

横手市文化財調査報告第66集

蟹 沢 遺 跡

-農地中間管理機構関連ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2025.3

横手市教育委員会

序

横手市は、横手盆地の中央に位置し、県内有数の米どころであります。現在は、農業経営基盤の強化と安定した経営体の育成のために、水田の区画拡大と用排水路網の整備が進められています。当教育委員会では地域開発との調和を図りながら、市内に600㌦所以上存在する埋蔵文化財包蔵地の保存と活用に取り組んでおります。

近年は、日本海側最北の古墳時代集落である一本杉遺跡、雄勝城と関わりが考えられる造山遺跡群、武士の館の初現期ともされる清原氏関連の国指定史跡大鳥井山遺跡附陣館遺跡、鎌倉時代の御家人である平賀氏に関連する館尻遺跡、津軽氏との関わりが明らかとなった金沢柵推定地金沢城跡など、各時代を通して、当時の秋田県、ひいては東北地方の歴史を語るうえで欠かせない遺跡の発見が相次ぎました。

本報告書は、中間管理機構関連ほ場整備事業に先立ち、平鹿蟹沢地区で実施した蟹沢遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、秋田県では極めて事例の少ない古墳時代の集落が営まれていたことがわかりました。

本報告書が地域の歴史資料として広く活用されることを願いますとともに、多くの皆さまからご指導いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元住民の皆さまはもとより、秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課や秋田県雄物川筋土地改良区並びに秋田県教育委員会をはじめ関係各位に対し深く感謝申し上げます。

令和7年3月

横手市教育委員会
教育長 伊藤 孝俊

例 言

1. 本報告書は、平鹿蟹沢地区農地中間管理機構関連ほ場整備事業に伴い、横手市教育委員会が令和5年度に発掘調査を実施した蟹沢遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は2,620㎡、工事立会面積は1,121㎡である。
2. 蟹沢遺跡の所在地は、秋田県横手市平鹿町中吉田字蟹沢地内、秋田県遺跡番号は203-59-108である。
3. 発掘調査及び整理作業と報告書作成の経費は、発掘調査を委託した秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課が92.5%を負担し、農家(受益者)負担分の7.5%については国庫補助金(3.75%)・県費補助金(0.75%)・市一般財源(3%)で負担した。
4. 発掘調査から整理作業と報告書作成までの期間は以下のとおりである。

発掘調査期間	令和5年5月1日～8月10日
整理作業・報告書作成期間	令和5年8月11日～令和6年3月22日
	令和6年5月29日～令和7年3月14日
5. 発掘調査にあたり、近隣の蟹沢集落の皆様から多大なるご理解、ご支援をいただいた。
6. 発掘調査・整理作業・報告書作成に際し、下記の機関、個人からご指導ご協力をいただいた。
(敬称略・順不同)
秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課、秋田県雄物川筋土地改良区、株式会社最上田組、文化庁文化財第二課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県埋蔵文化財センター、福島大学行政政策学類考古学研究室、小松正夫・利部修(由理柵・駅家研究会)、高橋学(雄勝城・駅家研究会)、八重樫忠郎(平泉世界遺産ガイドランスセンター)、柳沼賢治(郡山市文化スポーツ部)、金田明大・神野恵・小田裕樹・丹羽崇史(国立文化財機構奈良文化財研究所)、菊地芳朗(福島大学)、青木敬(國學院大學)、藤野一之(駒澤大学)、青山博樹(福島県文化振興財団)、高橋和成・安田創(秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室)、吉川耕太郎・山村剛・小山美紀(秋田県埋蔵文化財センター)、五十嵐祐介(男鹿市観光文化スポーツ部)、斎藤和葉(にかほ市教育委員会)
7. 遺跡内のグリッド測量及び方眼杭打設は、有限会社北都測量設計に委託した。
8. 遺跡出土遺物の自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所及び株式会社吉田生物研究所に委託した。
9. 遺跡出土遺物の写真撮影は、株式会社みどり光学社に委託した。
10. 本報告書は、横手市教育委員会教育総務部文化財保護課横手市遺跡調査事務所で整理作業・編集を行い、横手市教育委員会が発行した。
11. 本報告書は藤原正大(横手市教育委員会)が執筆した。
12. 本報告書の挿図・表・写真図版は、田中郁美・栗津ひろみ・佐藤康彦(横手市教育委員会)が中心となって発掘調査補助員が作成し、編集は藤原が行った。
13. 発掘調査成果の一部については、蟹沢遺跡現地説明会資料・秋田県遺跡報告会資料集等において公表しているが、これらと本報告書の内容が異なる場合には、本報告書を優先する。
14. 本報告書に記載した地形図は横手市管内図で、横手市役所が国土地理院の承認を得て、同院発行の5千分の1地形図及び2万5千分の1地形図を使用したものである。

15. 測量原点の座標値は世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。
16. 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標軸を示している。
17. 挿図の縮尺については、各図にスケールを付した。
18. 本報告書の体裁や記述方針は、文化庁文化財部記念物課発行の『発掘調査のてびき』(2010)に準拠している。
19. 遺構に付した略号は次のとおりである。
SI-竪穴建物跡、SB-掘立柱建物跡、SA-柱穴列、SP-柱穴・ピット、SE-井戸跡、SK-土坑、
SL-炉跡、SX-性格不明遺構、SD-溝跡
20. 遺跡の基本層序番号にはローマ数字、遺構内堆積土層にはアラビア数字を付した。
21. 基本層序・遺構内堆積土層、土器色調などの記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2015年版)に準拠した。
22. 遺構・遺物の法量について、()内の数値は推定値を表している。
23. 古代の土器実測図には、須恵器に●、ロクロ土師器に△、非ロクロ土師器には○を付している。中近世の土器実測図には、陶器に■、磁器に□を付した。
24. 土器の器面調整については、実測図に表現し、遺物観察表に詳細を記載した。
25. 土器・陶磁器の拓影図を含む破片実測は、外面-断面-内面の順で記載している。
26. 図版に使用したスクリーントーンは、各図に凡例を明記した。炭化物範囲・焼土範囲・地山面の表現は以下のとおりである。

炭化物範囲

焼土範囲

地山面

目次

序	1
例言	2
目次	4
第1章 調査にいたる経緯	6
Ⅰ 調査にいたる経緯	6
Ⅱ 発掘調査と整理作業の体制	6
Ⅲ 発掘調査の経過	7
Ⅳ 整理作業の経過	7
第2章 遺跡の立地と環境	8
Ⅰ 地理的環境	8
1. 概要	8
2. 遺跡の立地と周辺の地形	8
Ⅱ 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と概要	14
Ⅰ 調査の方法	14
1. 調査区とグリッド設定	14
2. 発掘作業	14
3. 自然科学分析	15
4. 整理作業	15
Ⅱ 調査の概要	15
第4章 A区の調査	18
Ⅰ 調査区の概要	18
Ⅱ 基本層序	18
Ⅲ 検出遺構と出土遺物	31
1. 竪穴建物跡	31
2. 掘立柱建物跡・柱穴列	32
3. 井戸跡	43
4. 土坑	43
5. 炉跡	54
6. 溝跡	54
7. 性格不明遺構	55
第5章 B区の調査	88
Ⅰ 調査区の概要	88
Ⅱ 基本層序	88
Ⅲ 検出遺構と出土遺物	96
1. 柱穴列	96
第6章 工事立会区の調査	103
Ⅰ 調査区の概要	103
Ⅱ 基本層序	103
Ⅲ 出土遺物	103

第7章 自然科学分析	107
Ⅰ 蟹沢遺跡の自然科学分析	107
Ⅱ 蟹沢遺跡出土土師器の樹種調査結果	131
Ⅲ 放射性炭素年代測定	134
第8章 総括	136
Ⅰ 古墳時代	136
1. 秋田県内の古墳時代遺跡	136
2. 蟹沢遺跡出土土師器の編年観	140
3. 古墳時代の須恵器甕について	146
4. 竪穴建物跡の構造と機能	147
5. 古墳時代中期後半の地域交流	147
Ⅱ 古代前期	147
Ⅲ 古代後期～中世	149
Ⅳ 近世	149
参考文献	149
報告書抄録	152
写真図版	153
奥付	

挿図・表目次

図1	遺跡周辺の地形分類図	11
図2	周辺遺跡位置図	12
図3	遺跡範囲と各調査区の位置	16
図4	蟹沢遺跡調査区・グリッド配置図・基本層序地点	17
図5	A区グリッド配置図・基本層序	20
図6	基本層序からみた削平の度合い	21
図7	A区遺構配置割付図	22
図8	A区遺構配置分割図(1)	23
図9	A区遺構配置分割図(2)	24
図10	A区遺構配置分割図(3)	25
図11	A区遺構配置分割図(4)	26
図12	A区遺構配置分割図(5)	27
図13	A区遺構配置分割図(6)	28
図14	A区遺構配置分割図(7)	29
図15	A区遺構配置分割図(8)	30
図16	A区SI15竪穴建物跡(1)	34
図17	A区SI15竪穴建物跡(2)	35
図18	A区SI33竪穴建物跡(1)	36
図19	A区SI33竪穴建物跡(2)	37
図20	A区SI33竪穴建物跡(3)	38
図21	A区掘立柱建物跡の配置	39
図22	A区SB01掘立柱建物跡	40
図23	A区SB02掘立柱建物跡・SA01柱穴列	41
図24	A区SB03,04掘立柱建物跡	42
図25	A区SE21,29井戸跡	45
図26	A区SE22井戸跡	46
図27	A区SL54炉跡・SK18,30土坑	47
図28	A区SK47,163土坑	48
図29	A区SK97土坑(1)	49
図30	A区SK97土坑(2)	50
図31	A区SK97土坑(3)	51

図 32	A区SK97土坑(4)	52
図 33	A区SK97土坑(5)	53
図 34	A区SD19溝跡	56
図 35	A区SD20,42,75,81,153,170溝跡	57
図 36	A区堅穴建物跡出土遺物(1)	63
図 37	A区堅穴建物跡出土遺物(2)	64
図 38	A区堅穴建物跡出土遺物(3)	65
図 39	A区堅穴建物跡(4)・柱穴出土遺物	66
図 40	A区井戸跡出土遺物(1)	67
図 41	A区井戸跡出土遺物(2)	68
図 42	A区井戸跡出土遺物(3)	69
図 43	A区井戸跡(4)・土坑出土遺物(1)	70
図 44	A区土坑出土遺物(2)	71
図 45	A区土坑出土遺物(3)	72
図 46	A区土坑出土遺物(4)	73
図 47	A区土坑出土遺物(5)	74
図 48	A区土坑出土遺物(6)	75
図 49	A区土坑出土遺物(7)	76
図 50	A区性格不明遺構・遺構外出土遺物(1)	77
図 51	A区遺構外出土遺物(2)	78
図 52	A区遺構外(3)・排土出土遺物	79
図 53	B区出土遺物	88
図 54	B区グリッド配置図・基本層序	89
図 55	B区遺構配置割付図	90
図 56	B区遺構配置分割図(1)	91
図 57	B区遺構配置分割図(2)	92
図 58	B区遺構配置分割図(3)	93
図 59	B区遺構配置分割図(4)	94
図 60	B区遺構配置分割図(5)	95
図 61	B区柱穴列の配置	98
図 62	B区SA柱穴列(1)	99
図 63	B区SA柱穴列(2)	100
図 64	工事立会区遺構配置分割図	104
図 65	工事立会区出土遺物	105
図 66	古墳時代の遺構	137
図 67	秋田県における古墳時代中期後半の遺跡分布	138
図 68	蟹沢遺跡周辺における古墳時代中期後半の遺跡分布	139
図 69	秋田県古墳時代中期の細別器種(1)	141
図 70	秋田県古墳時代中期の細別器種(2)	142
図 71	秋田県古墳時代中期の細別器種(3)	143
図 72	蟹沢遺跡出土土器の分類	144
図 73	秋田県古墳時代中期の堅穴建物跡	148
図 74	古代前期の遺構	150
図 75	古代後期～中世の遺構	151
表 1	蟹沢遺跡周辺の遺跡一覧表	13
表 2	蟹沢遺跡A区検出遺構一覧表	58
表 3	蟹沢遺跡A区出土遺物観察表	80
表 4	蟹沢遺跡B区出土遺物観察表	88
表 5	蟹沢遺跡B区検出遺構一覧表	101
表 6	蟹沢遺跡工事立会区出土遺物観察表	106
表 7	秋田県における古墳時代中期の土師器 細別器種の概要	145
表 8	古墳時代中期における主要遺構の口縁部破片数一覧	145
表 9	蟹沢遺跡主要遺構の口縁部破片数一覧(左)と 口縁部残存計測法によるSI15堅穴建物跡 ・SK97土坑の土師器個体数(右)	146

写真図版目次

写真図版 1	蟹沢遺跡全景	153
写真図版 2	昭和23年の空中写真	154
写真図版 3	A区全景	155
写真図版 4	A区基本層序・旧表土層遺物出土状況	156
写真図版 5	A区堅穴建物跡(1)	157
写真図版 6	A区堅穴建物跡(2)	158
写真図版 7	A区堅穴建物跡(3)	159
写真図版 8	A区掘立柱建物跡・柱穴列	160
写真図版 9	A区井戸跡(1)	161
写真図版 10	A区井戸跡(2)	162
写真図版 11	A区炉跡・土坑(1)	163
写真図版 12	A区土坑(2)	164
写真図版 13	A区土坑(3)	165
写真図版 14	A区溝跡	166
写真図版 15	B区全景・基本層序	167
写真図版 16	B区柱穴列	168
写真図版 17	古墳時代の出土遺物	169
写真図版 18	堅穴建物跡 出土遺物	170
写真図版 19	井戸跡 出土遺物(1)	171
写真図版 20	井戸跡 出土遺物(2)	172
写真図版 21	土坑 出土遺物(1)	173
写真図版 22	土坑 出土遺物(2)	174
写真図版 23	遺構外ほか出土遺物(1)	175
写真図版 24	遺構外ほか出土遺物(2)	176

第1章 調査にいたる経緯

I 調査にいたる経緯

令和4年9月、横手市教育委員会は、秋田県平鹿地域振興局と平鹿蟹沢地区農地中間管理機構関連ほ場整備事業予定区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、埋蔵文化財の詳細分布調査の依頼を受けた。

詳細分布調査は、文化庁と秋田県の補助事業として、令和4年11月16日から同月25日まで現地での調査を実施した。この調査の結果、事業区域内に新たに蟹沢遺跡を発見した。

上記の調査結果を受け、横手市教育委員会は、秋田県平鹿地域振興局と蟹沢遺跡の保護について協議を行った。複数回にわたる協議により、蟹沢遺跡の北側の水田及び南側の水田については、取水の関係で大幅な設計の変更は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとした。この結果については、令和5年1月に秋田県教育委員会に報告した。

秋田県平鹿地域振興局は、文化財保護法第94条第1項に基づき、令和5年3月16日付、平農-5968で秋田県教育委員会に土木工事等のための発掘の通知書を提出した。

秋田県教育委員会は、令和5年3月29日付、教生文-2197で秋田県平鹿地域振興局に周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、工事着手前の発掘調査実施が必要となることを通知した。

秋田県平鹿地域振興局は、令和5年3月30日付、平農-6364で工事着手前の発掘調査の実施について、横手市教育委員会に依頼した。

令和5年4月10日、秋田県平鹿地域振興局と横手市は、平鹿蟹沢地区農地中間管理機構関連ほ場整備業務委託として、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、横手市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

横手市教育委員会は、令和5年4月19日付、教文第27号で秋田県教育委員会に文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査を実施することを通知した。

以上の経緯により、横手市教育委員会は、平鹿蟹沢地区農地中間管理機構関連ほ場整備事業に先立ち、令和5年5月1日から同年8月10日まで蟹沢遺跡の発掘調査を実施した。

II 発掘調査と整理作業の体制

発掘調査は令和5年度に、整理報告書作成は令和5年度から令和6年度に行い、令和6年度に報告書を刊行した。

遺跡名 蟹沢遺跡(がにざわいせき)

所在地 秋田県横手市平鹿町中吉田字蟹沢地内

事業主体 秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課

調査面積 2,620㎡

発掘調査期間 令和5年5月1日～8月10日 整理作業期間 令和5年8月11日～令和7年3月14日

調査主体 横手市教育委員会

調査体制 教育長 伊藤孝俊 教育総務部 部長 菊地浩昭[令和5年度] 部長 佐藤耕樹[令和6年度]
次長 佐藤耕樹[令和5年度] 次長 近江秀和[令和6年度]

文化財保護課 課長 信太正樹 主幹 石田正明[令和5年度]

埋蔵文化財係 課長代理兼係長 島田祐悦[令和5年度] 上席副主幹兼係長 島田祐悦[令和6年度]
主査 佐藤 俊(総務担当)[令和5年度] 主任 藤原正大(発掘調査・整理作業・総務担当)

発掘調査技師 栗津ひろみ(発掘調査・整理作業担当) 田中郁美(発掘調査・整理作業担当) 佐藤康彦
(発掘調査・整理作業担当)

発掘調査補助員(発掘作業従事)

小松谷昇、菅原忠男、福原章、石橋龍美、小山公人、赤津春夫、岩井平、笹山正治、斉藤清一、藤井修、佐藤忠生、佐々木義美、宮城清治、塩原健、石塚ユリ子、柴田茜、佐々木悦子、佐藤千穂、松井のり子、佐藤真紀子、高橋美紀子

発掘調査補助員(整理作業・報告書作成従事)

佐藤千穂、佐藤真紀子、佐々木悦子、柴田茜、石塚ユリ子、松井のり子、佐藤まなみ、福原章、宮城清治、塩原健

Ⅲ 発掘調査の経過

5月第1週 現場開始式。蟹沢遺跡A区の表土除去及び工事立会実施。工事立会区の湿地堆積層より古墳時代の土師器高杯が出土。A区より古墳時代の竪穴建物跡(SI15)を検出。5月第2週 A区遺構精査。中世と思われる掘立柱建物跡を検出。遺構確認面の標高が、新田面の標高より高いことが判明。記録保存の範囲の拡張について原因者と協議し了解を得る。5月第3週 A区を拡張し、遺構精査。A区の南端より、古墳時代の竪穴建物跡(SI33)を検出。このほか、古代の掘立柱建物跡、土坑、井戸跡を検出。5月第4週 A区遺構の掘り下げ。古代の井戸跡より木製品出土。SI33については削平が深くまで及ぶことが判明する。

6月第1週 A区遺構の掘り下げ。SI15を中心に作業を行い、古墳時代の竪穴建物跡の特徴である床面小溝などを検出する。6月第2週 A区遺構の掘り下げ。掘立柱建物跡の精査を行う。6月14日吉田小学校発掘体験。6月第3週 A区遺構の掘り下げ。A区遺構はほぼ完掘する。6月第4週 B区の表土除去。遺構のほとんどが柱穴であり、調査区の北側に集中することが判明。6月第5週 A区遺構の再精査。SI15の支柱穴と床面小溝との関係を確認。B区遺構精査を進める。

7月第1週 B区遺構精査と併行し、現地説明会の開催準備。7月8日午前横手を学ぶ郷土学ワークショップを開催し、市内小中学生が参加。同日午後に現地説明会を開催。7月第2週 A区の記録が完了し、施工業者へ引き渡し。B区遺構の掘り下げ。調査区の南側から記録を進める。7月第3週B区遺構の掘り下げ。調査区の北側より柱穴列を複数棟検出。7月第4週 B区の記録が完了し、施工業者へ引き渡し。現場事務所の引き渡し準備。

8月第1週 現場事務所を撤収。横手市遺跡調査事務所にて発掘機材等の片づけを行い、現場を終了する。

Ⅳ 整理作業の経過

整理作業は、現場終了後から令和7年3月14日まで実施した。令和5年5月から8月までは現場で遺物洗浄と註記作業を行い、現場終了後は、引き続き横手市遺跡調査事務所内で行い、3月で完了させた。これに並行して、10月から令和6年8月までは遺物の集計・計量・分類と土器の接合・復元・実測・拓本を行った。これら一連の作業が終了した後、9月から翌年2月にかけて報告書の編集作業を行った。

第2章 遺跡の立地と環境

I 地理的環境

1. 概要

横手市は、秋田県の内陸南東部、東側の奥羽山脈、西側の出羽山地の間、雄物川水系の中・下流域に展開する南北およそ60km、東西およそ15kmの狭長な断層盆地である横手盆地中央に位置する。

横手市域は東西45.4km、南北35.2km、総面積692.80km²、人口は令和6年12月末現在で80,765人である。北を大仙市・美郷町、南を湯沢市・羽後町・東成瀬村、西を由利本荘市、東を岩手県西和賀町に接する。東部には扇状地が並ぶ一方、西部には沖積地が開け、雄物川の大小支流が南東方向から北西方向に向かって蛇行しながら流れ、水田地帯の沖積地では網状に流路を形成し、雄物川に合流する。

また、横手市は古くから交通の要衝であり、旧羽州街道と並行して南北に縦貫する国道13号は、市の中心で東西に横断する国道107号と交差する。この付近に横手インターチェンジがあり、高速道路網の秋田自動車道と東北中央自動車道につながる。同じように、JR奥羽本線が縦貫し、JR北上線が東に延びる。

気候は、秋田県の内陸部がケッペンの気候分類法で亜寒帯に近い温帯湿潤気候に属し、盆地特有の四季の変化をみせる。夏季は暑いのにに対して、冬季は寒冷で積雪が多く、最深積雪は例年1mを超える。

2. 遺跡の立地と周辺の地形

蟹沢遺跡は横手市のほぼ中央に位置し、JR横手駅から西南西約5.9kmに立地する。現況は水田及び畑地である。遺跡の標高は約49mで、地形面は完新世に旧皆瀬川が形成した低位段丘である砂礫段丘Ⅳに分類される。遺跡周辺には皆瀬川から取水する大小の河川が北流しており、東には大戸川が、西には弥十郎堰が流れる。これらの河川や水路は合流しながら横手市大雄字西中島付近で雄物川と合流する。大戸川流域一帯には、南北方向に延びる狭長な微高地が点在し、現在形成されている集落は概ねこの微高地に立地するが、縄文時代、古墳時代、古代の遺跡も微高地上に多く分布している。

遺跡周辺は現在水田が広がっており、昭和30年代には耕地整理が実施されている。現在確認できる水田区画や水路はこのときに形成されたものであり、これ以前は中小河川が網目状の流路を形成していた。この耕地整理の際に、遺跡は大きく削平を受けており、後述するように耕作土直下が地山の黄褐色粘土層となり、旧表土が失われている範囲が大きい。

II 歴史的環境

遺跡の立地する横手市内の沖積地には、雄物川支流河川によって形成された南北に狭長な微高地が点在し、各流域ごとに縄文時代や古墳時代、古代を中心として長期間にわたって多くの遺跡が形成されている。以下では発掘調査が実施された遺跡を中心として、市内の主だった遺跡を含めて概観する。

縄文時代は、横手市西部を流れる大宮川流域の微高地上で縄文時代中期中葉頃から遺跡が確認されており、江原嶋1遺跡(64-1)では大木8b式期の竪穴建物跡が検出されている。神谷地遺跡

(60-127)では、大木8a～10a式期の72軒の竪穴建物跡が検出され、集落構造や複式炉の変遷過程を把握するうえで重要な資料が得られた。なお、炉跡出土動物骨の分析からサケ・コイ・イノシシ・ニホンジカの利用が明らかになっている。晩期には大洞B～A式期の土器棺墓35基、土坑墓89基があり、当該期における墓域の展開についても把握された。大戸川流域のオホン清水A遺跡(03-86)は後期後葉から晩期末葉、瘤付土器から大洞B～C式期の遺跡であり、土坑墓312基と玉類・石棒・石剣・岩版などが出土した事で知られている。

弥生時代は、縄文時代晩期に比べて遺跡数が激減し、市内全体でも18遺跡しか確認されていない。弥生時代前期の遺跡は前述のオホン清水A遺跡のみで、砂沢式併行期の土器が出土している。神谷地遺跡では、竪穴建物跡から弥生時代中期中葉の壺・小型精製甕が出土した。

古墳時代は、蟹沢遺跡の主たる年代である。市内では、現在までのところ6遺跡が確認されており、県内では最も遺跡が集中している。これらの遺跡は沖積地の河川沿いにある微高地に立地し、大宮川流域と、さらにもう一段低い段丘面である砂礫段丘Ⅲに属する油川流域に集中している。一本杉遺跡(59-54)は油川流域に立地する古墳時代中期の集落遺跡で、竪穴建物跡5軒をはじめ、土師器・須恵器・管玉・紡錘車などが出土し、当該期における古墳時代集落の様相が明らかになっている。土師器は5世紀後半の所産と考えられ、その系譜が北陸に求められている。また、須恵器はTK208型式の有蓋坏2点とハソウ1点が出土しており、これが県内で最も古い須恵器の出土例である。大宮川流域では、前述の神谷地遺跡と隣接する小出遺跡(60-98)、会塚田中B遺跡(60-121)で古墳時代の遺構・遺物が検出されている。神谷地遺跡と小出遺跡では、古墳時代中期の竪穴建物跡と掘立柱建物跡がそれぞれ検出され、TK208型式併行期の須恵器と土師器高杯脚部・小型壺が出土した。会塚田中B遺跡では、土坑から5世紀後半の土師器高杯がまとまって出土している。一方で、横手市東部の田久保下遺跡(03-129)では、東北北部の続縄文文化に属する6世紀前半から7世紀前半の土坑墓8基が検出され、土師器・須恵器と共伴して柄付刀子や黒曜石が出土している。

飛鳥時代から奈良時代では、天平五年(733)に雄勝郡が、天平宝字三年(759)に平鹿郡が建郡され、さらに同年には雄勝城が造営されたことが『続日本紀』に記述されているが、その場所については明らかになっていない。しかし近年、県内で最も古い須恵器窯跡のひとつである末館窯跡(60-26)が立地すること、東槻遺跡(60-120)・蝦夷塚古墳群(60-47)などの8世紀前半代の遺跡が密集することなどを根拠として、雄物川町造山地区が擬定地として有力視されている。当該地周辺では、秋田県教育委員会や民間の調査組織である雄勝城・駅家研究会が継続的に発掘調査を実施している。大戸川流域には、7世紀後半から8世紀代の遺跡が比較的高密度に分布しており、前述のオホン清水A遺跡や宮下遺跡(03-94)、宮東遺跡(03-100)、下福田尻遺跡(59-100)がある。これらはいずれも大戸川東岸に立地する。これらの遺跡では、在地系非ロクロ土師器と在地生産された須恵器が共伴するのが特徴である。

平安時代は、市内で遺跡数が急増する時期である。未調査で土師器・須恵器が表採された遺跡が多いものの、ほ場整備事業などに伴う緊急発掘調査の実施によって集落遺跡、須恵器窯跡などの生産遺跡の資料が蓄積されている。

9世紀代に入ると、横手市東部の中山丘陵上において土器生産が活発化する。9世紀前半には丘陵北側の竹原窯跡のほか、竹原窯跡の北側に隣接する上猪岡遺跡、中山丘陵南側の郷土館窯跡(03-127)や富ヶ沢A～C窯跡(03-173～175)で須恵器生産が開始され、各年代を通して最も生産活動が盛行する時期に位置づけられる。また、この時期に須恵器窯に近接して土師器焼成に伴う平窯が確認されるようになり、ロクロ土師器の生産も開始される。9世紀中頃には竹原窯跡での生産は確認され

ず、富ヶ沢C窯跡や田久保下遺跡などの郷土館支群で須恵器・ロクロ土師器生産が行われた。9世紀後半には大沼沢窯跡(03-172)を最後に中山丘陵での須恵器生産が確認されなくなり、郷土館D遺跡(03-167)ではロクロ土師器のみの生産へ移行している。

集落遺跡は、9世紀初頭から後半にかけて、大戸川周辺のオホン清水A遺跡や十文字遺跡(03-191)、手取清水遺跡(03-83)のほか、赤川沼頭遺跡(03-194)、柴崎遺跡(03-110)など、中山丘陵の東側沖積地にある微高地上においても確認されるようになる。この時期には竪穴建物跡がほとんど確認されず、いずれの遺跡も掘立柱建物跡が主体となる。手取清水遺跡は真北に軸線をもつ掘立柱建物跡とともに、河川跡からは須恵器・ロクロ土師器のほか、木簡・墨書土器が大量に出土した。これらの墨書土器には、「丸子部」「津守部」「日口(下カ)部継人」「物部」「蝮口部」「嶋」などの人名・役職や、祭祀に関わる「占」などがある。木製品も斎串・馬形・鳥形などの祭祀遺物が多く、官衙遺跡に類似した様相を示している。柴崎遺跡は、平安時代前期を中心とする遺跡で、南北棟の大型掘立柱建物跡を中心とし、倉庫と考えられる側柱掘立柱建物跡も検出した。また、遺跡の消長が中山丘陵の須恵器生産と連動している点も注目される。

10世紀前半は竪穴建物跡が主体となる集落が急増するものの大規模な集落遺跡は確認されず、比較的小規模な集落遺跡が点在する。一方で江原嶋1遺跡(64-1)や大見内遺跡(60-99)などで付属建物をもつ底付建物や、倉庫をもつ集落遺跡が確認されている。その後、10世紀中頃以降遺跡数が激減し、丘陵に立地が移り交通の要衝である河川や交通路沿いに在地有力者の居館と考えられる遺跡が確認される。清原氏の居館として知られる国指定史跡大鳥井山遺跡(03-64)がその一例である。また市教育委員会では、金沢城跡などの後三年合戦関連遺跡の発掘調査を継続的に実施している。

中世前期には、横手市東部の手取清水遺跡(03-83)で堀・塀を巡らせた地割の中に桁行20mの四面庇や二面庇の主殿級建物と付属屋が整然と配置された館跡が検出されている。遺物は13世紀から14世紀の中国産青磁と国産陶器・祭祀具・将棋駒の「桂馬」など、一般集落で出土しないものが出土している。当該期の横手は、尾張国を本拠とする松葉朝宗の次子惟泰が平鹿郡を本拠として平賀氏を名乗り、平鹿郡地頭職を確立したとされる。手取清水遺跡は市内で存在が想定される所領のなかの「塚堀」に関連するものと考えられる。そのほか三ツ栗柵木(03-79)、下八丁古館遺跡(03-81)も同様に平賀氏所領である「三樟」との関連性が考えられる。また、県指定史跡吉田城跡(59-28)近傍に立地し市教育委員会が発掘調査を実施した館尻遺跡(59-93)は、手取清水遺跡と同様の四面庇や二面庇のつく掘立柱建物跡や屋敷墓などが検出され、平賀氏との関連が指摘される。

中世後期は横手盆地へ勢力を伸ばした戦国大名小野寺氏に関連する城館が市内に点在している。蟹沢遺跡周辺の中世城館は、吉田城跡、城野岡館跡(03-111)、八柏城跡(64-8)、郷土館跡(03-124)、猪岡館跡(03-105)、古城跡(59-29)、前郷館跡(03-132)、赤川館跡(03-103)、西野館跡(03-75)、黒川館跡(03-73)、真壁館跡(03-78)などがある。吉田城跡は戦国時代に横手盆地へ勢力を伸ばした小野寺輝道の隠居地と伝わり、東西120m、南北100mの平城で周囲を土塁と堀が巡る。八柏城跡は小野寺氏重臣である八柏氏、西野館跡や赤川館跡、真壁館跡などもそれぞれ小野寺氏家臣の居館である可能性が指摘されている。

近世の蟹沢遺跡周辺は、中吉田村の支郷として「蟹沢村」が成立していたようである。蟹沢村は、江戸時代の紀行家菅江真澄が文政7年(1824)に著した『雪の出羽路』に村名がみられるほか、文政5年(1822)に作成された『中吉田村絵図』でも「蟹沢」の記載が確認できる。一方で、享保15年(1730)の『六郡郡邑記』では、村名が確認できないことから、支郷としての成立は江戸時代後期と推定される。

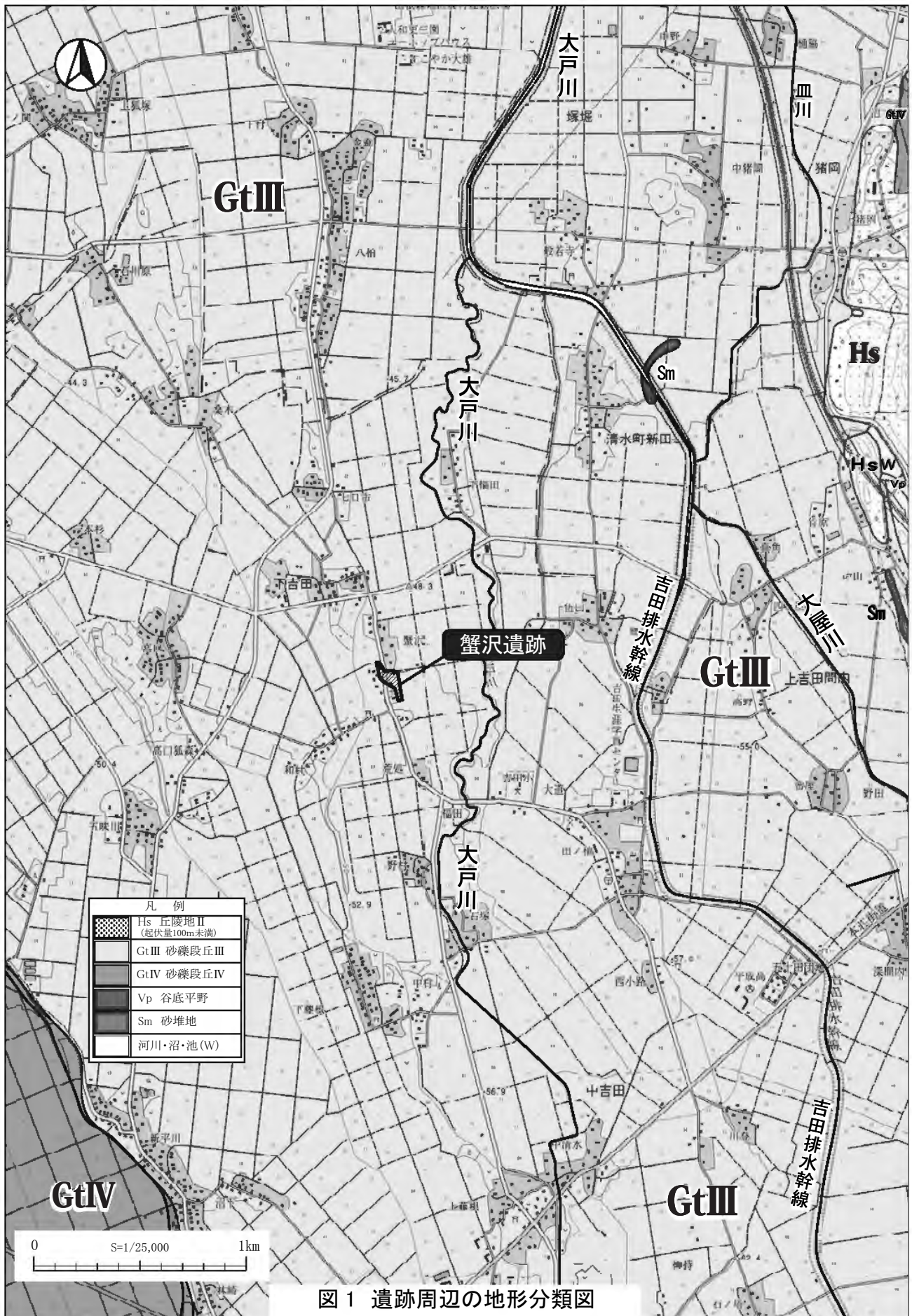


表1 蟹沢遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
03-84	オホン清水北	縄文・弥生・平安	集落跡	59-13	小野塚	不明	遺物包含地
03-85	オホン清水B	縄文・古墳・平安	集落跡	59-15	壇の前	縄文	遺物包含地
03-86	オホン清水A	縄文・飛鳥・奈良・平安	集落跡	59-16	五味川	古墳・奈良	遺物包含地
03-87	猪岡萱原	縄文	遺物包含地	59-17	越部会	平安	遺物包含地
03-88	鷹匠道下	縄文・平安	遺物包含地	59-28	吉田城	中世	城館跡
03-89	中堰西	縄文・平安	遺物包含地	59-29	古城	中世	城館跡
03-90	薬師前A	縄文・平安	遺物包含地	59-32	竹原窯跡	平安	生産遺跡
03-91	般若寺	平安	遺物包含地	59-33	中山Ⅰ窯跡	平安	窯跡
03-92	中猪岡A	縄文・平安・中世・近世	集落跡	59-34	中山Ⅱ窯跡	平安	窯跡
03-93	中猪岡B	平安	遺物包含地	59-35	福島	平安	遺物包含地
03-94	宮下	縄文・奈良・平安	集落跡	59-36	中清水	縄文・飛鳥～奈良	遺物包含地
03-95	猪岡川口A	平安	遺物包含地	59-37	中谷地	平安	遺物包含地
03-96	猪岡川口B	平安	遺物包含地	59-40	上藤根Ⅰ	縄文・飛鳥～奈良	遺物包含地
03-97	猪岡八幡	縄文・平安	遺物包含地	59-42	中藤根A	飛鳥～奈良	集落跡
03-98	清水町新田堤下	縄文・平安	遺物包含地	59-43	中藤根B	飛鳥～奈良	集落跡
03-99	大堰端	縄文・平安	遺物包含地	59-44	中藤根C	飛鳥～奈良	遺物包含地
03-100	宮東	縄文・飛鳥～奈良・平安	集落跡	59-48	中吉田中藤根	不明	集落跡
03-101	宮表	平安	遺物包含地	59-49	下藤根Ⅰ	古代	集落跡
03-102	新城下	縄文	遺物包含地	59-50	下藤根Ⅱ	古代	集落跡
03-105	猪岡館	中世	城館跡	59-51	野村	古代	遺物包含地
03-106	長瀬A	平安	遺物包含地	59-52	七日市城	中世	城館跡
03-107	長瀬B	縄文	遺物包含地	59-53	高口東	縄文・奈良・平安	遺物包含地
03-113	猪岡	縄文・平安	遺物包含地	59-54	一本杉	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	狩猟場 集落跡 城館跡
03-114	岩野沢A	縄文・平安	遺物包含地	59-93	館尻	平安・中世	生産遺跡 集落跡
03-115	上猪岡	縄文・弥生・平安	集落跡 生産遺跡	59-98	西小路東	平安	工房跡
03-188	薬師前B	縄文・平安	集落跡	59-99	下福田東	平安	集落跡
03-191	十文字	平安	集落跡	59-100	下福田尻	奈良・平安	集落跡
03-192	宮下南	縄文	集落跡	59-109	下村	中世	集落跡
				64-8	八柏城	中世	城館跡

第3章 調査の方法と概要

I 調査の方法

1. 調査区とグリッド設定

調査区は、前述のとおり切土によって遺跡の消滅を免れない蟹沢遺跡北側の水田と、南側の水田に設定し、前者をA区、後者をB区とした。また、このほかに、設計上で盛土による水田面の嵩上げにより遺跡の保護がなされる範囲については工事立会を実施し、遺跡に与える影響がないかを確認したが、一部で遺物の出土があったため、トータルステーションによる遺物出土位置の記録を行い、この範囲を工事立会区とした。それぞれの調査面積は、A区1,560㎡、B区1,121㎡、工事立会区1,060㎡である。

発掘調査はグリッド法を採用した。グリッドは各遺跡調査区内の任意の1点を【MA100】とし、水平・垂直方向の原点として設定した。MA100の平面直角座標系及び標高は、(X=-77861.124、Y=-29272.438、標高49.018m)である。この原点を通り、国家座標第X系の座標北方向を南北方向の基準線とし、これと直交するラインを東西の基準線として4m×4mのグリッドを設定した。南北方向の基準線には南北どちらかへ4m進むごとに…98・99・100・101・102…のアラビア数字を付し、東西方向の基準線には東西へ4m進むごとに…MC・MB・MA・LT・LS…のアルファベットを付し、両基準線の南東隅の交点をグリッドとして呼称した。遺構観察表中の遺構の位置及び遺物観察表中の出土遺物の位置はこれによる。

2. 発掘作業

発掘調査は、令和4年度の試掘調査の結果をもとに、バックホウを用いて表土(水田耕作土及び造成土)を除去し、その後、人力による掘り下げと遺構確認面の精査を繰り返した。遺構は検出順に遺構の種別に関わらず連番で番号を付した。精査の過程で、遺構ではないと判断したものについては欠番とし、遺構の重複が認められた場合は、古い方をA、新しい方をB、Cとして区別を行っている。また、整理作業の過程で土坑が柱穴となったものや、柱穴が土坑となったものなどについては略記号を変更した。

竪穴建物跡・土坑・溝跡などの遺構は、堆積状況を確認するため土層観察用畔を設定し土層断面の状況を観察・記録していった。柱穴(柱掘り方・柱抜き取り痕)は2～5cmの段下げを繰り返し、柱痕または柱痕跡を確認できた段階でトータルステーションによる測量を行った。柱痕跡が不明確なものは結果的に完掘まで行い、その有無を確認した。調査の過程で掘立柱建物跡が復元できた場合は、建物の柱筋に合わせて半截し、掘り方の形状や柱の抜き取りの有無、根入りなどについて記録した。

遺物はトータルステーションで出土地点の測量を行い、出土年月日・出土層位を記載したチャック付きポリ袋とともに取り上げた。発掘現場での測量作業は3台のトータルステーションを使用した。断面図はオートレベル及びメジャーを使用して実測図(原則として20分の1)を作成した。

写真はデジタルカメラ4台と、ドローンを使用して撮影した。ドローンで撮影した写真は、遺構として認定できなかった柱穴等を認識するため、現場作業のなかで補助的に使用した。写真撮影時には、写真写し込みに日時・天候・方位等を記し、遺構・遺物の状況を簡略図で描いた。発掘作業中は写真台帳を作成し、写真の写し漏れがないかを確認した。写し込みの情報は、その後の整理作業に役立てた。

3. 自然科学分析

SE21,22井戸跡からは木製品が出土しており、遺跡内においてどのような木材が選択され、利用されたかを把握することを目的として、樹種同定を実施した。

放射性炭素年代測定については、竪穴建物跡・土坑・柱穴（掘立柱建物跡）の年代を把握する手がかりとして実施した。

漆被膜分析については、後述する古墳時代須恵器甕の破断面に付着していた漆の構造を確認し、その用途等を検証するために実施した。

4. 整理作業

整理作業及び報告書作成は、発掘調査が終了した8月から翌年度の令和7年3月まで実施した。

出土した遺物は、中コンテナ換算で約47箱である。遺跡から出土した遺物の洗浄は、発掘調査と並行して行い、作業の効率化に努めた。その後に註記・復元作業を実施し、実測図作成・拓本・トレースなどの図面作成を行った。実測ができない遺構内遺物については重量測定を行った。

遺構図面・遺物図面・トレース等については、以下の方法で実施した。遺構平面図は、トータルステーションの測量データを、遺構実測支援ソフト「遺構くん」を利用して作成した。断面図は現地での発掘調査の図面をもとに第2原図を作成し、Adobe社PhotoshopCS2を利用してスキャナで取り込み、それを同社IllustratorCS2上に配置し、トレースを行った。遺物は実測図・拓影図を作成し、遺構と同様の方法でトレースを行った。遺構・遺物ともに図面は写真・実物で確認しながら作業を行った。これら一連の作業が終了した後で、PhotoshopCS2とIllustratorCS2で作成した本文・挿図・表・写真を統合し、編集作業を行った。編集作業がすべて終了した後、印刷業者にデータ入稿した。その後、遺構・遺物図面と出土遺物は、今後活用しやすいようにファイルおよびコンテナに分類して収納や保管にあたった。

II 調査の概要

蟹沢遺跡では、前述のとおり2,620㎡の発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の集落遺跡であり、主たる年代は古墳時代であることが判明した。

遺構は、竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡4棟、柱穴列6列、柱穴166基（掘立柱建物跡柱穴を含む）、井戸跡3基、土坑6基、炉跡1基、性格不明遺構1基、溝跡13条の総計202遺構を検出した。遺構はA区に集中する。調査区は先に述べたとおり昭和30年代の耕地整理によって大きく削平を受けているが、一部で旧表土層が存在する。古墳時代の遺構はこの旧表土層から掘り込まれている。A区の東側には細粒砂を主体とする湿地堆積層が広がり、古墳時代の遺物が出土しているため、少なくとも古墳時代には氾濫原が形成されていたと考えられる。

A区では古墳時代・古代・中世の遺構を検出し、土師器・須恵器・木製品・須恵器系陶器・青磁・白磁が出土した。B区では、時期不明の柱穴を多数検出した。

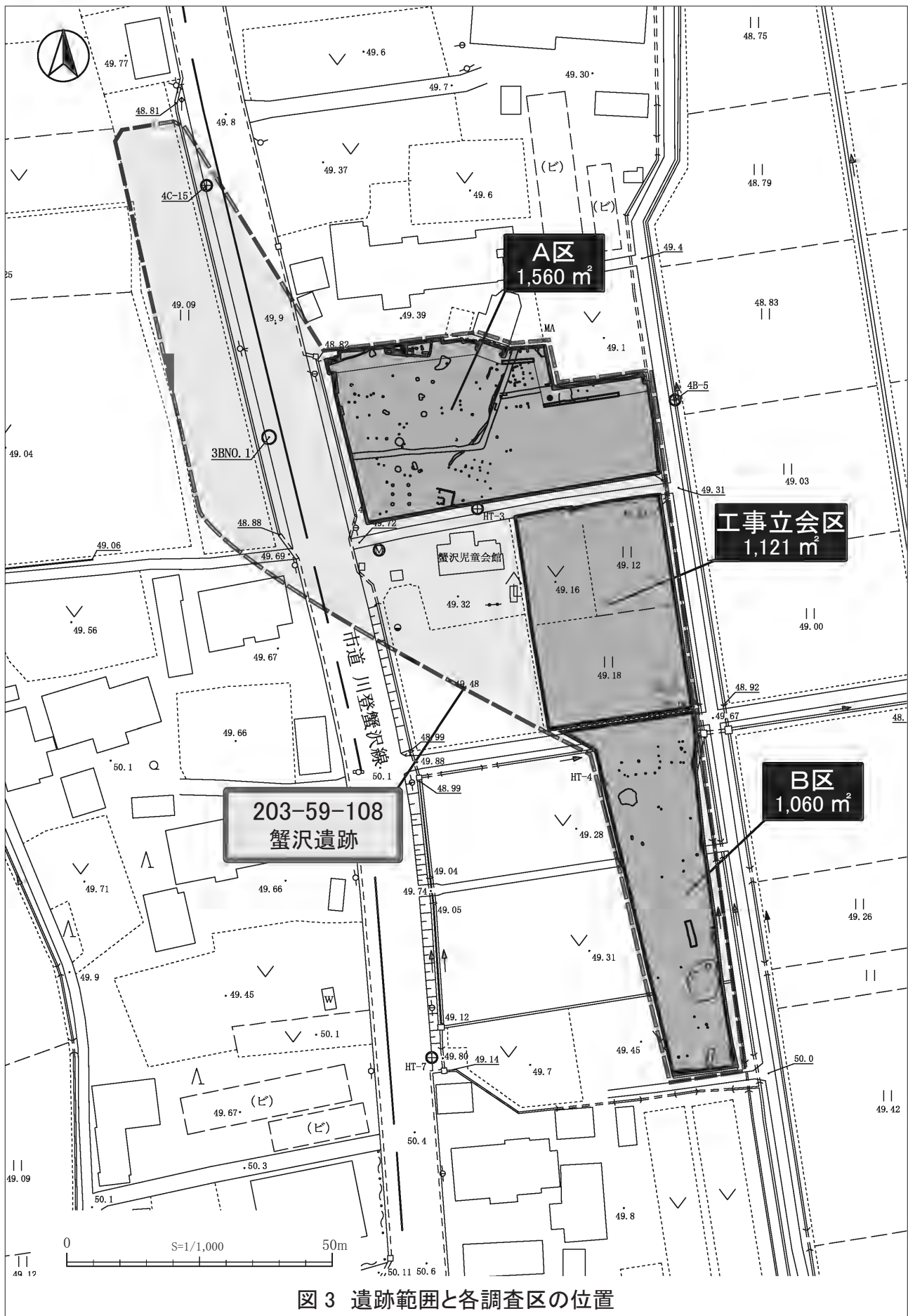
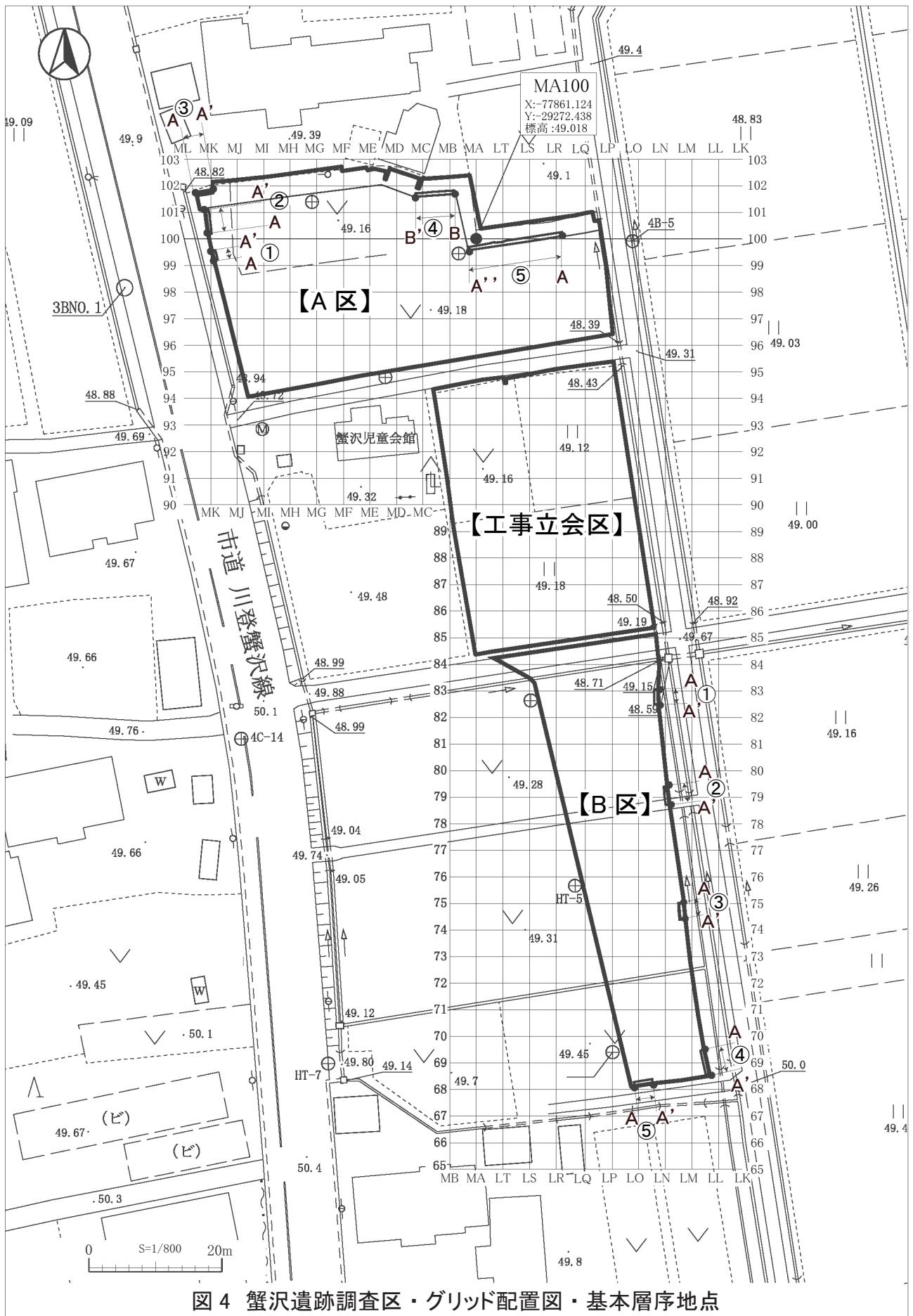


図3 遺跡範囲と各調査区の位置



第4章 A区の調査

I 調査区の概要【写真図版3】

A区からは、竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡4棟、柱穴列1列、柱穴123基（掘立柱建物跡柱穴を含む）、井戸跡3基、土坑6基、炉跡1基、性格不明遺構1基、溝跡13条の総計154遺構を検出した。

竪穴建物跡はいずれも古墳時代の所産で、A区北端からSI15竪穴建物跡を、南端からSI33竪穴建物跡を検出した。SI15竪穴建物跡は、一辺が9m弱の大型であり、規模・構造ともにこれまで横手市内で検出されている竪穴建物跡と類似する。SI33竪穴建物跡は小型の竪穴建物跡で、掘り込みが浅く、主柱穴が建物内に存在しないため壁立式と推定される。掘り込みの浅さから、前述の耕地整理の際に大幅な削平を受けており、床面がすべて削平された状況で確認された。SI15竪穴建物跡の南東にはSK97土坑が隣接しており、この土坑からは土師器を中心に古墳時代の土器が大量に出土した。また、この土坑から秋田県で初めて古墳時代の須恵器甕口縁部片が出土している。

調査区の南西端からはSB01掘立柱建物跡を検出した。この北側には、SE22,29井戸などがあり、これらは古代に帰属すると考えられる。調査区北東端にはSB02,03,04掘立柱建物跡などがある。

A区の出土遺物は中コンテナ換算で47箱が出土した。当該調査で出土した遺物のほとんどを占め、遺構内からの出土が主である。本報告書ではこのうち実測可能な150点を図示した。実測不能の破片資料は遺構一覧表中に「g」表示している。出土遺物の9割程度は古墳時代の所産である。

II 基本層序【図5・写真図版4】

基本層序は、①～③調査区北西壁、④～⑤調査区北東壁の5か所で確認した。以下がその概要で、5層に分層される。

I 層：黒褐色土層（10YR2/2）、層厚15～20cm

耕作土層。しまり弱、粘性弱。昭和30年代の耕地整理から現在に至るまで耕作されていた層で、水田耕作時の鋤入れ層である。地山土（IV層）粒を微量含む。層厚が薄く、地山土層（IV層）が直下にある場合は遺物が混入する。

II 層：黒色土層（10YR2/1）、層厚10cm

旧表土層。しまり弱、粘性弱。調査区の北西隅にのみ確認される。古墳時代～古代の遺物を包含する。昭和30年代の耕地整理による削平を受けているため、層厚が薄い。

III 層：黒褐色土層（10YR3/2）、層厚5cm

II層とIV層との間にみられる漸移層。しまり中、粘性やや弱。II層の旧表土層と同じく、調査区の北西隅にのみ確認される。SI15竪穴建物跡などはこの層上面で確認した。II層と同様に、昭和30年代の耕地整理による削平を受けているため、層厚が薄い。

IV 層：にぶい黄褐色粘土層（10YR4/3）、層厚30cm～

地山土層 I。しまり弱、粘性弱。シルト主体の自然堆積層で、大半の遺構はこの層の上面で検出した。シルト主体となることから、水流の弱い環境下で後期更新世から完新世にかけて堆積した洪水堆積層である。

V 層：にぶい黄褐色粘土層（10YR5/4）、層厚30cm～

地山土層Ⅱ。しまりやや弱、粘性弱。Ⅳ層とⅤ層の間にみられる漸移層で、細粒砂主体の自然堆積層である。SI33竪穴建物跡はこの層の上面で検出した。

Ⅵ層：褐色土層(10YR4/4)、層厚50cm～

地山土層Ⅲ。しまり弱、粘性弱。大礫主体の自然堆積層である。SK163土坑などはこの層の上面で検出した。調査区の西端はⅠ層直下にこの層が存在しており、調査区内で最も削平が大きい範囲である。井戸跡などの掘り込みの深い遺構は、この層まで掘削が及んでいる。

以下は、調査区の東側で検出した湿地堆積層である。

Ⅶ層：黒褐色土層(10YR2/1)、層厚20cm

しまりやや弱、粘性強。細粒砂を微量含む湿地堆積層。酸化鉄が沈殿する。上層の影響でしまりがやや強い。

Ⅷ層：黒褐色土層(10YR2/1)、層厚20cm

しまり弱、粘性強。細粒砂が主体の湿地堆積層。酸化鉄が沈殿する。

Ⅸ層：黒褐色土層(10YR2/1)、層厚30cm～

しまり弱、粘性強。中粒砂が主体の湿地堆積層。酸化鉄が沈殿する。場所により、グライ化する箇所がある。

X層：黒褐色土層(10YR2/1)、層厚30cm～

しまり弱、粘性強。Ⅸ層と同質だがグライ化が著しい。

以上、基本層序について概観した。調査区は現況では平坦な地形であり、微地形を確認することは困難であるが、Ⅰ層直下に存在する層を手掛かりに旧地形を復元したのが図6である。旧地形は、調査区の南西隅が最も標高が高く、北東にむかって緩やかに下る地形であったと推定される。その証拠に、SI15竪穴建物跡はⅢ層上面で確認したのに対して、SI33竪穴建物跡はⅤ層上面で検出しており、本来やや比高差があったと判断される。調査区南西隅に存在するSB01掘立柱建物跡は、Ⅴ層～Ⅵ層にかけて検出している。このため、本来標高の高かったであろう調査区の南西端の一带は、掘り込みの浅い遺構が消滅している可能性が高い。

調査区の東側には湿地堆積層が広がり、一段低くなっていたと推定される。これは、遺跡の東側を北流する大戸川の河川浸食により形成された地形と想定され、大戸川の流路が現在の位置になり、調査区周辺の水流が弱くなった時期に湿地堆積層が形成されたと考えられる。

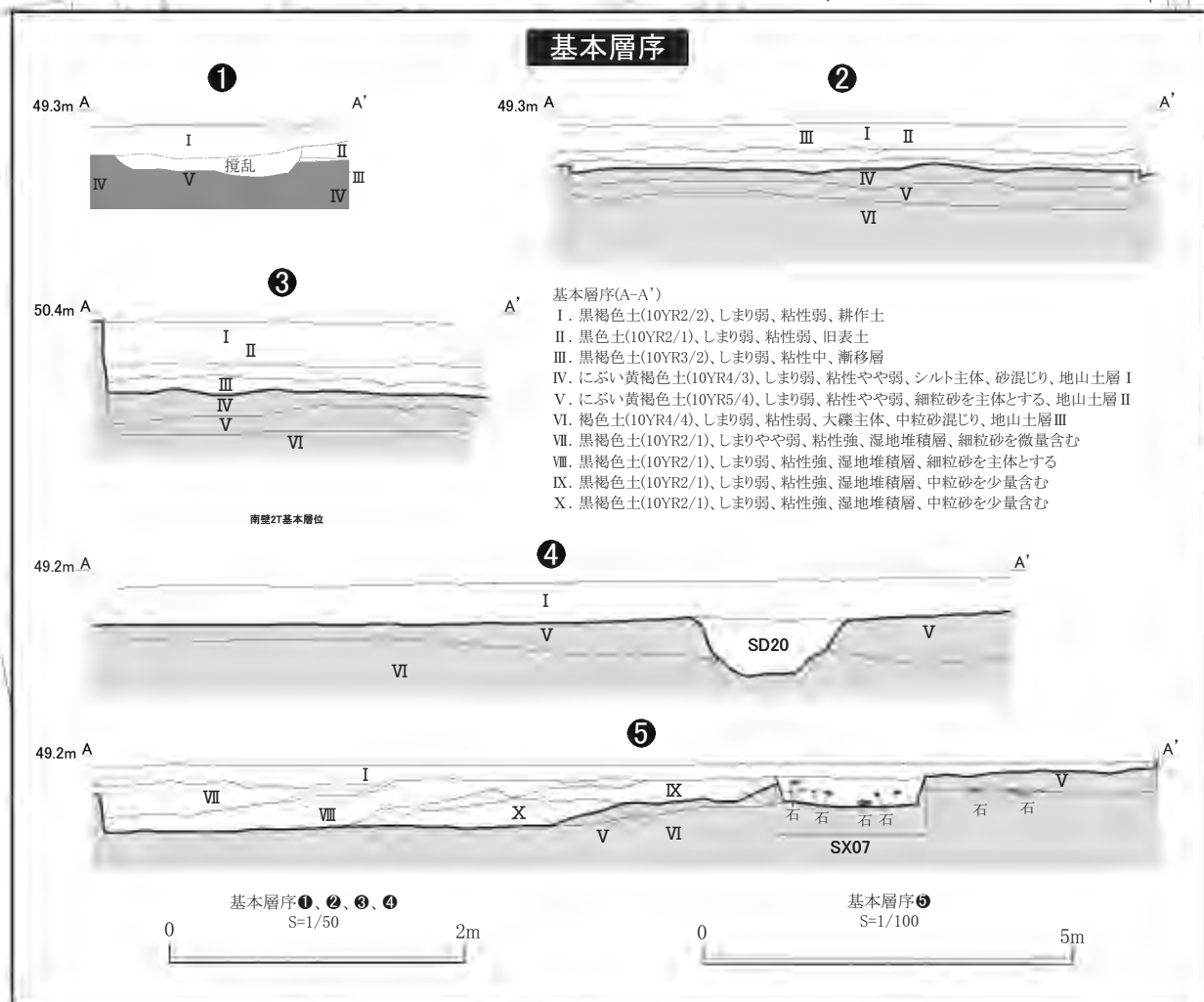
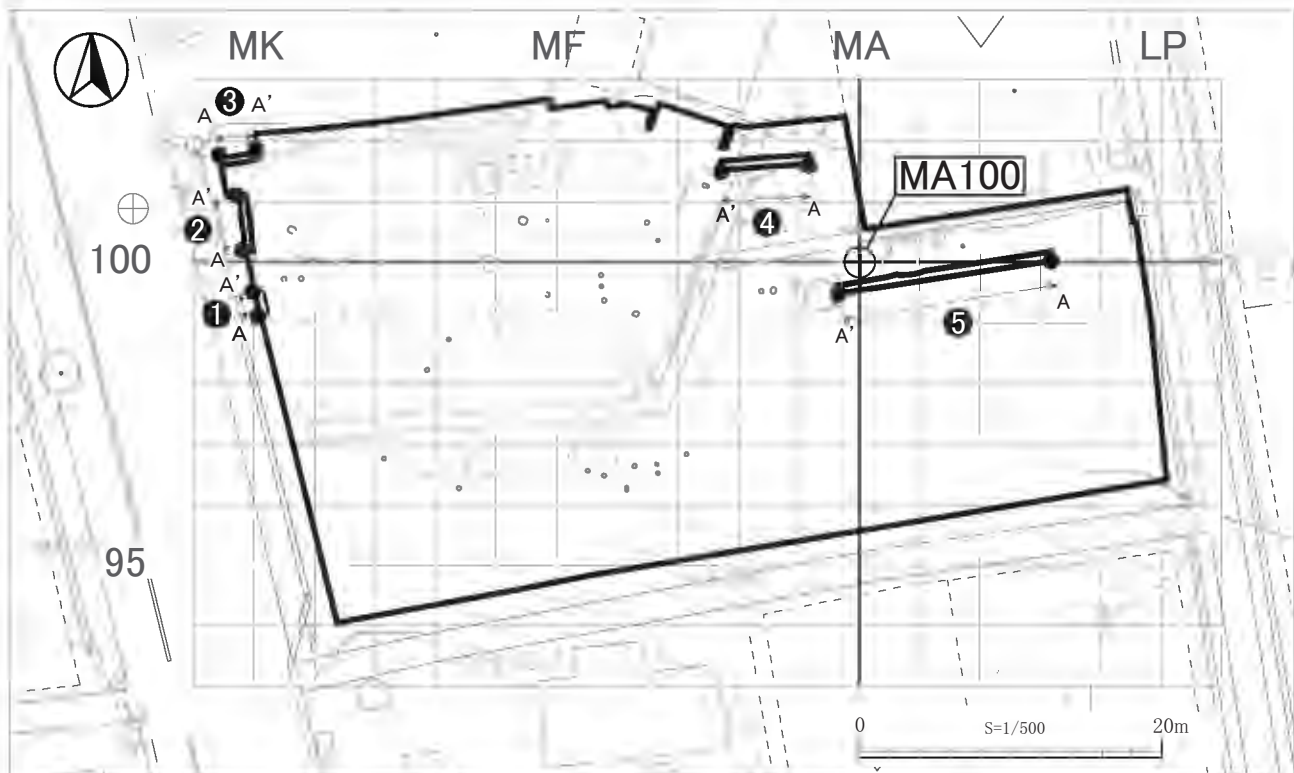
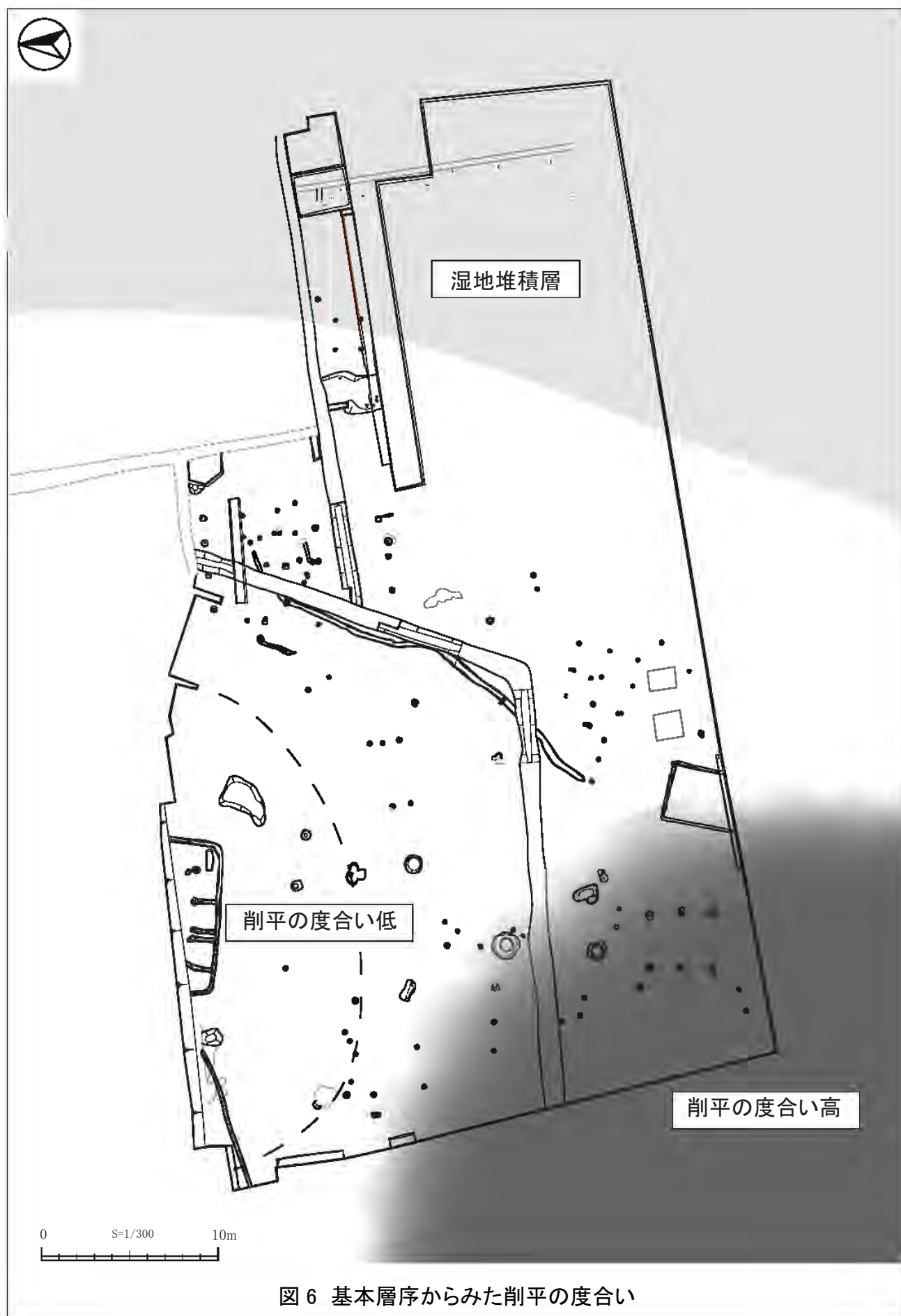
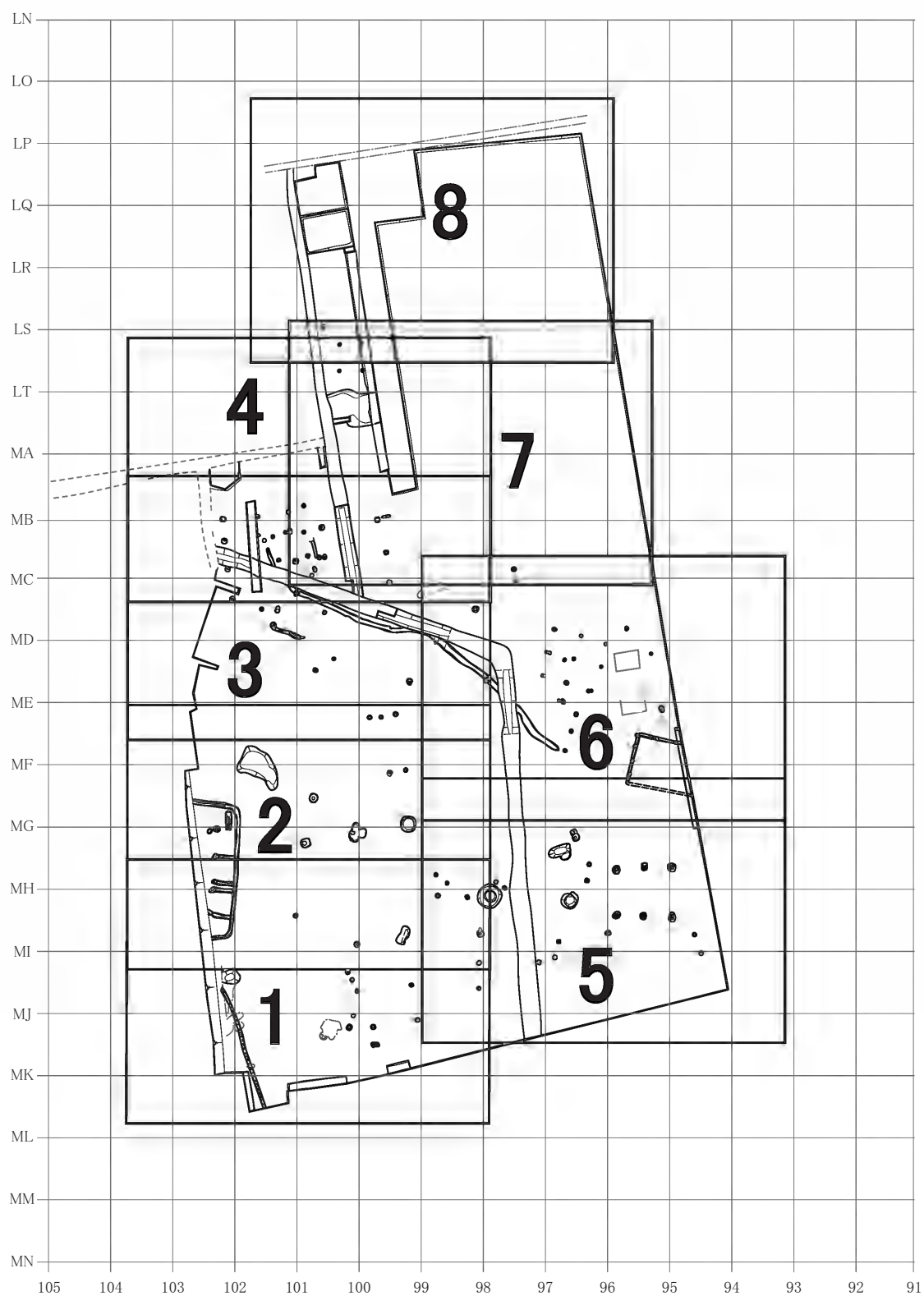


図5 A区 グリッド配置図・基本層序





0 平面図S=1/400 20m

图 7 A 区遺構配置割付図

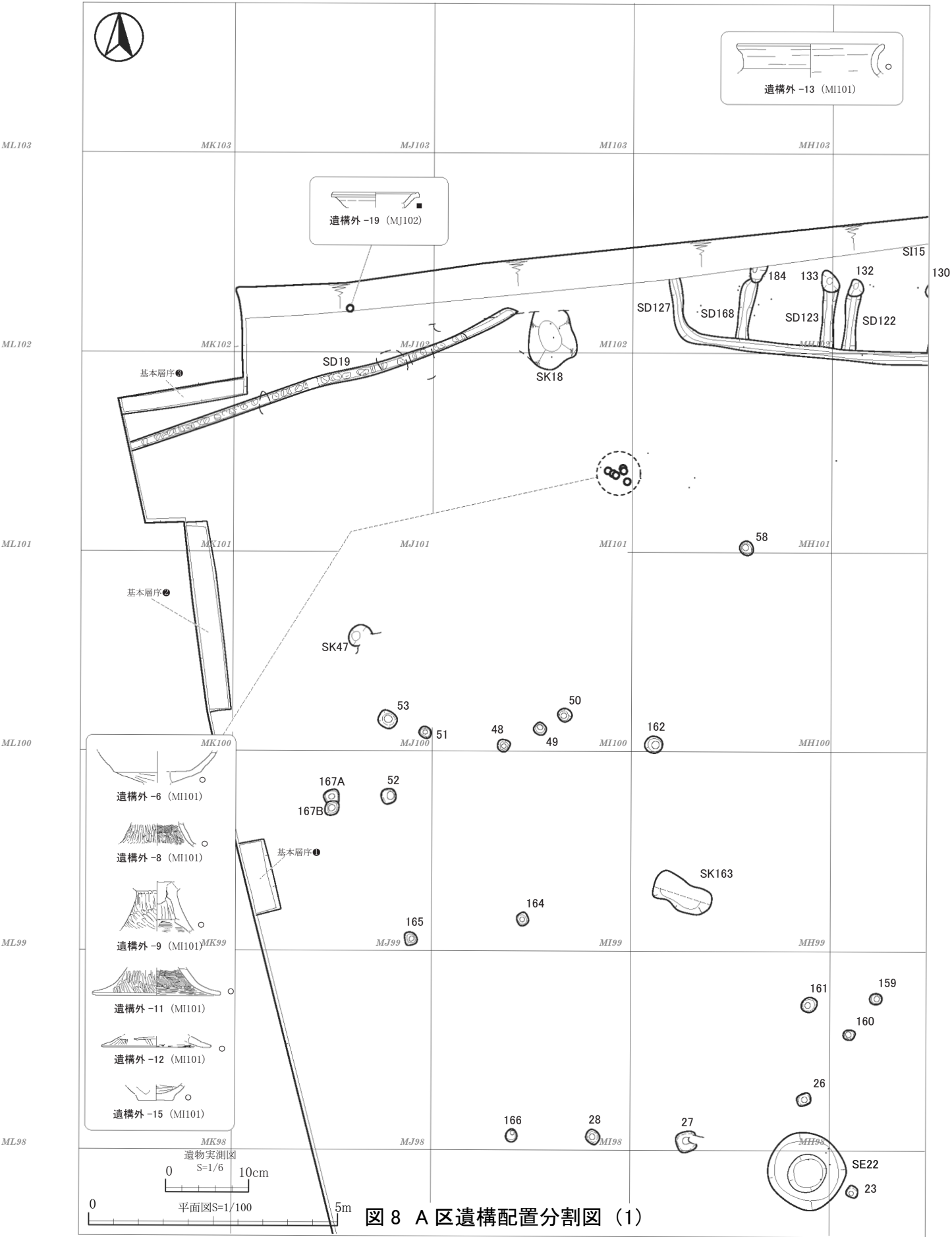


图 8 A 区遺構配置分割図 (1)

50
49
164

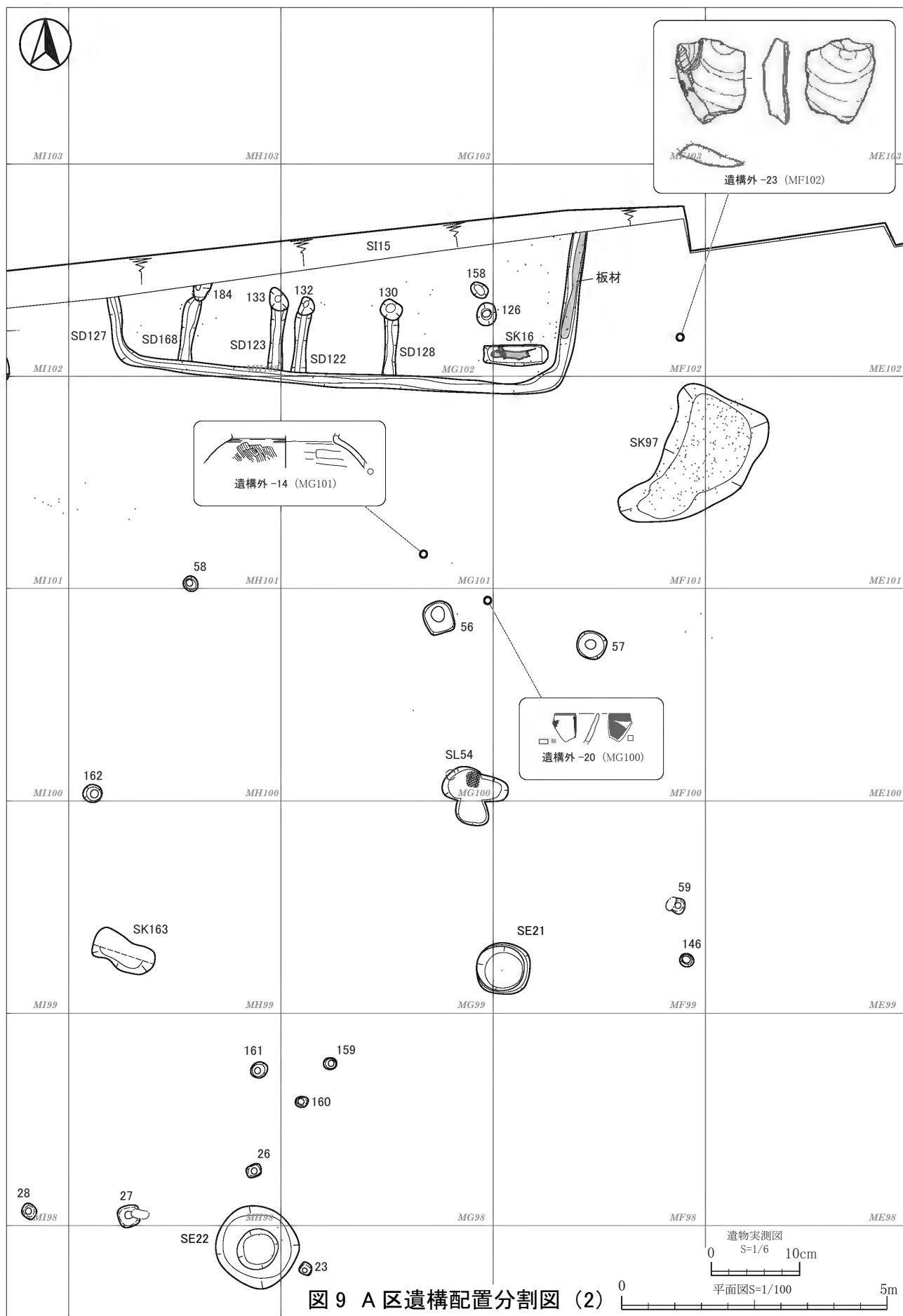


図9 A区遺構配置分割図(2)

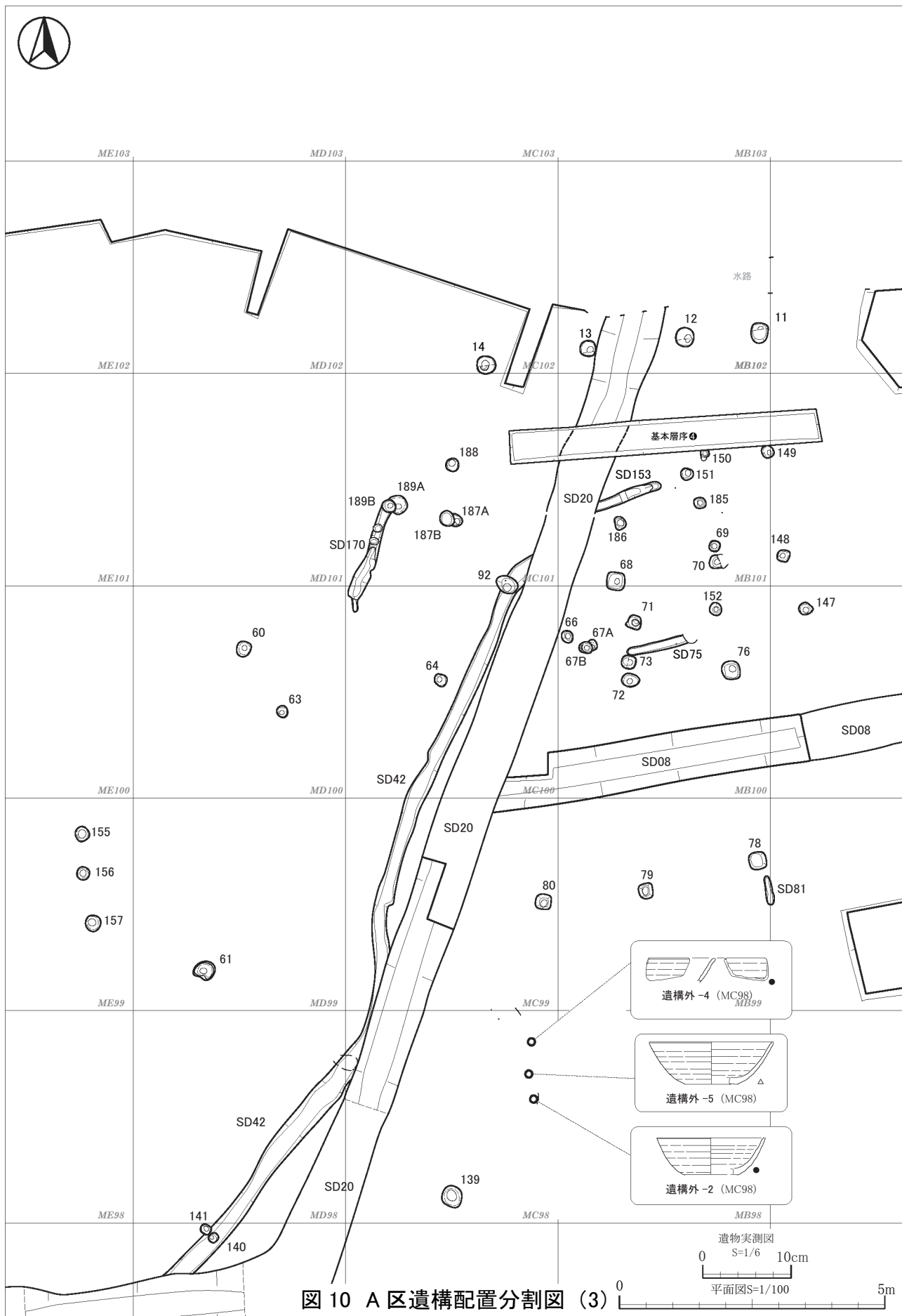
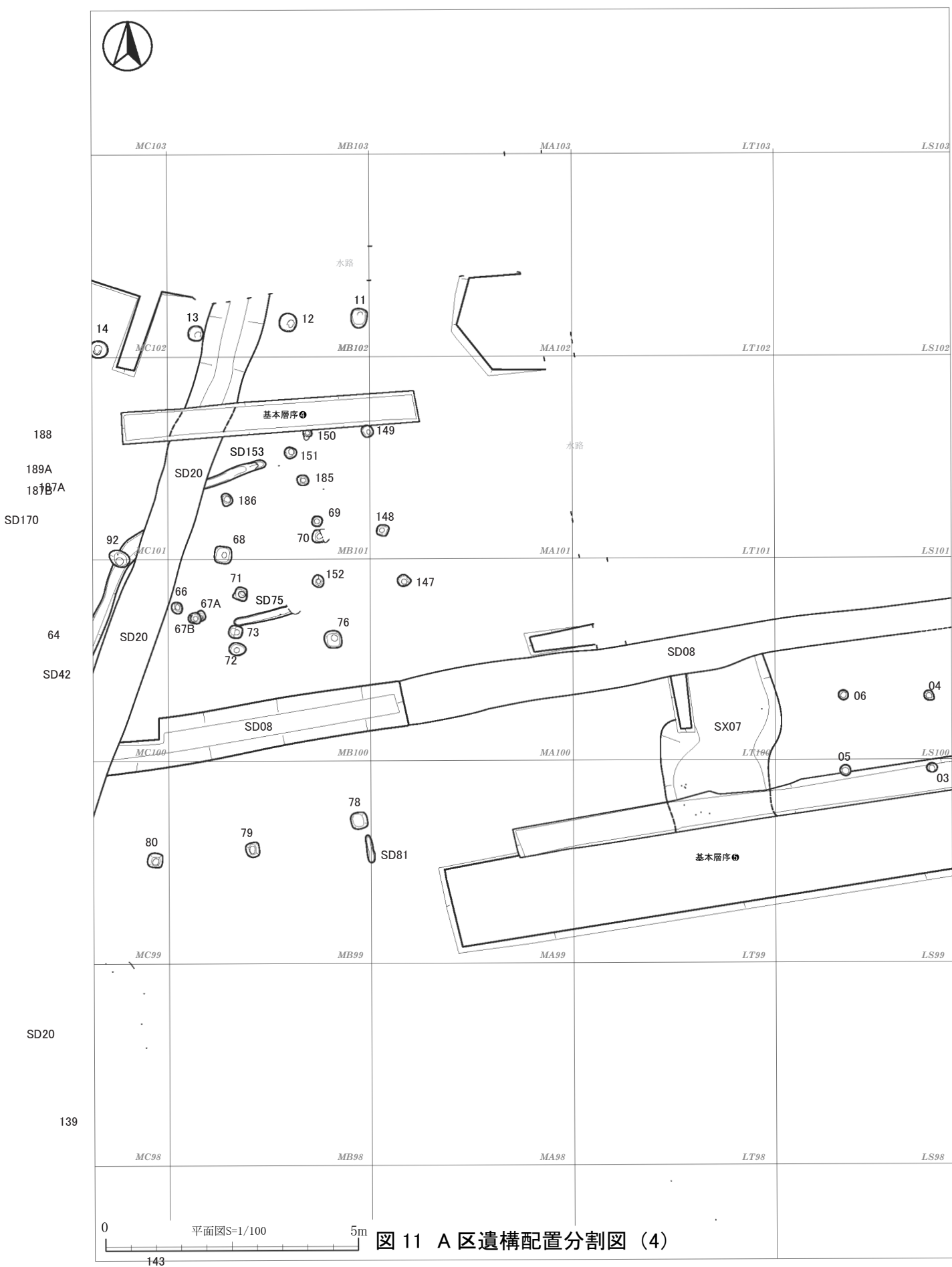


图 10 A 区遺構配置分割図 (3)

水路



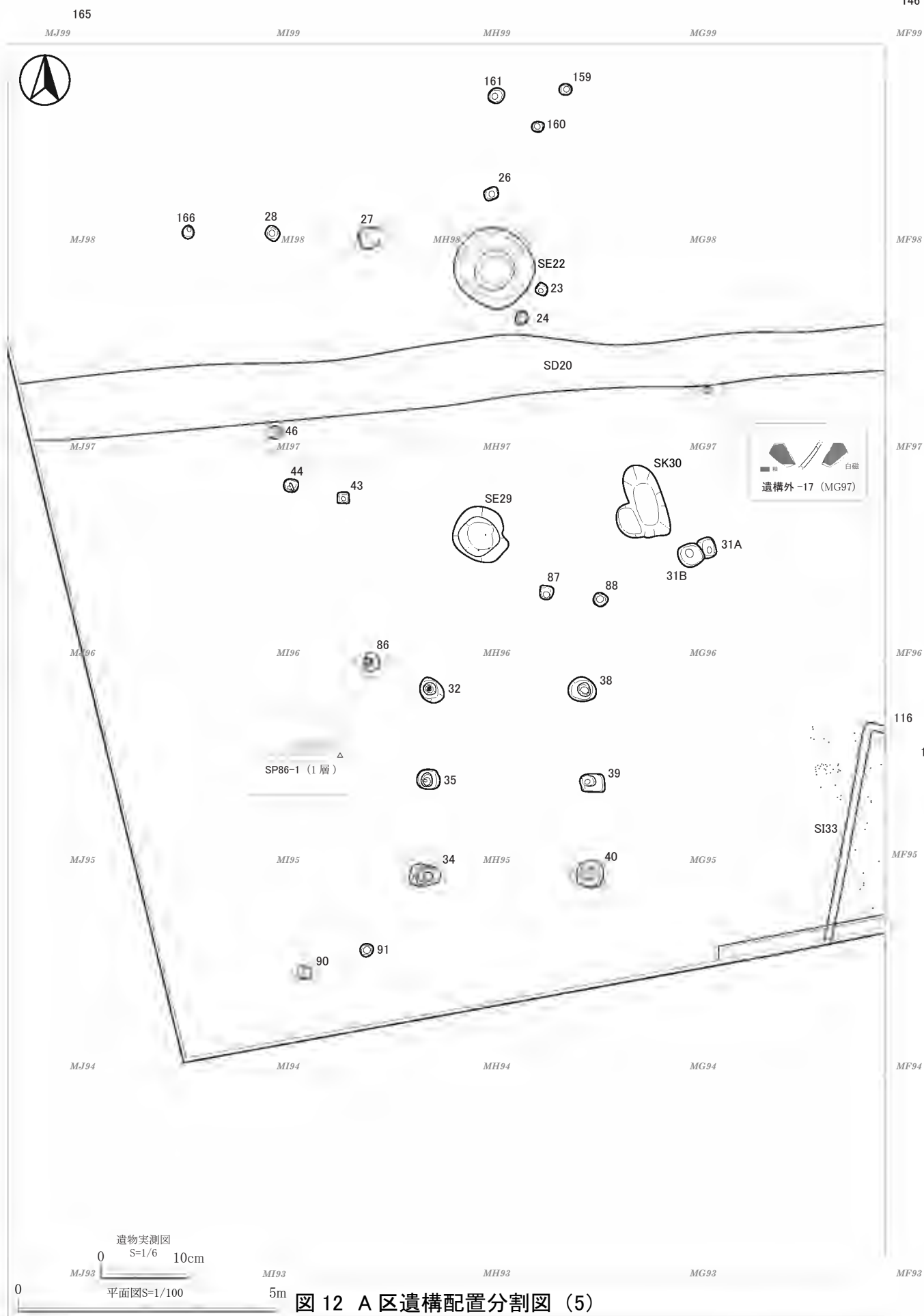


图 12 A 区遺構配置分割図 (5)

SK21

61

SD42

146

MG99

MF99

ME99

MD99

MC99



MG98

MF98

ME98

SD42

MD98

MC98

141

140

SD20

139

143

144

MG97

MF97

ME97

137

MD97

MC97

SK30

31A

98

99

100

102

101

103

104

142

107

136

31B

※1/2
遺構外-25
(MF95)

※1/2
遺構外-24
(ME95)

SP100-1 (確認面)

ME96

MD96

MC96

MG96

MF96

116

115

114

113

112

181

111

SI33

MF95

トレンチ跡

トレンチ跡

134

109

MG95

MF95

ME95

MD95

MC95

MG94

MF94

ME94

MD94

MC94

MG93

MF93

ME93

MD93

MC93

遺物実測図
S=1/6 10cm

0

平面図S=1/100

5m

図 13 A 区遺構配置分割図 (6)

150 149
SD153 151 185 69 70 148
SD20 186 68 71 73 72 76 152 147
66 67A 67B 70 71 72 73 76 152 147
187A 92 MC101 MB101

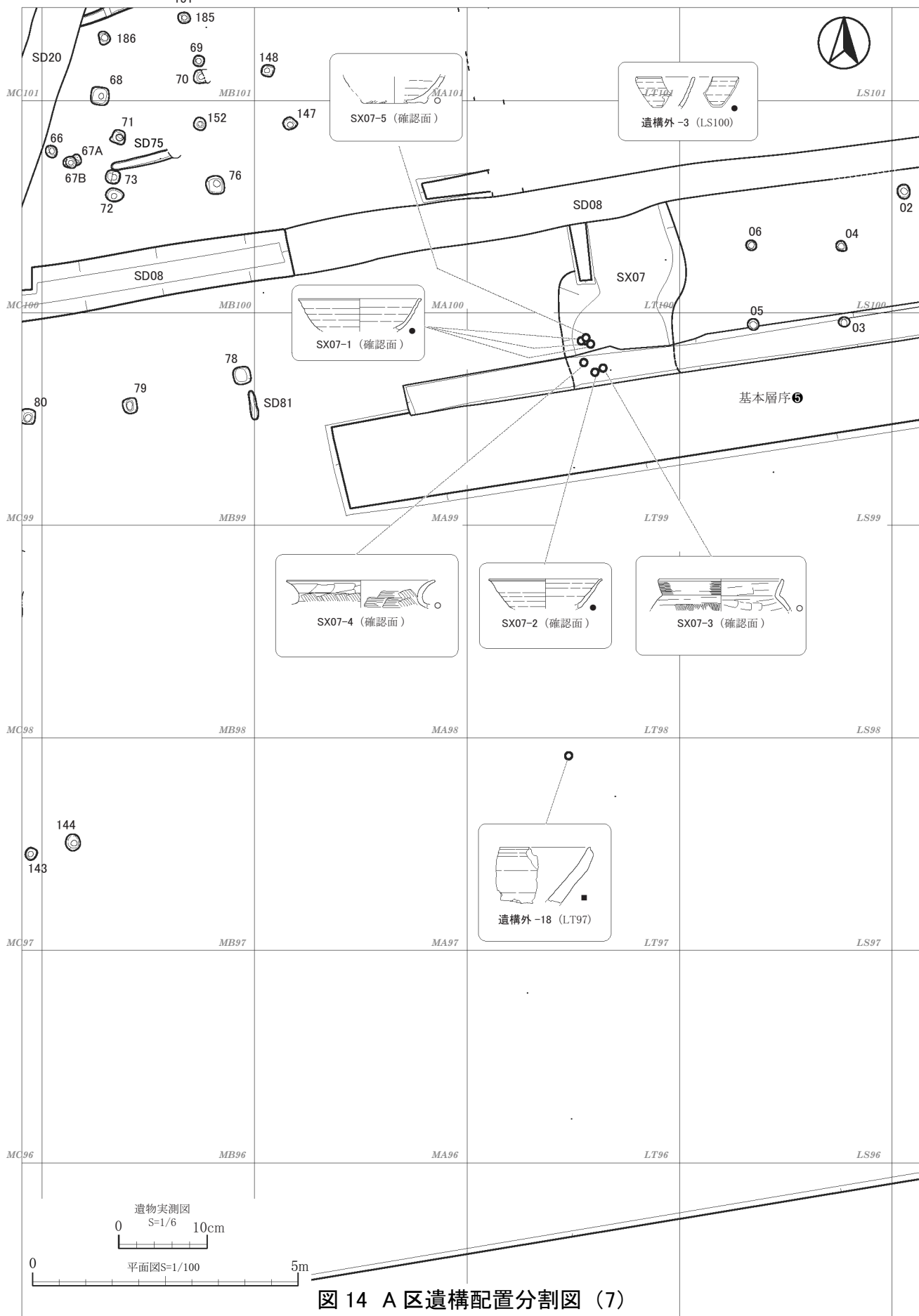


图 14 A 区遺構配置分割図 (7)

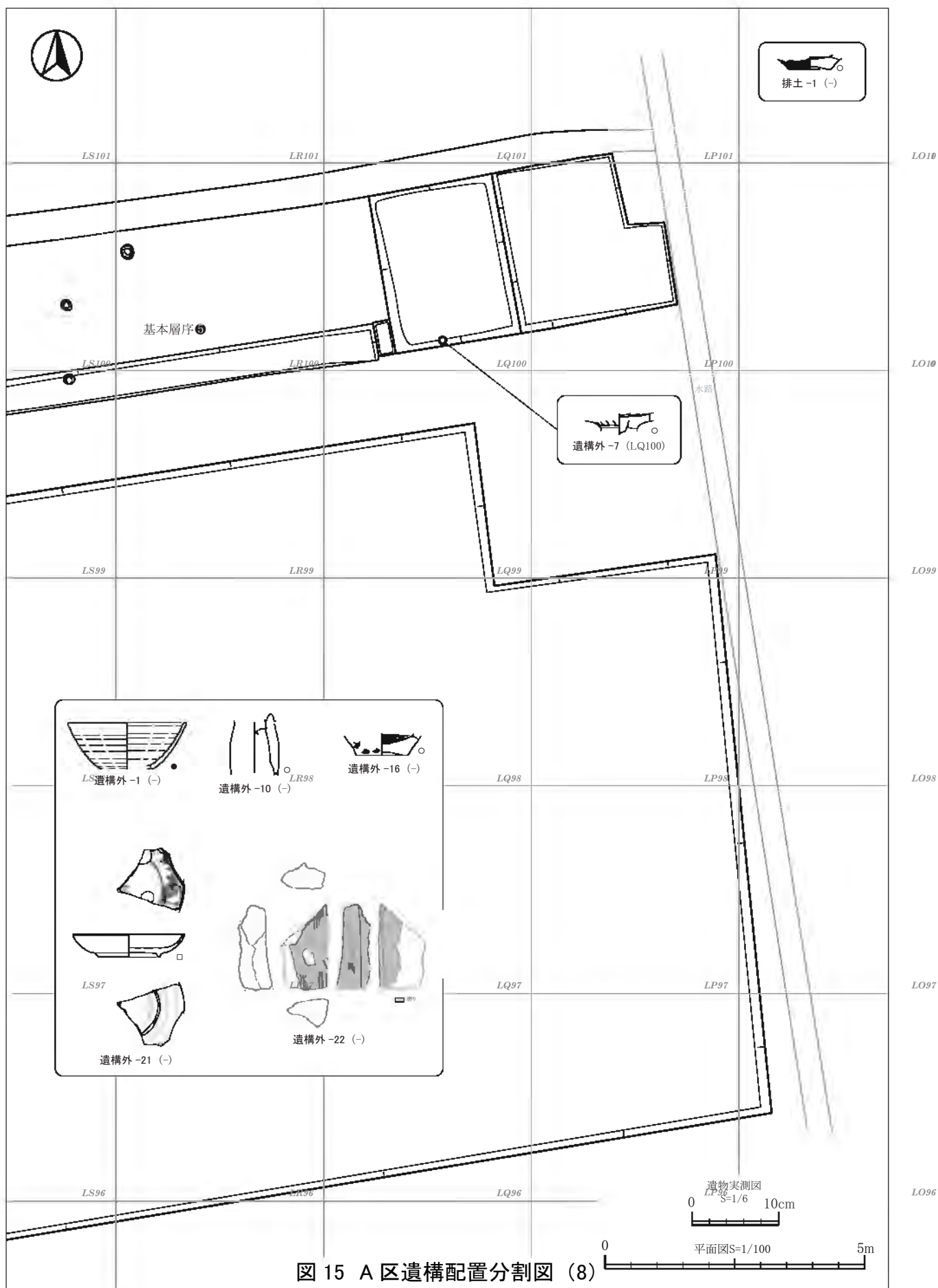


图 15 A 区遺構配置分割図 (8)

Ⅲ 検出遺構と出土遺物

1. 竪穴建物跡

SI15竪穴建物跡【図9,16,17・写真図版5,6】

位置 調査区北端に位置する。**重複関係** 電柱の据え付け穴であるSK16に切られる。**平面形・規模・特徴** 竪穴建物跡の3分の1以上は調査区外に延びている。調査区内で確認できる長軸は8.28mで、方形を呈すると考えられる。建物軸線は東に3.2度振れる。建物跡南東隅は、電柱の据え付け穴によって一部破壊されていた。**堆積層** 建物の埋土は2層に分層される。1層はしまりが弱く、地山土粒を微量含む黒色土層、この下層の2層が地山土と黒色土の混和層で、この層が明確な貼り床層である。2層の下層は大礫が混じる地山土層であり、本来の建物床面は1層であったと考えられる。建物跡はⅢ層上面から検出し、20cm程度の削平を受けていると考えられるが、構築当初から掘り込みの浅い竪穴建物であったと考えられる。建物跡の壁の立ち上がりはほとんど残存していない。**内部施設** 建物跡の大部分は調査区外へ広がるため、カマド、炉跡等は確認できなかった。主柱穴はSP126,184柱穴を確認した。この主柱穴間の間隔は、5.35mである。柱配置から4本柱で上屋を支持したと考えられる。主柱穴はいずれも柱が抜き取られていた。このほかに、建物跡南辺に直交するように床面小溝を4本（東からSD128,122,123,168溝跡）検出した。これらの溝跡は前述の大礫混じりのⅣ層を掘り込んで設けられており、掘り込みはいずれも南から北に向かい深くなっている。溝の幅は20cm程度である。この溝の北側にはいずれも重複して直径30～40cm程度のピットが設けられており、床面小溝に付属した遺構と想定される。なお、SD168溝跡は主柱穴であるSP184柱穴に連結している。**壁際溝** 竪穴建物跡の周囲は壁際溝が巡っている。溝内部には、掘削に伴う鋤跡が北東辺を中心に残存していた。東辺の掘り込みは深く遺構確認面から20cmあるのに対して、西辺は13cm程度しかない。埋土は単層であり、断面では板材等の痕跡は確認できないが、地山層に大礫が主体とならない東辺の壁際溝底面には板材の痕跡が確認されており、竪穴建物跡が機能していた当初に並んでいた板材を廃棄時に解体したと考えられる。**出土遺物** 5世紀後半の土師器甕片が出土した。また前述の電柱による攪乱から土師器高杯脚部片が出土しており、この竪穴建物跡に伴うと考えられる。竪穴建物跡からの遺物の出土が少ないが、隣接するSK97土坑から大量に5世紀後半の土師器が出土しており、この建物跡から出土した土師器片と接合していることから、この土坑はSI15竪穴建物跡の塵芥処理等に使用されたと考えられる。このほかロクロ土師器片30g、土師器片432gが出土した。

SI33竪穴建物跡【図13,18,19,20・写真図版7】

位置 調査区南端に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 竪穴建物跡の南西側は一部調査区外に延びている。大きく削平を受けており、北西辺は消滅している。このため規模も正確ではないが、短軸は2.57mで南西から北東に長い方形を呈すると考えられる。建物軸線は東に10.8度振れる。**堆積層** 建物の埋土は大きく削平を受けているため、1層のみしか残存していない。1層は地山土と黒色土とのしまりの強い混和層で、この層が貼り床層と思われる。基本層序で述べたとおり、SI33竪穴建物跡が位置するA区南端は削平の度合いが大きい範囲と考えられるため、本来の竪穴建物跡の掘り込みは少なくともSI15竪穴建物跡と同程度はあったと推測される。このため、建物跡の壁の立ち上がりはほとんど残存していない。建物跡の周辺には、床面に由来すると考えられる黒色土層が広がっており、この層から5世紀後半の土師器片が出土している。**内部施設** 床面が残存していないため、カマド、炉

跡等は確認できなかった。主柱穴は建物跡の内部には存在しないが、三方を巡る壁際溝を切るように小ピット(SP111,181,112,113,114,115,116)を検出した。それぞれの柱穴の間隔は、次のとおりである。

SP111-SP181 1.3m、SP118-SP112 0.35m、SP112-SP113 0.9m、SP113-SP114 0.8m、
SP114-SP115 0.95m、SP115-SP116 0.95m

壁際溝は、建物南東辺と北東辺で確認した。幅21cm程度、深さ5cm程度だが、北西辺は削平の影響で消滅していた。A区南壁に設定したサブトレンチでも、断面で壁際溝の痕跡は確認できなかった。主柱穴が建物内部に存在せず、壁際溝を切る柱穴が存在することから四方の壁で上屋を支持した壁立式の竪穴建物跡であると考えられる。いずれの柱穴でも柱が抜き取られていた。**出土遺物** 竪穴建物跡及び前述の床面由来の黒色土層より、5世紀後半の土師器高杯、椀、甕片が出土した。このほか須恵器片28g、土師器片1,959g、陶器片16gが出土した。

2. 掘立柱建物跡・柱穴列

SB01掘立柱建物跡【図21,22・写真図版8】

位置 調査区南西端に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 桁行2間、梁行1間の南北棟建物である。桁行約3.6m(12尺)、梁間約3.0m(10尺)の規模をもち、桁行方向は1.8m(6尺)等間である。庇(下屋)などは付属しない。建物の軸線はほぼ真北をとる。柱穴は40～50cm程度の隅丸方形で比較的大きい部類に入る。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは20cm程度と浅いが、当該建物一帯は耕地整理による削平が大きい範囲であるため、本来の柱の根入りはさらに深かったと考えられる。柱はすべて抜き取られているが、SP38柱穴の抜き取り痕を参考にすれば、柱材は直径20cm程度であったと想定される。総じて柱穴の根入りが均一であることから、柱のあたりの標高は揃い、旧地表面は比較的水平であったと考えられる。SP34,32,35柱穴は柱掘り方底面に石が据えられており、地盤沈下を防ぐ目的と想定されることから、上屋等によりある一定の荷重がかかっていたと考えられる。柱筋の通りは比較的良い。**出土遺物** 土師器片4gが出土した。

SB02掘立柱建物跡【図21,23】

位置 調査区北東端に位置する。**重複関係** SD20溝跡に切られる。**平面形・規模・特徴** 建物の大部分は調査区外に延びている。調査区内で確認できるのは、梁間方向のみで、梁間2間の南北棟建物になると想定される。梁間方向は3.9m(13尺)の規模をもち、桁行方向は1.95m(6.5尺)等間である。建物の軸線は西に7.4度振れる。隣接するSP11柱穴は、SB02掘立柱建物跡を構成する柱穴よりも根入りが浅く、柱筋が通ることから、庇(下屋)となる可能性がある。SB02掘立柱建物跡が身舎であった場合、庇(下屋)の出は1.5m(5尺)で、南側に庇(下屋)が巡る構造となるが、建物のほとんどが調査区外に存在するため検証ができなかった。柱穴は20～30cm程度の円形で、遺構確認面からの柱穴の掘り込みは20cm前後であるが、当該建物一帯は耕地整理による削平が大きい範囲であるため、本来の柱の根入りはさらに深かったと考えられる。棟木直下の柱穴(SP13)は根入りが浅い。この柱穴は、底面に黒色シルト由来の人為堆積層があり、柱材の長さを調整することを目的に、嵩上げのための盛土がなされたと考えられる。柱穴にはすべて柱痕跡が残り、柱材は直径15cm程度であったと想定される。柱筋の通りは比較的良い。**出土遺物** 土師器片2gが出土した。

SB03掘立柱建物跡【図21,24・写真図版8】

位置 調査区北東端に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 桁行1間、梁間1間の簡素な構造の掘立柱建物跡で、桁行約1.95m(6.5尺)、梁間約1.95m(6.5尺)の規模をもつ。庇(下屋)などは付属しない。建物の軸線は西に7.7度振れる。柱穴は20～30cm程度の隅丸方形で、遺構確認面からの柱穴の掘り込みは20～30cm程度であり、根入りは均一ではない。当該建物一帯は耕地整理による削平が大きい範囲であるため、本来の柱の根入りはさらに深かったと考えられる。建物の北西隅にあたるSP68柱穴の柱痕跡は、10cm程度であり、柱筋の通りは悪い。このため、均一ではない柱材を使用して建てられていたと考えられる。**出土遺物** 土師器碗片が出土した。このほか土師器片7gが出土した。

SB04掘立柱建物跡【図21,24・写真図版8】

位置 調査区北東端に位置する。**重複関係** SD20溝跡に切られる。**平面形・規模・特徴** 桁行2間、梁間1間の東西棟建物である。桁行約3.0m(10尺)、梁間約1.95m(6.5尺)の規模をもち、桁行方向は1.5m(5尺)等間である。庇(下屋)などは付属しない。建物の軸線は西に9.7度振れる。柱穴は20cm程度の円形または隅丸方形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは20cm程度と浅いが、当該建物一帯は耕地整理による削平が大きい範囲であるため、本来の柱の根入りはさらに深かったと考えられる。掘り方の標高は揃わないが、柱のあたりの標高は揃う。柱はすべて抜き取られているが、柱材は直径20cm程度であったと想定される。建物を構成する柱穴は、北辺の2つ(SP185,186)の底面に黒色シルト由来の人為堆積層があり、南辺の柱が北辺に比して長かったため、柱材の長さを調整する目的で、掘り方内部に嵩上げのための盛土がなされたと考えられる。以上から、旧地形は南から北に向かい傾斜していたと考えられ、既存層序で述べた旧地形の想定と矛盾しない。建物の桁行方向にはSD75溝跡とSD153溝跡があり、当該建物に伴う雨落ち溝とみられるが、これを参考にすれば軒の出は身舎から50cm程度であったと想定される。柱筋の通りは悪く、均一ではない柱材を使用して建てられていたと考えられる。**出土遺物** なし。

SA01柱穴列【図21,23・写真図版8】

位置 調査区北東端に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 柱通りの良く、埋土が類似する3つの柱穴を柱穴列と認定した。柱穴列の総長は4.2m(14尺)で、それぞれの柱の間隔は、北からSP78柱穴とSP79柱穴間が2.3m、SP79柱穴とSP80柱穴間が1.9mである。建物の軸線はSB02～04掘立柱建物跡と同軸で、同時期に併存していた可能性が高い。柱穴は30cm程度の隅丸方形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは20～30cm程度と浅いが、当該建物一帯は耕地整理による削平が大きい範囲であるため、本来の柱の根入りはさらに深かったと考えられる。掘り方の標高は揃わないが、柱のあたりの標高は揃う。柱材は直径20cm程度であったと想定される。建物を構成する柱穴は、すべてに底面に黒色シルト由来の人為堆積層があり、柱材の長さを調整する目的で、嵩上げのための盛土がなされたと考えられる。**出土遺物** なし。

SI15

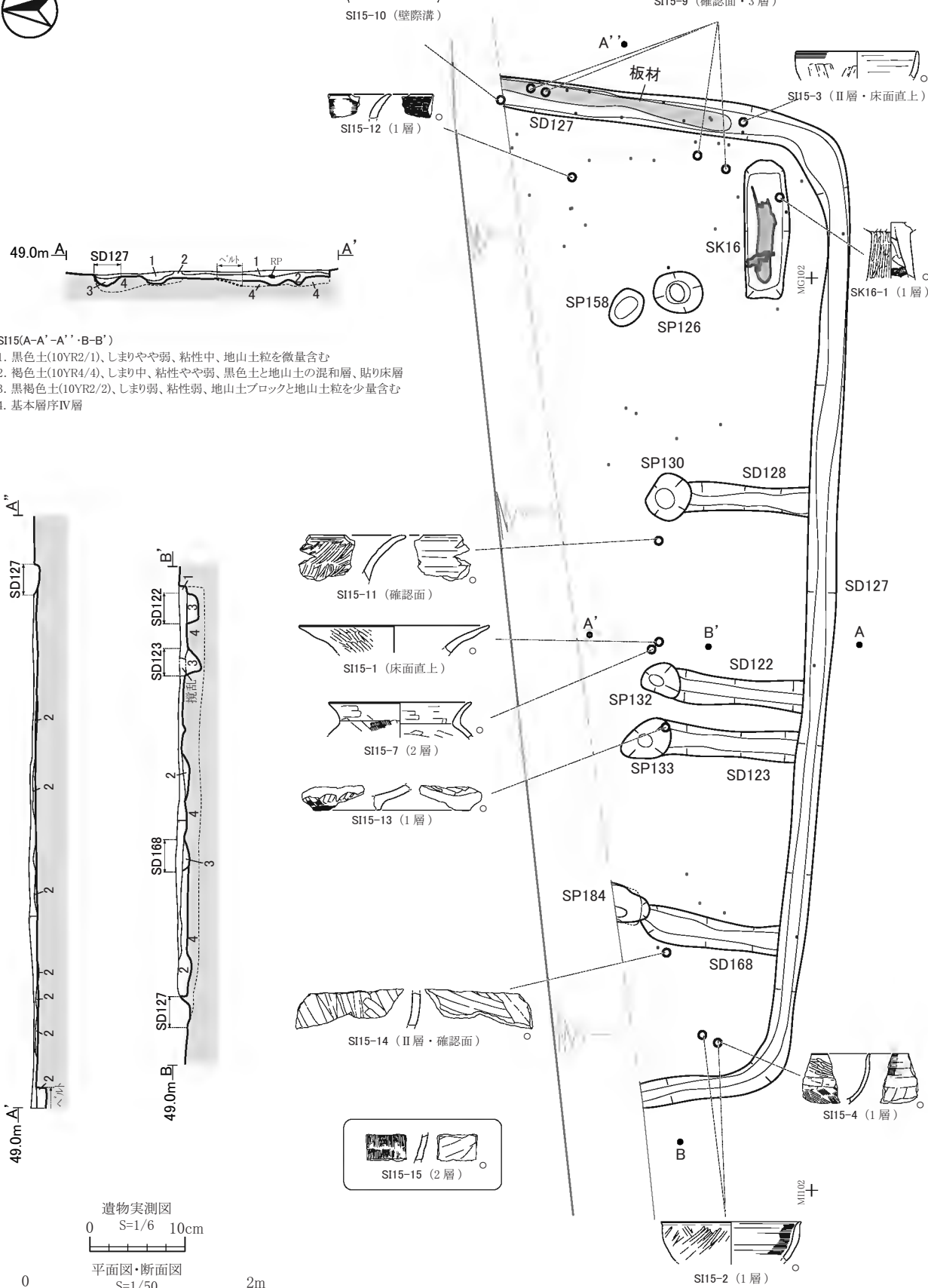
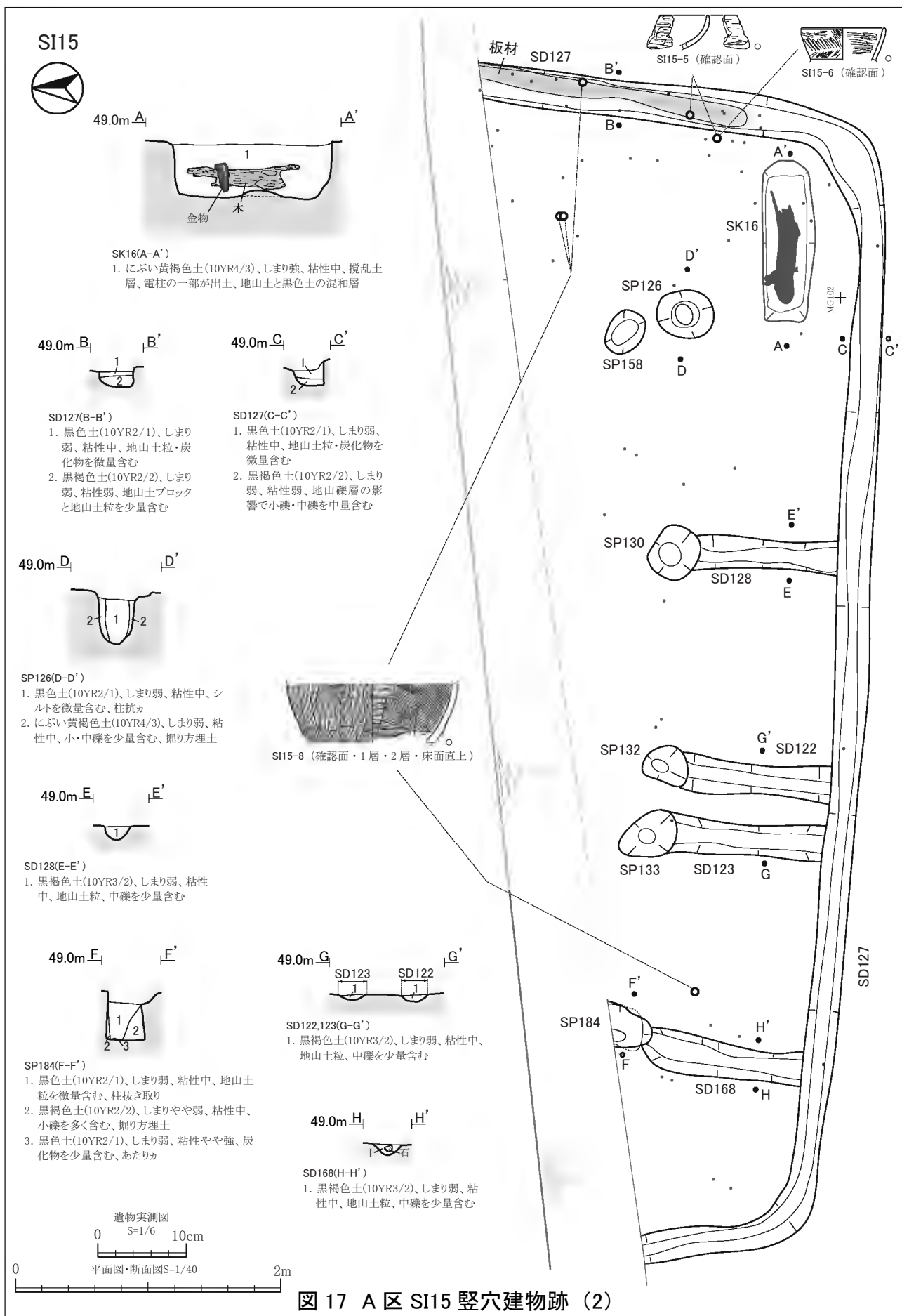
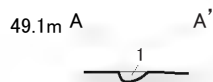
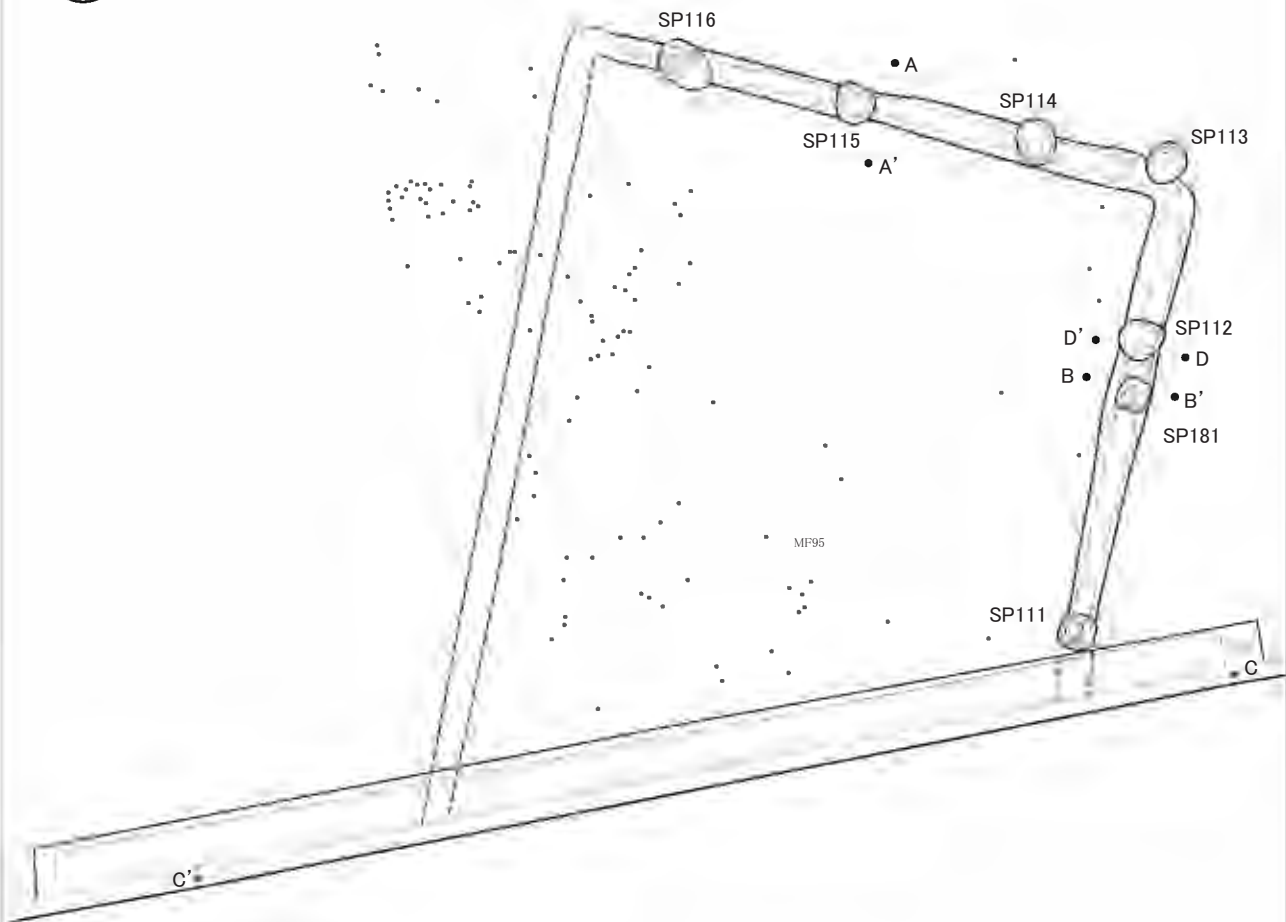


図 16 A 区 SI15 竪穴建物跡 (1)

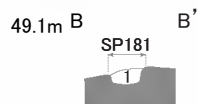


SI33



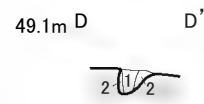
SI33(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり中、粘性弱、黒色土と地山土との混和層、壁溝カ、抜き取り、貼り床層の土が混和する



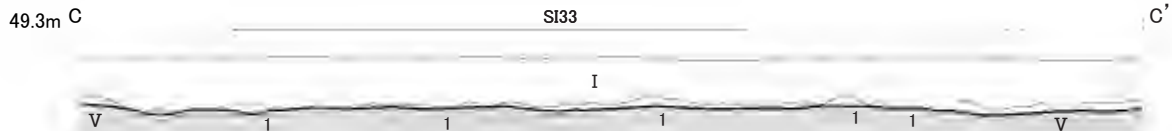
SI33(B-B')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり中、粘性中、柱穴への人為堆積、地山土を微量含む



SP112(D-D')

1. 黒褐色土(10YR2/3)、しまり弱、粘性中、黒色土を主体に地山土層が混和、壁柱カ
2. 1層と同質だが地山土層が主体、柱の裏込め層カ



SI33(C-C')

- I. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性中、現代の耕作土層
- V. にぶい黄褐色土(10YR5/4)、しまりやや弱、粘性弱、地山黄褐色粘土層、細粒砂を主体とした河川堆積層
1. 褐色土(10YR4/4)、しまり強、粘性弱、黒色土と地山土(IV層)との混和層、大幅に削平された貼り床層

0 1 2m
平面図・断面図S=1/40

図 18 A 区 SI33 竪穴建物跡 (1)

SI33

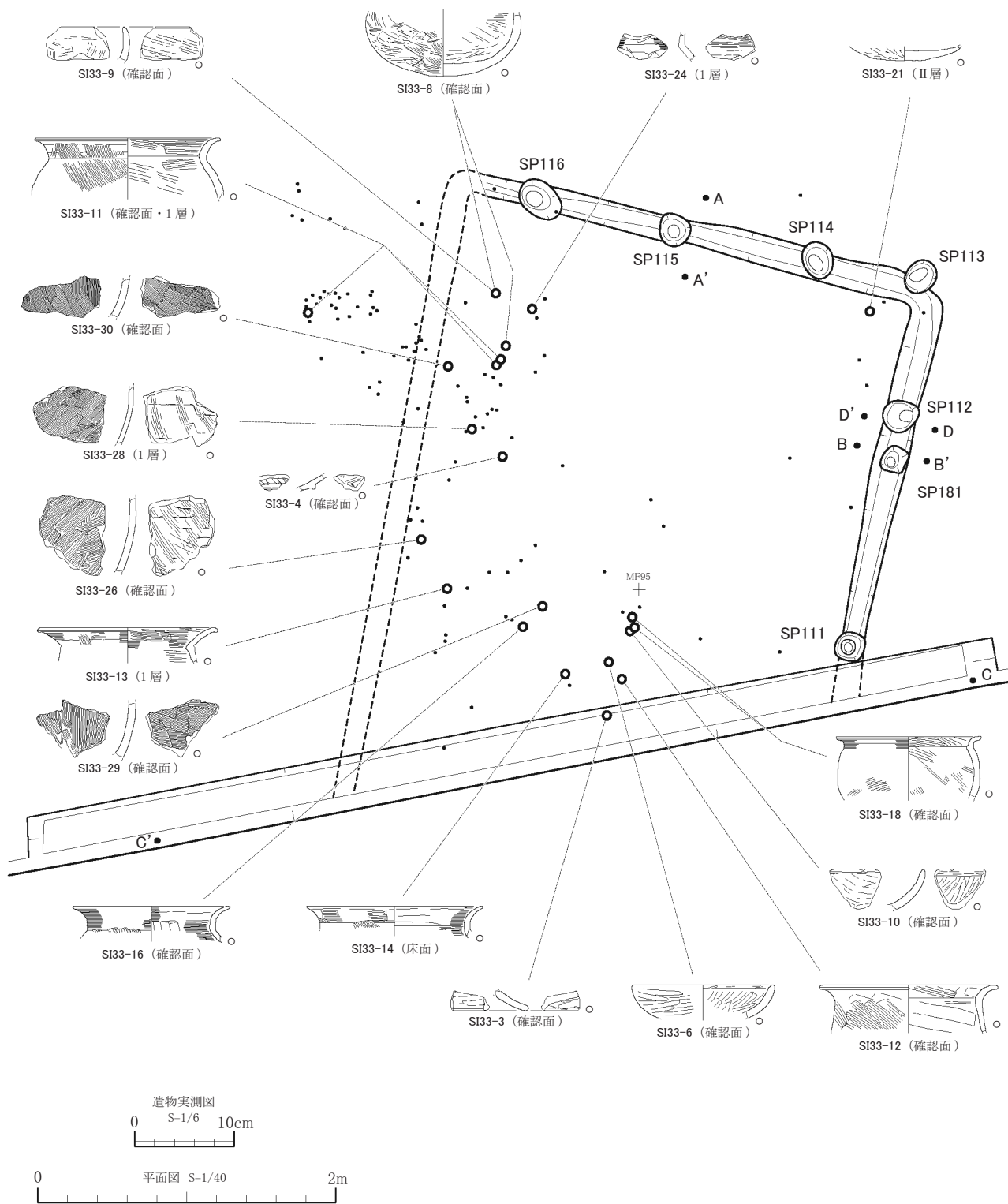


図 19 A 区 SI33 竪穴建物跡 (2)

SI33

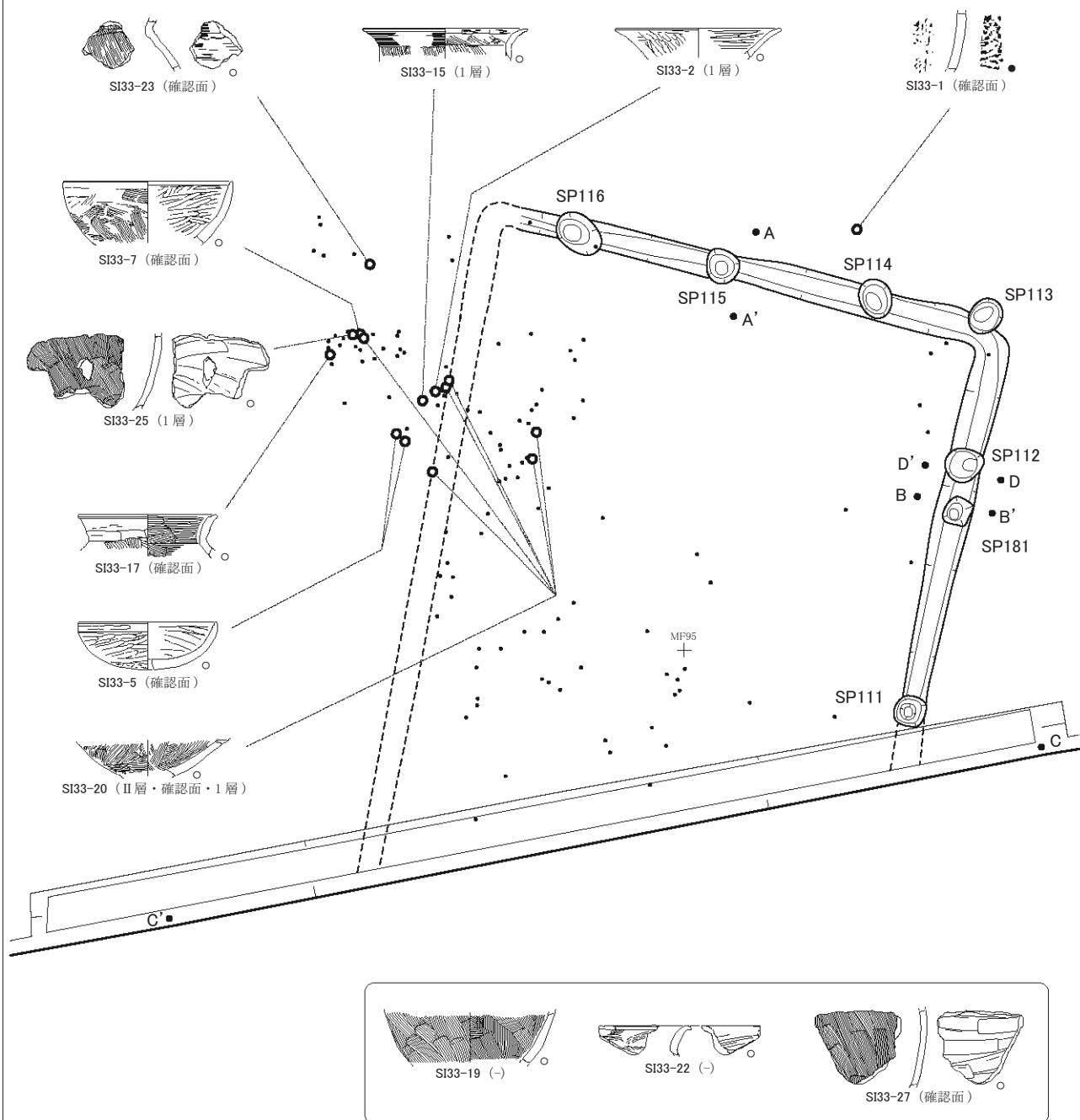
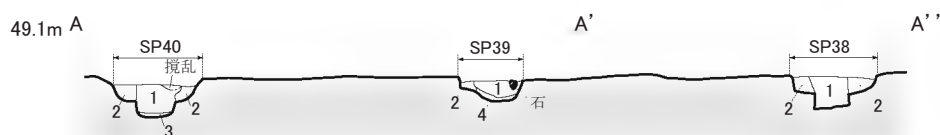
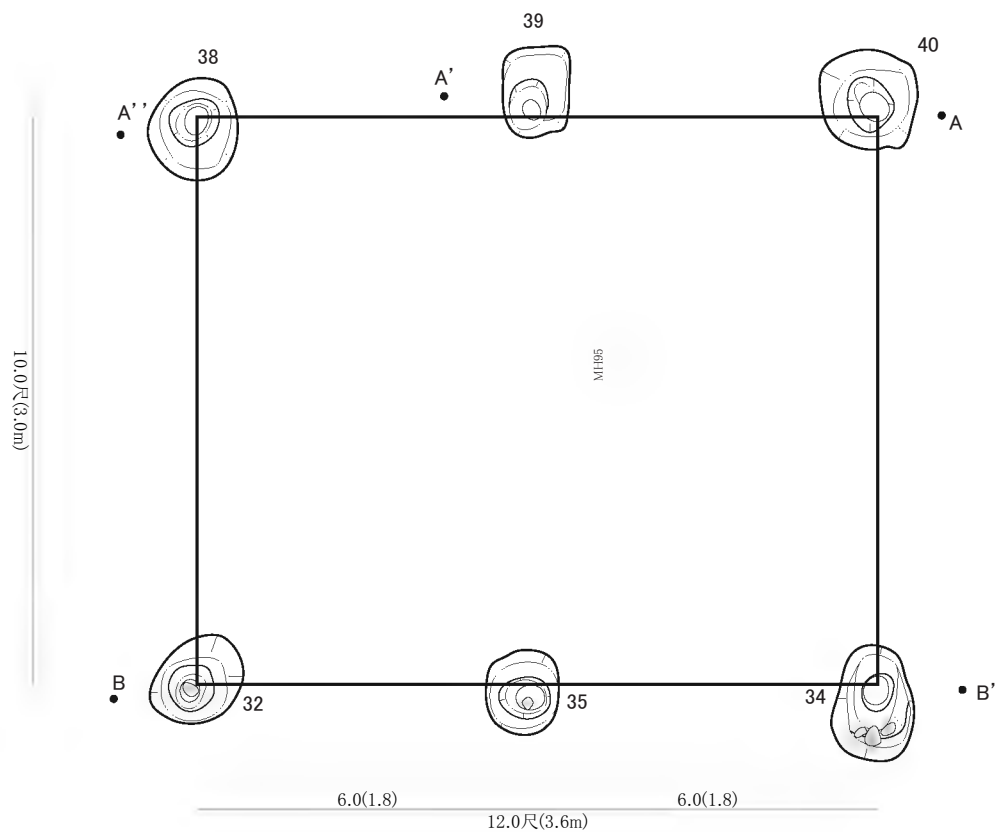


図 20 A 区 SI33 竪穴建物跡 (3)



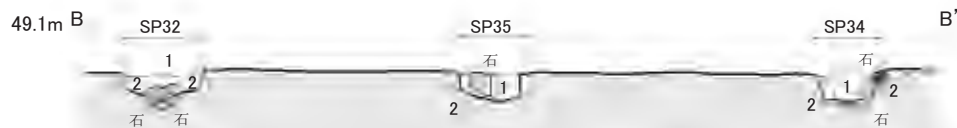
図 21 A 区掘立柱建物跡の配置

SB01



SP40,39,38(A-A'-A'')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり中、粘性やや弱、柱痕
2. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり中、粘性弱、黒色土と地山土との混和土、掘り方埋土
3. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、しまりなし、粘性なし、小礫主体、あたり
4. 黒褐色土(10YR3/1)、しまりなし、粘性やや弱、あたり



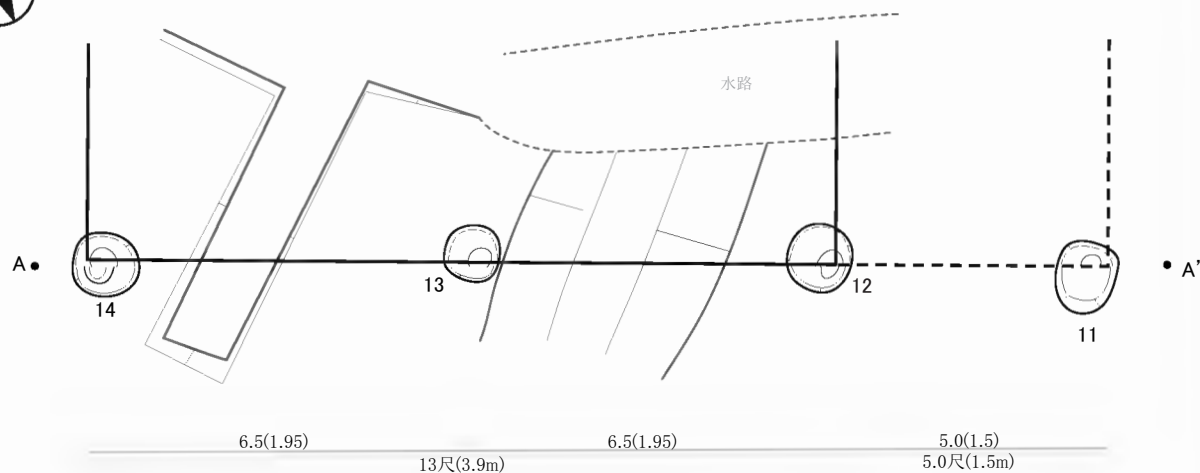
SP32,35,34(B-B')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性弱、柱痕跡
2. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり弱、粘性弱、掘り方埋土

0 平面図・断面図S=1/40 2m

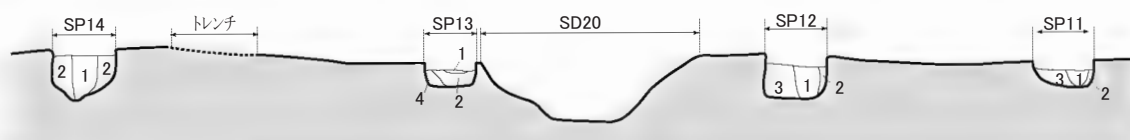
図 22 A 区 SB01 掘立柱建物跡

SB02



49.3m A

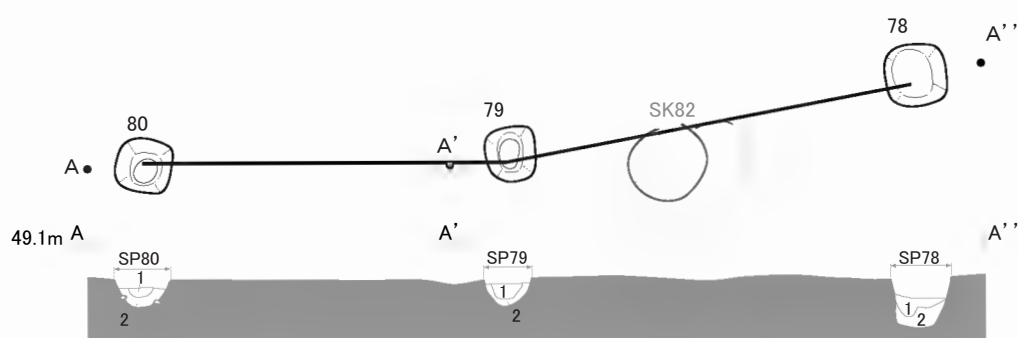
A'



SP14,13,12,11(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性弱、柱痕跡
2. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり弱、粘性弱、掘り方埋土
3. 2層と同質、小礫を多く含む
4. にぶい黄橙色土(10YR7/2)、しまりなし、粘性なし、地山土主体土、掘り方埋土

SA01



49.1m A

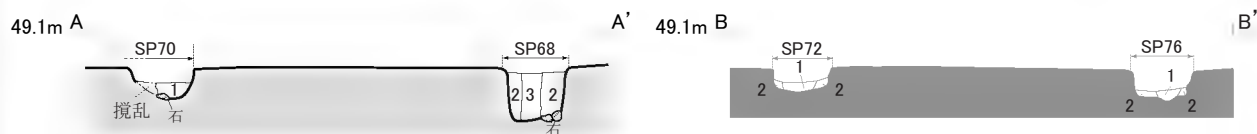
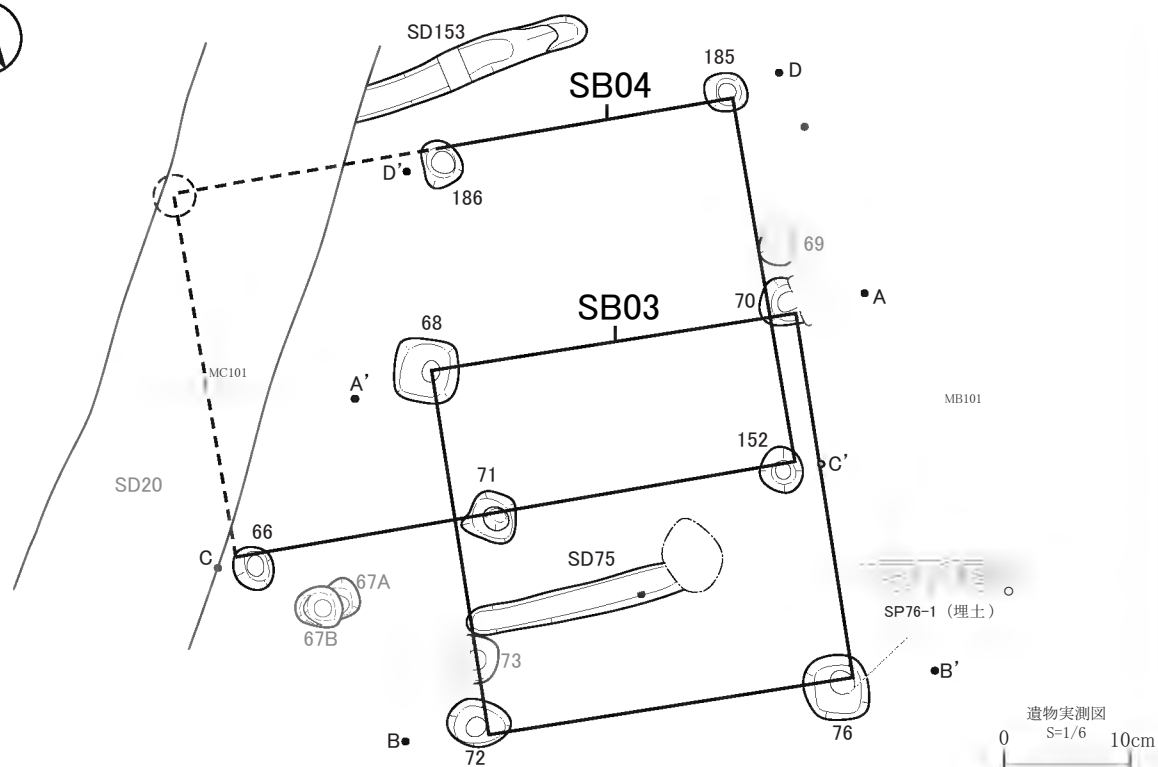
SP80,79,78(A-A'')

1. 黒色土(10YR2/1)、しまりやや弱、粘性中、柱抜き取り
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)、しまり中、粘性中、柱掘り方

0 平面図・断面図S=1/40 2m

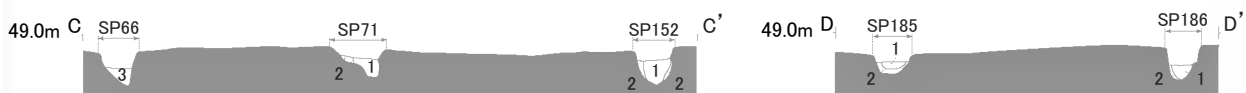
図 23 A 区 SB02 掘立柱建物跡・SA01 柱穴列

SB03,04



SP70,68(A-A')・SP72,76(B-B')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性やや弱、柱抜き取り、地山土粒を微量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1)、しまり中、粘性弱、柱掘り方、地山土粒と黒色土の混和土
3. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性中、柱痕跡



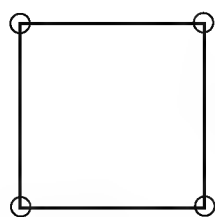
SP66,71,152(C-C')

1. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、しまり弱、粘性弱、黒色土と地山土の混和層、柱抜き取り
2. にぶい黄褐色土(10YR6/3)、しまりやや弱、粘性弱、地山土の再堆積、掘り方埋土
3. 黒褐色土(10YR3/1)、しまり弱、粘性弱、地山土粒を微量含む、柱抜き取り

SP185,186(D-D')

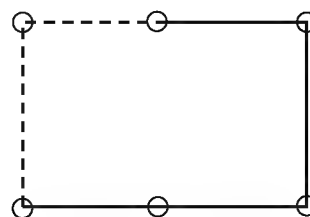
1. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、しまり弱、粘性弱、黒色土と地山土の混和層、柱抜き取り
2. にぶい黄褐色土(10YR6/3)、しまりやや弱、粘性弱、地山土の再堆積、掘り方埋土

SB03



6.5尺(1.95m)

SB04



5.0尺 5.0尺
10.0尺(3.0m)

0 平面図・断面図S=1/40 2m

図 24 A 区 SB03,04 掘立柱建物跡

3. 井戸跡

SE21井戸跡【図9.25・写真図版9】

位置 調査区南西に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.0m、短軸0.96mの円形を呈する。遺構確認面からの深さは0.60mである。断面形は逆台形状で、遺構確認面からやや内側へ内傾しながら底面へ落ち込む。井戸跡内部には縦板等が存在せず、解体の痕跡もみられないため、素掘りの井戸とみられる。堆積層は5層に分層される。5層は黒色シルトが主体の自然堆積層で、井戸が機能していた段階の自然堆積層と思われる。4層は大礫と植物遺存体を多量に含む人為堆積層で、井戸の廃棄に伴う堆積層である。2～3層は井戸壁面崩壊土層で、地山土ブロックを含む。1層は、井戸廃棄後の自然堆積層である。**出土遺物** 4層から古代の須恵器甕片、石皿、木製品、自然木が、1層から5世紀後半の土師器碗片が出土した。4層出土遺物については、井戸廃棄に伴う一括廃棄と思われる。土師器碗片については流れ込みと判断される。このほか土師器片26gが出土した。

SE22井戸跡【図8.12,26・写真図版9,10】

位置 調査区南西に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.51m、短軸1.45mの円形を呈する。遺構確認面からの深さは0.82mである。断面形は逆台形状で、遺構確認面からやや内側へ内傾しながら底面へ落ち込む。後述する帯水層の5層がやや深く掘り込まれており、水溜めとして機能した可能性がある。井戸跡内部には縦板等が存在せず、解体の痕跡もみられないため、素掘りの井戸とみられる。堆積層は5層に分層される。5層は黒色シルトが主体の自然堆積層である。常に湧水があり、現代の帯水層まで掘り込みが及んでいる。井戸が機能していた段階の自然堆積層と思われる。4層は小礫を少量含む人為堆積層で、井戸の廃棄に伴う堆積層である。1～3層は、井戸廃棄後の自然堆積層である。**出土遺物** 3～4層から古代の須恵器杯・甕片、5世紀後半の土師器碗・甕片、木製品（俎板・箍）が出土した。俎板は、両面に被熱痕がみられる。遺構確認面より肥前系磁器碗と土師器甕片が出土した。このほか須恵器片4g、土師器片93gが出土した。

SE29井戸跡【図12.25・写真図版10】

位置 調査区南西に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.09m、短軸0.52mの円形を呈する。遺構確認面からの深さは0.63mである。断面形は逆台形状で、遺構確認面からやや内側へ内傾しながら底面へ落ち込む。井戸跡内部には縦板等が存在せず、解体の痕跡もみられないため、素掘りの井戸とみられる。堆積層は3層に分層される。3層は被熱した大礫を多量に含む人為堆積層で、井戸の廃棄に伴う大礫の一括投棄層である。2層は、井戸廃棄後の自然堆積層である。**出土遺物** 2層から古代の須恵器壺・甕片、土師器甕片、ロクロ土師器杯片が出土した。このほか須恵器片1g、土師器片14gが出土した。

4. 土坑

SK18土坑【図8.27・写真図版11】

位置 調査区北西端に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 一部が調査区外へ延びており、調査区内で確認できる長軸は1.18m、短軸0.68mの方形を呈する。遺構確認面からの深さは0.17mと非常に浅い。堆積層は2層に分層される。下層の2層が地山土主体の黄褐色粘土層であり、その上層

の1層は、黒色土主体層である。**出土遺物** 1層から5世紀後半の土師器碗・甕片が出土した。このほか土師器片24gが出土した。

SK30土坑【図12,27・写真図版11】

位置 調査区南西に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.45m、短軸0.44mの不整形で、西側に張り出しがある。遺構確認面からの深さは0.37mと非常に浅い。断面形は一定ではなく、東側はほぼ垂直に掘り込まれているが、そのほかは内傾しながら底面へ落ち込む。堆積層は3層に分層され、基本的に黒色シルトが主体の自然堆積層だが、2～3層に小礫が含まれる。**出土遺物** なし。

SK47土坑【図8,28・写真図版11】

位置 調査区北西に位置する。**重複関係** 攪乱に切られる。**平面形・規模・特徴** 大部分が攪乱により破壊されており、規模が不明だが、長軸0.47m、短軸0.25mの円形を呈する。遺構確認面からの深さは0.24mと浅い。断面形は不整形で一定ではない。堆積層は1層で、黒色シルトが主体の自然堆積層である。**出土遺物** なし。

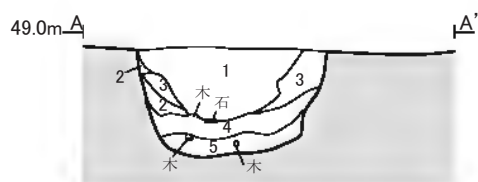
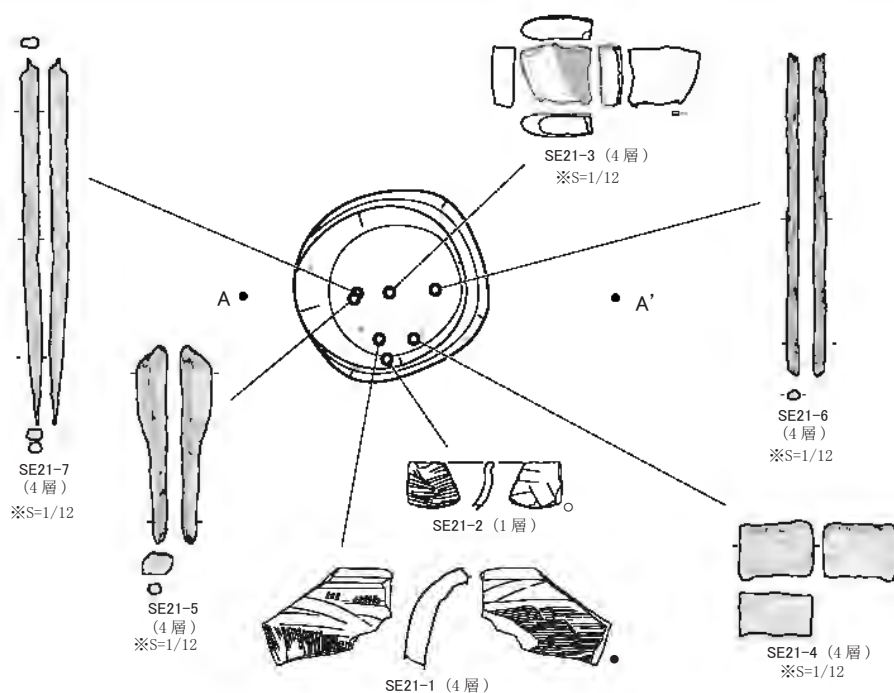
SK97土坑【図9,29～33・写真図版12,13】

位置 調査区北端に位置し、SI15竪穴建物跡に隣接する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸2.81m、短軸0.98mの不整形を呈する。遺構確認面からの深さは0.24mと浅い。堆積層は6層に分層される。最下層の6層は、黒色シルトと地山黄褐色粘土との混和層で、人為堆積層である。2～5層は同質で、黒色シルトが主体の自然堆積層であり、基本的には風成堆積と考えられる。1層は十和田a火山灰層で、上層からの掘り込みによって流入したものと考えられる。**出土遺物** 遺構内から5世紀後半の土師器片が大量に出土した。3～4層からの出土が大半である。出土した器種は、土師器高杯、碗、壺、甕である。各器種の口縁部残存計測法の結果は第8章 総括に掲載している。出土状況を図29～33に示したが、器種ごとに出土状況の偏りはなく、破片が全体に飛び散っている。土師器片のほかに、土坑南西端から5世紀後半の須恵器甕片が出土した。この須恵器甕片は秋田県内では初めて出土した。破断面に漆が塗布されており、接着剤としての用途が想定される。詳細は第7章 自然科学分析を参照されたい。このほか須恵器片6g、ロクロ土師器片21g、土師器片3,437g、陶器片3gが出土した。

SK163土坑【図8,28・写真図版11】

位置 調査区西に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.21m、短軸0.52mの不整形を呈する。遺構確認面からの深さは0.23mである。断面形は不整形で一定ではない。堆積層は3層で、黒色シルトが主体の自然堆積層である。**出土遺物** なし。

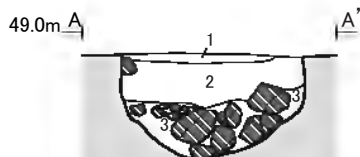
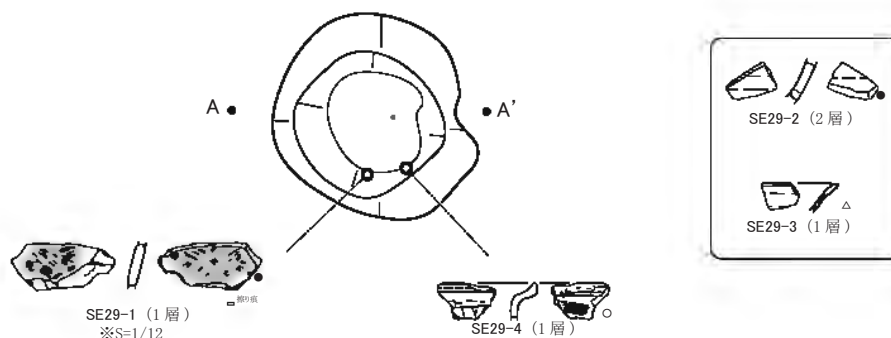
SE21



SE21(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)、しまりやや弱、粘性中、地山土ブロックを少量含む
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、しまり弱、粘性中、地山土の再堆積、崩落カ
3. 黒褐色土(10YR3/1)、しまり弱、粘性やや弱、黒色土に地山土粒が微量含む、崩落カ
4. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性中、大礫を多量含む、植物遺存体
5. 4層と同質、大礫を含まない

SE29



SE29(A-A')

1. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり中、粘性中、水田造成土
2. 黒色土(10YR2/1)、しまり中、粘性強、地山土ブロックを少量含む
3. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性強、大礫を多量含む、被熱したものが多い

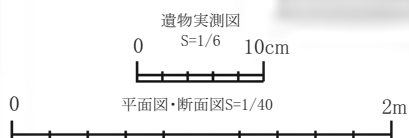
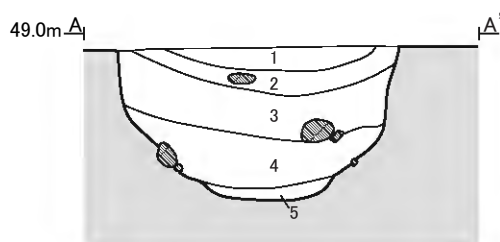
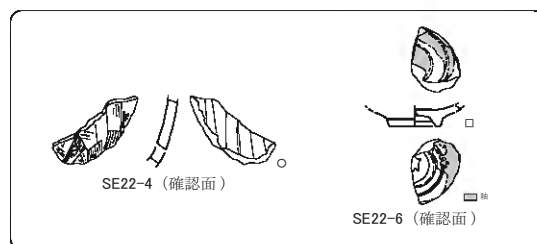
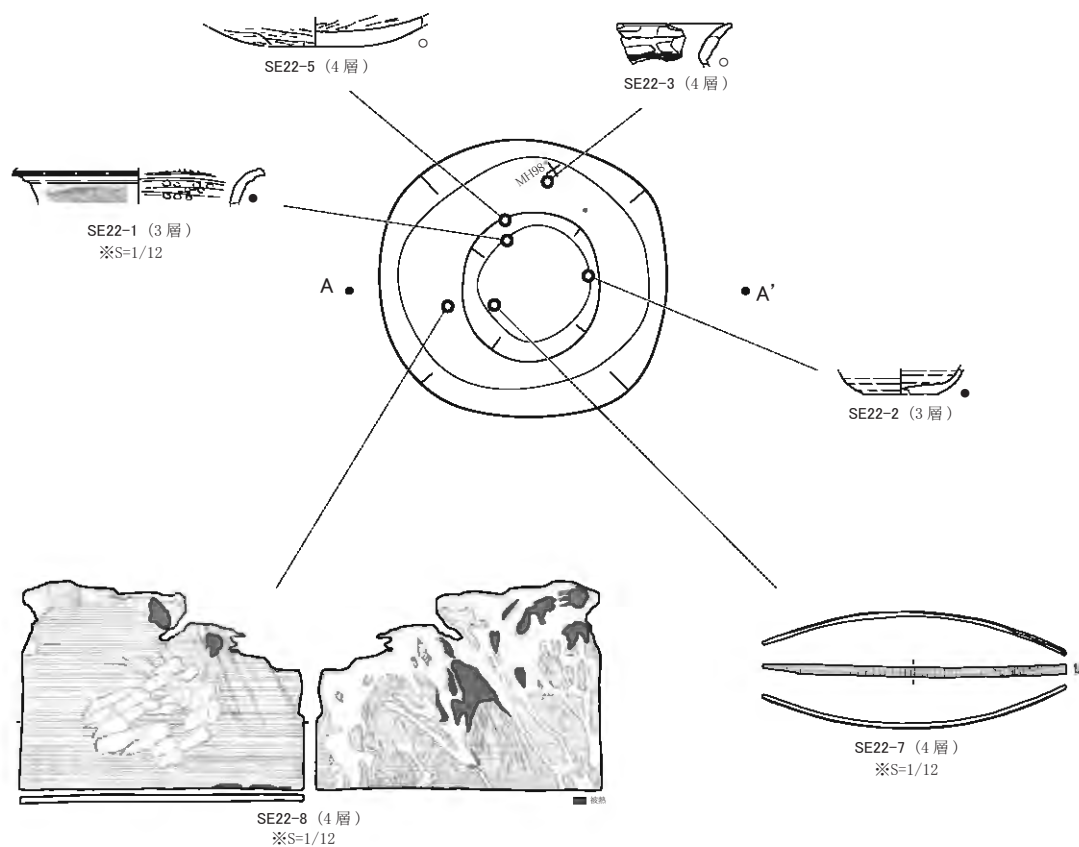


図 25 A 区 SE21,29 井戸跡

SE22



SE22(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり中、粘性中、地山土粒・炭化物を微量含む
2. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性弱、1層と比べてシルト質が強い、地山土粒を少量含む
3. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性中、地山土粒を微量含む
4. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性強、植物遺存体を多く含む、小礫を少量含む、板材出土
5. 4層と同質、常に湧水

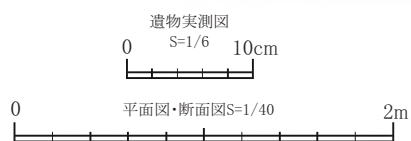
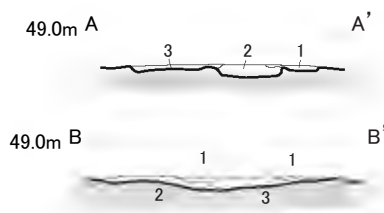
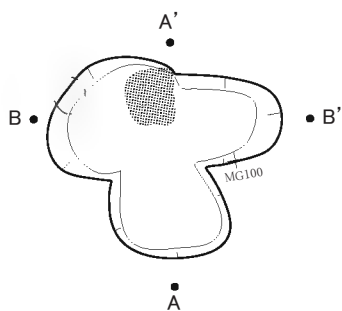


図 26 A 区 SE22 井戸跡

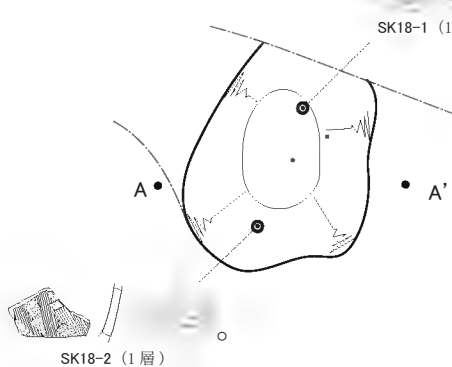
SL54



SL54(A-A'・B-B')

1. 黒褐色土(10YR3/2)、しまり弱、粘性弱、焼土粒と黒色土との混和層
2. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性なし、炭化物層、地山土粒を微量含む
3. 2層と同質、炭化物が少ない

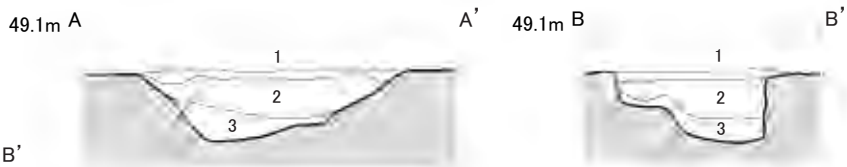
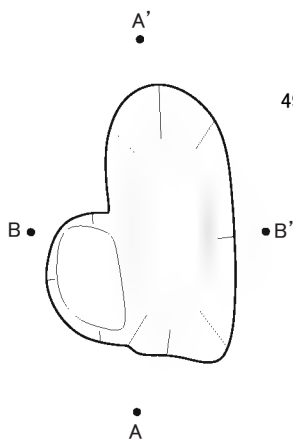
SK18



SK18(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性弱、シルト主体、炭化物を微量含む
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4)、しまり弱、粘性弱、細粒砂主体土、地山土主体

SK30



SK30(A-A'・B-B')

1. 黒褐色土(10YR2/3)、しまり中、粘性中、シルトを少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/2)、しまり弱、粘性弱、小礫を少量含む
3. 黒褐色土(10YR3/2)、しまり弱、粘性中、2層と同質

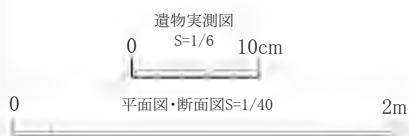
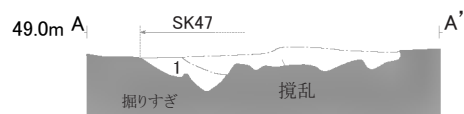
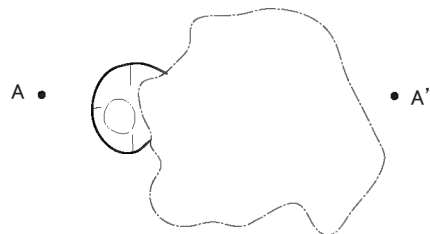


図 27 A 区 SL54 炉跡・SK18,30 土坑

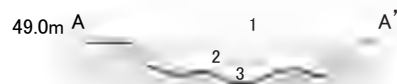
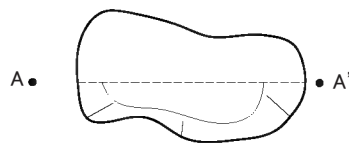
SK47



SK47(A-A')

1. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性やや強

SK163



SK163(A-A')

1. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性強、2層土と一部で混和
2. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性強、シルトを微量含む
3. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性弱、シルトを少量含む

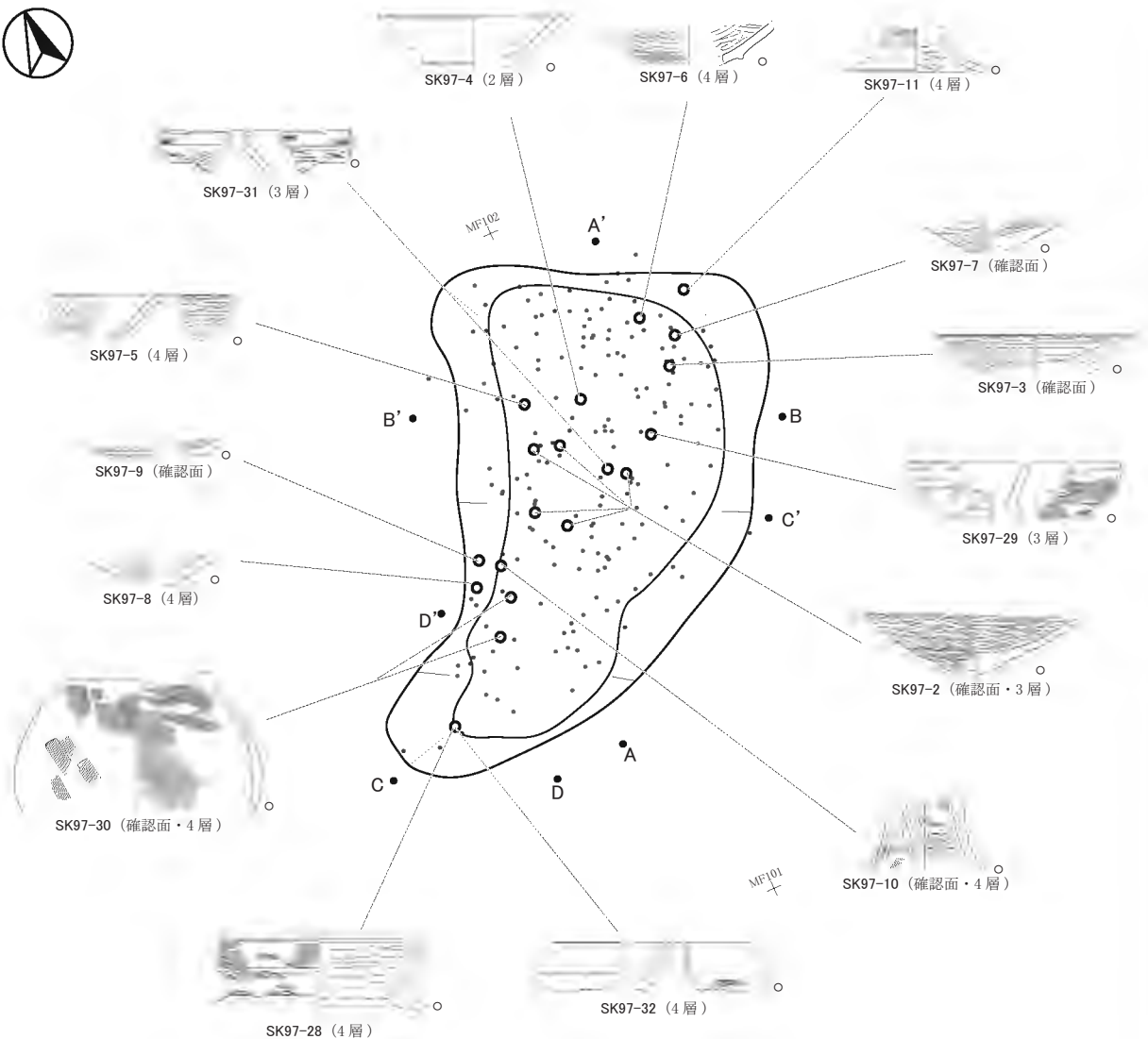
0

平面図・断面図S=1/40

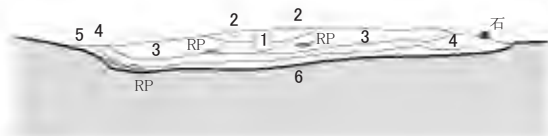
2m

図 28 A 区 SK47,163 土坑

SK97

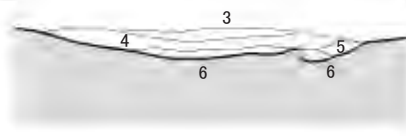


49.1m A



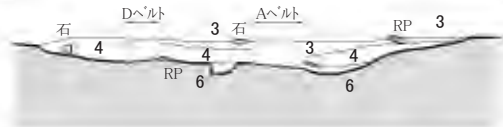
A'

49.1m B



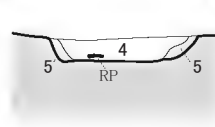
B'

49.1m C



C'

49.1m D



D'

SK97(A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

1. 黄褐色土(10YR5/8)、しりなし、粘性なし、十和田a火山灰層カ、スポットで見られる、攪乱カ
2. 黒色土(10YR2/1)、しり中、粘性弱、地山土粒を微量含む
3. 黒褐色土(10YR2/2)、しり弱、粘性やや弱、地山土粒を微量含む
4. 3層と同質、粒径がやや細かい
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)、しり中、粘性中、地山土の再堆積、流入土
6. 黒褐色土(10YR2/3)、しり弱、粘性中、地山土と黒色土の混和土

遺物実測図

S=1/6

0 10cm

平面図・断面図S=1/40

0 2m

図 29 A 区 SK97 土坑 (1)

SK97

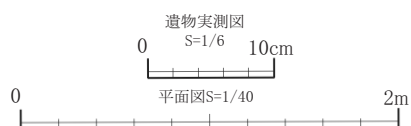
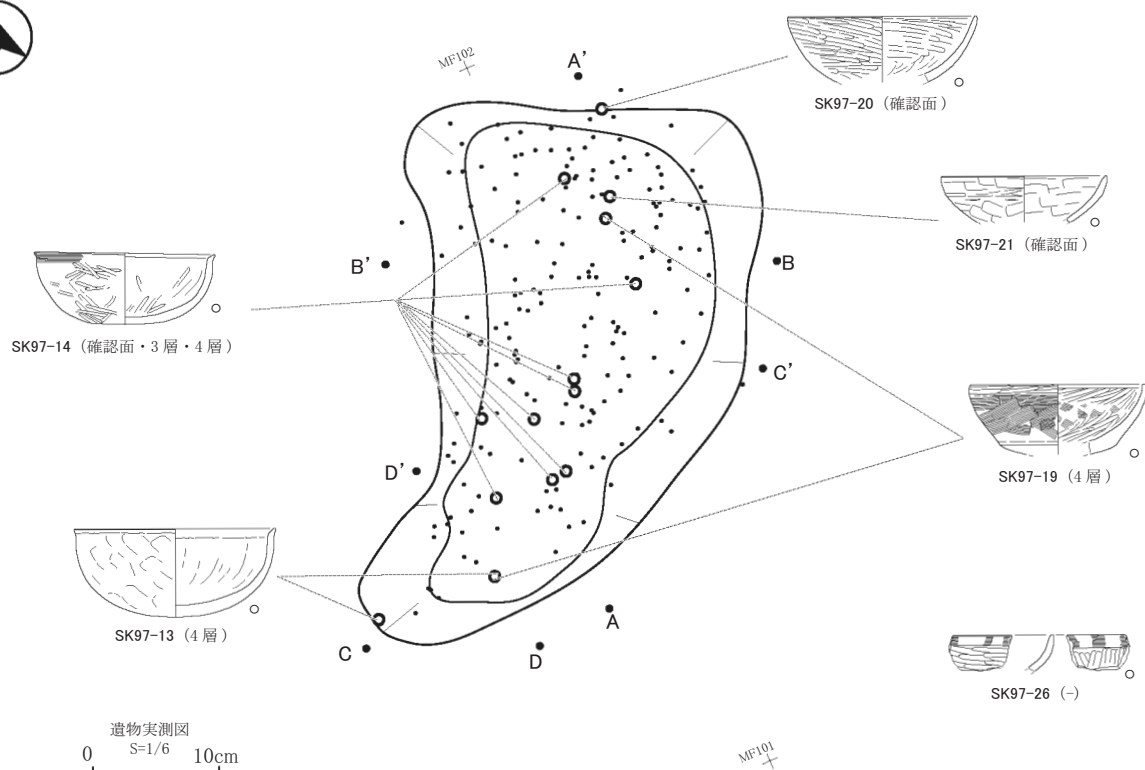
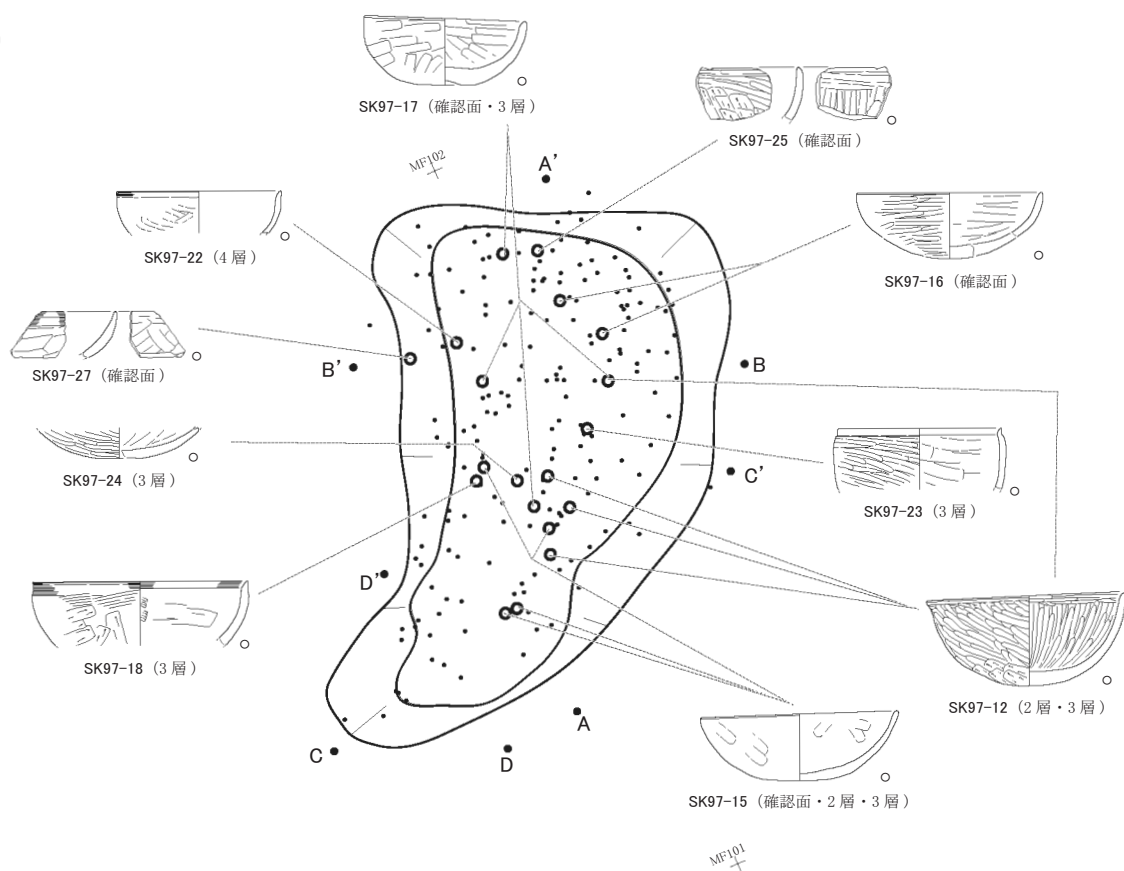
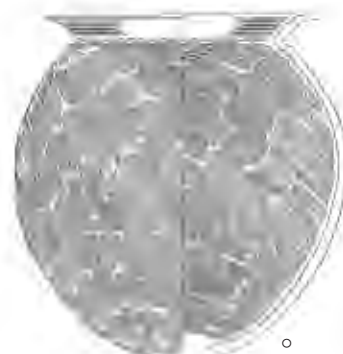
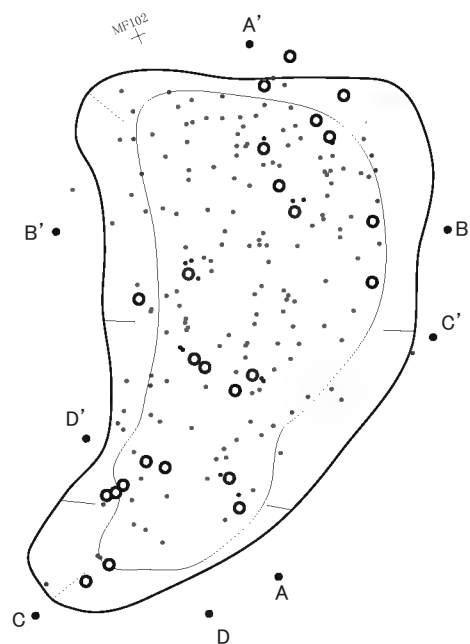
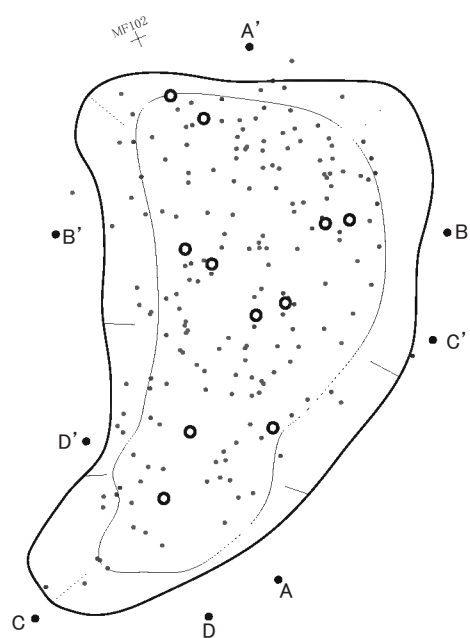


図 30 A 区 SK97 土坑 (2)

SK97



SK97-33 (Ⅱ層・確認面・3層・4層)



SK97-34 (確認面・3層・4層)

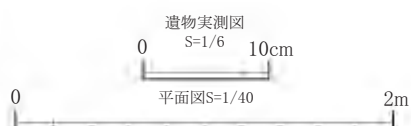


図 31 A 区 SK97 土坑 (3)

SK97

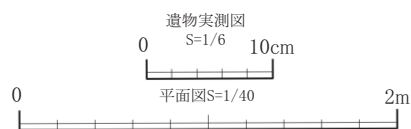
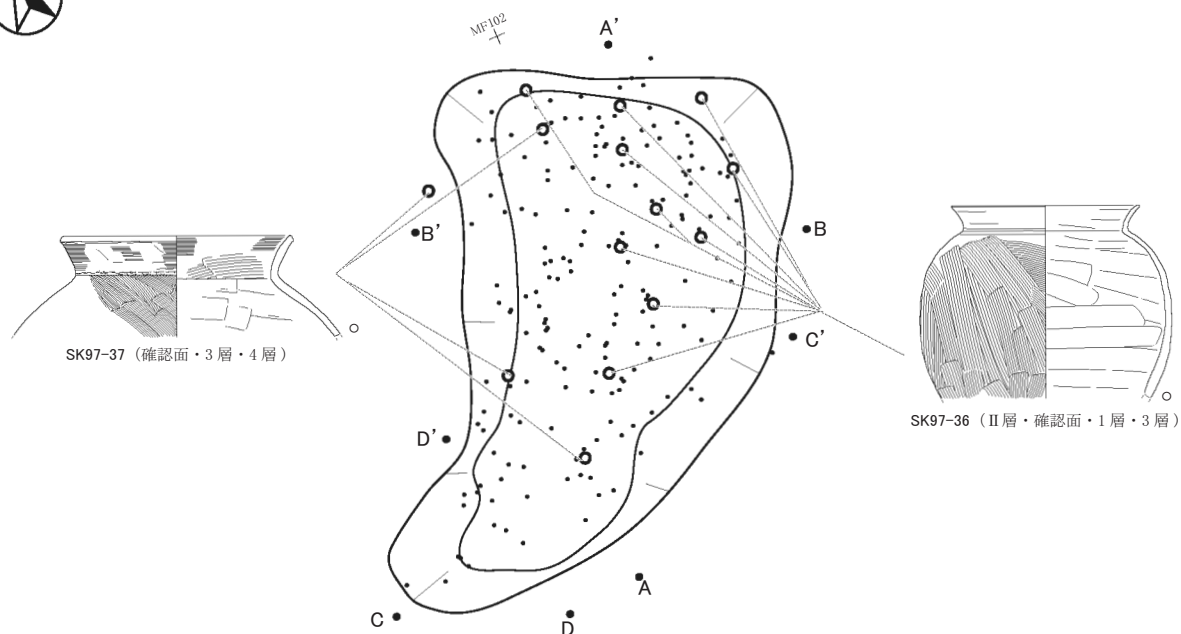
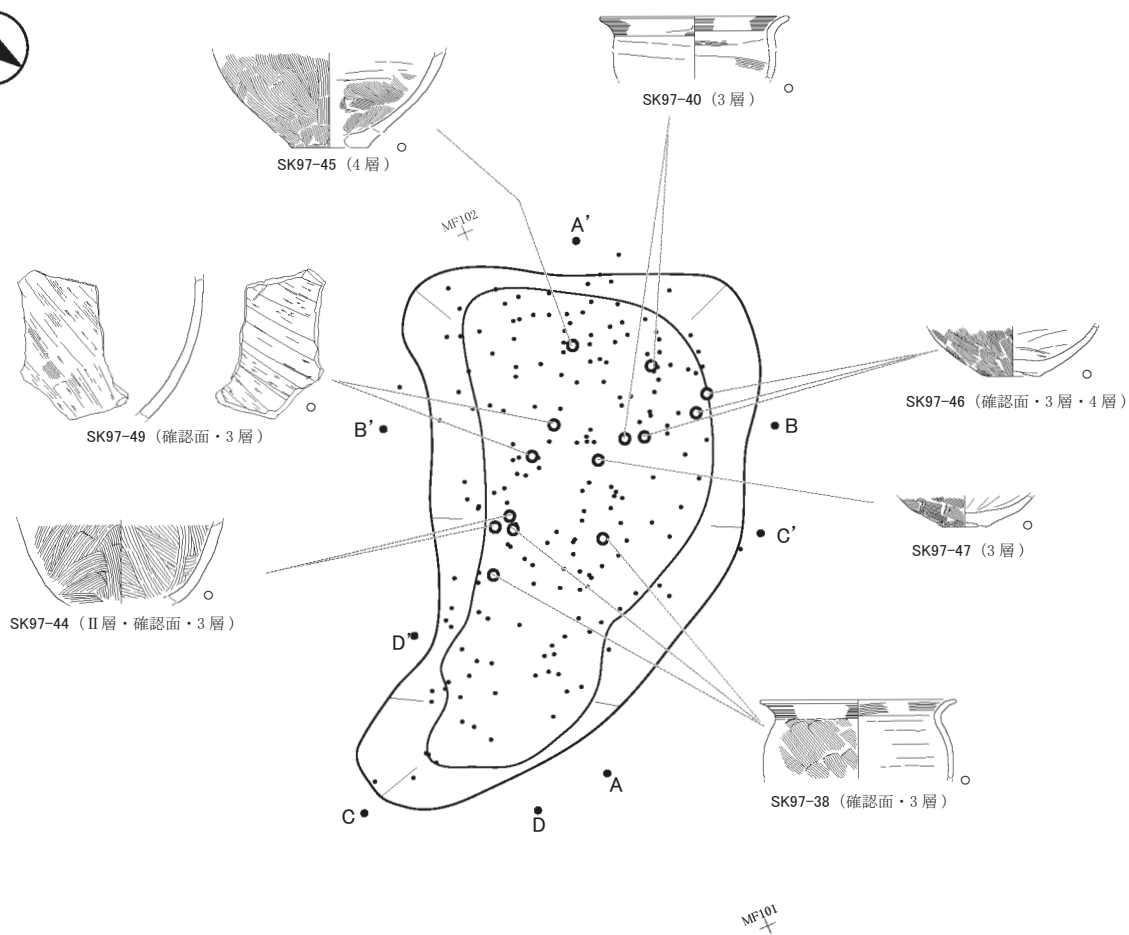


図 32 A 区 SK97 土坑 (4)

SK97

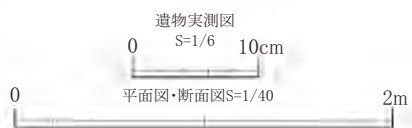
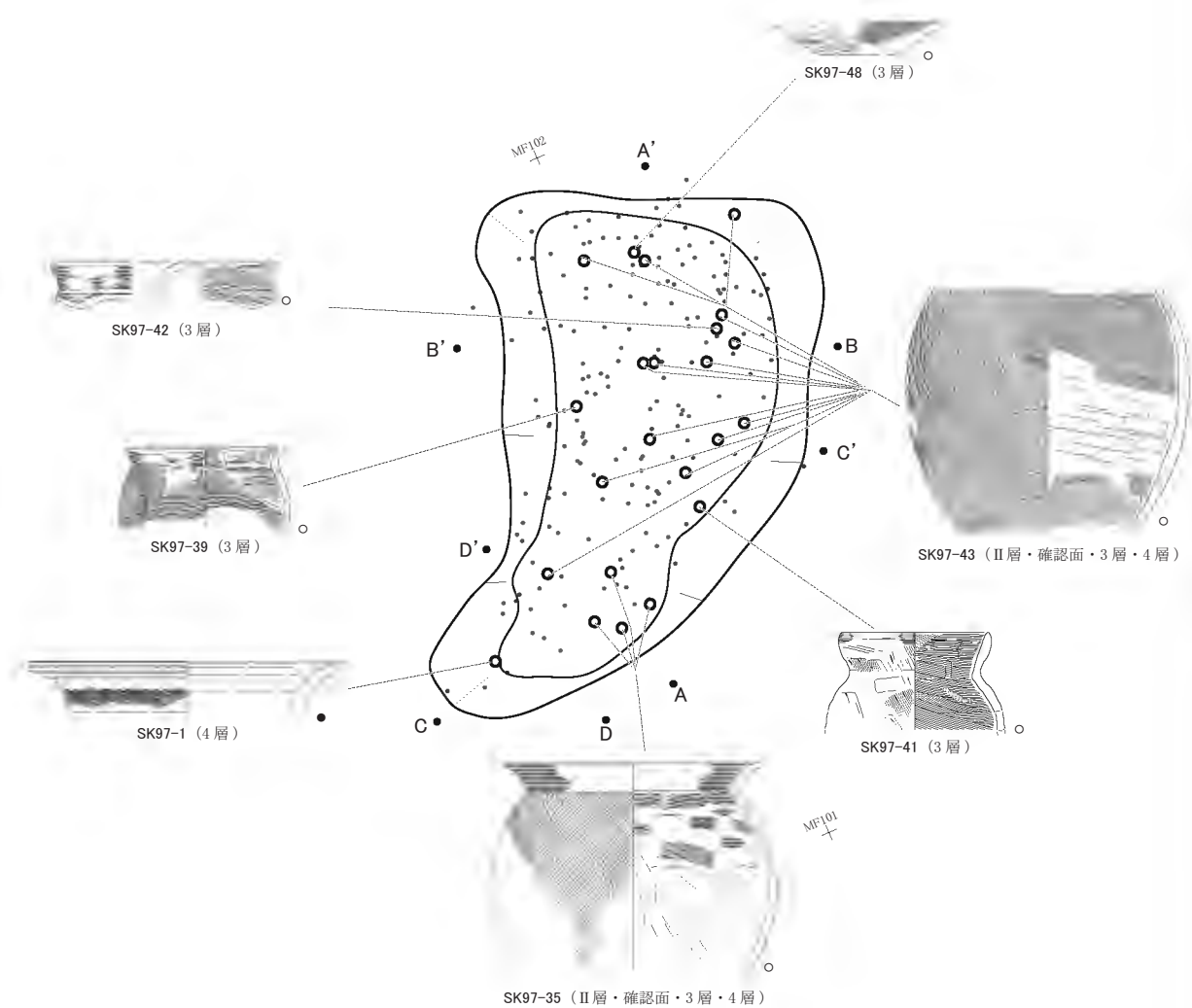


図 33 A 区 SK97 土坑 (5)

5. 炉跡

SL54炉跡【図9,27・写真図版11】

位置 調査区北側に位置する。**重複関係** なし。**平面形・規模・特徴** 長軸1.21m、短軸1.00mの不整形を呈する。遺構確認面からの深さは0.06mと浅い。堆積層は3層に分層される。すべてに焼土粒が混入し、炉跡と推定したが、自然科学分析の結果、BC18952～18615(2シグマ)年の年代値が示されており、遺構の性格に疑問が残る。**出土遺物** なし。

6. 溝跡

SD08溝跡【図10,11,14,15】

位置 調査区東端に位置する。**重複関係** SD20溝跡に切られ、SX07性格不明遺構を切る。**平面形・規模・特徴** 上端が1.0m程度、下端が0.2m程度で、後述するSD20溝跡と断面形が類似する。SD20溝跡に切られるが、おそらく同時期の溝跡と考えられる。**出土遺物** なし。

SD19溝跡【図8,34・写真図版14】

位置 調査区北西端から北東方向へ延びる。**重複関係** 攪乱に切られる。**平面形・規模・特徴** 調査区内での全長8.13mの溝跡である。やや蛇行しながら延び、幅は上端が0.20m程度、下端が0.18m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、0.05m程度しかない。堆積層は1層のみであり、黒色シルトが主体の自然堆積層である。**出土遺物** なし。

SD20溝跡【図10,13,35・写真図版14】

位置 調査区西端から東方向へ延び、MD97グリッド付近で北東方向に屈曲し、調査区外へ延びる。**重複関係** SD08,42,153溝跡を切る。**平面形・規模・特徴** 調査区内での全長43.94mの溝跡である。幅は上端が1.0m程度、下端が0.2m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈するが、一部で薬研堀状を呈する。堆積層は3層に分層される。3層は細粒砂主体で、一定の水流のある環境下で堆積したと考えられる。2～3層は壁面崩落土と人為的な埋め戻し層である。構造・堆積状況から水田水路と推定されるが、昭和23年の航空写真には表れていないため、これ以前の水路と考えられる。**出土遺物** なし。

SD42溝跡【図10,13,35・写真図版14】

位置 調査区中央から北東方向へ延びる。**重複関係** SD20溝跡・SP92,140,141柱穴に切られる。**平面形・規模・特徴** 全長18.91mの溝跡である。蛇行しながら延び、幅は上端が0.12m程度、下端が0.10m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、0.09m程度しかない。堆積層は1層のみであり、黒色シルトが主体の自然堆積層である。**出土遺物** 土師器片38gが出土した。

SD75溝跡【図10,11,14,35・写真図版14】

位置 調査区北東端に位置する。SB04掘立柱建物跡に隣接する。**重複関係** 攪乱に切られる。**平面形・規模・特徴** 全長1.11mの溝跡である。幅は上端が0.16m程度、下端が0.10m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、0.12m程度しかない。堆積層は2層のみであり、

黒色シルトが主体の自然堆積層である。SB04掘立柱建物跡の雨落ち溝とみられる。 **出土遺物** 土師器片18gが出土した。

SD81溝跡【図10,11,14,35・写真図版14】

位置 調査区東に位置する。SA01柱穴列に隣接する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 全長0.54mの溝跡である。深さが0.05m程度しかない。堆積層は1層のみであり、黒色シルトが主体の自然堆積層である。 **出土遺物** なし。

SD153溝跡【図10,11,35・写真図版14】

位置 調査区北東端に位置する。SB04掘立柱建物跡に隣接する。 **重複関係** SD20溝跡に切られる。 **平面形・規模・特徴** 全長1.24mの溝跡である。幅は上端が0.18m程度、下端が0.14m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、0.11m程度しかない。堆積層は1層のみであり、黒色シルトが主体の自然堆積層である。SB04掘立柱建物跡の雨落ち溝とみられる。 **出土遺物** 土師器片12gが出土した。

SD170溝跡【図10,35・写真図版14】

位置 調査区北東端に位置する。 **重複関係** SP189A,B柱穴に切られる。 **平面形・規模・特徴** 全長2.02mの溝跡である。幅は上端が0.24m程度、下端が0.10m程度で、基本的には逆台形状の断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、0.13m程度しかない。堆積層は1層のみであり、黒色シルトが主体の自然堆積層である。 **出土遺物** なし。

7. 性格不明遺構

SX07性格不明遺構【図14】

位置 調査区北東端に位置する。 **重複関係** SD08溝跡に切られる。 **平面形・規模・特徴** 長軸3.06m、短軸1.63mの比較的大きい土坑状の遺構である。平面形・断面形ともに不整形であり、埋土は大礫混じりの黒色シルトを主体とする。5世紀後半の土師器片が出土しているが、後世による攪乱の可能性もあり、性格不明遺構とした。 **出土遺物** 5世紀後半の須恵器杯、土師器甕、土師器片52gが出土した。

SD19



SK18

攪乱

攪乱

MJ102

攪乱

攪乱

49.0m A 1 A'

SD19(A-A')

1. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり中、粘性弱、地山ブロックを少量含む

A

A'

攪乱

MJ102

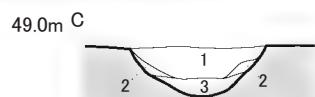
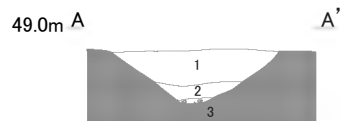
0

平面図・断面図S=1/40

2m

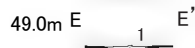
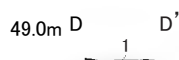
図 34 A 区 SD19 溝跡

SD20,42,153,170



SD20(A-A'・B-B'・C-C')

1. 黒褐色土(10YR3/2)、しまり弱、粘性なし、地山土ブロックを少量含む
2. 黒褐色土(10YR2/2)、しまり弱、粘性中、地山土粒を少量含む、崩落カ
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)、しまりなし、粘性なし、細粒砂主体、河流の堆積カ

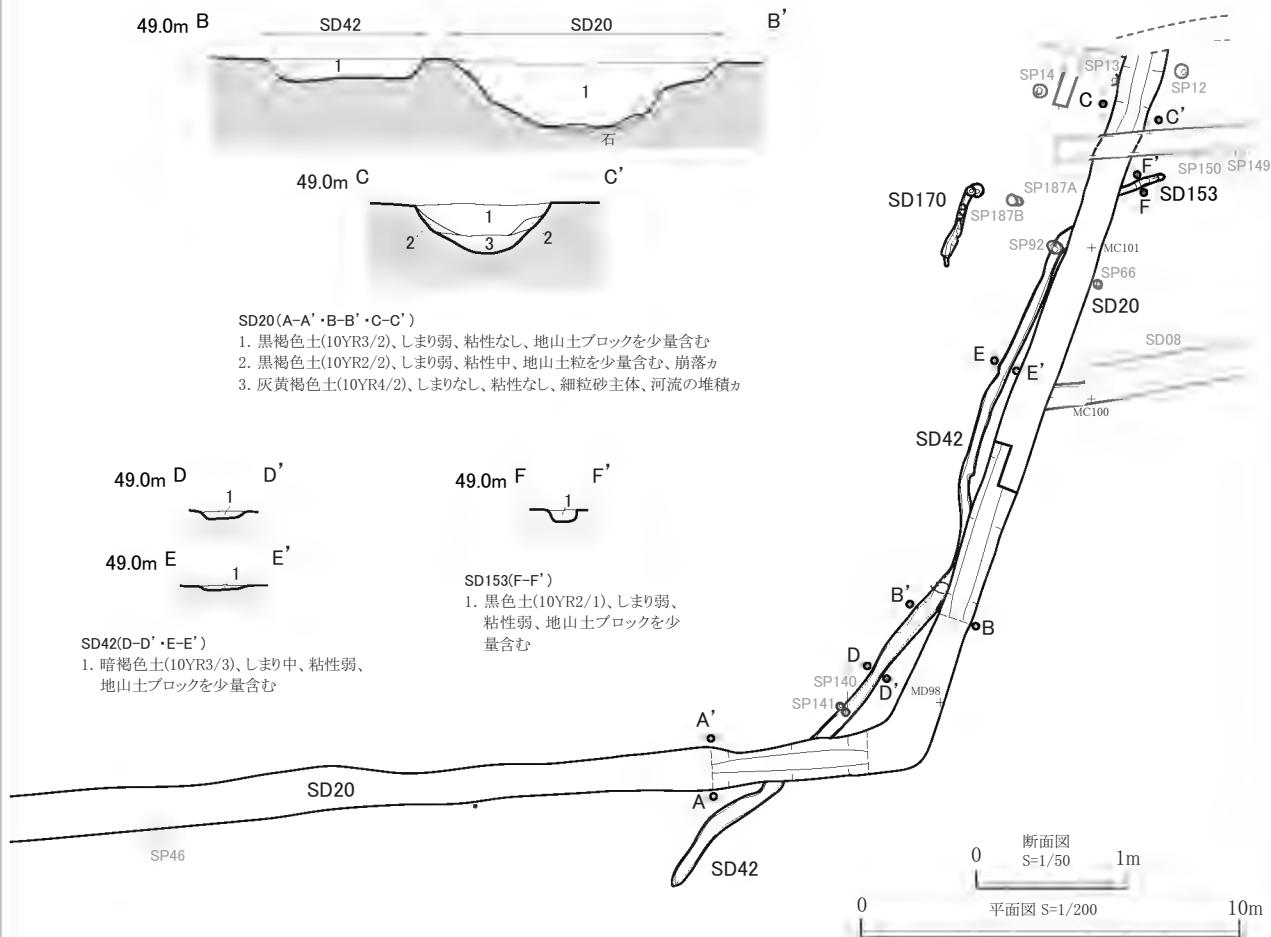


SD42(D-D'・E-E')

1. 暗褐色土(10YR3/3)、しまり中、粘性弱、地山土ブロックを少量含む

SD153(F-F')

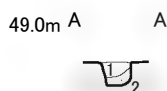
1. 黒色土(10YR2/1)、しまり弱、粘性弱、地山土ブロックを少量含む



断面図
S=1/50

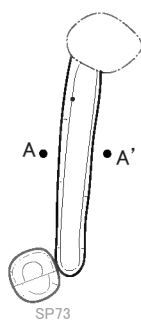
平面図 S=1/200

SD75



SD75(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)、しまりやや弱、粘性中、地山土粒を微量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1)、しまり弱、粘性弱、地山土の再堆積、黒色土を微量含む



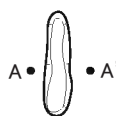
SP73

SD81



SD81(A-A')

1. 黒褐色土(10YR3/1)、しまりやや弱、粘性弱、地山土粒を微量含む



平面図・断面図S=1/40

図 35 A 区 SD20,42,75,81,153,170 溝跡

表2 蟹沢遺跡A区検出遺構一覧表

●重複関係：古→新・新旧不明≠●長軸・短軸・深さの単位→m●()内は残存
 堅穴建物跡 ●(須)→須恵器、(ロ)→ロクロ土師器、(土)→土師器、(陶)→陶器●数字は図示点数、gは破片残量

No.	遺構名		位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SI15		MG102	SI15→SK16,SD122→SI15, SD123→SI15,SD128→SI15, SD168→SI15	8.28	(1.04)	0.18	土師器15点、(ロ)30g、(土)412g	
	SI15内	SK16	MF102	SI15→SK16	1.20	0.32	0.46	土師器1点	
		SD122	MG102	SD122→SI15,SD122→SP132	(1.06)	0.21	0.13		
		SD123	MH102	SD123→SI15,SD123→SP133	(1.20)	0.22	0.15		
		SD127	MF102	-	(12.15)	0.19	0.24		
		SD128	MG102	SD128→SI15,SD128→SP130	(1.04)	0.20	0.12	(土)20g	
		SD168	MH102	SD168→SI15,SD168→SP184	(1.18)	0.21	0.14		
		SP126	MG102	-	0.42	0.41	0.54		主柱穴
		SP130	MG102	SD128→SP130	0.40	0.35	0.26		
		SP132	MG102	SD122→SP132	0.35	0.28	0.12		
		SP133	MH102	SD123→SP133	0.46	0.33	0.21		
		SP158	MG102	-	0.33	0.29	0.12		
2	SI33		ME95	-	(4.01)	(2.57)	0.13	須恵器1点、土師器29点、 (須)28g、(土)1,959g、(陶)16g	
	SI33内	SP111	ME94	-	0.19	0.19	0.05		
		SP112	ME95	-	0.22	0.20	0.14		
		SP113	ME95	-	0.24	0.19	0.17		
		SP114	ME95	-	0.25	0.20	0.12		
		SP115	ME95	-	0.22	0.21	0.09		
		SP116	MF95	-	0.31	0.22	0.13		
		SP181	ME95	-	0.21	0.17	0.09		

柱穴

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SP02	LR100	-	0.28	0.24	-		段下げのみ
2	SP03	LS99	-	0.20	0.18	-		段下げのみ
3	SP04	LS100	-	0.19	0.19	-		段下げのみ
4	SP05	LS99	-	0.21	0.21	-		段下げのみ
5	SP06	LS100	-	0.20	0.19	-		段下げのみ
6	SP11	MB102	-	0.38	0.32	0.18		SB02
7	SP12	MB102	-	0.36	0.35	0.28		SB02
8	SP13	MB102	-	0.30	0.28	0.17		SB02
9	SP14	MC102	-	0.34	0.34	0.29	(土)2g	SB02
10	SP23	MG97	-	0.24	0.22	-		段下げのみ

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
11	SP24	MG97	-	0.26	0.24	-		段下げのみ
12	SP26	MH98	-	0.29	0.24	-		段下げのみ
13	SP27	MH98	-	0.41	(0.25)	-		段下げのみ
14	SP28	MI98	-	0.28	0.26	-		段下げのみ
15	SP31A	MG96	SP31A→SP31B	0.40	(0.27)	0.04		
16	SP31B	MG96	SP31A→SP31B	0.47	0.45	0.07		
17	SP32	MH95	-	0.45	0.44	0.21		SB01
18	SP34	MH94	-	0.55	0.55	0.22	(土)4g	SB01
19	SP35	MH95	-	0.44	0.43	0.18		SB01
20	SP38	MG95	-	0.49	0.48	0.21		SB01
21	SP39	MG95	-	0.47	0.44	0.16		SB01
22	SP40	MG94	-	0.50	0.48	0.25		SB01
23	SP43	MH96	-	0.23	0.22	-		段下げのみ
24	SP44	MI96	-	0.28	0.25	-		段下げのみ
25	SP46	MI97	-	0.27	0.24	-		段下げのみ
26	SP48	MI100	-	0.25	0.25	0.09		
27	SP49	MI100	-	0.25	0.24	0.08		
28	SP50	MI100	-	0.28	0.26	0.10		
29	SP51	MJ100	-	0.25	0.21	0.10		
30	SP52	MJ99	-	0.30	0.28	-		段下げのみ
31	SP53	MJ100	-	0.37	0.33	-		段下げのみ
32	SP56	MG100	-	0.57	0.56	0.12		
33	SP57	MF100	-	0.55	0.51	0.34	(土)19g	
34	SP58	MH101	-	0.29	0.26	0.06		
35	SP59	MF99	-	0.29	(0.18)	-		段下げのみ
36	SP60	MD100	-	0.29	0.26	-		段下げのみ
37	SP61	MD99	-	0.37	0.34	-		段下げのみ
38	SP63	MD100	-	0.22	0.18	0.05	(土)3g	
39	SP64	MC100	-	0.25	0.22	-		段下げのみ
40	SP66	MB100	-	0.24	0.20	0.26		SB04
41	SP67A	MB100	SP67A→SP67B	0.20	(0.10)	-		段下げのみ
42	SP67B	MB100	SP67A→SP67B	0.23	0.20	-		段下げのみ
43	SP68	MB101	-	0.34	0.31	0.32		SB03
44	SP69	MB101	-	0.20	0.20	0.18		
45	SP70	MB101	-	0.24	(0.19)	0.19		SB03
46	SP71	MB100	-	0.25	0.24	0.16		SB04
47	SP72	MB100	-	0.31	0.25	0.15	(土)6g	SB03
48	SP73	MB100	-	0.25	0.25	0.15	(土)10g	
49	SP76	MB100	-	0.35	0.32	0.17	土師器1点、(土)1g	SB03
50	SP78	MB99	-	0.33	0.33	0.30		SA01
51	SP79	MB99	-	0.29	0.27	0.16		SA01

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
52	SP80	MC99	-	0.30	0.26	0.19		SA01
53	SP86	MH95	-	0.36	0.31	-	ロクロ土師器1点	段下げのみ
54	SP87	MG96	-	0.29	0.25	-		段下げのみ
55	SP88	MG96	-	0.27	0.26	-		段下げのみ
56	SP90	MI94	-	0.27	0.23	0.11		
57	SP91	MH94	-	0.26	0.26	-		段下げのみ
58	SP92	MC101	SD42→SP92	0.41	0.31	0.26		
59	SP98	ME96	-	0.24	0.21	-		段下げのみ
60	SP99	ME96	-	0.25	0.23	-		段下げのみ
61	SP100	ME96	-	0.28	0.25	-	土師器1点、(土)29g	段下げのみ
62	SP101	MD96	-	0.30	0.25	-		段下げのみ
63	SP102	MD96	-	0.19	0.18	-		段下げのみ
64	SP103	MD96	-	0.30	0.24	-		段下げのみ
65	SP104	MD96	-	0.21	0.19	-		段下げのみ
66	SP105	MD96	-	0.17	0.17	-		段下げのみ
67	SP107	MC96	-	0.19	0.17	-		段下げのみ
68	SP108	MD96	-	0.20	0.20	-		段下げのみ
69	SP109	MC95	-	0.26	0.23	-		段下げのみ
70	SP110	MD96	-	0.21	0.19	-	(土)9g	段下げのみ
71	SP118	MD96	-	0.18	0.17	-		段下げのみ
72	SP120	MD96	-	0.20	0.19	-		段下げのみ
73	SP121	MD96	-	0.18	0.17	-		段下げのみ
74	SP134	MD95	-	0.19	0.18	-		段下げのみ
75	SP136	MC96	-	0.25	0.24	-		段下げのみ
76	SP137	MD97	-	0.19	(0.11)	-		段下げのみ
77	SP139	MC98	-	0.38	0.38	-		段下げのみ
78	SP140	MD97	SD42→SP140	0.19	0.15	0.03		
79	SP141	MD97	SD42→SP141	0.20	0.18	-		段下げのみ
80	SP142	MD96	-	0.23	0.21	-		段下げのみ
81	SP143	MC97	-	0.23	0.21	0.05		
82	SP144	MB97	-	0.30	0.28	-		段下げのみ
83	SP145A	ME95	SP145A→SP145B	0.30	0.28	0.10		
84	SP145B	ME95	SP145A→SP145B	0.22	0.22	-		段下げのみ
85	SP146	MF99	-	0.25	0.25	0.17		
86	SP147	MA100	-	0.24	0.23	-		段下げのみ
87	SP148	MA101	-	0.25	0.22	-		段下げのみ
88	SP149	MB101	-	0.24	0.22	-		段下げのみ
89	SP150	MB101	-	0.17	(0.14)	-		段下げのみ
90	SP151	MB101	-	0.24	0.23	-		段下げのみ
91	SP152	MB100	-	0.23	0.23	0.19		SB04
92	SP155	ME99	-	0.27	0.26	-		段下げのみ

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
93	SP156	ME99	－	0.26	0.23	－		段下げのみ
94	SP157	ME99	－	0.30	0.28	－		段下げのみ
95	SP159	MG98	－	0.22	0.22	0.05		
96	SP160	MG98	－	0.23	0.20	－		段下げのみ
97	SP161	MH98	－	0.31	0.27	0.12		
98	SP162	MH100	－	0.34	0.34	0.05		
99	SP164	MI99	－	0.25	0.23	0.20		
100	SP165	MJ99	－	0.26	0.24	0.07		
101	SP166	MI98	－	0.24	0.24	0.04		
102	SP167A	MJ99	SP167A→SP168B	0.31	(0.23)	0.05		
103	SP167B	MJ99	SP167A→SP168B	0.28	0.28	－		
104	SP185	MB101	－	0.22	0.20	0.11		SB04
105	SP186	MB101	－	0.25	0.21	0.18		SB04
106	SP187A	MC101	SP187A→SP187B	0.22	(0.15)	－		段下げのみ
107	SP187B	MC101	SP187A→SP187B	0.30	0.26	0.11		
108	SP188	MC101	－	0.25	0.23	－		段下げのみ
109	SP189A	MC101	SP189A→SP189B	0.37	(0.21)	－		段下げのみ
110	SP189B	MC101	SD170→SP189A→SP189B	0.26	0.24	0.11		

井戸跡

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SE21	MF99	－	1.00	0.96	0.60	須恵器1点、土師器1点、石器1点、木製品(角材・棒状)4点、(土)26g	
2	SE22	MH97	－	1.51	1.45	0.82	須恵器2点、土師器3点、磁器1点、木製品(板材他)2点、(須)4g、(土)93g	
3	SE29	MH96	－	1.09	0.52	0.63	須恵器2点、ロクロ土師器1点、土師器1点、(須)1g、(土)14g	

土坑

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SK18	MI102	－	(1.18)	0.68	0.17	土師器2点、(土)24g	
2	SK30	MG96	－	1.45	0.44	0.37		
3	SK47	MJ100	－	0.47	(0.25)	0.24		
4	SK97	MF101	－	2.81	0.98	0.24	須恵器1点、土師器48点、(須)6g、(口)21g、(土)3,437g、(陶)3g	
5	SK163	MH99	－	1.21	0.52	0.23		

炉跡

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SL54	MG100	－	1.21	1.00	0.06		

性格不明遺構

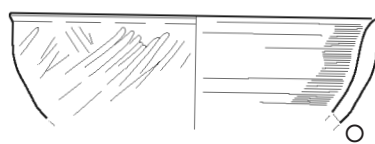
No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SX07	LT100	SX07→SD08	(3.06)	1.63	0.37	須恵器2点、土師器3点、(土)52g	

溝跡

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SD08	MA100	SD08→SD20,SX07→SD08	(30.12)	0.58	0.39		
2	SD19	MJ101	-	(8.13)	0.17	0.05		
3	SD20	MB101	SD42→SD20,SD08→SD20, SD153→SD20	(43.94)	0.83	0.37		
4	SD42	MC99	SD42→SD20,SD42→SP92, SD42→SP140,SD42→SP141	(18.91)	0.23	0.09	(土)38g	
5	SD75	MB100	-	(1.11)	0.13	0.12	(土)18g	
6	SD81	MB99	-	0.54	0.11	0.05		
7	SD153	MB101	SD153→SD20	(1.24)	0.17	0.11	(土)12g	
8	SD170	MC101	SD170→SP189A・B	(2.02)	0.10	0.13		



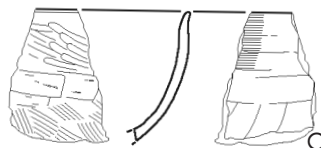
SI15-1 (床面直上)



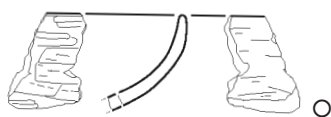
SI15-2 (1層)



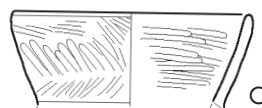
SI15-3 (Ⅱ層・床面直上)



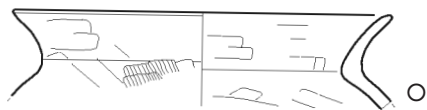
SI15-4 (1層)



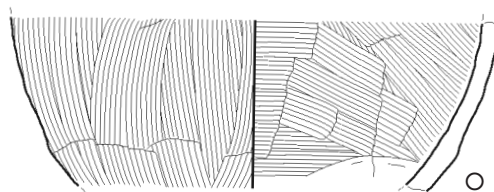
SI15-5 (確認面)



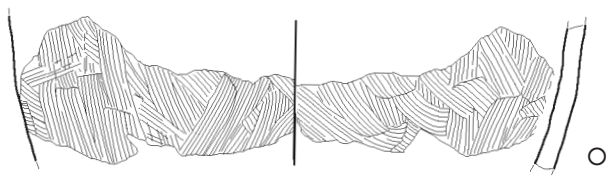
SI15-6 (確認面)



SI15-7 (2層)



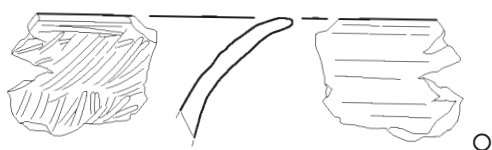
SI15-8 (確認面・1層・2層・床面直上)



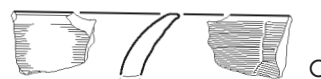
SI15-9 (確認面・3層)



SI15-10 (壁際溝)

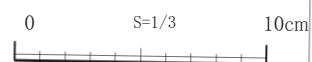


SI15-11 (確認面)



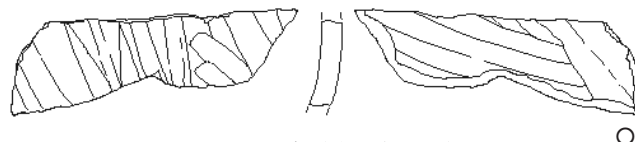
SI15-12 (1層)

図 36 A 区竪穴建物跡出土遺物 (1)





SI15-13 (1層)

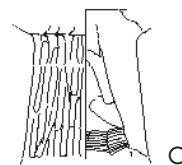


SI15-14 (II層・確認面)

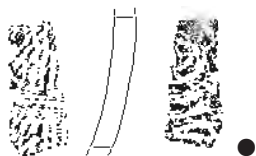


SI15-15 (2層)

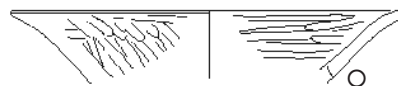
【SI15 内】



SK16-1 (1層)



SI33-1 (確認面)



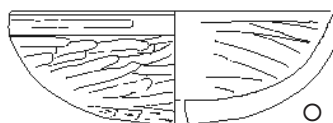
SI33-2 (1層)



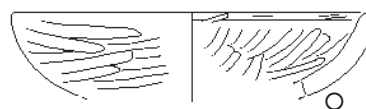
SI33-3 (確認面)



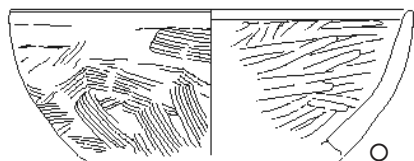
SI33-4 (確認面)



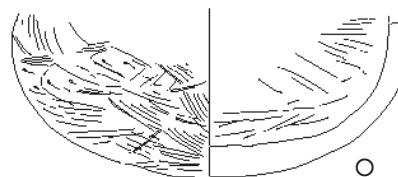
SI33-5 (確認面)



SI33-6 (確認面)



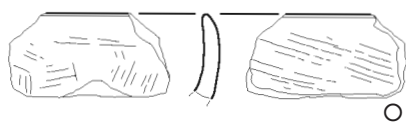
SI33-7 (確認面)



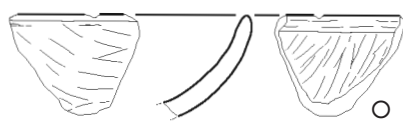
SI33-8 (確認面)

0 S=1/3 10cm

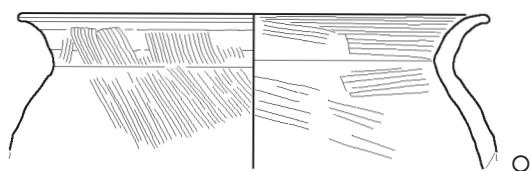
図 37 A 区竪穴建物跡出土遺物 (2)



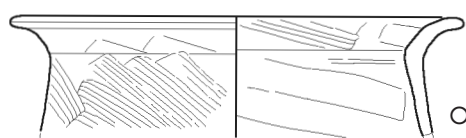
SI33-9 (確認面)



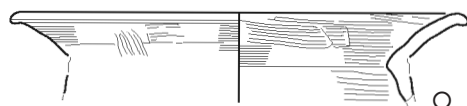
SI33-10 (確認面)



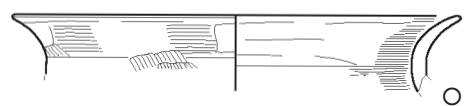
SI33-11 (確認面・1層)



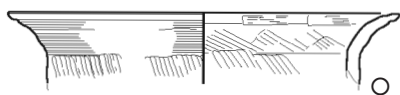
SI33-12 (確認面)



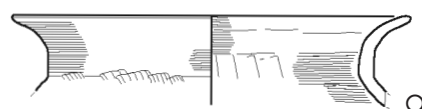
SI33-13 (1層)



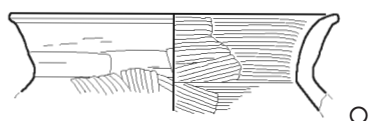
SI33-14 (床面)



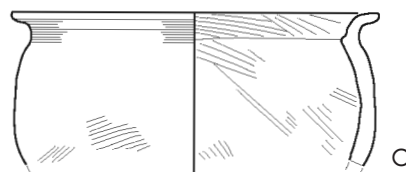
SI33-15 (1層)



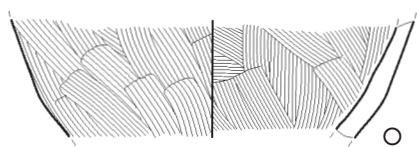
SI33-16 (確認面)



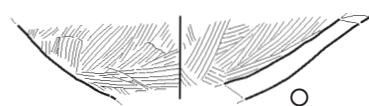
SI33-17 (確認面)



SI33-18 (確認面)

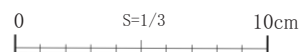


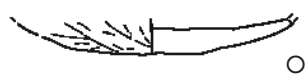
SI33-19 (-)



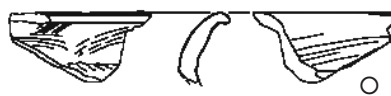
SI33-20 (Ⅱ層・確認面・1層)

図 38 A 区竪穴建物跡出土遺物 (3)





SI33-21 (II層)



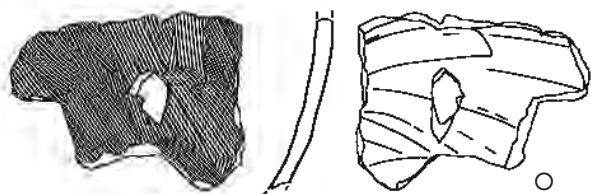
SI33-22 (-)



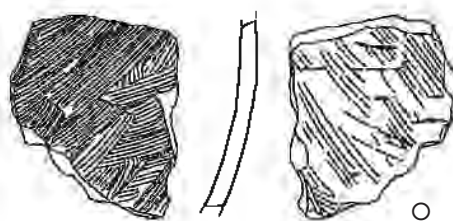
SI33-23 (確認面)



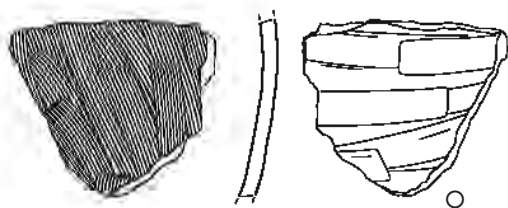
SI33-24 (1層)



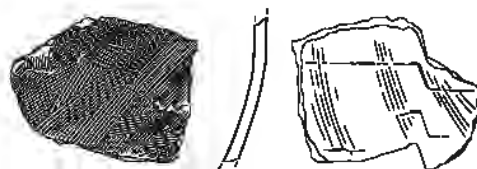
SI33-25 (1層)



SI33-26 (確認面)



SI33-27 (確認面)



SI33-28 (1層)



SI33-29 (確認面)

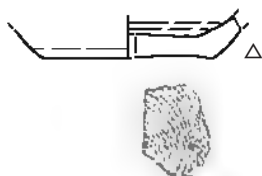


SI33-30 (確認面)

【SB03】



SP76-1 (埋土)



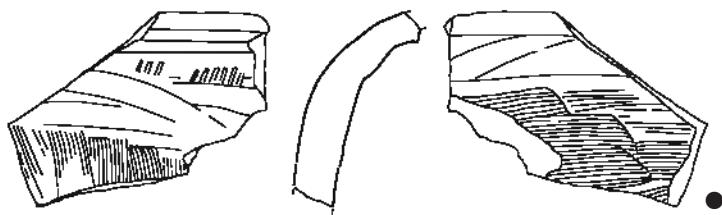
SP86-1 (1層)



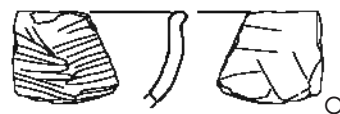
SP100-1 (確認面)

0 S=1/3 10cm

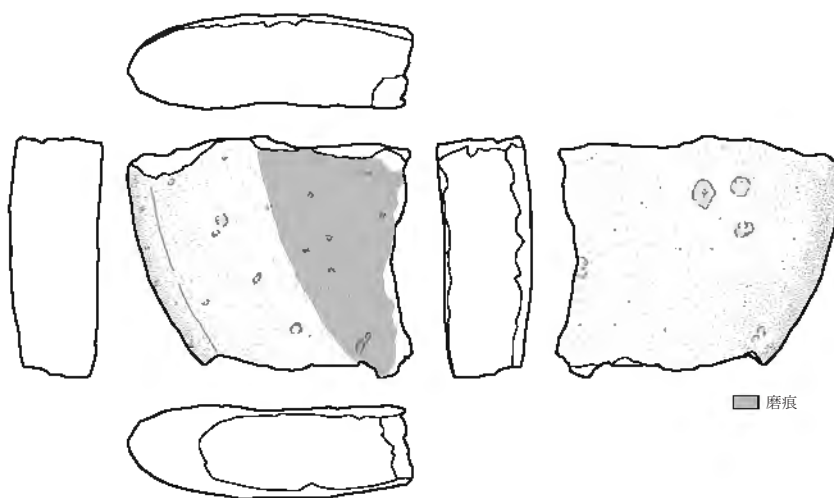
図 39 A 区竖穴建物跡 (4)・柱穴出土遺物



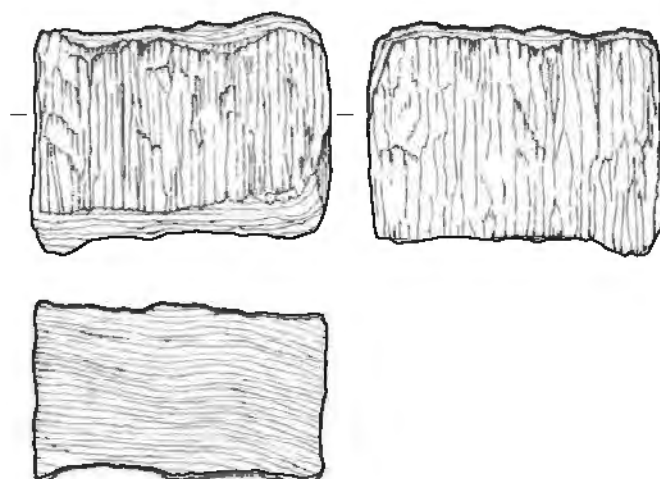
SE21-1 (4層)



SE21-2 (1層)



SE21-3 (4層)



SE21-4 (4層)

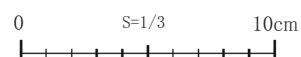


图 40 A 区井戸跡出土遺物 (1)

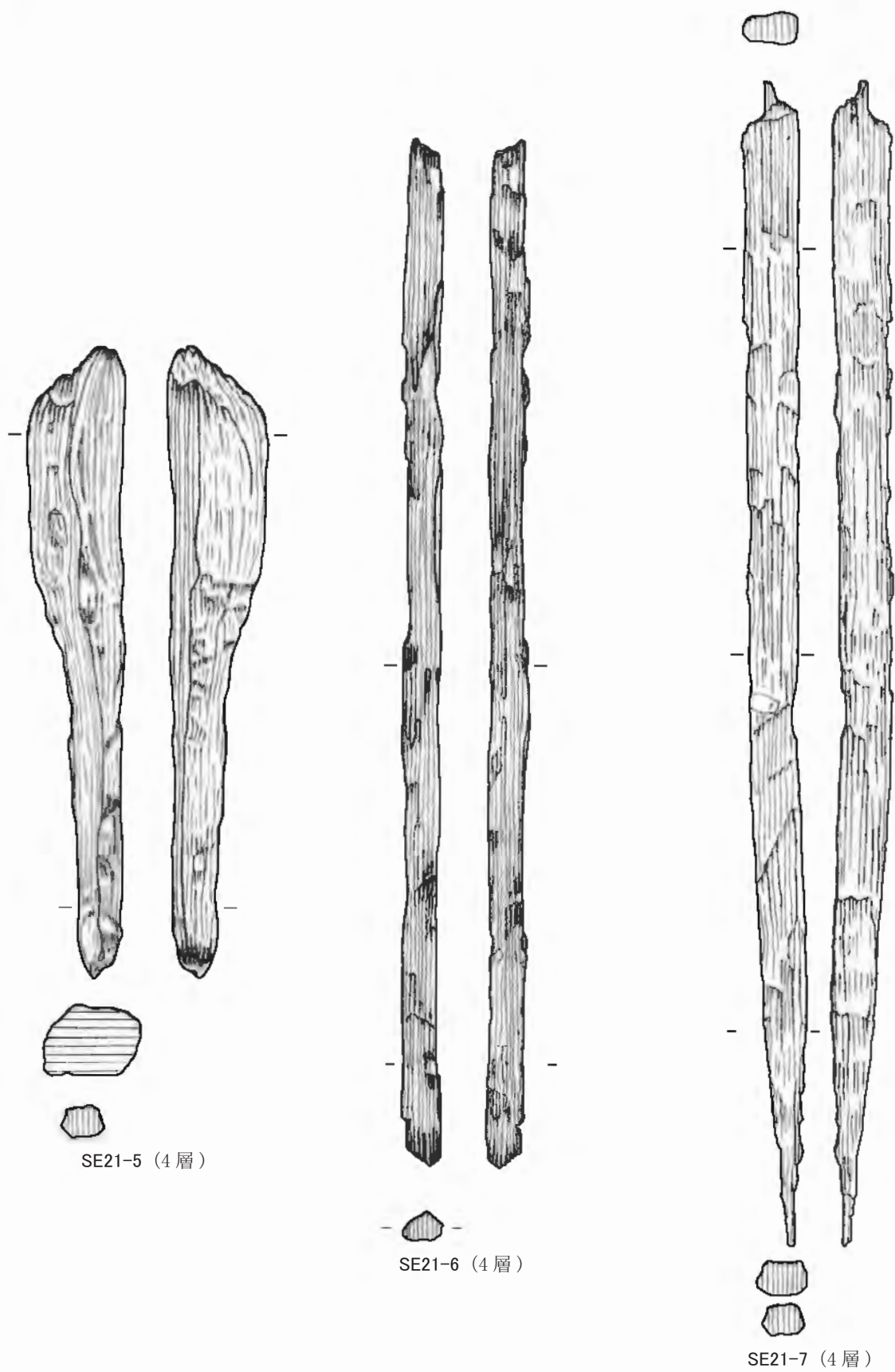
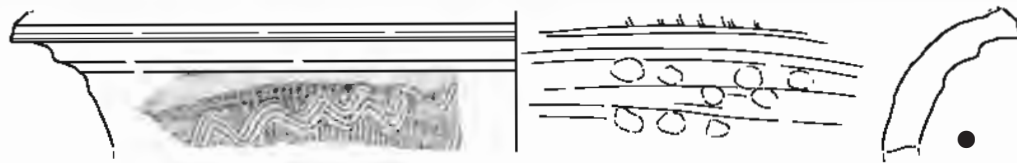


图 41 A 区井戸跡出土遺物 (2)



SE22-1 (3層)



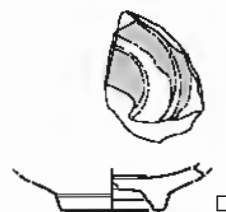
SE22-2 (3層)



SE22-3 (4層)



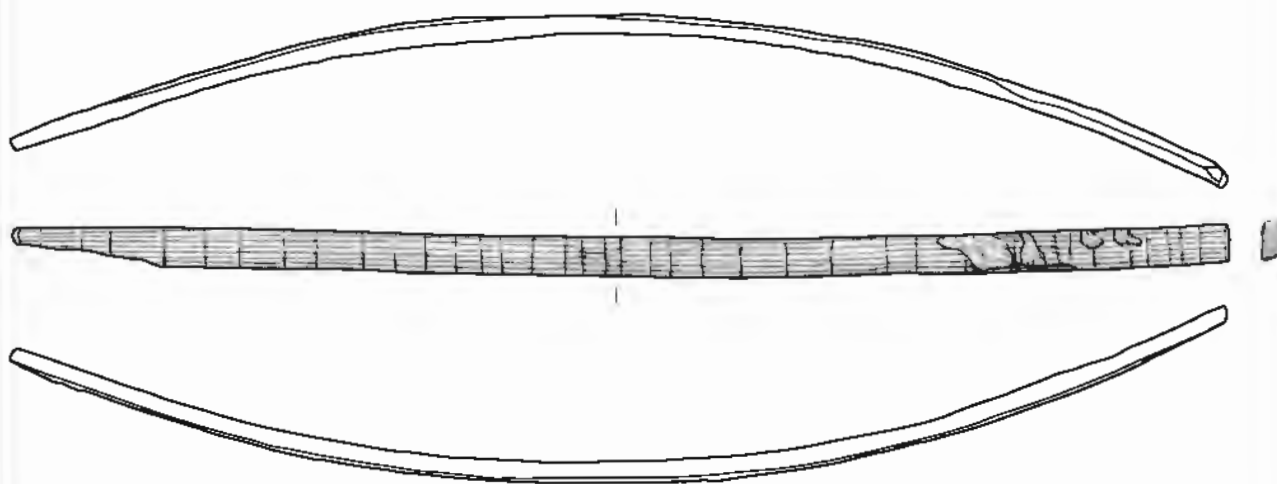
SE22-4 (確認面)



SE22-6 (確認面)



SE22-5 (4層)



SE22-7 (4層)

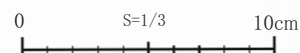
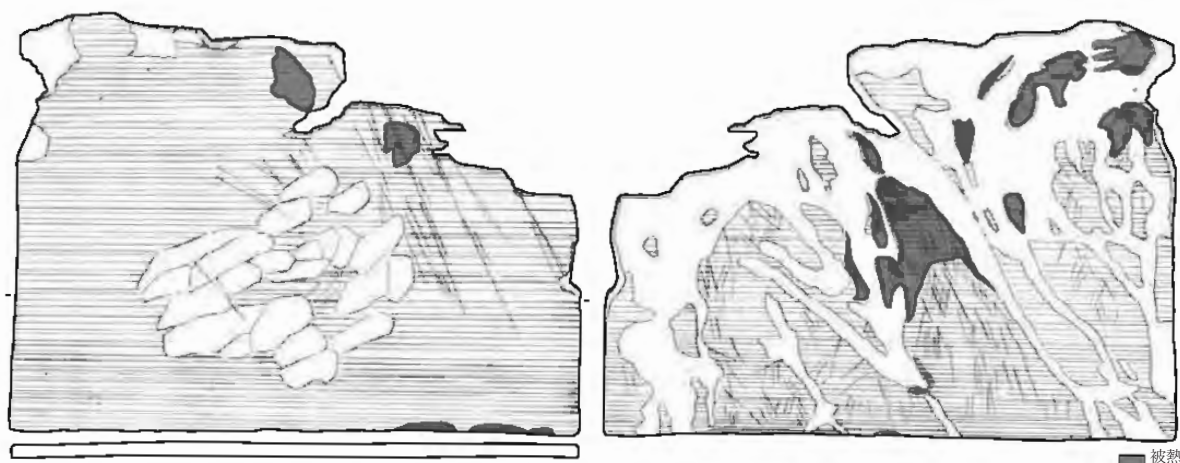
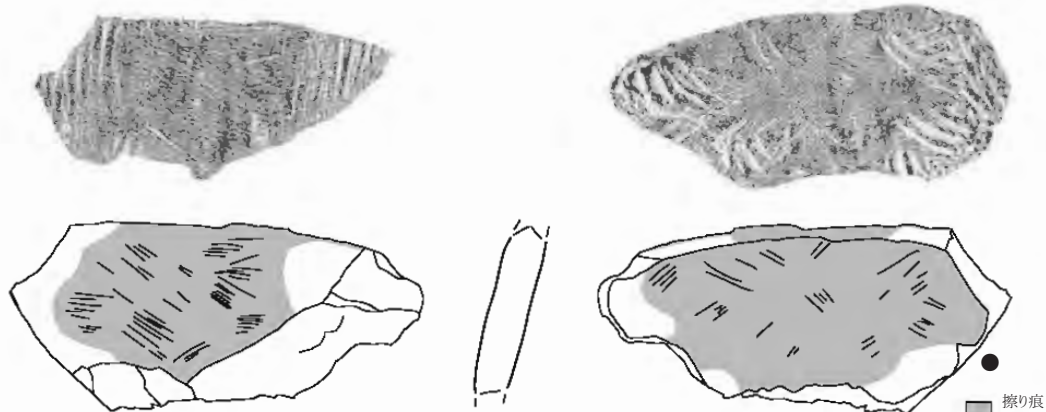


図 42 A 区井戸跡出土遺物 (3)



SE22-8 (4層)

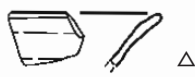
0 S=1/6 20cm



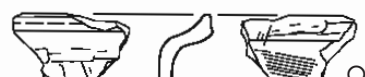
SE29-1 (1層)



SE29-2 (2層)



SE29-3 (1層)



SE29-4 (1層)



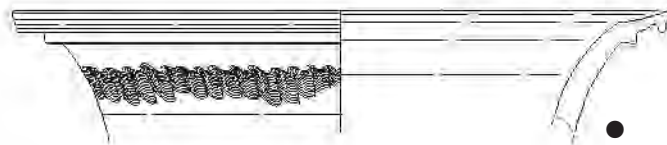
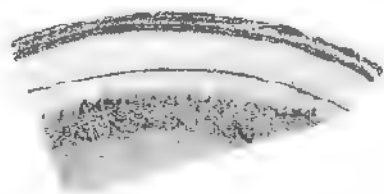
SK18-1 (1層)



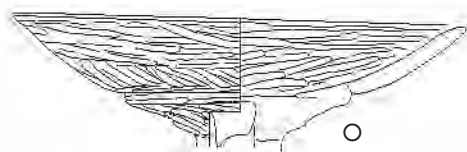
SK18-2 (1層)

0 S=1/3 10cm

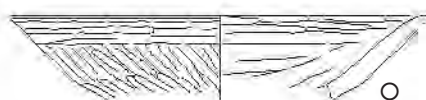
図 43 A区井戸跡(4)・土坑出土遺物(1)



SK97-1 (4層)



SK97-2 (確認面・3層)



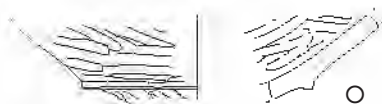
SK97-3 (確認面)



SK97-4 (2層)



SK97-5 (4層)



SK97-6 (4層)



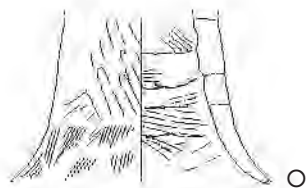
SK97-7 (確認面)



SK97-8 (4層)



SK97-9 (確認面)



SK97-10 (確認面・4層)



SK97-11 (4層)

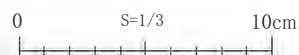
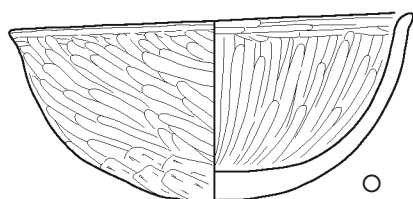
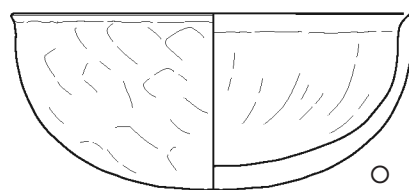


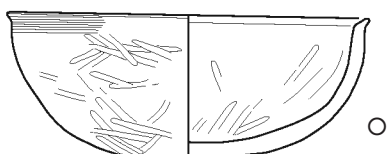
図 44 A 区土坑出土遺物 (2)



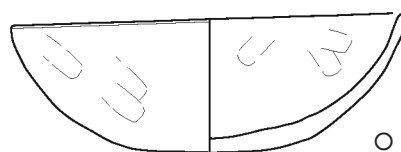
SK97-12 (2層・3層)



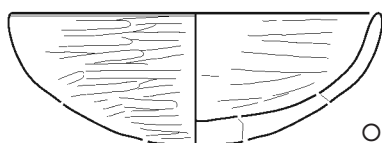
SK97-13 (4層)



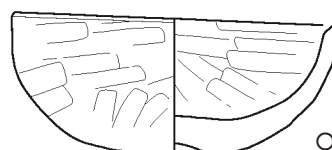
SK97-14 (確認面・3層・4層)



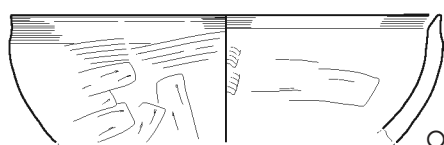
SK97-15 (確認面・2層・3層)



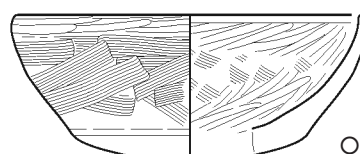
SK97-16 (確認面)



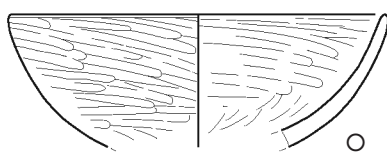
SK97-17 (確認面・3層)



SK97-18 (3層)



SK97-19 (4層)



SK97-20 (確認面)



SK97-21 (確認面)

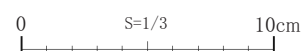
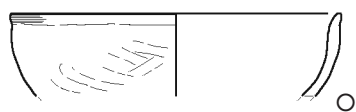
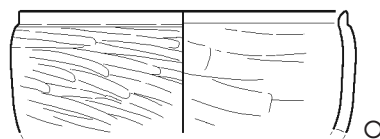


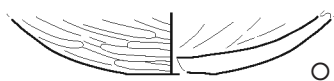
図 45 A 区土坑出土遺物 (3)



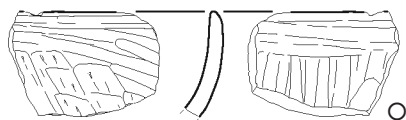
SK97-22 (4層)



SK97-23 (3層)



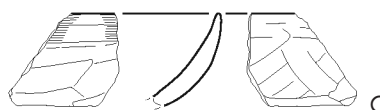
SK97-24 (3層)



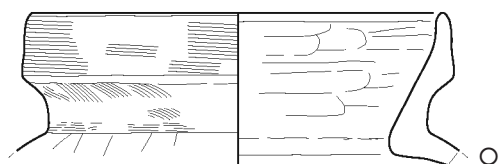
SK97-25 (確認面)



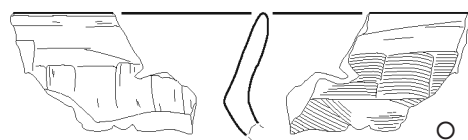
SK97-26 (-)



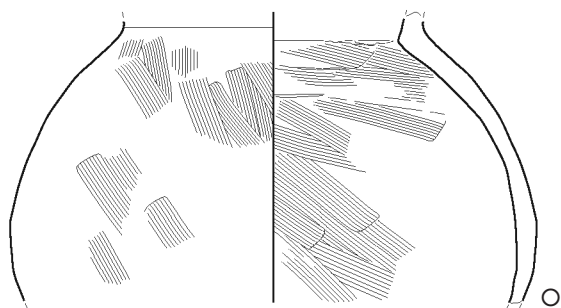
SK97-27 (確認面)



SK97-28 (4層)



SK97-29 (3層)



SK97-30 (確認面・4層)



SK97-31 (3層)



SK97-32 (4層)

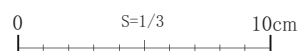
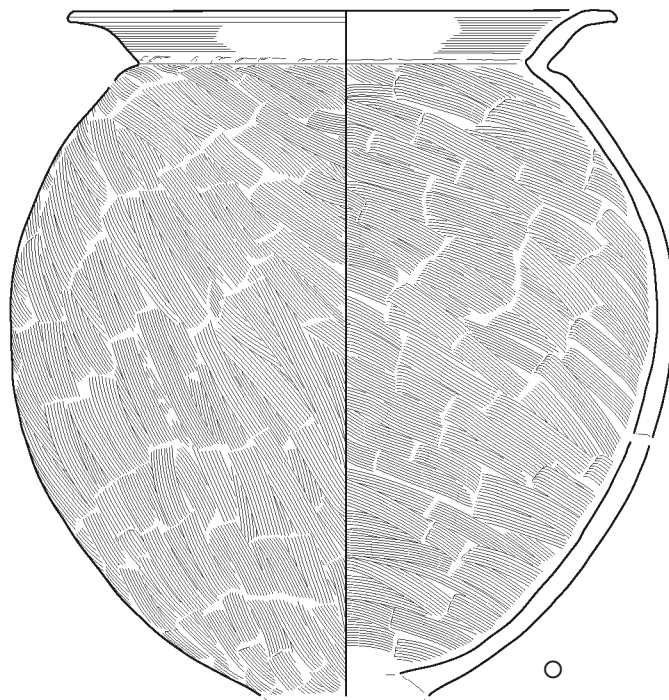
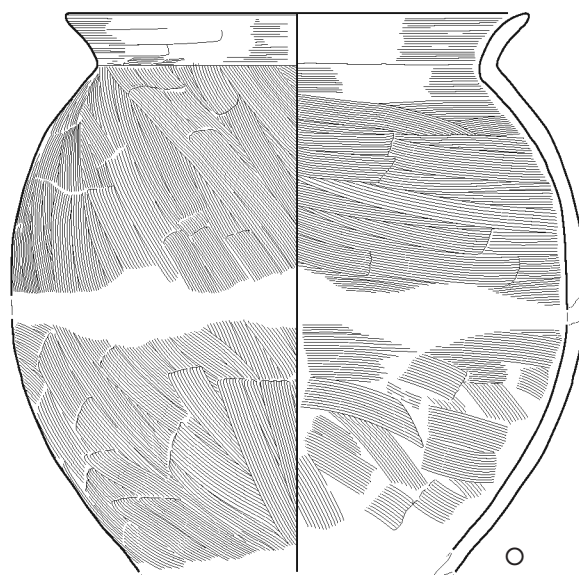


図 46 A 区土坑出土遺物 (4)



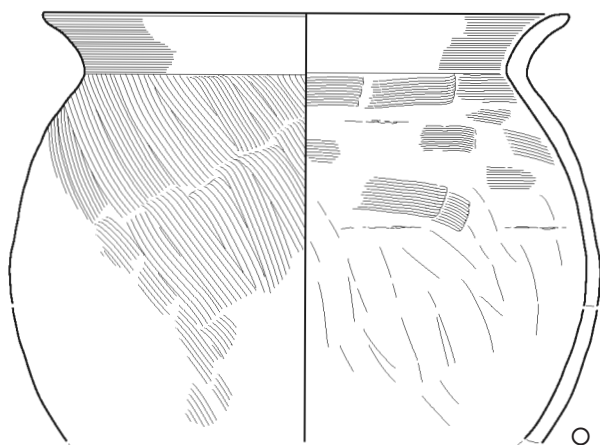
SK97-33 (Ⅱ層・確認面・3層・4層)



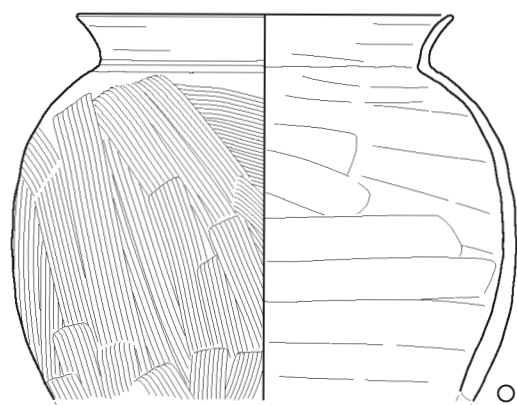
SK97-34 (確認面・3層・4層)

図 47 A 区土坑出土遺物 (5)

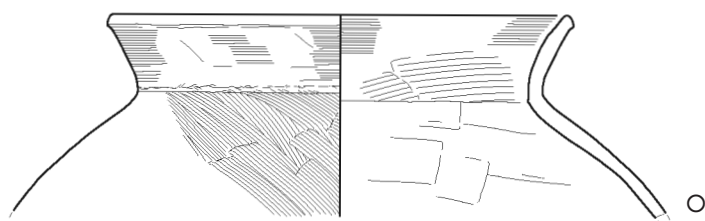
0 S=1/3 10cm



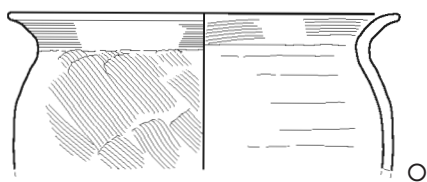
SK97-35 (Ⅱ層・確認面・3層・4層)



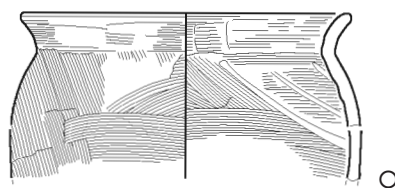
SK97-36 (Ⅱ層・確認面・1層・3層)



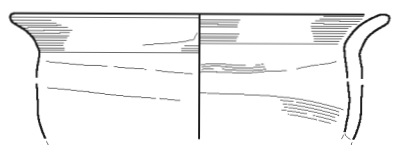
SK97-37 (確認面・3層・4層)



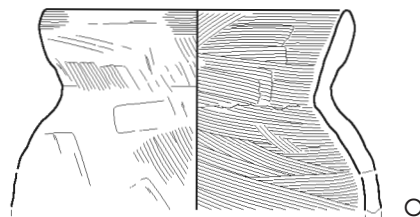
SK97-38 (確認面・3層)



SK97-39 (3層)

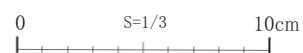


SK97-40 (3層)



SK97-41 (3層)

図 48 A 区土坑出土遺物 (6)

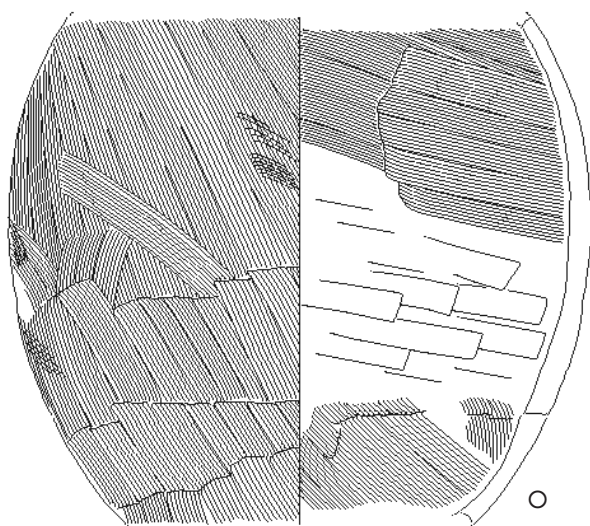




SK97-42 (3層)



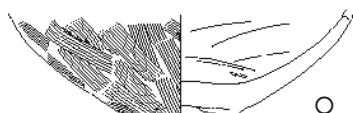
SK97-44 (Ⅱ層・確認面・3層)



SK97-43 (Ⅱ層・確認面・3層・4層)



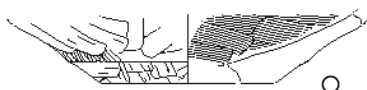
SK97-45 (4層)



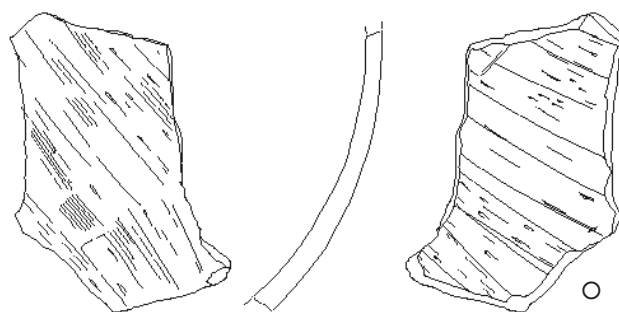
SK97-46 (確認面・3層・4層)



SK97-47 (3層)



SK97-48 (3層)



SK97-49 (確認面・3層)

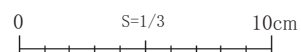
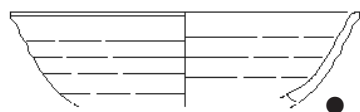
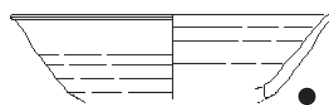


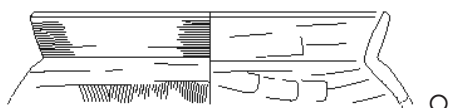
図 49 A 区土坑出土遺物 (7)



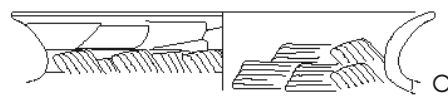
SX07-1 (確認面)



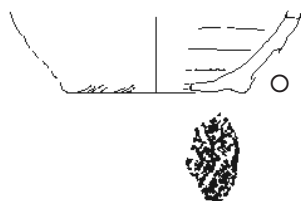
SX07-2 (確認面)



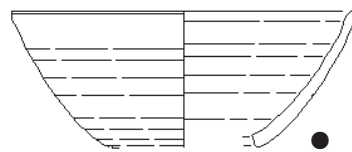
SX07-3 (確認面)



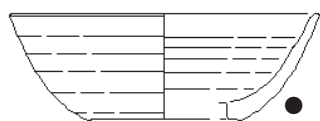
SX07-4 (確認面)



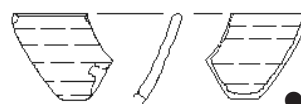
SX07-5 (確認面)



遺構外-1 (-)



遺構外-2 (MC98)



遺構外-3 (LS100)



遺構外-4 (MC98)



遺構外-5 (MC98)

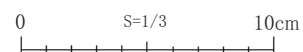


図 50 A 区性格不明遺構・遺構外出土遺物 (1)



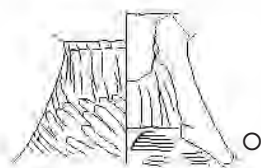
遺構外-6 (MI101)



遺構外-7 (LQ100)



遺構外-8 (MI101)



遺構外-9 (MI101)



遺構外-10 (-)



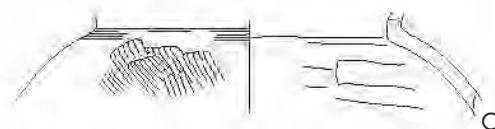
遺構外-11 (MI101)



遺構外-12 (MI101)



遺構外-13 (MI101)



遺構外-14 (MG101)



遺構外-15 (MI101)



遺構外-16 (-)

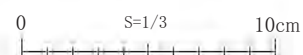


图 51 A 区遺構外出土遺物 (2)

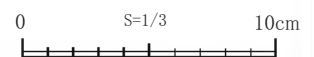
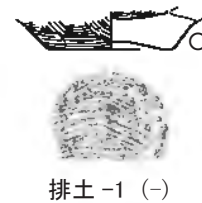
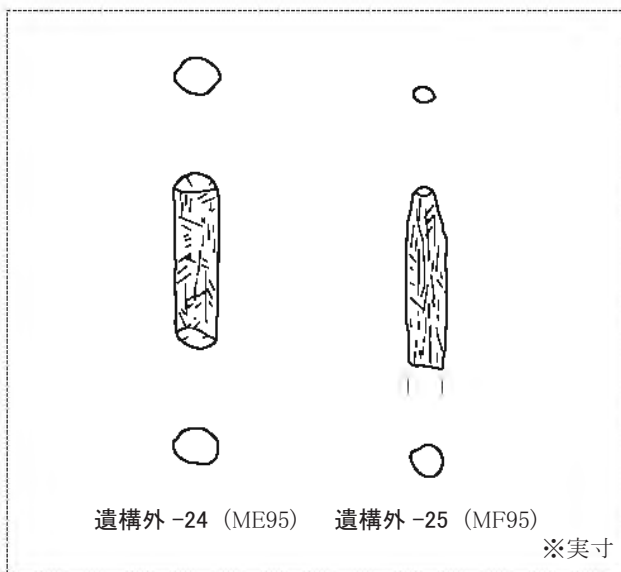
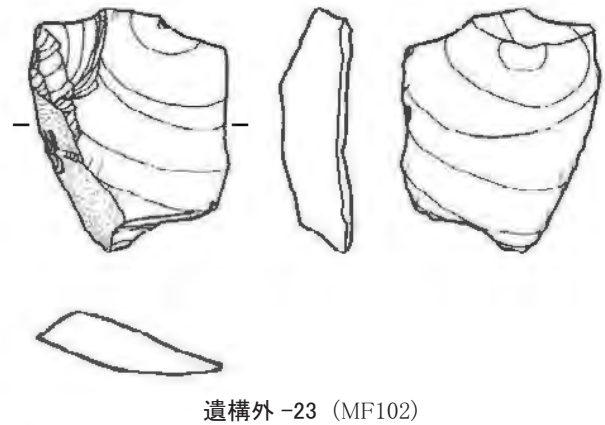
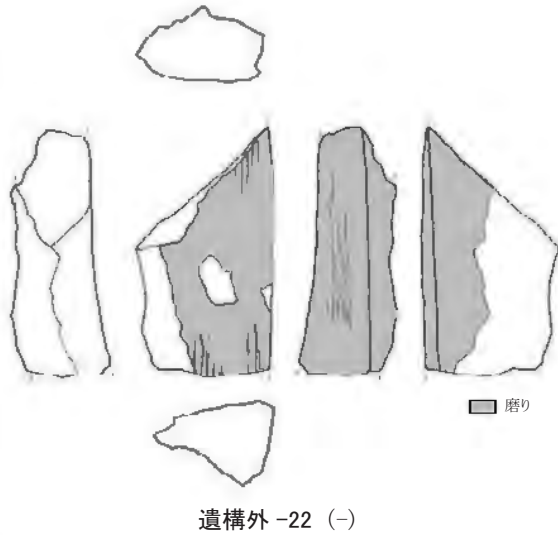
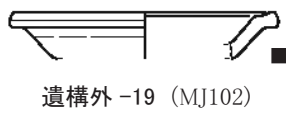
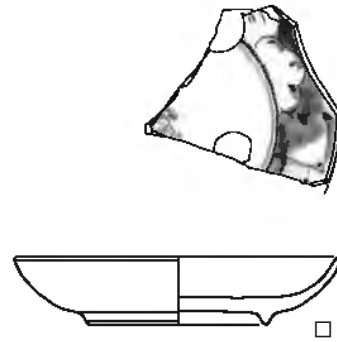
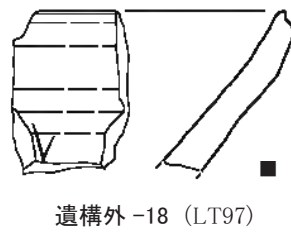
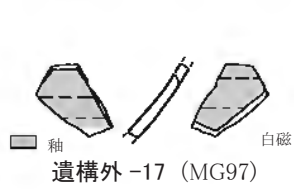


図 52 A 区遺構外(3)・排土出土遺物

表3 蟹沢遺跡A区出土遺物観察表

※()内数字は推定値・単位cm・(口)→口縁部・(底)→底部・(胴)→胴部・(体)→体部・(頸)→頸部・(脚)→脚部・(内)→内面・(外)→外面

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
1	36	SI15 -1	床面直上	土師器	高杯	(口) 1/8	ミガキ	磨滅	-	(20.0)	-	-	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		282
2	36	SI15 -2	1層	土師器	椀	(口) 1/2	ミガキ	横ナデ	-	(14.7)	-	-	(外)浅黄橙 (内)にぶい黄橙		55 56
3	36	SI15 -3	Ⅱ層 床面直上	土師器	椀	(口) 1/7	(口)ナデ (体)クスリ	ナデ	-	(12.8)	-	-	(外)褐灰 (内)にぶい黄橙	口縁部被熱	199 272
4	36	SI15 -4	1層	土師器	椀	(口) 破片	ミガキ クスリ ハケメ	ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	外面煤付着	56
5	36	SI15 -5	確認面	土師器	椀	(口) 破片	クスリ →ミガキ	ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	外面煤付着	31 33
6	36	SI15 -6	確認面	土師器	壺	(口) 1/6	ミガキ	ミガキ	-	(9.5)	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		31
7	36	SI15 -7	2層	土師器	甕	(口) 1/7	(口)ナデ (胴)ハケメ	ナデ	-	(15.0)	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰	外面煤付着	451
8	36	SI15 -8	確認面 1層 2層 床面直上	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		37 66 274 356 一括
9	36	SI15 -9	確認面 3層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)褐灰		28 32 364 365
10	36	SI15 -10	壁際溝	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)黄灰		363
11	36	SI15 -11	確認面	土師器	甕	(口) 破片	ミガキ	ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		18
12	36	SI15 -12	1層	土師器	甕	(口) 破片	横ナデ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	外面煤付着	67
13	37	SI15 -13	1層	土師器	甕	(底) 破片	ハケメ →ナデ	ナデ	-	-	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰		62
14	37	SI15 -14	Ⅱ層 確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		44 82
15	37	SI15 -15	2層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	外面煤付着	一括
16	37	SK16 -1	1層	土師器	高杯	(脚) 破片	ミガキ	ナデ ハケメ	-	-	-	-	(外)橙 (内)にぶい黄橙	[SI15内]	54
17	37	SI33 -1	確認面	須恵器	甕	(胴) 破片	平行タタキ	円形 あて具	-	-	-	-	(外)オリーブ黒 (内)灰		119
18	37	SI33 -2	1層	土師器	高杯	(口) 1/8	ミガキ	ミガキ	-	(15.7)	-	-	(外)浅黄橙 (内)にぶい黄橙		264
19	37	SI33 -3	確認面	土師器	高杯	(脚) 破片	ナデ	ナデ	-	-	-	-	(外)橙 (内)橙		138
20	37	SI33 -4	確認面	土師器	高杯	(杯身) 破片	ミガキ	ハケメ	-	-	-	-	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	内面磨滅	105
21	37	SI33 -5	確認面	土師器	椀	1/5	ミガキ クスリ	ナデ	-	(13.0)	-	4.5	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		94 151
22	37	SI33 -6	確認面	土師器	椀	(口) 1/7	ミガキ	ミガキ	-	(14.4)	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		137
23	37	SI33 -7	確認面	土師器	椀	(口) 1/6	ナデ ハケメ	ミガキ	-	(15.7)	-	-	(外)橙 (内)橙		148
24	37	SI33 -8	確認面	土師器	椀	(底) 破片	ハケメ クスリ	ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)浅黄橙		101 110

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
25	38	SI33 -9	確認面	土師器	椀	(口) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)橙 (内)にぶい橙		110
26	38	SI33 -10	確認面	土師器	椀	(口) 破片	ナデ	ミカキ	-	-	-	-	(外)にぶい橙 (内)橙		139
27	38	SI33 -11	確認面 1層	土師器	甕	(口) 1/6	ハケメ	ハケメ	-	(19.8)	-	-	(外)にぶい橙 (内)褐灰		161 171 210
28	38	SI33 -12	確認面	土師器	甕	(口) 破片	ナデ ハケメ	ハケメ ヘラナデ	-	(17.9)	-	-	(外)浅黄 (内)にぶい黄橙		175
29	38	SI33 -13	1層	土師器	甕	(口) 1/8	ナデ ハケメ	ハケメ	-	(18.2)	-	-	(外)灰褐 (内)灰黄褐	外面煤付着	269 一括
30	38	SI33 -14	床面	土師器	甕	(口) 1/8	(口)横ナデ (頸)ハケメ	(口)ハケメ →ナデ (頸)ハケメ	-	(17.8)	-	-	(外)にぶい黄褐 (内)灰黄褐	外面煤付着	448 一括
31	38	SI33 -15	1層	土師器	甕	(口) 1/7	(口)横ナデ (胴)ハケメ	(口)横ナデ (胴)ハケメ	-	(15.4)	-	-	(外)にぶい黄橙 (外)にぶい黄褐 (内)浅黄橙		265
32	38	SI33 -16	確認面	土師器	甕	(口) 1/8	(口)横ナデ (頸)ハケメ	(口)ハケメ →ナデ (頸)ハケメ	-	(15.8)	-	-	(外)にぶい黄褐 (内)灰黄褐	外面煤付着	176
33	38	SI33 -17	確認面	土師器	甕	(口) 1/7	(口)ナデ (胴)ハケメ	ハケメ	-	(13.0)	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)灰黄褐 (内)にぶい黄橙		161
34	38	SI33 -18	確認面	土師器	甕	(口) 1/6	(口)横ナデ (胴)ハケメ	ハケメ	-	(14.5)	-	-	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙		160 168
35	38	SI33 -19	-	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)褐灰		一括
36	38	SI33 -20	Ⅱ層 確認面 1層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい黄褐 (内)黒褐		74 95 97 126 164 268 一括
37	39	SI33 -21	Ⅱ層	土師器	甕	(底) 破片	ケスリ	磨滅	-	-	-	-	(外)浅黄橙 (内)にぶい橙		120
38	39	SI33 -22	-	土師器	甕	(口) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		一括
39	39	SI33 -23	確認面	土師器	甕	(頸) 破片	ハケメ	ヘラナデ	-	-	-	-	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙		86
40	39	SI33 -24	1層	土師器	甕	(頸) 破片	ナデ	(口)ハケメ (頸)ナデ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄橙		271
41	39	SI33 -25	1層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ナデ	-	-	-	-	(外)灰褐 (内)にぶい褐		208
42	39	SI33 -26	確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰褐 (内)灰黄褐		174
43	39	SI33 -27	確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ヘラナデ	-	-	-	-	(外)にぶい橙 (内)灰褐		一括
44	39	SI33 -28	1層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰褐 (内)明褐灰		211
45	39	SI33 -29	確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐		136
46	39	SI33 -30	確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐		100
47	39	SP76 -1	埋土	土師器	椀	(口) 破片	ハケメ ミカキ	ミカキ	-	-	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)浅黄橙	[SB03]	一括

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
48	39	SP86 -1	1層	ロクロ 土師器	甕	(底) 1/4	ロクロナデ'	ロクロナデ'	回転 糸切り	-	(6.7)	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		194
49	39	SP100 -1	確認面	土師器	高杯	(口) 破片	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	(外)にぶい、黄橙 (内)にぶい、黄橙		446
50	40	SE21 -1	4層	須恵器	甕	(頸) 破片	平行タタキ →ナデ' ハケメ	ナデ' ハケメ	-	-	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰		196
51	40	SE21 -2	1層	土師器	椀	(口) 破片	ミガキ	ナデ'	-	-	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		183
52	40	SE21 -3	4層	石器	石皿	-	-	-	-	最大長 9.5	最大幅 11.2	最大厚 3.7	-	表面右半部に磨痕 あり	S02
53	42	SE22 -1	3層	須恵器	甕	(口) 破片	ロクロナデ' →波状文	ナデ'	-	(42.0)	-	-	(外)黒褐 (内)褐灰	内面に指頭痕あり	309
54	42	SE22 -2	3層	須恵器	杯	(底) 破片	ロクロナデ'	ロクロナデ'	回転 糸切り (右)	-	(5.9)	-	(外)灰白 (内)灰白		308
55	42	SE22 -3	4層	土師器	甕	(口) 破片	(口)ナデ' (胴)ハケメ	ロクロナデ'	-	-	-	-	(外)にぶい、黄橙 (内)暗灰黄		362
56	42	SE22 -4	確認面	土師器	甕	(胴) 破片	ナデ' ハケメ	ナデ'	-	-	-	-	(外)黒褐 (内)灰黄褐		一括
57	42	SE22 -5	4層	土師器	甕	(底) 破片	ケスリ	ナデ'	-	-	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		361
58	42	SE22 -6	確認面	磁器	碗	(底) 2/3	ロクロナデ'	ロクロナデ'	-	-	(4.1)	-	(外)にぶい、橙 (内)灰白	肥前 見込み蛇の目軸剥 ぎ	一括
59	43	SE29 -1	1層	須恵器	甕	(胴) 破片	平行タタキ	円形あて具	-	-	-	-	(外)灰 (内)黄灰	内外面ともに磨面 あり	204
60	43	SE29 -2	2層	須恵器	壺	(胴) 破片	ロクロナデ' →ケスリ	ロクロナデ'	-	-	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰		一括
61	43	SE29 -3	1層	ロクロ 土師器	杯	(口) 破片	ロクロナデ'	ロクロナデ'	-	-	-	-	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		一括
62	43	SE29 -4	1層	土師器	甕	(口) 破片	ナデ'	(口)ナデ' (胴)ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい、黄橙 (内)にぶい、黄橙		202
63	43	SK18 -1	1層	土師器	椀	(口) 1/8	ミガキ ナデ'	ナデ'	-	(14.0)	-	-	(外)浅黄橙 (内)にぶい、黄橙		60
64	43	SK18 -2	1層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ヘラナデ'	-	-	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰		70
65	44	SK97 -1	4層	須恵器	甕	(口) 1/5	ロクロナデ' →波状文	ロクロナデ'	-	(26.0)	-	-	(外)褐灰 (内)褐灰	断面に漆付着	403
66	44	SK97 -2	確認面 3層	土師器	高杯	(口) 1/2	ミガキ	ミガキ	-	17.8	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		242 294 328 342 382
67	44	SK97 -3	確認面	土師器	高杯	(口) 1/7	ミガキ	ミガキ ナデ'	-	(16.6)	-	-	(外)にぶい、橙 (内)浅黄橙		300 一括
68	44	SK97 -4	2層	土師器	高杯	(口) 1/7	磨減	磨減	-	(16.1)	-	-	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		411
69	44	SK97 -5	4層	土師器	高杯	(口) 破片	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	(外)灰白 (内)灰白		347
70	44	SK97 -6	4層	土師器	高杯	(杯身) 破片	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		311
71	44	SK97 -7	確認面	土師器	高杯	(杯身) 破片	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		226
72	44	SK97 -8	4層	土師器	高杯	(杯身) 破片	ミガキ	ナデ'	-	-	-	-	(外)にぶい、橙 (内)灰黄褐		336

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
73	44	SK97 -9	確認面	土師器	高杯	(杯身) 破片	ミカキ	ハケメ	－	－	－	－	(外)橙 (内)橙		255
74	44	SK97 -10	確認面 4層	土師器	高杯	(脚) 破片	ミカキ ハケメ	ハケメ	－	－	－	－	(外)浅黄橙 (内)灰白		337 387
75	44	SK97 -11	4層	土師器	高杯	(脚) 破片	ミカキ	ヘラナデ	－	－	(11.5)	－	(外)橙 (内)浅黄橙		195
76	45	SK97 -12	2層 3層	土師器	椀	1/2	ミカキ (下部)ケスリ	ミカキ	－	16.0	－	(7.2)	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		332 407 421 434
77	45	SK97 -13	4層	土師器	椀	1/3	ナデ (下部)ケスリ	ナデ	－	(16.0)	－	7.0	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	内外面磨減	353 409
78	45	SK97 -14	確認面 3層 4層	土師器	椀	3/5	(口)横ナデ (体)ミカキ	ミカキ	ケスリ	14.3	－	(5.7)	(外)橙 (内)にぶい橙	内外面磨減	298 333 337 350 407 421 423 430 431
79	45	SK97 -15	確認面 2層 3層	土師器	椀	3/4	ヘラナデ	ヘラナデ	－	15.7	－	(5.3)	(外)淡橙 (内)にぶい橙		305 306 406 438
80	45	SK97 -16	確認面	土師器	椀	1/4	ミカキ	ナデ	－	(14.7)	－	5.3	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		223 233
81	45	SK97 -17	確認面 3層	土師器	椀	準完形	ヘラナデ	ヘラナデ	－	13.0	4.1	(5.2)	(外)浅黄橙 (内)にぶい橙		13 407 429 442
82	45	SK97 -18	3層	土師器	椀	(口) 1/6	(口)ナデ (胴)ハケメ ケスリ	(口)ナデ (胴)ハケメ	－	(16.9)	－	－	(外)灰褐 (内)褐灰		377 一括
83	45	SK97 -19	4層	土師器	椀	(口) 1/2	ミカキ ハケメ	ミカキ ハケメ	－	(13.9)	－	－	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		316 409
84	45	SK97 -20	確認面	土師器	椀	(口) 1/7	ミカキ (下部)ケスリ	ミカキ	－	(15.0)	－	－	(外)にぶい橙 (内)浅黄橙		07 一括
85	45	SK97 -21	確認面	土師器	椀	(口) 1/7	(口)ナデ (体)ヘラナデ ミカキ	ナデ	－	(13.1)	－	－	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙		240 一括
86	46	SK97 -22	4層	土師器	椀	(口) 1/7	(口)ナデ (胴)ミカキ	磨減	－	(13.0)	－	－	(外)淡橙 (内)淡橙		348
87	46	SK97 -23	3層	土師器	椀	(口) 1/5	ミカキ	ナデ	－	(13.0)	－	－	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		392 一括
88	46	SK97 -24	3層	土師器	椀	(底) 1/3	ミカキ	ナデ	－	－	(3.6)	－	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙		382
89	46	SK97 -25	確認面	土師器	椀	(口) 破片	(口)ナデ (胴)ミカキ ケスリ	(口)ナデ (胴)ミカキ	－	－	－	－	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		234
90	46	SK97 -26	－	土師器	椀	(口) 破片	(口)横ナデ (体)ミカキ	(口)横ナデ (体)ミカキ	－	－	－	－	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		一括
91	46	SK97 -27	確認面	土師器	椀	(口) 破片	(口)横ナデ (体)ヘラナデ	ヘラナデ	－	－	－	－	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙		251
92	46	SK97 -28	4層	土師器	壺	(口) 2/5	ハケメ ナデ	ナデ	－	(16.3)	－	－	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	内外面磨減	351

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
93	46	SK97-29	3層	土師器	壺	(口)破片	(口)ナデ' (胴)ケスリ	(口)ナデ' (胴)ハケメ ナデ'	-	-	-	-	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄		407
94	46	SK97-30	確認面 4層	土師器	壺	(胴)破片	ハケメ	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄		291 335 一括
95	46	SK97-31	3層	土師器	壺	(口)破片	(口)ナデ' (胴)ハケメ	ナデ'	-	-	-	-	(外)黄 (内)黄		418
96	46	SK97-32	4層	土師器	壺	(口)破片	磨滅	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい黄 (内)灰黄	内外面磨滅	351
97	47	SK97-33	Ⅱ層 確認面 3層 4層	土師器	甕	(口) 2/5	ハケメ	ハケメ	-	(21.7)	-	-	(外)にぶい黄 (内)灰黄		09 24 195 199 201 228 245 252 286 289 290 291 299 301 302 310 316 324 333 339 352 379 381 408 424 436
98	47	SK97-34	確認面 3層 4層	土師器	甕	(口) 1/3	(口)ナデ' (胴)ハケメ	(口)ナデ' (胴)ハケメ	-	(18.2)	-	-	(外)暗灰黄 (内)暗灰黄		10 235 258 321 323 334 375 399 412 419 443
99	48	SK97-35	Ⅱ層 確認面 3層 4層	土師器	甕	(口) 1/2	(口)横ナデ' (胴)ハケメ	(口)横ナデ' (胴)ハケメ ナデ'	-	(21.0)	-	-	(外)にぶい黄 (内)灰黄		192 199 304 433

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
100	48	SK97 -36	Ⅱ層 確認面 1層 3層	土師器	甕	(口) 1/8	(口)ナデ (胴)ハケメ	ナデ	－	(15.0)	－	－	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐		10 195 218 222 230 299 324 373 414 424
101	48	SK97 -37	確認面 3層 4層	土師器	甕	(口) 1/8	(口)横ナデ (胴)ハケメ	(口)横ナデ ハケメ (胴)ナデ	－	(18.6)	－	－	(外)にぶい・橙 (内)黒		11 16 338 432
102	48	SK97 -38	確認面 3層	土師器	甕	(口) 1/5	(口)ナデ (胴)ハケメ	ナデ	－	(15.6)	－	－	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙		293 306 331 一括
103	48	SK97 -39	3層	土師器	甕	(口) 1/5	(口)ナデ (胴)ハケメ	(口)ナデ (胴)ハケメ	－	(13.0)	－	－	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		345 一括
104	48	SK97 -40	3層	土師器	甕	(口) 1/8	ナデ	ナデ ハケメ	－	(15.0)	－	－	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		317 416
105	48	SK97 -41	3層	土師器	甕	(口) 1/5	ナデ ハケメ	ハケメ	－	(12.6)	－	－	(外)浅黄橙 (内)にぶい黄橙		405
106	49	SK97 -42	3層	土師器	甕	(口) 破片	横ナデ	ハケメ	－	－	－	－	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい・橙	外面ふきこぼれ	380
107	49	SK97 -43	Ⅱ層 確認面 3層 4層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ ナデ	－	－	－	－	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	外面煤付着	195 250 252 291 302 318 322 344 374 376 400 407 414 420 440 一括
108	49	SK97 -44	Ⅱ層 確認面 3層	土師器	甕	(胴) 破片	ハケメ	ハケメ	－	－	－	－	(外)褐灰 (内)にぶい黄橙		341 343 一括
109	49	SK97 -45	4層	土師器	甕	(底) 1/8	ハケメ	ハケメ ナデ	－	－	(6.0)	－	(外)黒褐 (内)灰黄褐		410 一括
110	49	SK97 -46	確認面 3層 4層	土師器	甕	(底) 完形	ハケメ	ナデ	ハケメ	－	4.2	－	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい・橙		225 301 346 407
111	49	SK97 -47	3層	土師器	甕	(底) 完形	ハケメ	ナデ	ハケメ	－	3.5	－	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙		415
112	49	SK97 -48	3層	土師器	甕	(底) 1/5	ハケメ ケスリ	ハケメ	無調整	－	(6.8)	－	(外)にぶい黄橙 (内)褐灰		402

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
113	49	SK97 -49	確認面 3層	土師器	甕	(胴) 破片	ケズリ ハケメ	ヘラナデ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)褐灰		243 398
114	50	SX07 -1	確認面	須恵器	杯	(口) 1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(13.8)	-	-	(外)灰黄 (内)灰黄		04 52 53
115	50	SX07 -2	確認面	須恵器	杯	(口) 1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(12.8)	-	-	(外)灰白 (内)黄灰		02
116	50	SX07 -3	確認面	土師器	甕	(口) 破片	(口)横ナデ (胴)ハケメ ナデ	ナデ	-	(14.4)	-	-	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄褐		01
117	50	SX07 -4	確認面	土師器	甕	(口) 1/7	ハケメ ナデ	ハケメ	-	(16.6)	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	外面煤付着	51
118	50	SX07 -5	確認面	土師器	甕	(底) 1/6	ハケメ	ナデ	木葉痕	-	(6.6)	-	(外)灰褐 (内)にぶい橙	外面ほぼ欠損	05
119	50	遺構外 -1	-	須恵器	杯	(口) 1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(13.8)	-	-	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐		一括
120	50	遺構外 -2	確認面 (MC98)	須恵器	杯	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転 糸切り	(12.2)	(6.0)	4.2	(外)黄灰 (内)暗灰黄		198
121	50	遺構外 -3	- (LS100)	須恵器	杯	(口) 破片	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	(外)灰黄褐 (内)褐灰		一括
122	50	遺構外 -4	確認面 (MC98)	須恵器	杯	(口) 破片	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	(外)灰白 (内)灰白	内外面煤付着	391
123	50	遺構外 -5	確認面 (MC98)	ロクロ 土師器	杯	1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転 糸切り	(14.0)	(5.8)	4.9	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		262
124	51	遺構外 -6	II層 (MI101)	土師器	高杯	(杯身) 破片	ナデ	不明	-	-	-	-	(外)橙 (内)橙	外面被熱	369
125	51	遺構外 -7	確認面 (LQ100)	土師器	高杯	(杯身) 破片	ナデ	ナデ	-	-	-	-	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		06
126	51	遺構外 -8	確認面 (MI101)	土師器	高杯	(脚) 破片	ミガキ	ハケメ	-	-	-	-	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		390
127	51	遺構外 -9	確認面 (MI101)	土師器	高杯	(脚) 破片	ミガキ	ミガキ ナデ	-	-	-	-	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙		383
128	51	遺構外 -10	VII層 (-)	土師器	高杯	(脚) 破片	ナデ	ナデ	-	-	-	-	(外)橙 (内)橙	内外面磨減	一括
129	51	遺構外 -11	確認面 (MI101)	土師器	高杯	(脚) 破片	ミガキ	ハケメ	-	-	(15.4)	-	(外)橙 (内)にぶい橙		386
130	51	遺構外 -12	確認面 (MI101)	土師器	高杯	(脚) 破片	ミガキ	ナデ	-	-	(13.2)	-	(外)橙 (内)橙		389
131	51	遺構外 -13	II層 (MI101)	土師器	甕	(口) 1/6	横ナデ	横ナデ	-	(18.0)	-	-	(外)褐灰 (内)灰黄褐		一括
132	51	遺構外 -14	確認面 (MG101)	土師器	甕	(頸) 破片	ハケメ	ナデ	-	-	-	-	(外)黒 (内)褐灰		285
133	51	遺構外 -15	確認面 (MI101)	土師器	甕	(底) 4/5	ナデ	ナデ	-	-	4.3	-	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	外面被熱	384
134	51	遺構外 -16	VII層 (-)	土師器	壺	(底) 完形	ハケメ →ナデ	ハケメ	ケズリ	-	5.9	-	(外)橙 (内)にぶい黄橙	底部被熱	一括
135	52	遺構外 -17	確認面 (MG97)	白磁	皿	(体) 破片	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	(外)灰白 (内)灰白	白磁・5群	185
136	52	遺構外 -18	確認面 (LT97)	須恵器 系陶器	鉢	(口) 破片	ロクロナデ	ロクロナデ →カギメ	-	-	-	-	(外)黄灰 (内)褐灰		131
137	52	遺構外 -19	II層 (MJ102)	陶器	折縁皿	(口) 1/6	-	-	-	(10.6)	-	-	(外)灰白 (内)灰白	瀬戸美濃大窯	450
138	52	遺構外 -20	確認面 (MG100)	磁器	染付碗	(口) 破片	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	(外)明緑灰 (内)灰白		190
139	52	遺構外 -21	VII層 (-)	磁器	染付皿	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(12.8)	(7.2)	2.7	(外)灰白 (内)灰白		一括

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
140	52	遺構外 -22	Ⅱ層 (-)	石器	砥石	-	-	-	-	最大長 (9.8)	最大幅 (5.4)	最大厚 (3.9)	-	アブライト 被熱の為に赤変し ている 磨面に薄く線状痕	一括
141	52	遺構外 -23	確認面 (MF102)	石器	剥片	-	-	-	-	最大長 4.8	最大幅 4.0	最大厚 1.4	-	頁岩	Q01
142	52	遺構外 -24	Ⅱ層 (ME95)	石器	不明 石製品	-	-	-	-	最大長 2.3	最大幅 0.6	最大厚 0.5	-	ろう石[灰色] 細かい線状痕が全 体的に確認できる	Q02
143	52	遺構外 -25	Ⅱ層 (MF95)	石器	不明 石製品	-	-	-	-	最大長 (2.4)	最大幅 0.5	最大厚 0.4	-	ろう石[灰黄褐色] 細かい線状痕が全 体的に確認できる	Q03
144	52	排土 -1	-	土師器	壺	(底) 2/3	ハケメ	ハケメ	ハケメ	-	4.8	-	(外)にぶい黄橙 (内)黄灰		一括

木製品

No.	図版 No.	遺物No.	台帳No.	種別	層位	最大長	最大幅	最大厚	備考	木取り	樹種同定
1	40	SE21 -4	RW02	木製品	4層	7.2	8.7	5.2	断面形が方形の角材	征目	スギ
2	41	SE21 -5	RW01	木製品	4層	23.4	3.6	2.6	断面形が不整円形の棒状木製品	征目	スギ
3	41	SE21 -6	RW04	木製品	4層	38.3	1.4	1.1	断面形が方形の棒状木製品	征目	スギ
4	41	SE21 -7	RW07	木製品	4層	43.2	2.0	1.2	断面形が円形の棒状木製品	征目	スギ
5	42	SE22 -7	RW10	木製品	4層	36.0	1.2	0.6	結物の一部、籬(タガ)カ	不明	スギ
6	43	SE22 -8	RW09	板材	4層	24.7	33.7	0.8	表面にチョウナ痕、組板(マナイタ)カ	不明	スギ

第5章 B区の調査

I 調査区の概要

B区からは、柱穴列5列、柱穴43基を検出した。柱穴列は、調査区の北側に集中しており、東西方向の柱穴列が3列、南北方向の柱穴列が2列存在する。放射性炭素年代測定をおこなったが、柱掘り方埋土自体を分析したため、年代幅が大きく、時期を特定するには至らなかった。

調査区の南端には黒色土の落ち込みがあり、この一帯は遺構密度が希薄である。このことから、調査区南端が遺跡の縁辺部にあたると考えられる。遺物は1点のみ図示した。調査区遺構外から出土した肥前系磁器である。

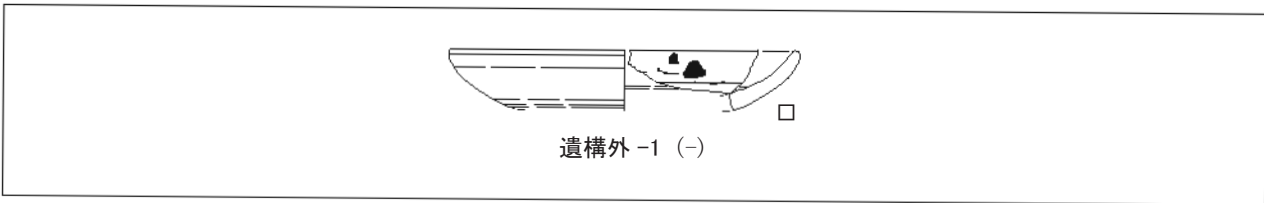


図 53 B 区出土遺物

表4 蟹沢遺跡B区出土遺物観察表

※()内数字は推定値・単位cm・(口)→口縁部(内)→内面・(外)→外面

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
1	53	遺構外 -1	-	磁器	染付碗	(口) 1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(13.8)	-	-	(外)灰白 (内)灰白	肥前	一括

II 基本層序

基本層序は、調査区南壁から東壁にかけての5か所で確認した。以下がその概要で、7層に分層される。

I 層: 黒褐色土層(10YR2/2)、層厚15～20cm

耕作土層。しまり弱、粘性弱。昭和30年代の耕地整理から現在に至るまで耕作されていた層で、水田耕作時の鋤入れ層である。地山土(IV層)粒を微量含む。層厚が薄い。A区と異なり、遺物の混入はほとんど見られなかった。

II 層: 黒褐色土層(10YR3/2)、層厚20cm

水田床土層。調査区の南端のみ確認される。昭和30年代におこなわれた耕地整理の際の人為堆積層である。本来南側に緩やかに傾斜する地形を水平にするため、調査区南側のみ盛土したと考えられる。

III 層: 黒褐色土層(10YR2/2)、層厚20cm

旧表土層。しまり弱、粘性中。調査区の全体で確認される。遺物を包含せず、シルト質である。

IV 層: 黒褐色土層(10YR3/2)、層厚10cm

III層とV層との間にみられる漸移層。しまり中、粘性やや弱。II層の旧表土層と同じく、調査区の全

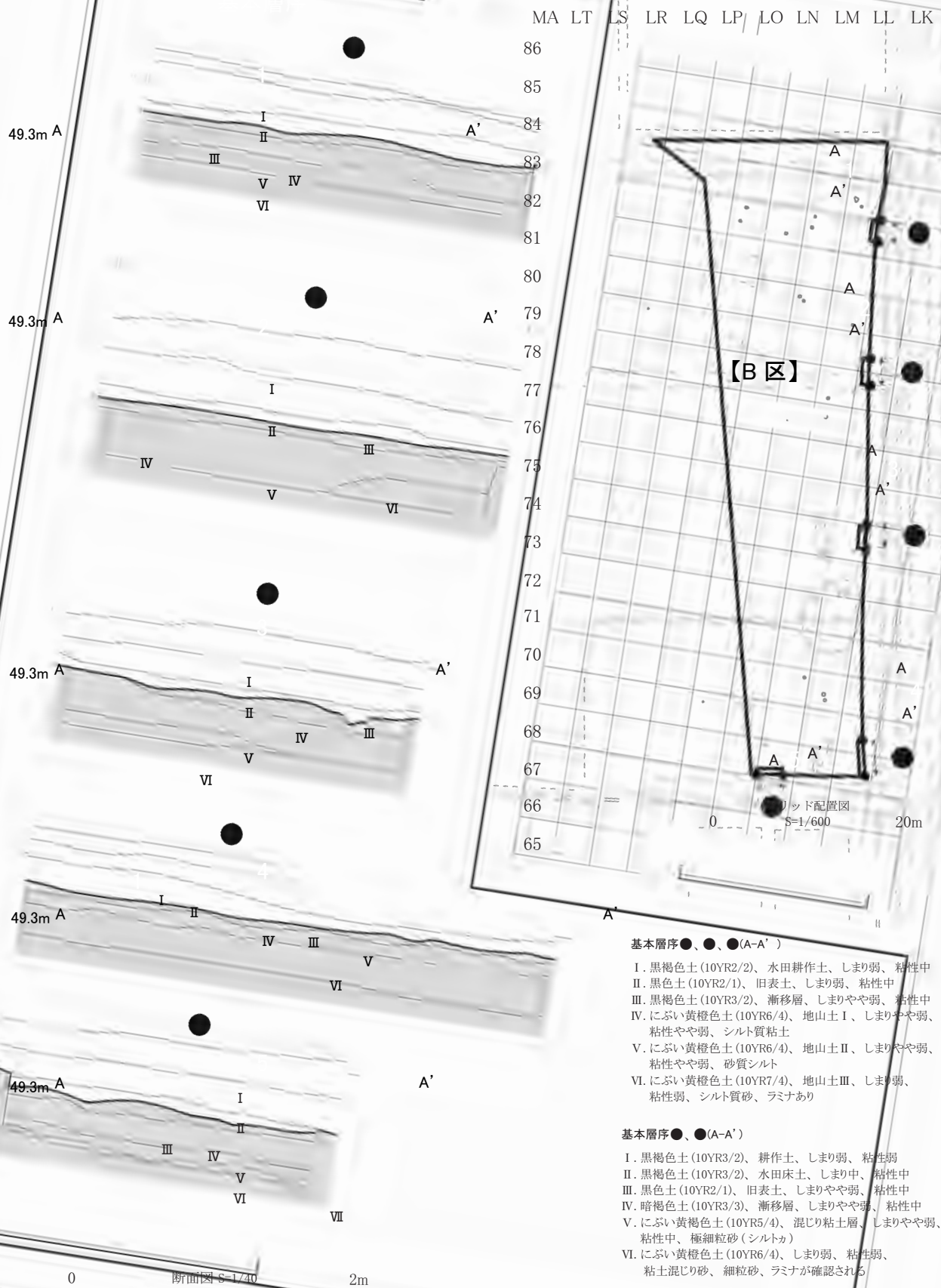


図 54 B 区グリッド配置図・基本層序



88

87

86

85

84

83

82

81

80

79

78

77

76

75

74

73

72

71

70

69

68

67

66

MB

MA

LT

LS

LR

LQ

LP

LO

LN

LM

LL

LK

0

平面図S=1/400

20m

図 55 B 区遺構配置割付図

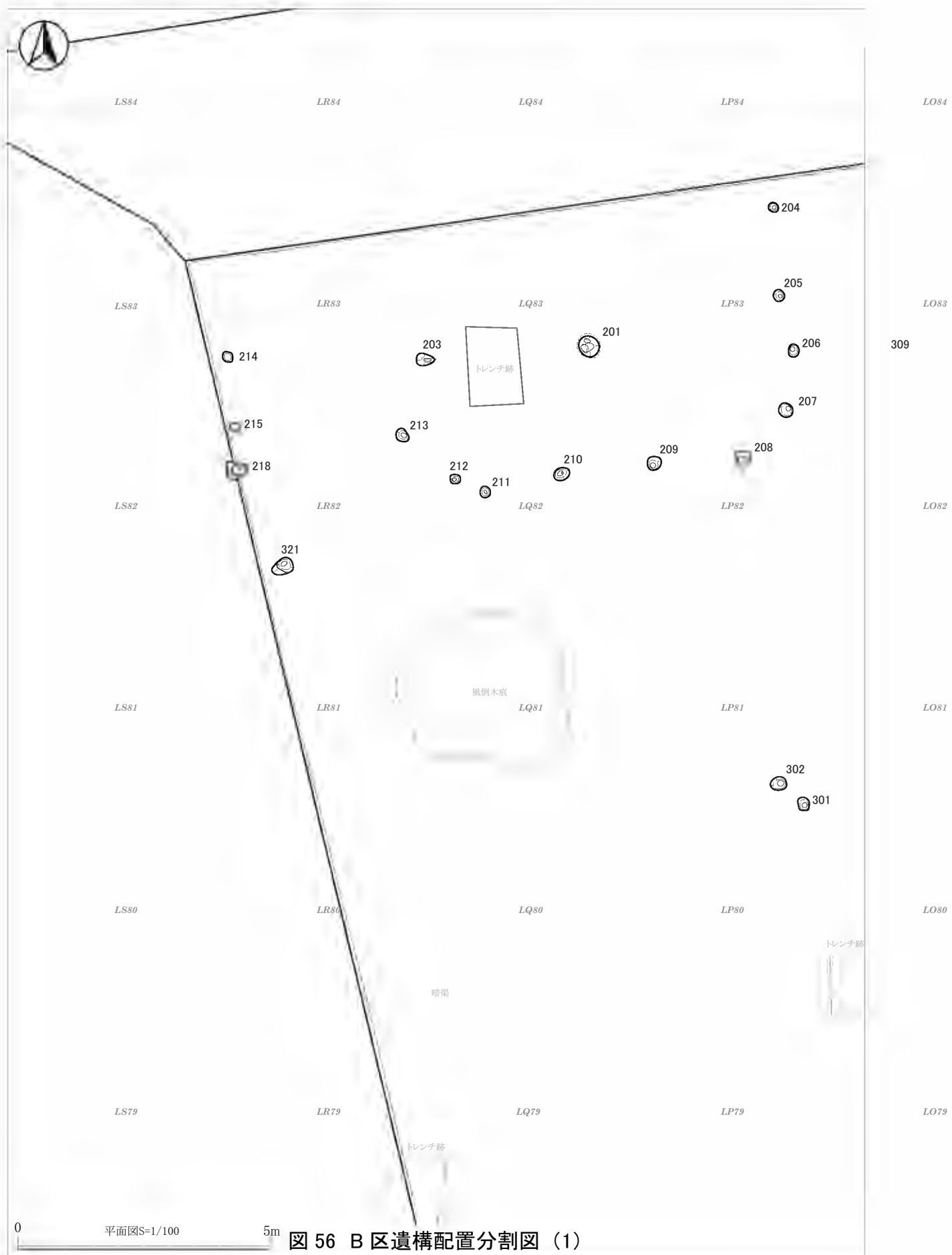


図 56 B 区遺構配置分割図 (1)

209

SK289

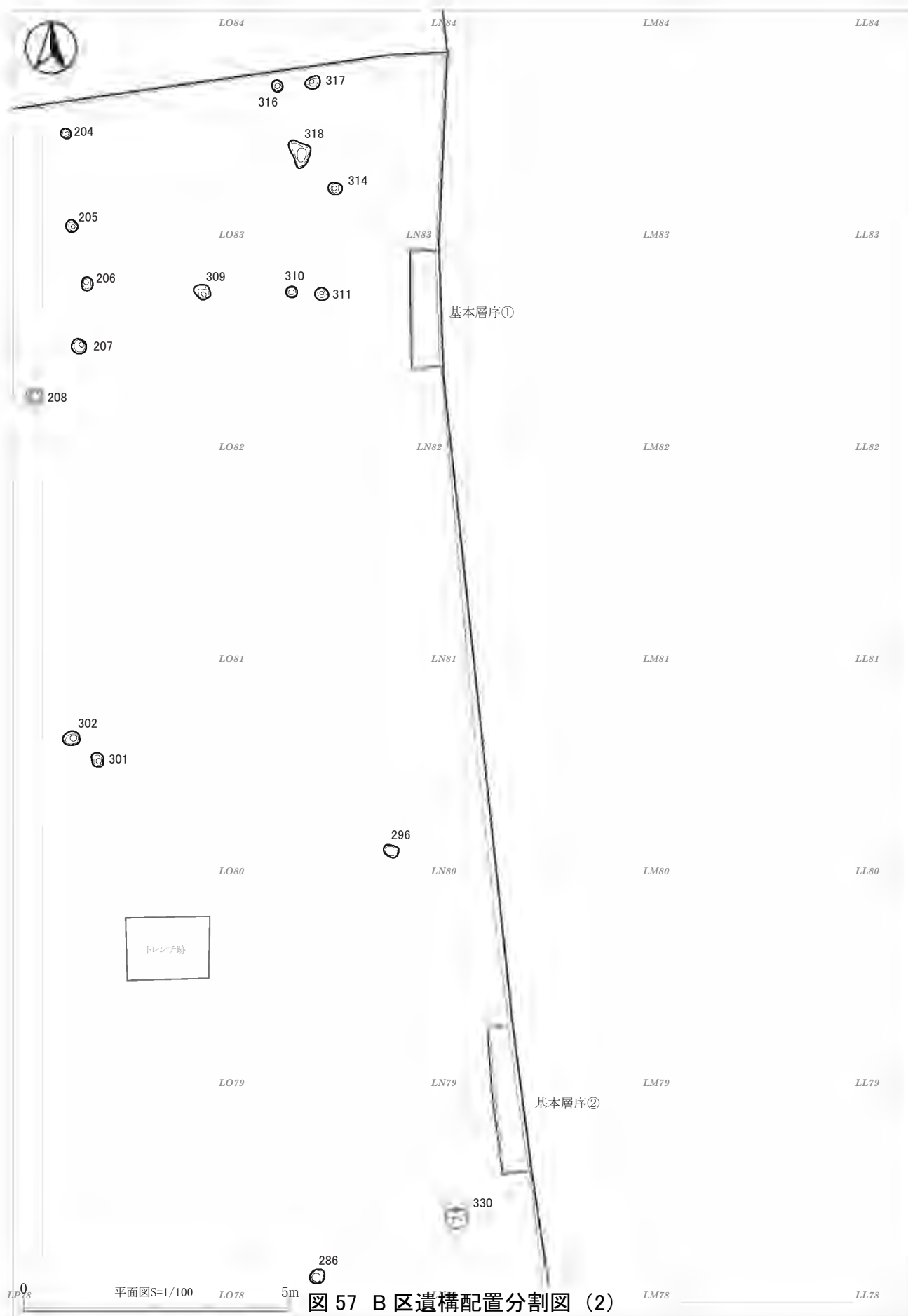


図 57 B 区遺構配置分割図 (2)



図 58 B 区遺構配置分割図 (3)

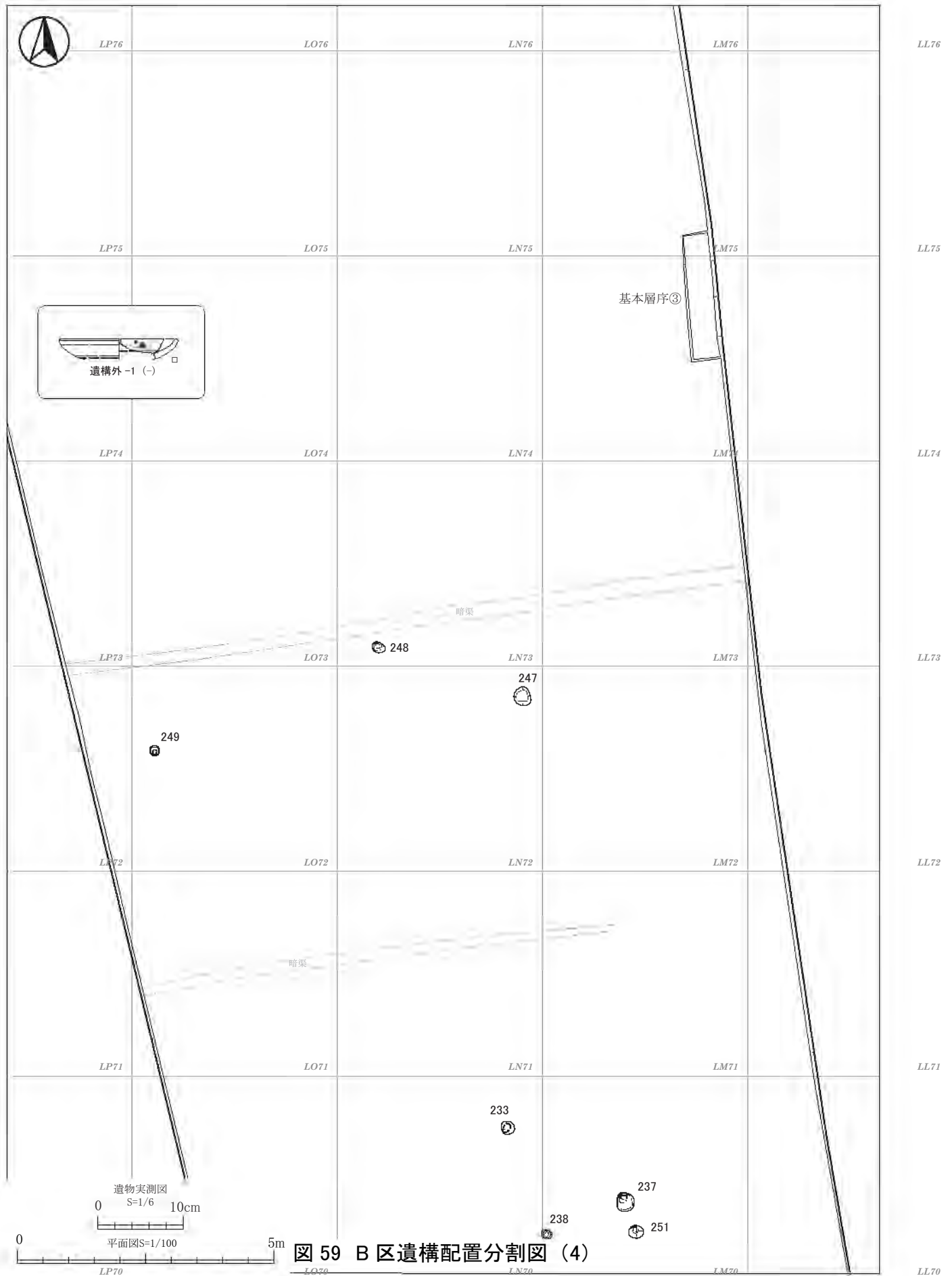


图 59 B 区遺構配置分割図 (4)

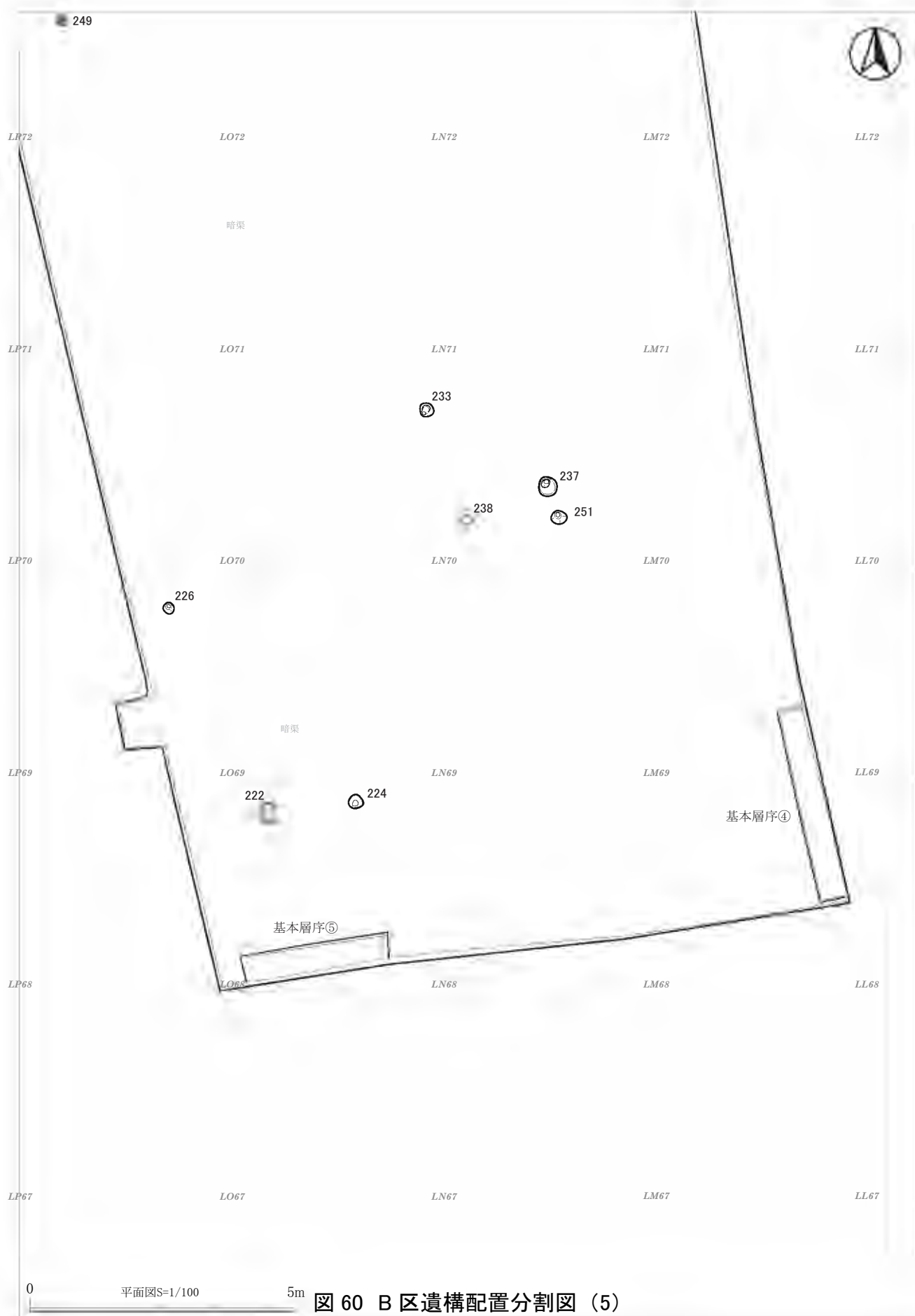


図 60 B 区遺構配置分割図 (5)

体で確認される。

V層:にぶい黄褐色粘土層(10YR5/4)、層厚30cm

地山土層Ⅰ。しまりやや弱、粘性中。シルト主体の自然堆積層である。遺構は本来Ⅱ層から掘り込まれていたが、目視で確認できず、この層の上面まで掘り下げ検出した。シルト主体となることから、水流の弱い環境下で後期更新世から完新世にかけて堆積した洪水堆積層である。場所により砂質の強い箇所がある。

Ⅵ層:にぶい黄橙色土層(10YR6/4)、層厚30cm

地山土層Ⅱ。しまりやや弱、粘性弱。Ⅴ層とⅦ層の間にみられる漸移層で、砂質シルトである。

Ⅶ層:にぶい黄橙色土層(10YR6/4)、層厚30cm

地山土層Ⅲ。しまり弱、粘性弱。シルト質砂。ラミナがみられる。

以上、基本層序について概観した。調査区は現況では平坦な地形であり、A区同様に微地形を確認することは困難であるが、基本層序から北から南に向かい緩やかに傾斜する地形であったと想定される。旧表土層が残存しているため、昭和30年代の耕地整理による削平がそれほどなされなかったと考えられる。

Ⅲ 検出遺構と出土遺物

1. 柱穴列

SA02柱穴列【図61・62写真図版16】

位置 調査区北端に位置する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 柱通りの良く、埋土が類似する4つの柱穴を柱穴列と認定した。東西方向の柱穴列で、総長は5.7m(19尺)である。それぞれの柱の間隔は、西からSP212柱穴とSP210柱穴間が2.1m(7尺)、SP210柱穴とSP209柱穴間が1.8m(6尺)、SP209柱穴とSP208柱穴間が1.8m(6尺)であり、西側の柱間間隔が若干広い。建物の軸線は真北を基軸とする。柱穴は20～30cm程度の円形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは30cmで、柱のあたりの標高が揃う。柱材は、各柱穴の柱痕跡から直径10cm程度であったと想定され、細い柱材を使用している。

出土遺物 なし。

SA03柱穴列【図61・62】

位置 調査区北端に位置する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 柱通りの良く、埋土が類似する2つの柱穴を柱穴列と認定した。東西方向の柱穴列で、総長は7.65m(25.5尺)である。柱間間隔が広く、柱穴列として成立するかはやや疑問が残る。建物の軸線は真北を基軸とする。柱穴は30cm程度の円形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは30cmで、柱のあたりの標高が揃う。柱材は、各柱穴の柱痕跡から直径10cm程度であったと想定され、細い柱材を使用している。 **出土遺物** なし。

SA04柱穴列【図61・62・写真図版16】

位置 調査区北端に位置する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 柱通りの良く、埋土が類似する3つの柱穴を柱穴列と認定した。東西方向の柱穴列で、総長は7.2m(24尺)である。それぞれの柱の間隔は、西からSP203柱穴とSP201柱穴間が3.3m(11尺)、SP201柱穴とSP206柱穴間が3.9m(13尺)であ

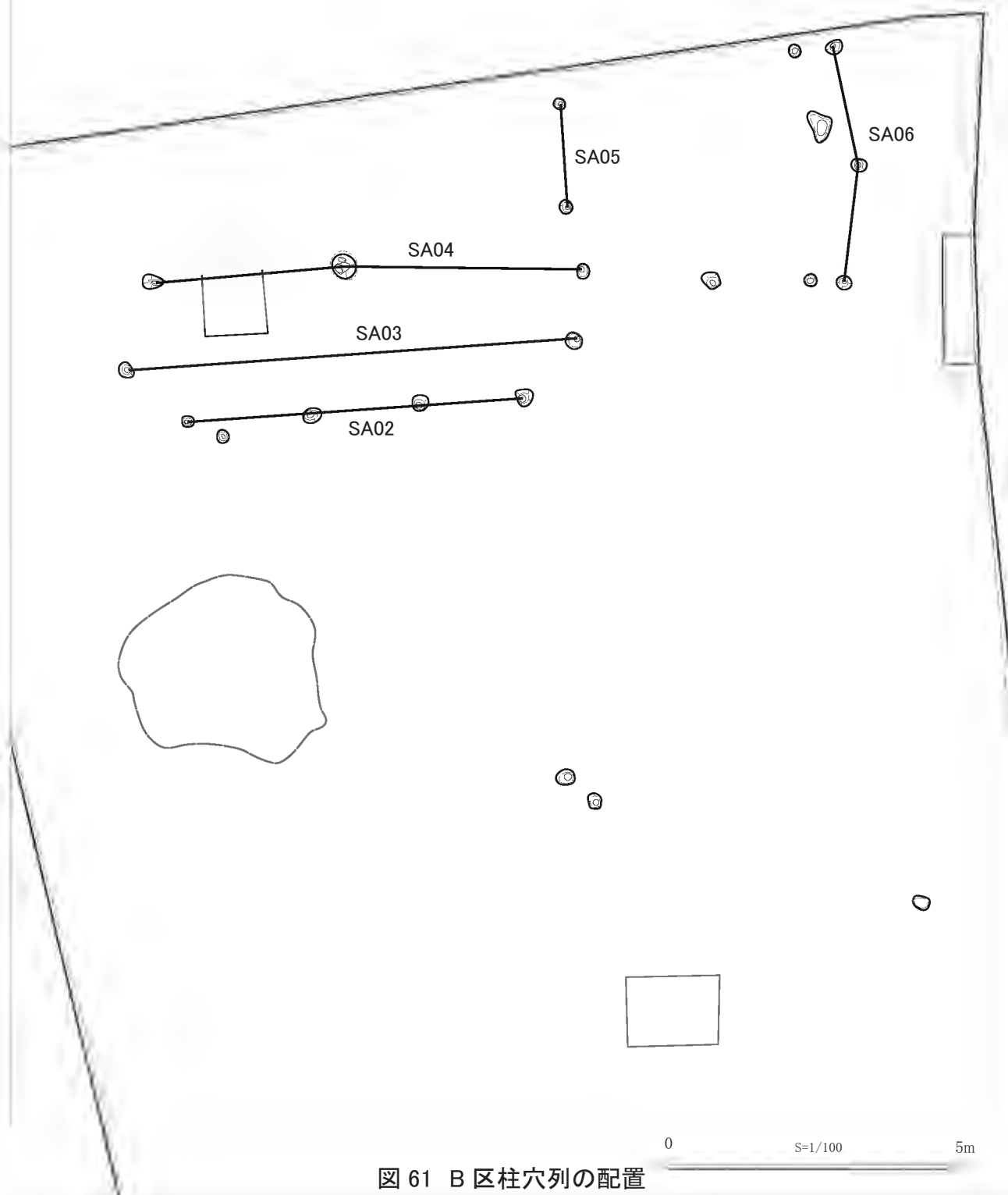
る。西側の柱間間隔が若干広い。建物の軸線は真北を基軸とする。柱穴は30～40cm程度の円形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは10～30cm程度で、掘り方の標高は揃わないが、柱のあたりの標高は揃う。建物を構成する柱穴は、底面に黒色シルト由来の人為堆積層があり、柱材の長さを調整する目的で、掘り方内部に嵩上げのための盛土がなされたと考えられる。柱材は、各柱穴の柱痕跡から直径10cm程度であったと想定され、細い柱材を使用している。 **出土遺物** なし。

SA05柱穴列【図61.63】

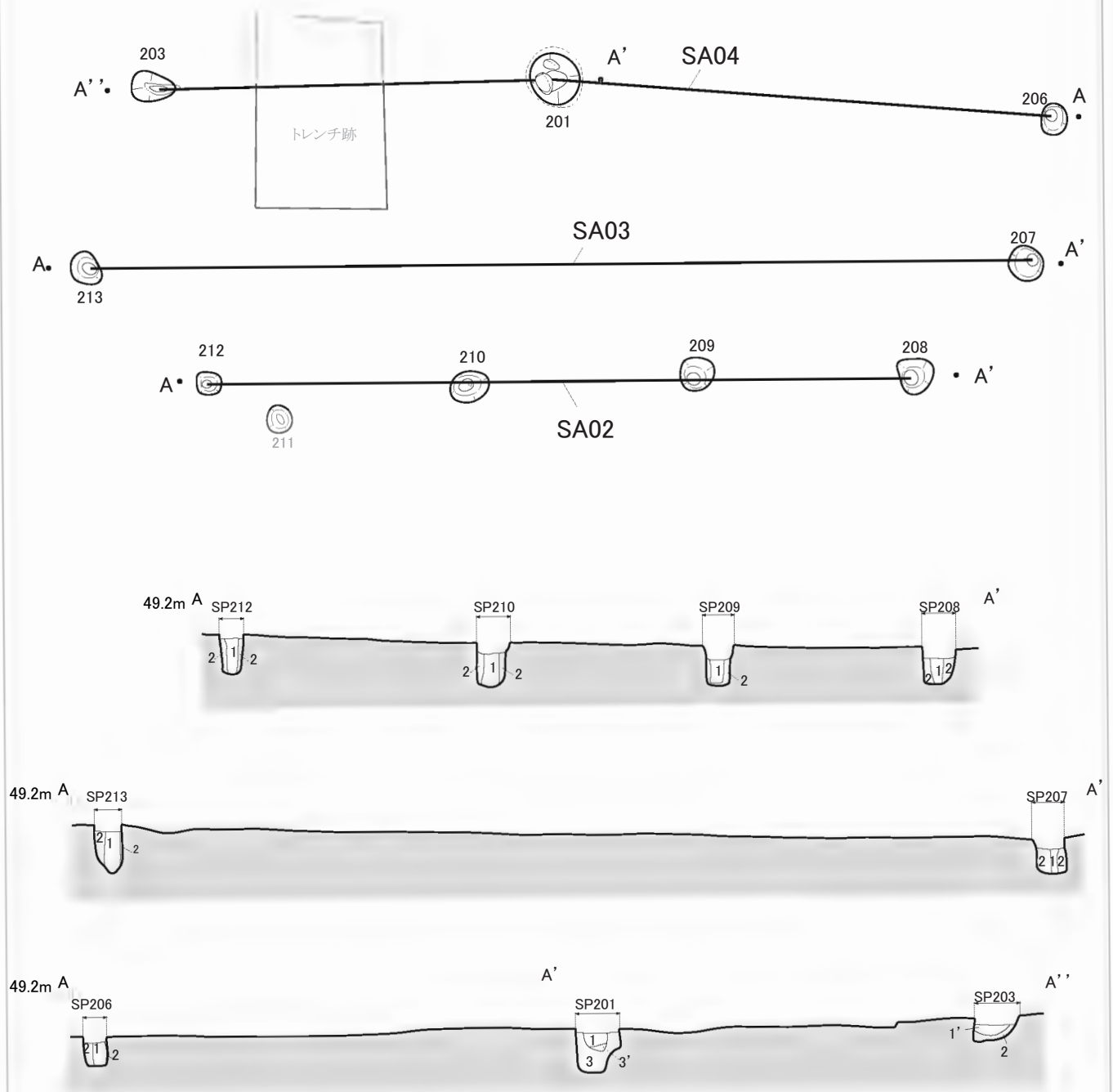
位置 調査区北端に位置する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 柱通りの良く、埋土が類似する2つの柱穴を柱穴列と認定した。南北方向の柱穴列で、総長は2.2mである。建物の軸線はほぼ真北をとる。柱穴は30cm程度の円形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは40cm程度で、柱のあたりの標高が揃う。柱材は、各柱穴の柱痕跡から直径15cm程度であったと想定される。 **出土遺物** なし。

SA06柱穴列【図61.63・写真図版16】

位置 調査区北端に位置する。 **重複関係** なし。 **平面形・規模・特徴** 柱通りが悪いが、埋土が類似する3つの柱穴を柱穴列と認定した。南北方向の柱穴列で、総長は5.1m(17尺)である。それぞれの柱の間隔は、北からSP317柱穴とSP314柱穴間が2.6m、SP314柱穴とSP311柱穴間が2.5mである。建物の軸線はほぼ真北をとる。柱穴は30cm程度の円形である。遺構確認面からの柱穴の掘り込みは25～40cm程度で、柱のあたりの標高は揃わない。柱材は、各柱穴の柱痕跡から直径20cm程度であったと想定される。 **出土遺物** なし。



SA02~04



SP212,210,209,208・SP213,207・SP206,201,203(A-A')

1.黒褐色土(10YR3/1)、しまり弱、粘性中、地山土粒を微量含む、柱痕跡

1'.抜き取り跡

2.にぶい黄褐色土(10YR5/3)、しまりやや弱、粘性やや弱、地山土と黒色土との混和土、掘り方埋土

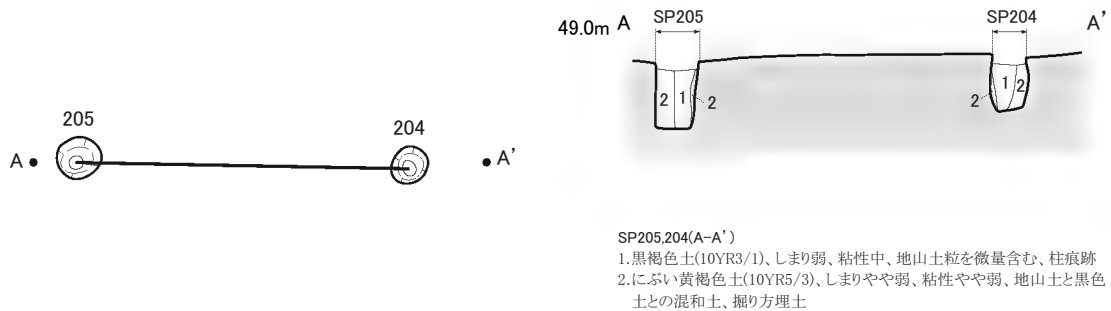
3.黒褐色土(10YR3/1)、しまり弱、粘性中、黒色土と地山土ブロックとの混和土

3'.黒色土の割合が高い

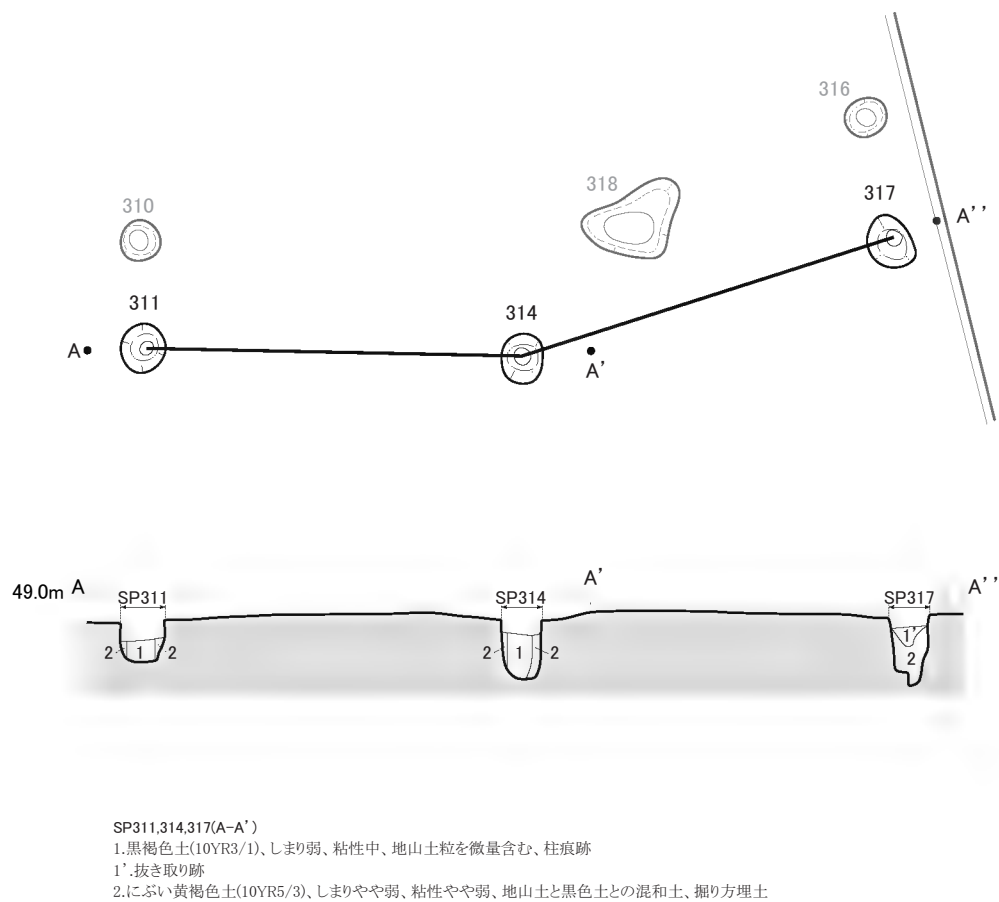
図 62 B 区 SA 柱穴列 (1)

0 平面図・断面図
S=1/50 2m

SA05



SA06



0 平面図・断面図S=1/40 2m

図 63 B 区 SA 柱穴列 (2)

表5 蟹沢遺跡B区検出遺構一覧表

●重複関係：古→新・新旧不明≠●長軸・短軸・深さの単位→m●()内は残存
●(須)→須恵器、(ロ)→ロクロ土師器、(土)→土師器●数字は図示点数、gは破片残量

柱穴

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	SP201	LP82	-	0.42	0.38	0.37		SA04
2	SP203	LQ82	-	0.35	0.25	0.20		SA04
3	SP204	LO83	-	0.20	0.18	0.31		SA05
4	SP205	LO83	-	0.23	0.21	0.38		SA05
5	SP206	LO82	-	0.25	0.21	0.29		SA04
6	SP207	LO82	-	0.29	0.27	0.23		SA03
7	SP208	LP82	-	0.29	0.27	0.34		SA02
8	SP209	LP82	-	0.27	0.26	0.36		SA02
9	SP210	LP82	-	0.32	0.25	0.39		SA02
10	SP211	LQ82	-	0.23	0.21	0.10		
11	SP212	LQ82	-	0.20	0.17	0.42		SA02
12	SP213	LQ82	-	0.29	0.22	0.43		SA03
13	SP214	LR82	-	0.20	0.20	0.09		
14	SP215	LR82	-	0.21	0.19	-		段下げのみ
15	SP218	LR82	-	0.34	0.26	0.17		
16	SP220A	LQ78	SP220A→SP220B	(0.19)	0.17	0.40		
17	SP220B	LQ78	SP220A→SP220B	0.26	0.22	0.38		
18	SP222	LN68	-	0.38	0.38	0.12		
19	SP224	LN68	-	0.26	0.26	-		段下げのみ
20	SP226	LO69	-	0.21	0.20	0.10		
21	SP233	LN70	-	0.26	0.24	0.15		
22	SP237	LM70	-	0.37	0.34	0.23		
23	SP238	LM70	-	0.21	0.18	0.07		
24	SP247	LN72	-	0.37	0.31	0.09		
25	SP248	LN73	-	0.26	0.20	0.20		
26	SP249	LO72	-	0.20	0.19	0.12		
27	SP251	LM70	-	0.27	0.25	0.18		
28	SP270	LO77	-	0.26	0.26	-		段下げのみ
29	SP275	LM76	-	0.35	0.22	-		段下げのみ
30	SP286	LN78	-	0.27	0.27	-		段下げのみ
31	SP296	LN80	-	0.29	0.23	0.11		
32	SP301	LO80	-	0.26	0.22	-		段下げのみ
33	SP302	LO80	-	0.32	0.24	0.24		
34	SP309	LO82	-	0.31	0.28	0.25		
35	SP310	LN82	-	0.21	0.20	-		段下げのみ
36	SP311	LN82	-	0.24	0.24	0.22		SA06
37	SP314	LN83	-	0.26	0.20	0.33		SA06

No.	遺構名	位置	重複関係	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
38	SP316	LN83	－	0.23	0.20	－		段下げのみ
39	SP317	LN83	－	0.30	0.23	0.33		SA06
40	SP318	LN83	－	0.54	0.36	－		段下げのみ
41	SP321	LR81	－	0.42	0.31	0.18		
42	SP327	LN77	－	0.32	0.24	－		段下げのみ
43	SP330	LN78	－	0.44	0.36	0.22		

第6章 工事立会区の調査

I 調査区の概要

A区とB区の間に挟まれる工事立会区は、工事の設計上保存される範囲であった。工事の施工に伴い、文化財保護課専門職員の立会の下、設計に従って表土除去がおこなわれたが、作業中、湿地堆積層中から5世紀後半の土師器片が出土した。この結果を受け、原因者である秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課と協議をおこない、トータルステーションによる遺物の取り上げを実施することとなった。さらに工事施工に伴い遺跡に影響を及ぼす可能性がないかを再度確認する目的で、一部で深堀りをおこない、基本層序を確認した。

なお、以下に示す基本層序が確認され、再度工事の設計を検討した結果、工事が遺跡に与える影響は軽微であると判断した。

II 基本層序

基本層序は4層に分層される。

I 層：黒褐色土層(10YR2/2)、層厚15～20cm

耕作土層。しまり弱、粘性弱。昭和30年代の耕地整理から現在に至るまで耕作されていた層で、水田耕作時の鋤入れ層である。地山土(IV層)粒を微量含む。

II 層：黒色土層(10YR2/1)、層厚30cm

A区基本層序III層と共通。しまりやや弱、粘性強。細粒砂を微量含む湿地堆積層。酸化鉄が沈殿する。上層の影響でしまりがやや強い。

III 層：黒色土層(10YR2/1)、層厚20cm

A区基本層序VII層と共通。しまり弱、粘性強。細粒砂が主体の湿地堆積層。酸化鉄が沈殿する。

IV 層：にぶい黄橙色土層(10YR6/4)、層厚30cm～

B区基本層序VII層と共通。地山土層。しまり弱、粘性弱。シルト質砂。ラミナは確認できなかった。

基本層序は、耕作土層直下に湿地堆積層が確認され、さらにその下から地山土層であるシルト質砂層を検出した。このうち、遺物はI層より出土していた。

III 出土遺物

前述のII層から、5世紀後半の土師器高杯、壺、甕破片、12世紀の青磁碗が出土した。年代の異なる遺物が混じることから、この一帯は捨て場として長期間遺物が投棄され続けたと考えられる。

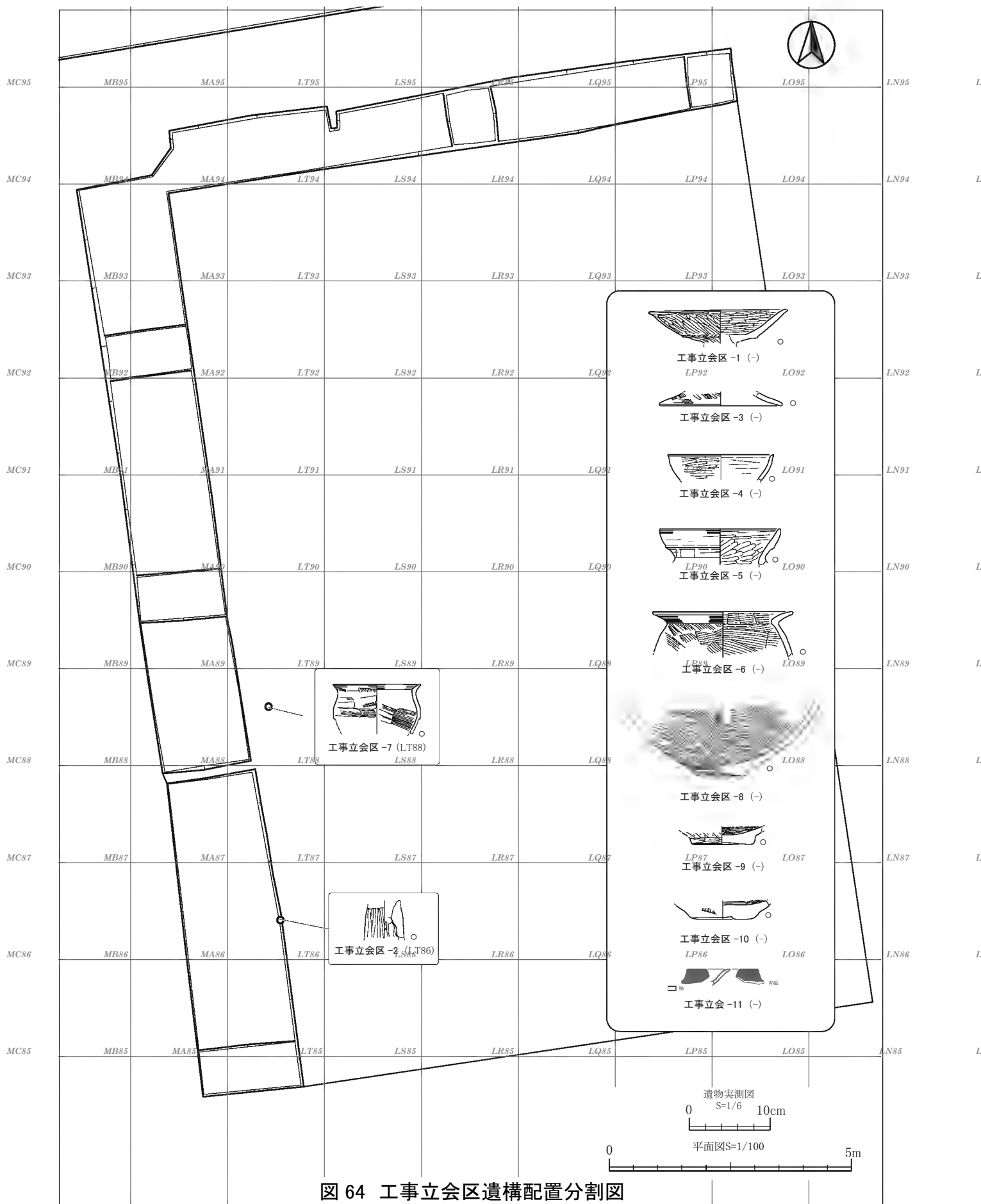
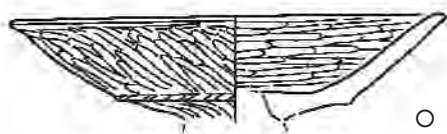


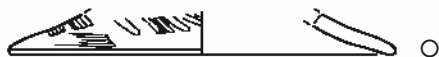
图 64 工事立会区遺構配置分割図



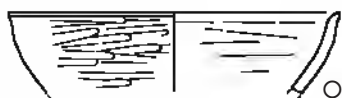
工事立会区 -1 (-)



工事立会区 -2 (LT86)



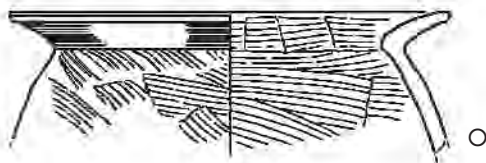
工事立会区 -3 (-)



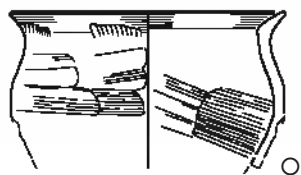
工事立会区 -4 (-)



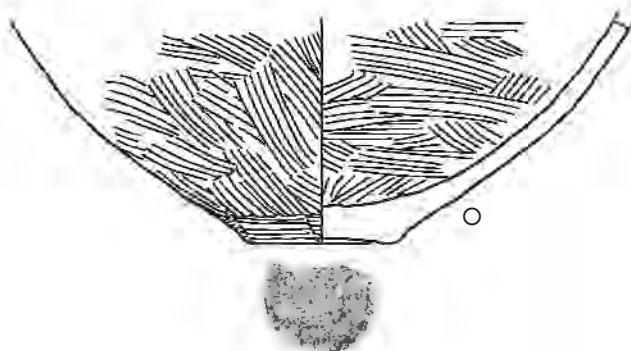
工事立会区 -5 (-)



工事立会区 -6 (-)



工事立会区 -7 (LT88)



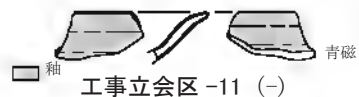
工事立会区 -8 (-)



工事立会区 -9 (-)



工事立会区 -10 (-)



工事立会区 -11 (-)

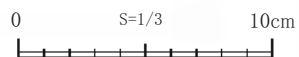


图 65 工事立会区出土遺物

表6 蟹沢遺跡工事立会区出土遺物観察表

※()内数字は推定値・単位cm・(口)→口縁部・(底)→底部・(胴)→胴部・(脚)→脚部・(内)→内面・(外)→外面

No.	図版 No.	遺物No.	層位 (出土位置)	種別	器種	残存	調整			口径	底径	器高	色調	備考	台帳 No.
							外面	内面	底面						
1	65	工事立会 区-1	Ⅱ層 (-)	土師器	高杯	(口) 3/4	ミカキ	ミカキ	-	17.1	-	-	(外)にぶい、橙 (内)にぶい、橙		一括
2	65	工事立会 区-2	Ⅱ層下 (LT86)	土師器	高杯	(脚) 破片	ミカキ	ナデ'	-	-	-	-	(外)明褐 (内)橙		25
3	65	工事立会 区-3	Ⅲ層 (-)	土師器	高杯	(脚) 破片	ハケメ ミカキ	磨滅	-	-	(15.2)	-	(外)橙 (内)橙		一括
4	65	工事立会 区-4	-	土師器	椀	(口) 1/7	ミカキ	ナデ'	-	(13.0)	-	-	(外)明褐灰 (内)明褐灰		一括
5	65	工事立会 区-5	Ⅱ層下 (-)	土師器	壺	(口) 1/8	ナデ'	(口)ナデ' (胴)ミカキ	-	(15.0)	-	-	(外)にぶい、黄橙 (内)灰黄褐		一括
6	65	工事立会 区-6	Ⅱ層 (-)	土師器	壺	(口) 1/7	(口)横ナデ' (胴)ハケメ	ハケメ	-	(17.5)	-	-	(外)にぶい、黄橙 (内)黒褐		一括
7	65	工事立会 区-7	- (LT88)	土師器	壺	(口) 1/5	(口)横ナデ' (胴)ハケメ	(口)横ナデ' (胴)ハケメ	-	(10.8)	-	-	(外)にぶい、黄褐 (内)にぶい、黄橙	外面剥離	447
8	65	工事立会 区-8	Ⅱ層 (-)	土師器	壺	(底) 3/4	ハケメ	ハケメ	ハケメ	-	4.5	-	(外)にぶい、黄橙 (内)黒褐		一括
9	65	工事立会 区-9	Ⅱ層 (-)	土師器	壺	(底) 完形	ケズリ	ハケメ	ケズリ	-	7.5	-	(外)明褐灰 (内)にぶい、黄橙		一括
10	65	工事立会 区-10	-	土師器	壺	(底) 1/3	ハケメ	ハケメ	-	-	(8.0)	-	(外)灰白 (内)淡黄		一括
11	65	工事立会 区-11	-	青磁	皿	(口) 破片	ロクロナデ'	ロクロナデ'	-	-	-	-	(外)明緑灰 (内)明緑灰	青磁・2群	一括

第7章 自然科学分析

I 蟹沢遺跡の自然科学分析

(株)加速器分析研究所

秋田県横手市に所在する蟹沢遺跡で出土した試料を対象に、放射性炭素年代測定、樹種同定、花粉分析、火山灰分析、漆被膜分析を実施した。以下、各分析の種類ごとに結果を報告する。なお、今回行った分析のうち、樹種同定、花粉分析、火山灰分析、漆被膜分析は一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。本稿は、放射性炭素年代測定の結果(I)と、文化財科学研究センターによる分析結果(II～VI)を統合し、加速器分析研究所が作成した。

II 放射性炭素年代測定

1 測定対象試料

測定対象試料は、遺構から出土した植物片、炭化物、木片、採取された土壌、土器に付着した漆膜の合計13点である(表1)。試料19の漆膜は、須恵器甕の破断面に付着しており、須恵器と試料採取部位の写真を図版1に示した。同一試料で漆被膜分析が実施されている(本稿VI参照)。試料20～23は土壌サンプルの中に炭化物等の有形の有機物が認められなかったため、土壌を試料とした。試料2の炭化物は細片のため、埋没中の汚染を除去するために通常炭化物等に対して行うAAA処理を行うことができず、アルカリ処理を省略して酸処理のみを行った。

試料1～3、20～23が採取された柱穴は1棟の掘立柱建物跡を構成し、時期は近世と推定されている。試料10が出土したSI015、試料11が出土したSI33は古墳時代の竪穴建物跡である。試料12が出土したSL54は不整円形の土坑で、上層に焼土、下層に炭化物が検出された。試料13、19が出土したSK97は、SI015に隣接し、古墳時代中期頃の土器が出土している。またこの土坑の上面に堆積した火山灰が試料9として分析されている(本稿V参照)。試料18が出土したSP57は、中世の掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性が考えられ、試料となった木片は柱材の一部か、抜き取りの際に混入したものと考えられている。

2 化学処理工程

(1) 植物片、炭化物3、10～13、木片、漆膜の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 炭化物2の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用い、表 1 に「HCl」と記載する。
以下、(1) 3) 以降と同じ。

(3) 土壌の化学処理

- 1) 試料を超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根等の混入物を除去する。ふるいを通した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用い、表1に「HCl」と記載する。
以下、(1) 3) 以降と同じ。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP、表1)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている(表1)。
- (4) 暦年較正年代(または単に較正年代)とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.3\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である(表2の「暦年較正用(yrBP)」)。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正

プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正の結果を表2(1 σ ・2 σ 暦年代範囲)に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用(yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

1棟の掘立柱建物跡を構成する柱穴から採取された試料1～3、20～23の ^{14}C 年代は、 $2660 \pm 20\text{yrBP}$ (試料20)から $1150 \pm 20\text{yrBP}$ (試料1)の間にある。暦年較正年代(1 σ)は、最も古い試料20が827～802calBCの範囲、最も新しい試料1が777～973cal ADの間に3つの範囲で示される。SP201、SP205、SP210、SP212の土壌20～23が縄文時代晩期中葉から弥生時代前期への移行期頃、SP213、SP311の炭化物2、3が古墳時代前期ないし前期から中期頃、SP314の植物片1が8～10世紀頃といくつかの時期に分かれたが(佐原2005、小林編2008、小林2009、2017)、いずれも近世という推定より古い結果となっている。柱穴の掘削から建物の構築、廃絶、埋没といった過程で周辺の地層を含む堆積・埋没環境と人間の活動によってもたらされた有機物の年代を示すと見られ、建物の構築や使用とは直接関わらないものの、遺跡形成過程の一端を示すと考えられる。

SI015から出土した試料10の ^{14}C 年代は $1780 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は240～325cal ADの間に2つの範囲で示され、弥生時代後期から古墳時代前期頃に相当する(佐原2005)。古墳時代と推定されているが、やや古い結果となった。

SI33から出土した試料11の ^{14}C 年代は $400 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は1449～1488cal ADの範囲で示される。古墳時代と推定されているが、新しい年代値となった。遺構の確認面で検出された試料であることによる可能性がある。

SL54から出土した試料12の ^{14}C 年代は $17200 \pm 60\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は18910～18707calBCの範囲で示され、後期旧石器時代後半期頃に相当する(工藤2012)。

SK97から出土した試料13、19の ^{14}C 年代は、試料13が $1660 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料19が $1620 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、試料13が376～431cal ADの範囲、試料19が416～532cal ADの間に3つの範囲で示される。炭化物13と土器付着漆膜19はおおむね近い年代を示し、いずれも出土土器の時期に一致する古墳時代中期頃の年代値を含む(佐原2005)。

SP57から出土した試料18の ^{14}C 年代は $180 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は1668～1803cal ADの間に3つの範囲と1930calAD以降の範囲で示される。推定よりやや新しい結果となった。なお、この試料の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表2下の警告参照)。

今回測定された試料13点のうち、炭化物2、3、10～13の多くは木炭と見られ(細片のため不明のものを含む)、木片18とともにいずれも樹皮が残存せず、最外年輪を確認できないことから、次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す(古木効果)。今回測定された試料のうち、炭化物2、3、10～13、木片18はいずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また、試料2、3、10、13が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった(尾寄

2009、坂本2010など)。2020年に更新された較正曲線IntCal20(Reimer et al. 2020)では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後も関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率は、植物片、炭化物、木片、漆膜がすべて45%以上のおおむね適正な値、土壌が3%以上の特に低くない値となった。

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代(Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA -231075	1	B 区 SP314 柱痕跡下 土壌サンプル	植物片	AaA	-25.45 $\pm$ 0.28	1,150 $\pm$ 20	86.66 $\pm$ 0.26
IAAA -231076	2	B 区 SP213 柱痕跡下 土壌サンプル	炭化物	HCl	-24.28 $\pm$ 0.29	1,730 $\pm$ 20	80.59 $\pm$ 0.24
IAAA -231077	3	B 区 SP311 確認面下 RC	炭化物	AAA	-23.86 $\pm$ 0.24	1,730 $\pm$ 20	80.59 $\pm$ 0.25
IAAA -231078	10	A 区 SI015 1 層 RC01	炭化物	AAA	-24.99 $\pm$ 0.23	1,780 $\pm$ 20	80.11 $\pm$ 0.25
IAAA -231079	11	A 区 SI33 住居確認面 RC03	炭化物	AAA	-23.45 $\pm$ 0.21	400 $\pm$ 20	95.14 $\pm$ 0.27
IAAA -231080	12	A 区 SL54 遺構確認面 RC05	炭化物	AAA	-23.93 $\pm$ 0.21	17,200 $\pm$ 60	11.76 $\pm$ 0.09
IAAA -231081	13	A 区 SK97 RP407 下 RC06	炭化物	AaA	-22.89 $\pm$ 0.22	1,660 $\pm$ 20	81.37 $\pm$ 0.25
IAAA -231082	18	A 区 SP57 埋土 RW08	木片	AAA	-22.91 $\pm$ 0.24	180 $\pm$ 20	97.78 $\pm$ 0.27
IAAA -231083	19	A 区 SK97 C ベルト上層(1 層) RP403	漆膜	AAA	-25.85 $\pm$ 0.24	1,620 $\pm$ 20	81.74 $\pm$ 0.25
IAAA -231678	20	B 区 SP201 3 層 土壌サンプル	土壌	HCl	-19.49 $\pm$ 0.22	2,660 $\pm$ 20	71.79 $\pm$ 0.21
IAAA -231679	21	B 区 SP205 遺構確認面 土壌サンプル	土壌	HCl	-20.13 $\pm$ 0.24	2,440 $\pm$ 20	73.85 $\pm$ 0.22
IAAA -231680	22	B 区 SP210 柱痕 土壌サンプル	土壌	HCl	-20.03 $\pm$ 0.25	2,550 $\pm$ 20	72.80 $\pm$ 0.22
IAAA -231681	23	B 区 SP212 柱痕 土壌サンプル	土壌	HCl	-20.25 $\pm$ 0.21	2,620 $\pm$ 20	72.16 $\pm$ 0.21

[IAA 登録番号: #C241, C355]

表2 放射性炭素年代測定結果(暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)(1)

測定番号	試料名	暦年較正用(yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA -231075	1	1,150 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	777calAD-784calAD (4.9%) 878calAD-900calAD(19.4%) 917calAD-973calAD (43.9%)	773calAD-788calAD (7.4%) 827calAD-862calAD (11.9%) 869calAD-978calAD (76.1%)
IAAA -231076	2	1,733 $\pm$ 24	OxCal v4.4 IntCal20	254calAD-287calAD (28.4%) 324calAD-365calAD (37.9%) 372calAD-375calAD (1.9%)	250calAD-296calAD (34.3%) 309calAD-403calAD (61.2%)
IAAA -231077	3	1,733 $\pm$ 24	OxCal v4.4 IntCal20	254calAD-287calAD (28.4%) 324calAD-365calAD (37.9%) 372calAD-375calAD (1.9%)	250calAD-296calAD (34.3%) 309calAD-403calAD (61.2%)

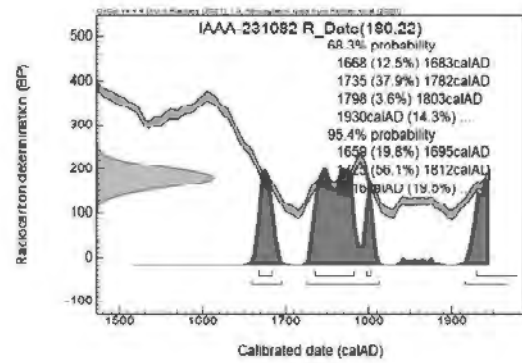
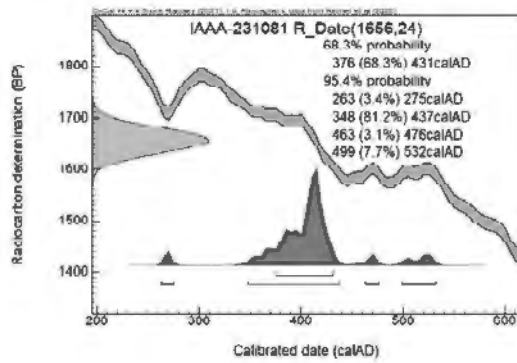
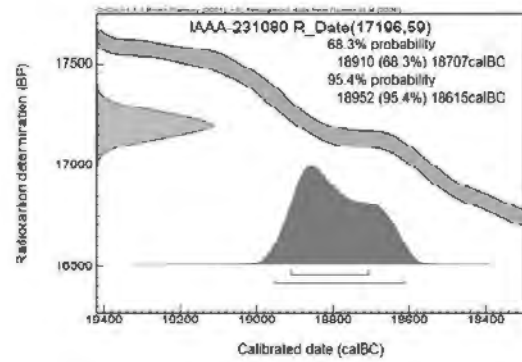
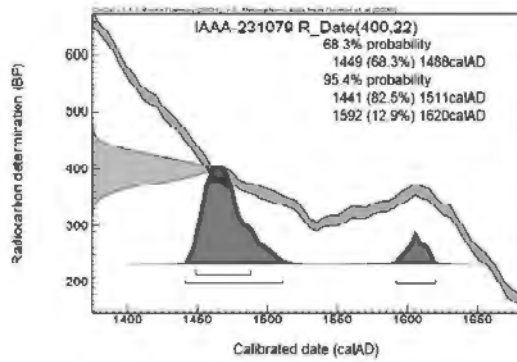
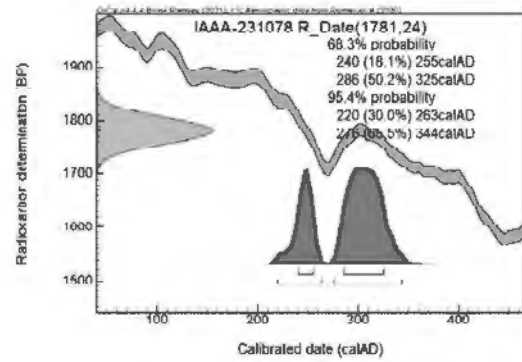
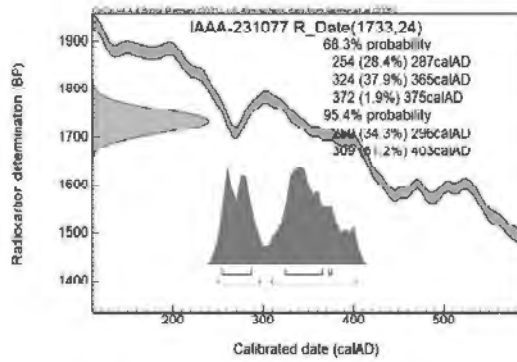
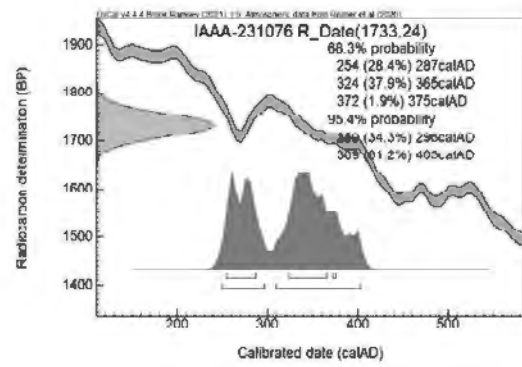
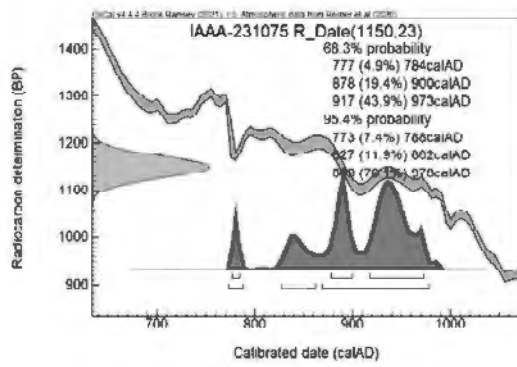
表2 放射性炭素年代測定結果(暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)(2)

測定番号	試料名	暦年較正用(yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA -231078	10	1,781 $\pm$ 24	OxCal v4.4 IntCal20	240calAD-255calAD (18.1%) 286calAD-325calAD (50.2%)	220calAD-263calAD (30.0%) 276calAD-344calAD (65.5%)
IAAA -231079	11	400 $\pm$ 22	OxCal v4.4 IntCal20	1449calAD-1488calAD (68.3%)	1441calAD-1511calAD (82.5%) 1592calAD-1620calAD (12.9%)
IAAA -231080	12	17,196 $\pm$ 59	OxCal v4.4 IntCal20	18910calBC-18707calBC (68.3%)	18952calBC-18615calBC (95.4%)
IAAA -231081	13	1,656 $\pm$ 24	OxCal v4.4 IntCal20	376calAD-431calAD (68.3%)	263calAD-275calAD (3.4%) 348calAD-437calAD (81.2%) 463calAD-476calAD (3.1%) 499calAD-532calAD (7.7%)
IAAA -231082	18	180 $\pm$ 22	OxCal v4.4 IntCal20	1668calAD-1683calAD (12.5%)* 1735calAD-1782calAD (37.9%)* 1798calAD-1803calAD (3.6%)* 1930calAD-... (14.3%)*	1659calAD-1695calAD (19.8%)* 1725calAD-1812calAD (56.1%)* 1916calAD-... (19.5%)*
IAAA -231083	19	1,620 $\pm$ 24	OxCal v4.4 IntCal20	416calAD-437calAD (25.0%) 463calAD-476calAD (12.7%) 499calAD-532calAD (30.6%)	411calAD-538calAD (95.4%)
IAAA -231678	20	2,662 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	827calBC-802calBC (68.3%)	896calBC-872calBC (11.3%) 837calBC-793calBC (84.1%)
IAAA -231679	21	2,435 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	721calBC-707calBC (6.6%) 662calBC-652calBC (4.7%) 544calBC-456calBC (45.2%) 443calBC-418calBC (11.8%)	748calBC-688calBC (18.8%) 666calBC-642calBC (7.8%) 567calBC-408calBC (68.9%)
IAAA -231680	22	2,549 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	792calBC-756calBC(52.8%) 680calBC-671calBC (7.7%) 607calBC-596calBC (7.8%)	797calBC-748calBC (57.0%) 687calBC-666calBC (11.9%) 641calBC-567calBC (26.5%)
IAAA -231681	23	2,621 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	808calBC-792calBC (68.3%)	815calBC-778calBC (95.4%)

*Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)



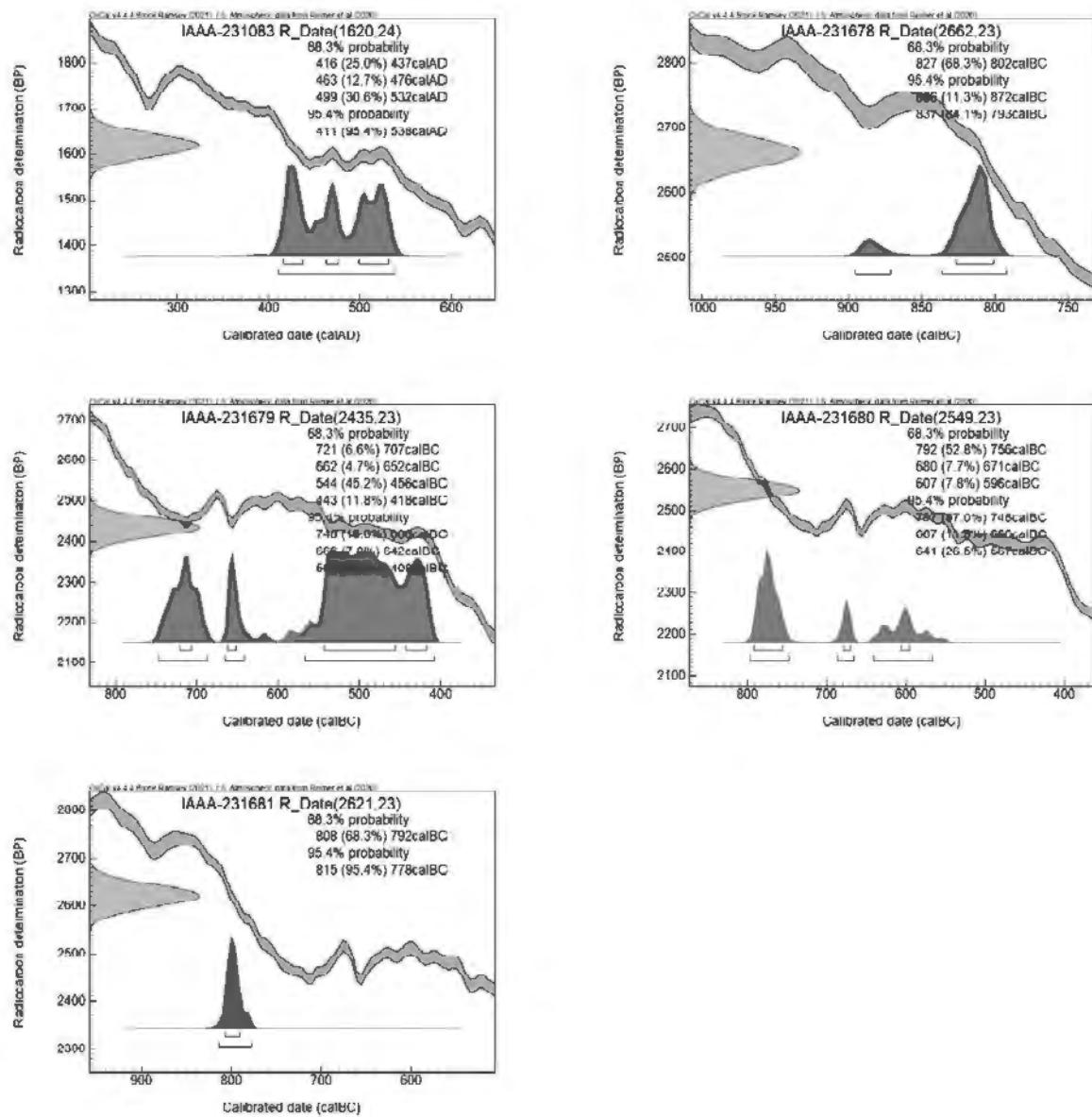


図 1 暦年較正年代グラフ

Ⅲ 樹種同定

1 試料

試料は、井戸跡SE22から出土した種実1点(試料14)、木材1点(試料15)、SE21から出土した木材2点(試料16、17)の合計4点である。木材はいずれも自然木と考えられている。なお、試料14、15と同じSE22の3層から採取された土壌サンプルを対象に花粉分析が実施されている(本稿Ⅲ参照)。

2 分析方法

種実(試料)は、肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

木材(生材)は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス(Mount-Quick “Aqueous”: 大道産業)で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)によって40～1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3 結果

表3に結果を示し、種実の写真と木材の顕微鏡写真を図版1、2に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

(1) 種実

- ・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種皮(破片) トチノキ科
楕円形を呈し、黒色と茶褐色の部分とに分かれる。すべて破片である。

(2) 木材

- ・ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

- ・ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科

小型で丸い道管が、単独あるいは2～8個が放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材であり、集合放射組織を有する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の特徴からハンノキ属ハンノキ亜属に同定される。ハンノキ属ハンノキ亜属にはヤマハンノキ、ハンノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の低木から高木である。

- ・ハンノキ属ヤシタブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* カバノキ科

小型で丸い道管が、単独あるいは2～10個が放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列～2列のものからなる。

以上の特徴からハンノキ属ヤシャブシ亜属に同定される。ハンノキ属ヤシャブシ亜属にはヤシャブシ、ミヤマヤシャブシ、ミヤマハンノキなどがあり、ヤシャブシは本州南部太平洋側、四国、九州の山地に分布し、ミヤマヤシャブシは本州南部太平洋側、四国のやや高いところに分布し、ミヤマハンノキは北海道、加賀以北の本州に分布する落葉低木または高木である。

表 3 樹種同定結果

試料名	調査区	遺構名	層位	種別	結果(学名／和名)	試料種別
14	A	SE22	3層	RN01	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ	種皮破片19個
15	A	SE22	3層	RW10	<i>Salix</i> ヤナギ属	木材
16	A	SE21	4層	RW05	<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnaster</i> ハンノキ属ヤシャブシ亜属	木材
17	A	SE21	5層	RW06	<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnus</i> ハンノキ属ハンノキ亜属	木材

4 考察

同定の結果、蟹沢遺跡の種実にはトチノキ種子破片19点で、自然木はヤナギ属1点、ハンノキ属ハンノキ亜属1点、ハンノキ属ヤシャブシ亜属1点であった。

トチノキ種子は食用となるが、サポニンやタンニンを多く含み苦みや渋みが強く、灰汁抜きが必要である。ヤナギ属は耐久・保存性は低く、切削・加工が容易で柔軟性に富む材である。ハンノキ属ハンノキ亜属およびハンノキ属ヤシャブシ亜属は硬さ、耐久・保存性中庸な材である。いずれの樹種もタンニンが多く樹皮や葉が薬用とされ、ハンノキ属はいずれも樹皮や果実を染料に利用するなど、有用である。

いずれも温帯に分布する落葉樹である。ハンノキ属ヤシャブシ亜属は陽当たりの良い山地に生育するが、崩壊地や砂礫地、痩せた荒れ地にも耐える二次林種でもある。トチノキは谷沿いなどの湿潤地を好んで生育し、ハンノキ属ハンノキ亜属は湿原や沼沢地、河原などに分布し、ヤナギ属は川辺などの水辺に生育する。本遺跡周辺は現在では水田が広がりまた河川が流れ、東には山地がある。同定されたハンノキ属ハンノキ亜属、ヤナギ属などは極近隣の湿潤な地点に生育していたとみなされ、ハンノキ属ヤシャブシ亜属やトチノキは周囲の山地部やその谷沿いに分布していたと考えられる。そのため自然木とされるがハンノキ属ヤシャブシ亜属の樹木は恣意的に本遺跡にもたらされたか、流水により流されてきたと考えられる。なお、トチノキは採集されてもたらされ食用として利用したのちに不要となった部位が井戸へ投棄された、または落ち込んだものと考えられる。

IV 花粉分析

1 試料

試料は、井戸跡SE22の3層から採取された土壌サンプルRP360(試料4)、RP361(試料5)、RP362下(試料6)、RP359下(試料7)の4点である。なお、これらと同じSE22の3層から出土した種実と木材の同定が実施されている(本稿Ⅱ参照)。

2 分析方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡(Nikon ECLIPSE Ci)によって300~1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(―)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)および非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

3 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉13、シダ植物孢子2形態の計36分類群である。これらの学名と和名および粒数を表4に示し、花粉数が50個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図2に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真(図版3)に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、1分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属―アサダ、クリ、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ、エノキ属―ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科―イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属－ヒナギキョウ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵

以下にこれの特徴を示す。

・鞭虫 *Trichuris trichiura*

卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

(2) 花粉群集の特徴

A区SE22の3層において、同層準のRP360、RP361、RP362下、RP359下について花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

RP360では、樹木花粉が16%、草本花粉が55%、樹木・草本花粉が2%、シダ植物孢子が27%を占める。草本花粉では、ヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ属を含むイネ科が多い。樹木花粉では、スギの出現率がやや高く、ハンノキ属、トチノキが低率に出現する。RP361では、樹木花粉が11%、草本花粉が36%、樹木・草本花粉が17%、シダ植物孢子が36%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高い。樹木花粉では、スギの出現率がやや高く、樹木・草本花粉では、マメ科が特徴的に出現する。鞭虫卵がわずかに検出される。RP362下では、樹木花粉が17%、草本花粉が52%、樹木・草本花粉が4%、シダ植物孢子が27%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、アブラナ科、カヤツリグサ科が伴われ、サジオモダカ属、オモダカ属が出現する。樹木花粉では、スギを主にコナラ属コナラ亜属、トチノキ、ブナ属が出現し、樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科が微増する。RP359下では、樹木花粉が25%、草本花粉が43%、樹木・草本花粉が4%、シダ植物孢子が28%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、タンポポ亜科、キク亜科が低率に伴われ、サジオモダカ属が出現する。樹木花粉では、スギ、トチノキの出現率がやや高く、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、クリが伴われる。

4 考察

SE22の3層において、花粉分析を行った結果、RP360、RP361、RP362下、RP359下の花粉構成と花粉組成に大きな差は認められない。ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、周囲はヨモギ属、イネ科の草本が繁茂する陽当たりのよい比較的乾燥した環境で、耕地や集落などの人為環境が分布していたと推定される。また、イネ属がサジオモダカ属、オモダカ属などの水田雑草を伴い出現することから周囲に水田の分布が示唆される。鞭虫卵がわずかに検出され、密度は生活汚染程度で、近接して生活域が分布していたと考えられる。RP361で特徴的に出現するマメ科は、大きさや形態からクズの可能性があり堆積地周囲に生育していたとみなされる。また、樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科は、カラムシ、カナムグラなどの荒れ地や路傍に生

表4 花粉分析結果(A区SE22)

Taxa 分類群		SE22(3層)			
Scientific name(学名)	Japanese name(和名)	RP360	RP361	RP362 下	RP359 下
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1	1	1	4
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	37	39	32	46
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-セノキ科	1			
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1		2	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	2	2	4	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	12	1	2	16
<i>Betula</i>	カバノキ属	1		2	1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	1	1	8
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	2	8	3
<i>Fagus japonica</i>	イヌブナ			1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	4	16	13
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	2	1	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		2		
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	8	3	11	33
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1	6	2	
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	8	11	14	14
Rosaceae	バラ科				1
Leguminosae	マメ科	3	83	5	7
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			2	1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属			2	
Gramineae	イネ科	93	84	106	82
<i>Oryza</i>	イネ属	3	10	16	8
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7	4	10	4
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-モウコ科	1	2	2	3
Cruciferae	アブラナ科			20	3
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1	
Apioidae	セリ亜科	2		1	2
<i>Adenophora-Campanula-Wahlenbergia</i>	ツリガネニンジン属 -ホタルブクロ属-セナギキョウ属			1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	1	3	9
Asteroideae	キク亜科	1	2	5	8
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	147	100	93	103
Arboreal pollen	樹木花粉	73	64	83	128
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	11	94	19	22
Nonarboreal pollen	草本花粉	256	203	262	223
Total pollen	花粉総数	340	361	364	373
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	3.5 ×10 ⁴	4.7 ×10 ⁴	3.9 ×10 ⁴	4.0 ×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	5	6	9	9
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	66	124	65	51
Trilate type spore	三条溝胞子	57	83	72	95
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	123	207	137	146
Parasite eggs	寄生虫卵				
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵		1		
Total	計	0	1	0	0
Parasite eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	-	0.2 ×10 ²	-	-
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(++)	(++)	(++)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10 ⁵)				
未分解遺体片		1.6	2.1	3.4	1.0
分解質遺体片		84.5	116.9	127.4	117.9
炭化遺体片(微粒炭)					

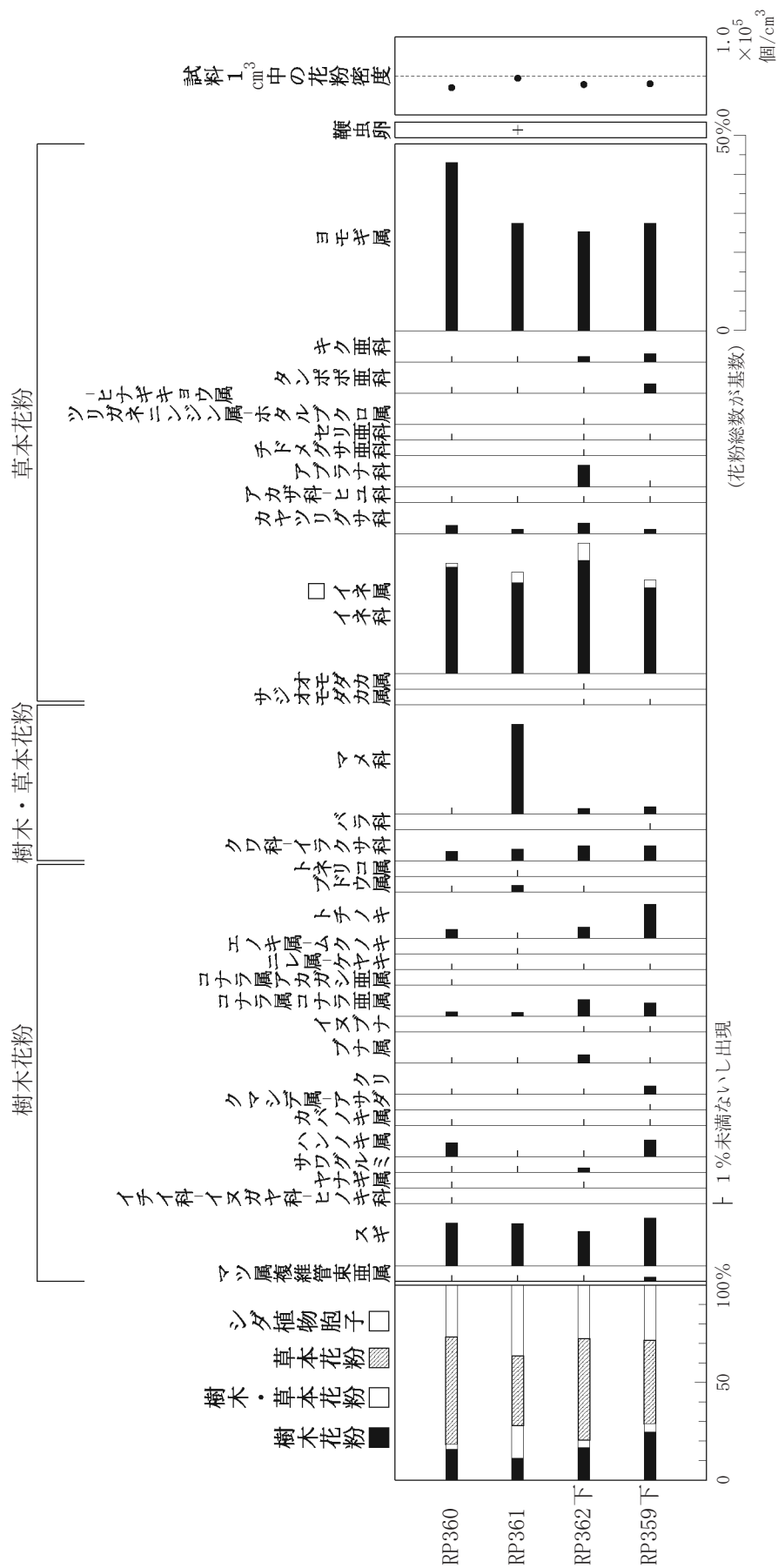


図2 A区SE22花粉ダイアグラム

育する草本が考えられ、これらも堆積地周囲に生育していたとみなされる。地域的な森林植生はスギ林で、近隣にはトチノキと、ハンノキ属は生態上ハンノキと考えられ、それらが生育する湿地林も分布したと推定される。

V 樹種同定および花粉分析結果に基づく環境復原

蟹沢遺跡は、イネ科とヨモギ属を主にクワ科－イラクサ科などやや乾燥を好む草本が分布し比較的排水の良い環境であり、イネ属およびサジオモダカ属、オモダカ属の水田雑草も検出され、周辺には水田が分布していた。他、トチノキやハンノキ属、ヤナギ属を含む樹木の検出から、湿地林が形成される河辺の湿地環境も周辺に分布していた。スギは安定して出現し、地域的な森林がスギ林であったとみなされる。

VI 火山灰分析

1 試料

試料は、T1区(試料8)とA区SK97(試料9)の2点である。

試料8は遺構が存在しないT1区で湿地堆積層から採取された。よどみのない環境に火山灰が堆積したものと考えられている。試料9は、古墳時代中期頃の土器が出土したSK97の上面に堆積したものである。なお、SK97から出土した炭化物と土器付着漆膜の年代測定が行われている(本稿 I 参照)。

2 分析方法

(1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉍物・火山ガラス比分析および屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250 μ mメッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は上述したテフラの検出同定と同様である。なお、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの軽鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子や未分解の粘土粒子などを含む。

火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3 結果

結果は表5、6に示し、図3、4に重鉱物・火山ガラス比および屈折率を示す。

(1) テフラの検出同定

処理後に得られた砂分からは、多量の火山ガラスと極めて微量の軽石が検出された。火山ガラスは無色透明のバブル型と無色透明の塊状の軽石型とが混在する。軽石は、T1区(試料8)では径0.3mmほど、A区SK97(試料9)では径0.7mmほどであり、いずれの試料の軽石も白色を呈し、発泡は良好である。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

2点の試料ともに重鉱物組成は、斜方輝石が多く、70%前後を占め、単斜輝石が15%程度、不透明鉱物が10~20%程度含まれる。火山ガラス比は、2点の試料ともに「その他」を除けば軽石型火山ガラスが多く、微量のバブル型火山ガラスおよび中間型火山ガラスが含まれる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図3に示す。T1区(試料8)は、 $n_{1.499-1.508}$ のレンジを示し、 $n=1.506$ 付近にモードが認められる。A区SK97(試料9)は、 $n_{1.504-1.509}$ のレンジを示し、 $n=1.506$ 付近にモードが認められる。

4 考察

T1区(試料8)は、火山ガラスからなる細粒テフラであることと、検出された火山ガラスの形態の特徴と屈折率、および共伴する重鉱物に斜方輝石が多い傾向のあること、さらには蟹沢遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981, 1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、十和田aテフラ(To-a)に同定される。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか, 1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。

A区SK97(試料9)についても、火山ガラスからなる細粒テフラであること、T1区(試料8)とほぼ同様の重鉱物組成と火山ガラスの形態を示し、火山ガラスの屈折率は主要なレンジとモードの値がT1区(試料8)のそれとほぼ一致することから、To-aに同定される。

発掘調査所見では、A区SK97は古墳時代中期頃の土器が出土した土坑で、試料9はその上面に堆積していることから、To-aよりも古い時代に降灰したテフラ層である可能性が注意されていた。しかし、秋田県域に降灰した可能性のあるテフラのうちで、火山ガラスからなる細粒テフラの給源となる火山は十和田カルデラ以外には考えられず、その十和田カルデラから噴出したテフラのうちで、To-a以前に噴出したテフラは最も新しくとも暦年で2600~2700年前に噴出した十和田b(To-b)であること(工藤・佐々

表5 テフラ分析結果

試料名	スコリア	火山ガラス		軽石		
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径 (mm)
T1区(試料8)	—	++++	cl・pm>cl・bw	(+)	W・g	0.3
SK97(試料9)	—	++++	cl・pm>cl・bw	(+)	W・g	0.7

凡例 — :含まれない, (+):きわめて微量, + :微量, ++ :少量, +++ :中量, ++++ :多量.

W: 白色, Br: 褐色, GBr: 灰褐色, R: 赤色.

g: 良好, sg: やや良好, sb: やや不良, b: 不良, 最大粒径は mm .

cl: 無色透明, br: 褐色, bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型.

表6 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
T1区(試料8)	0	186	37	0	0	0	0	27	0	250	4	3	40	203	250
SK97(試料9)	0	57	13	0	0	0	0	17	0	87	9	0	88	153	250

木,2007)から、A区SK97(試料9)がTo-aよりも古い時代に降灰したテフラ層である可能性は低いと考えられる。

出土した遺物や遺構との層位関係については、遺跡の立地している場所が沖積低地であることから、遺構の遺物埋積後からTo-aの降灰までの間に、氾濫堆積物の堆積や削剥が繰り返されたことにより、テフラ層と遺構遺物との間層の堆積がそれほど進行しなかった可能性があると考えられる。

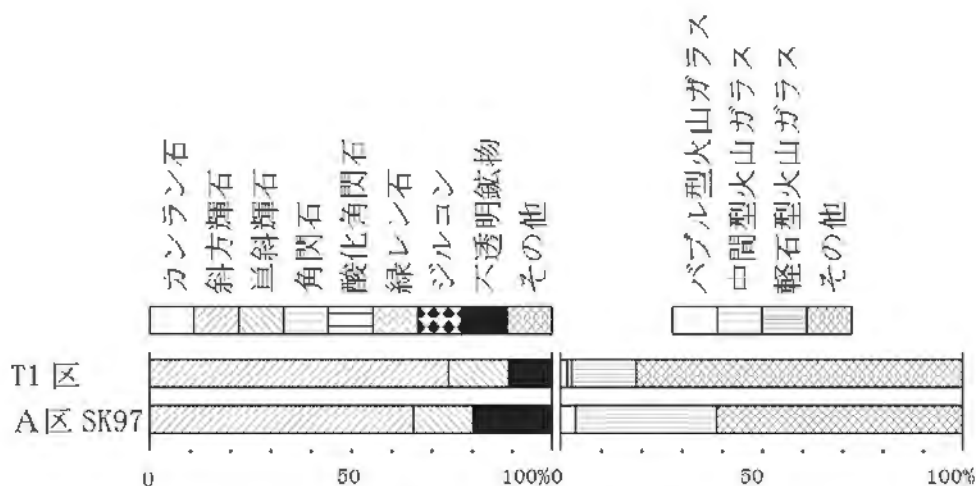


図3 重鉱物組成および火山ガラス比

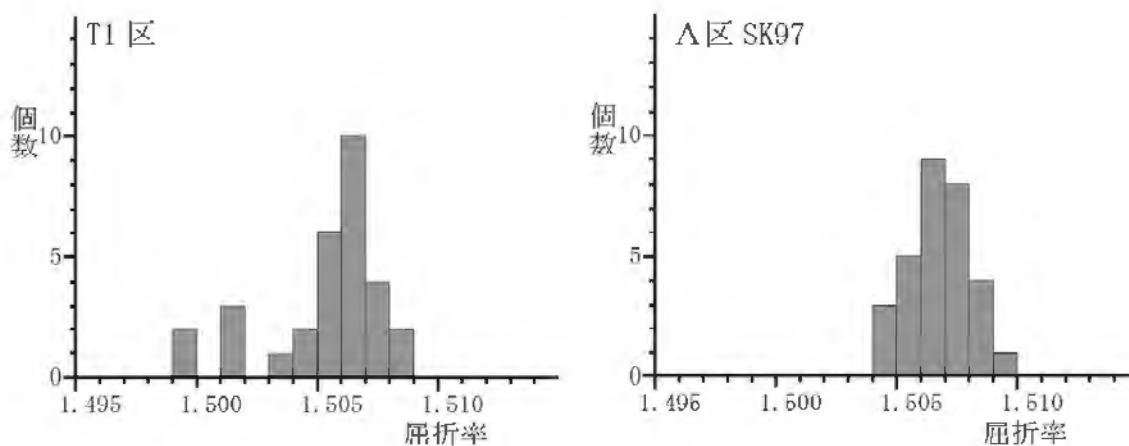


図4 火山ガラスの屈折率

VII 漆被膜(塗膜)分析

1 試料

分析試料は、蟹沢遺跡SK97出土の須恵器甕(RP403)の割れ面に接着剤として利用されたと考えられる付着物である。付着物の一部を2mm角程度採取した。

2 分析方法

試料を包埋し、厚さ数 μ mになるまで#1500、#4000、#6000、#10000の耐水紙やすりおよび研磨機(FG-18:RYOBI)で研磨した。なお、包埋およびプレパラートへの接着は高透明エポキシ樹脂(セメダインスーパー:セメダイン株式会社製)で行った。完成した試料を透過顕微鏡(OPTIPHOTO-2:Nikon)および落射顕微鏡(OPTIPHOTO-2:Nikon)で観察し、写真に示す(図版5)。

3 結果

不純物が多いが漆液が観察された。漆液は均一に含まれておらず、漆液が観察されない部分もある。多くの不純物が観察され、不純物は有機質である。

4 考察

須恵器甕の付着物は漆液と不純物が観察された。漆液は全体に均一に含有されておらず、有機物の空隙には漆液が観察されない部分が多い。一般に工芸品に利用される漆は採取したそのままを利用することは少なく、精製したものが利用されている。採取したそのままの漆は木屑やゴミが混じり、なおかつ成分が均質ではなく水分が多い。これを濾して木屑やゴミを取り除いたものを生漆と呼び、この段階ではまだ成分は均質ではない。その後成分を均質にする作業を行い工芸品に用いる。これを踏まえると顕微鏡観察下で見られる空隙は漆液に残る水分が蒸発した結果であり、大きな不純物が観察されないため、濾してはいるが細かな有機物が透過する程度の濾した生漆と推測される。須恵器甕の付着物は成分を均質にする作業が行われていない生漆で、接着剤として用いられたと考えられる。

引用・参考文献

- Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - . *Geographical reports of Tokyo Metropolitan University* No.21, 223-250.
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 古澤明 1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌 101, p.123-133.
- 早川由紀夫・小山真人 1998 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日 - 十和田湖と白頭山 -. 火山 43, p.403-407.
- 伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I . 木材研究・資料 第31号, 京都大学木材研究所・京都大学木質科学研究所, p.81-181.
- 伊東隆夫・山田昌久 2012 木の考古学, 雄山閣, 449p.
- 金原正明・金原正子 2015 堆積物と植物遺体の総合的研究. 日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, p.146-147.
- 金子清俊・谷口博一 1987 線形動物・扁形動物. 医動物学 付 実験用動物学 新版臨床検査講座 8, 医歯薬出版, p.9-134.
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 - 土器型式編年と炭素14年代 -, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 工藤崇・佐々木寿 2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年. 地学雑誌 116, p.653-663.
- 工藤雄一郎 2012 旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代と考古学, 新泉社
- 町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学 - 考古学研究と関連するテフラのカatalog - . 渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学, 同朋舎,

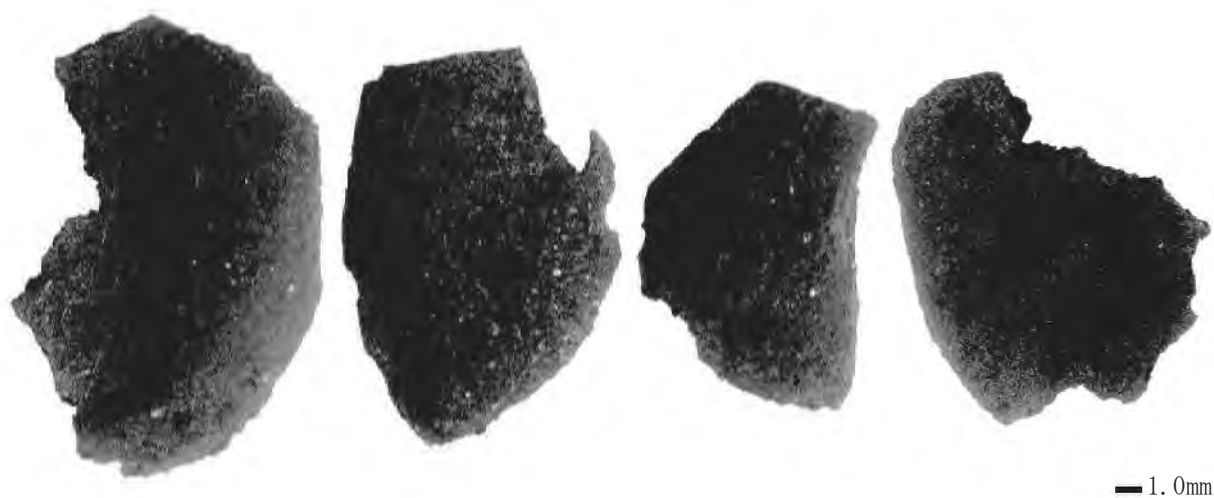
- 町田洋・新井房夫・森脇広 1981 日本海を渡ってきたテフラ. 科学 51, p.562-569.
- 中村純 1967 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究 13, 日本第四紀学会, p.187-193.
- 中村純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, no.10, 日本文化財科学会, p.21-30.
- 中村純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 大阪市立自然史博物館, 91p.
- 岡田文男 1995 古代出土漆器の研究－顕微鏡で探る材質と技法－. 京都書院, 191p.
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- 佐伯浩・原田浩 1985 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 1985 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- 島地謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, 176p.
- 島地謙・伊東隆夫 1988 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 大阪市立自然史博物館, 60p.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- 四柳嘉章 2002 漆の技術と文化－出土漆の世界－. あらたな世界へ いくつもの日本Ⅱ, 岩波書店, p.249-267.
- 四柳嘉章 2006 漆Ⅰ, もの与人間の文化史131-Ⅰ. 法政大学, 252p.
- 四柳嘉章 2006 漆Ⅱ, もの与人間の文化史131-Ⅱ. 法政大学, 435p.
- 四柳嘉章 2018 中世式の技術転換と社会の動向, 国立歴史民俗博物館研究報告第210集, 国立歴史民俗博物館, p.249-267.

図版1 須恵器甕(漆付着)・種実写真

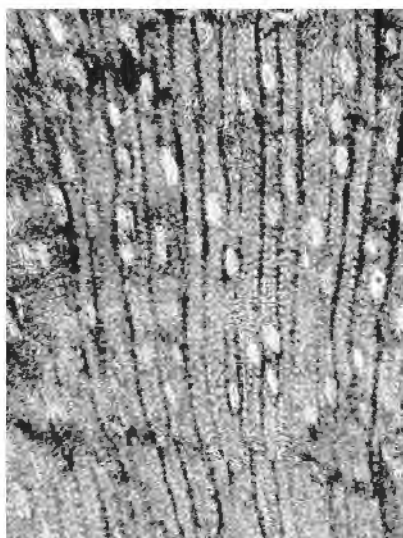


須恵器甕破片 試料19 A区 SK97 Cベルト上層 (1層) 下写真の破断面より試料採取

トチノキ種子破片 試料14 A区 SE22 3層



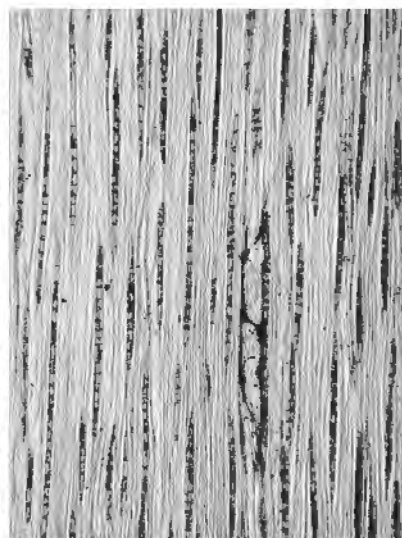
図版2 木材写真



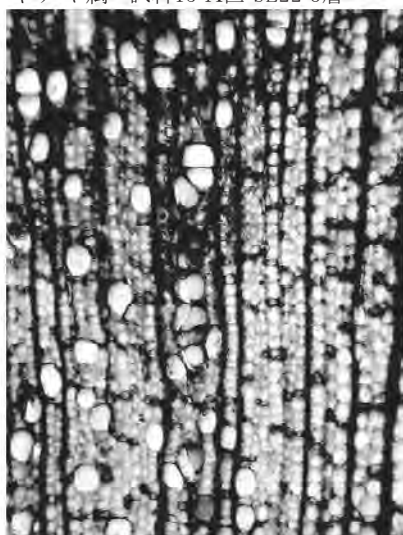
横断面
ヤナギ属 試料15 A区 SE22 3層



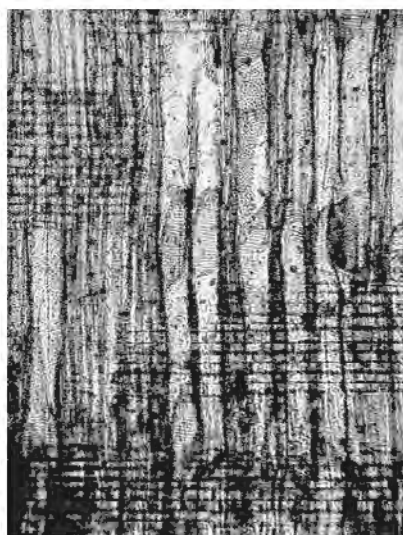
放射断面



接線断面



横断面
ハンノキ属ヤシヤブシ亜属 試料16 A区 SE21 4層



放射断面



接線断面



横断面
ハンノキ属ハンノキ亜属 試料17 A区 SE21 5層



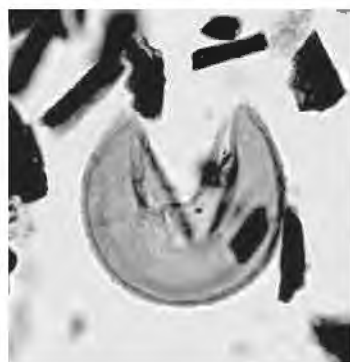
放射断面



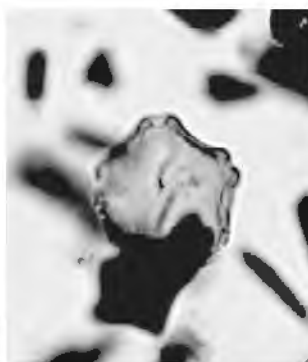
接線断面

図版3 花粉写真(A区 SE22 3層)

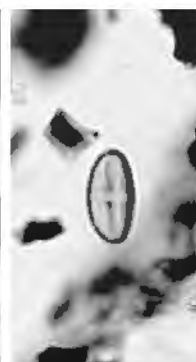
※0内は、検出箇所



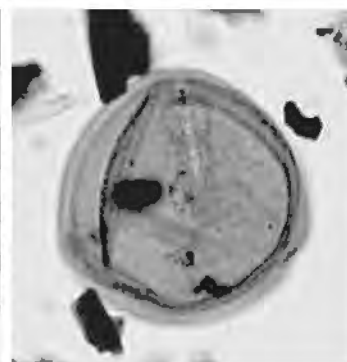
1 スギ



2 ハンノキ属



3 クリ



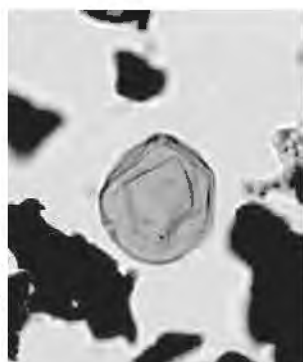
4 ブナ属



5 トチノキ



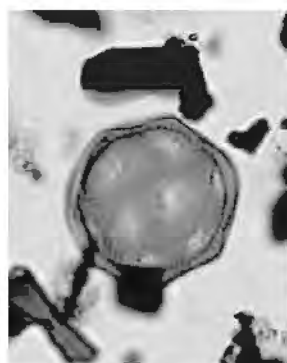
6 ブドウ属



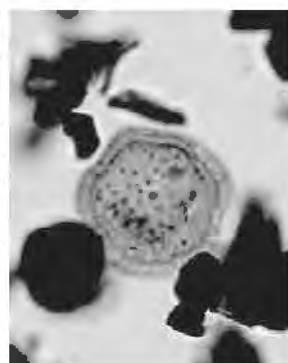
7 クワ科-イラクサ科



8 マメ科



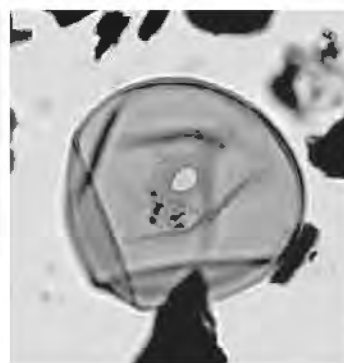
9 サジオモダカ属



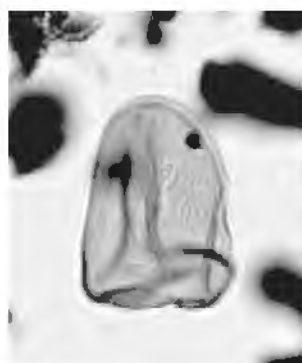
10 オモダカ属



11 イネ科



12 イネ属



13 カヤツリグサ科



14 アブラナ科



15 ヨモギ属

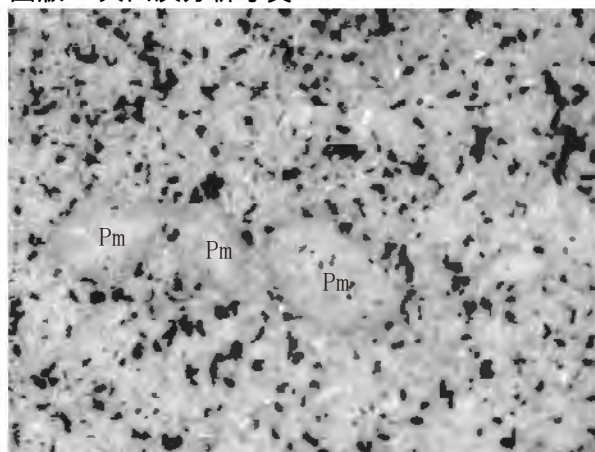


16 鞭虫卵

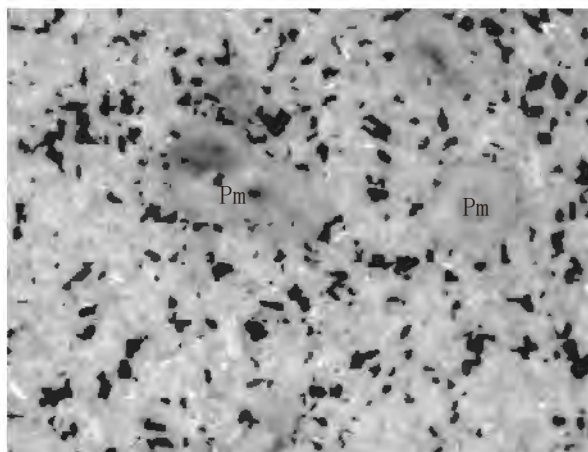
※検出箇所 RP361 :6,8,15,16
RP362下:1,3,4,7,9,10,12,14
RP359下:2,5,11,13

— 10 μ m

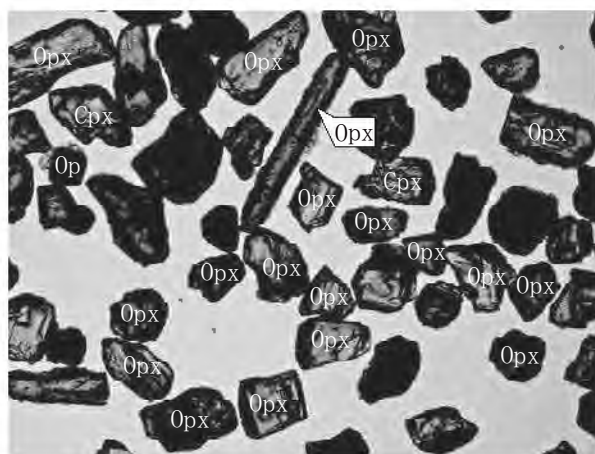
図版4 火山灰分析写真



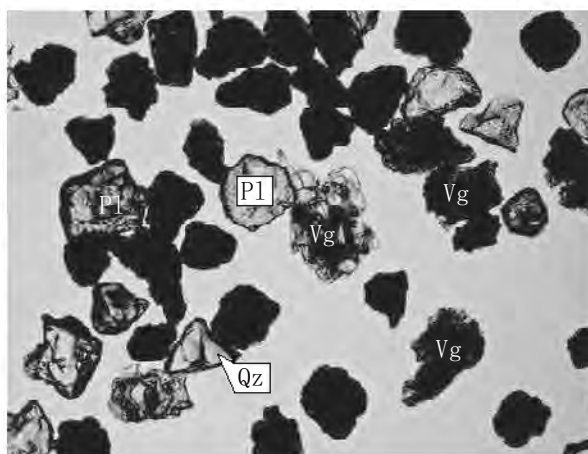
1 砂分の状況(T1区(試料8))



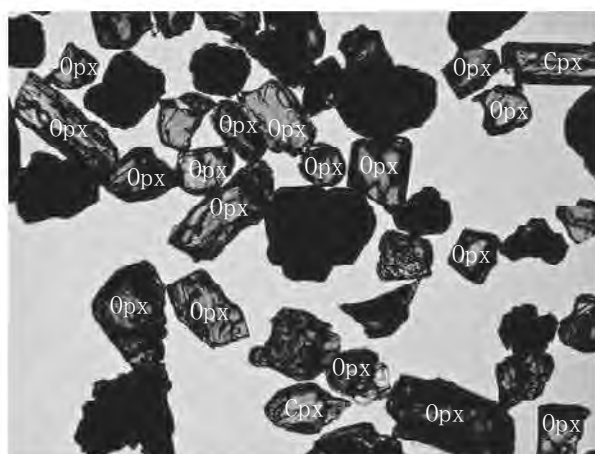
2 砂分の状況(SK97(試料9))



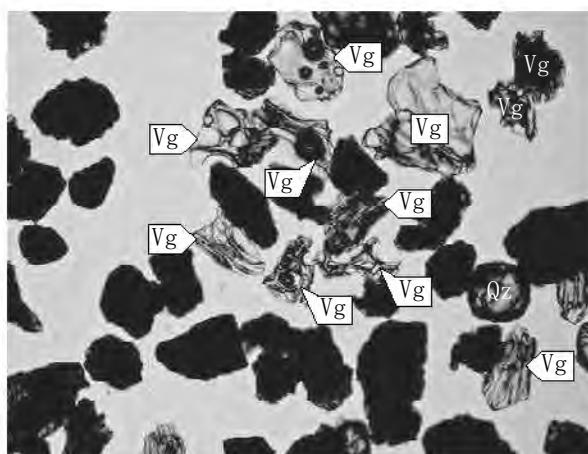
3 重鉱物(T1区(試料8))



4 火山ガラス(T1区(試料8))



5 重鉱物(SK97(試料9))

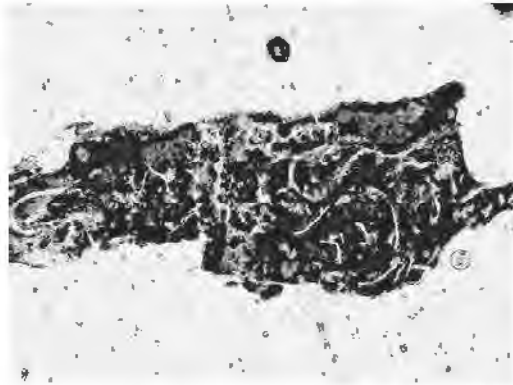


6 火山ガラス(SK97(試料9))

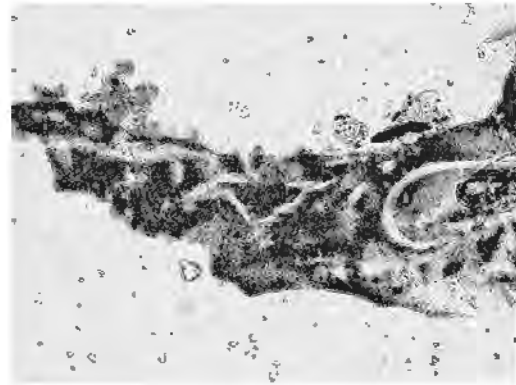
Pm: 軽石. Opx: 単斜輝石. Cpx: 単斜輝石. Op: 不透明鉱物.
Vg: 火山ガラス. Qz: 石英. Pl: 斜長石.

1,2 ————— 0.5mm
3-6 ————— 0.5mm

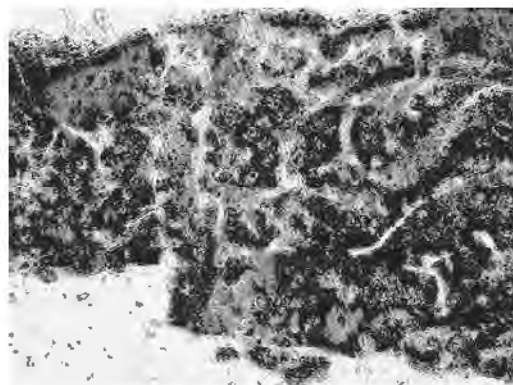
图版5 塗膜分析写真



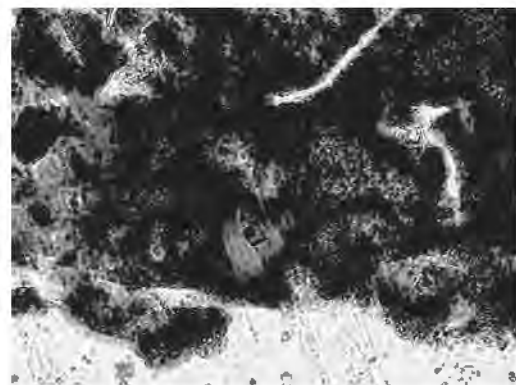
1 塗膜 透過顕微鏡 50 μ m



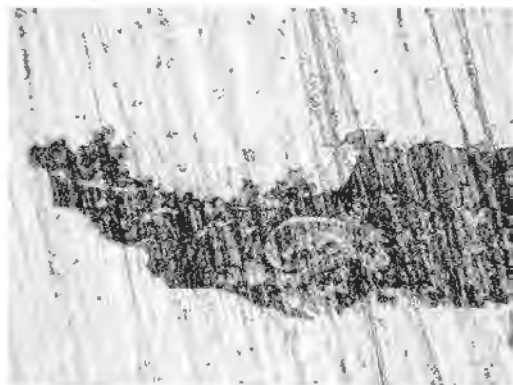
2 塗膜 透過顕微鏡 50 μ m



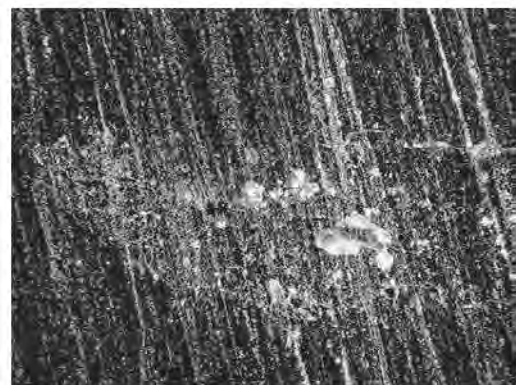
3 塗膜 透過顕微鏡 50 μ m



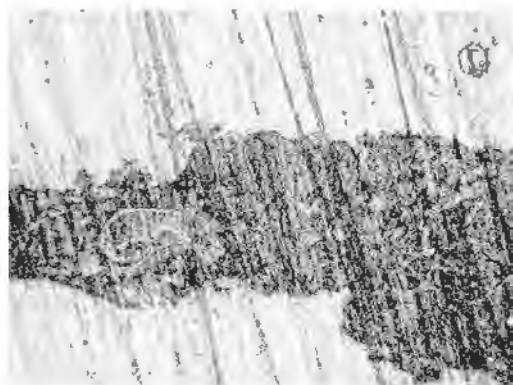
4 塗膜 透過顕微鏡 10 μ m



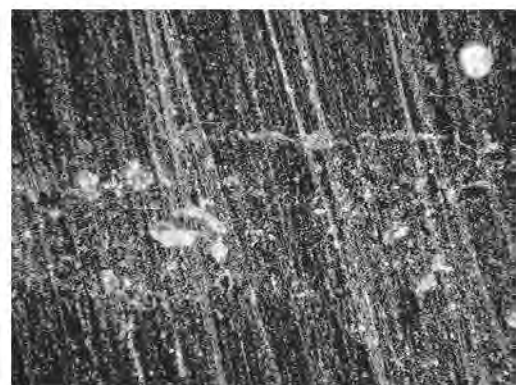
5 塗膜 落射顕微鏡 50 μ m



6 塗膜 落射顕微鏡 50 μ m



7 塗膜 落射顕微鏡 50 μ m



8 塗膜 落射顕微鏡 50 μ m

Ⅱ 蟹沢遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は蟹沢遺跡から出土した木製品6点である。なお、遺物の状態により採取可能箇所が極めて小さかった為No.2は木口の採取が出来なかった。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don)

(遺物No.1～6)

(写真No.1～6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柁目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

◆参考文献◆

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

蟹沢遺跡出土木製品同定表

No.	品名	出土遺構名	実測番号	樹種
1	井戸出土木製品	SE21-5	RW01	スギ科スギ属スギ
2		SE21-4	RW02	スギ科スギ属スギ
3		SE21-6	RW04	スギ科スギ属スギ
4		SE21-7	RW07	スギ科スギ属スギ
5		SE22-8	RW09	スギ科スギ属スギ
6		SE22-7	RW10	スギ科スギ属スギ



No-1 木口
スギ科スギ属スギ



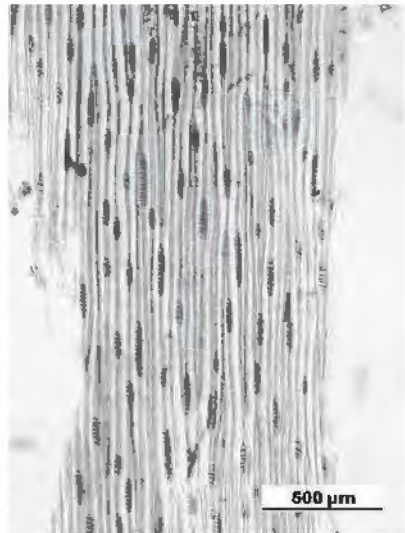
柁目



板目

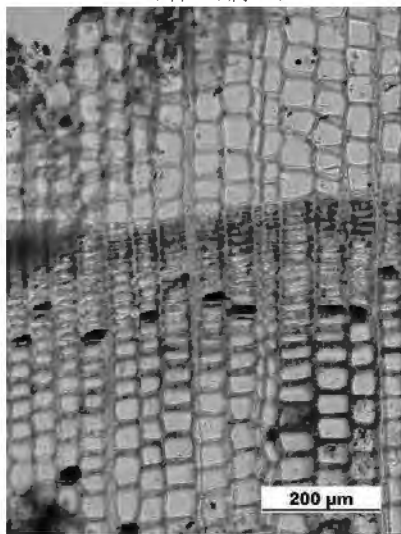


柁目



板目

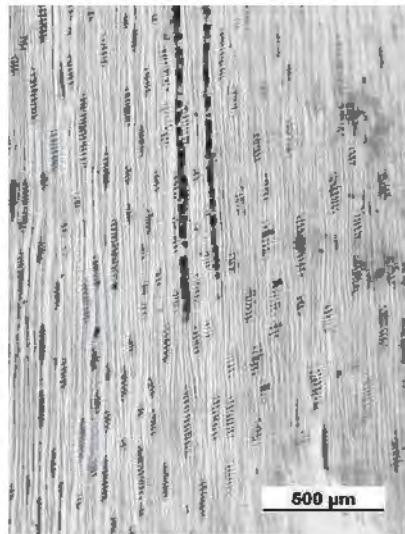
No-2 スギ科スギ属スギ



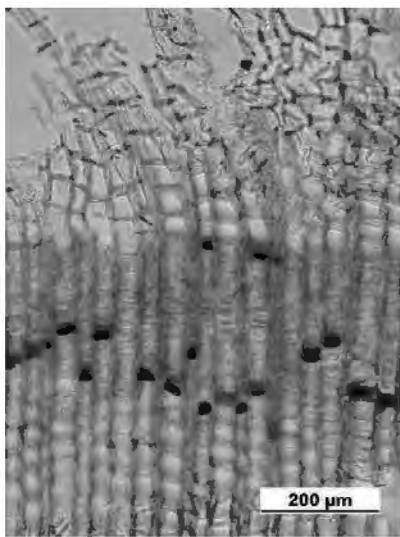
No-3 木口
スギ科スギ属スギ



柁目



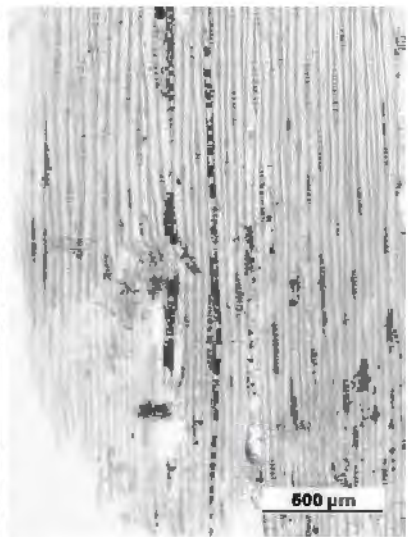
板目



木口

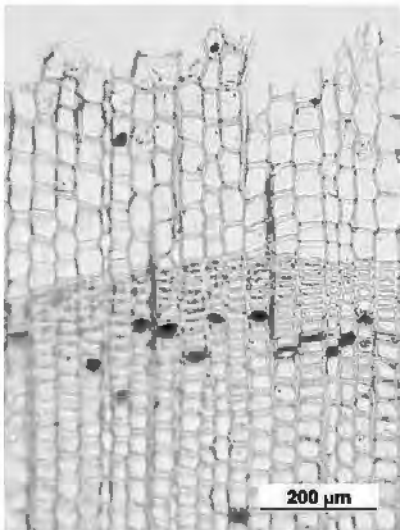


柁目

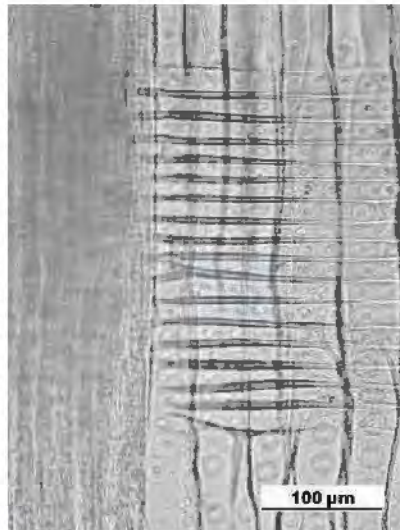


板目

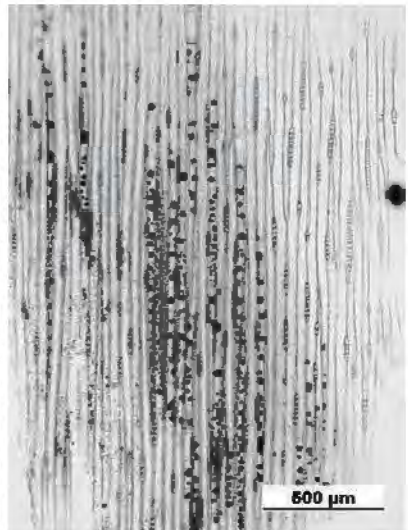
No-4 スギ科スギ属スギ



木口



柁目

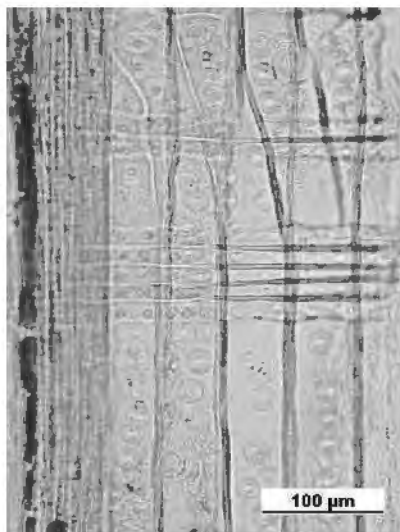


板目

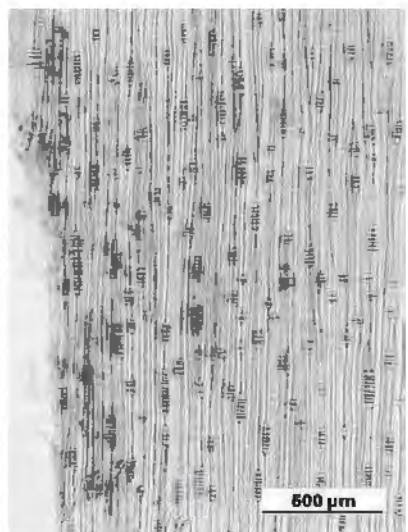
No-5 スギ科スギ属スギ



木口



柁目



板目

No-6 スギ科スギ属スギ

Ⅲ 放射性炭素年代測定

(株)吉田生物研究所

1. はじめに

蟹沢遺跡より出土した木製品6点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

No.	測定番号	試料データ	前処理
1	PLD-50988 SE21-5 RW01	種類:木材 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)
2	PLD-50989 SE21-4 RW02	種類:木材 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)
3	PLD-50990 SE21-6 RW04	種類:木材 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)
4	PLD-50991 SE21-7 RW07	種類:木材 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)
5	PLD-50992 SE22-8 RW09	種類:木材 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)
6	PLD-50993 SE22-7 RW10	種類:木材 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

No.	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
1	PLD-50988	-22.02 ± 0.25	1045 ± 19	1045 ± 20	994–997 cal AD (9.21%) 1001–1021 cal AD (59.06%)	979–984 cal AD (1.62%) 989–1029 cal AD (93.83%)
2	PLD-50989	-20.22 ± 0.26	1046 ± 20	1045 ± 20	993–997 cal AD (9.89%) 1001–1021 cal AD (58.38%)	978–1029 cal AD (95.45%)
3	PLD-50990	-20.21 ± 0.26	1159 ± 20	1160 ± 20	775–785 cal AD (11.22%) 832–848 cal AD (11.24%) 876–895 cal AD (21.66%) 924–950 cal AD (24.14%)	775–788 cal AD (12.59%) 825–900 cal AD (48.75%) 917–974 cal AD (34.11%)
4	PLD-50991	-21.12 ± 0.25	1194 ± 20	1195 ± 20	775–776 cal AD (1.20%) 781–789 cal AD (8.56%) 825–881 cal AD (58.50%)	774–793 cal AD (15.62%) 795–887 cal AD (79.83%)
5	PLD-50992	-19.52 ± 0.25	941 ± 21	940 ± 20	1041–1052 cal AD (9.33%) 1078–1089 cal AD (9.53%) 1090–1107 cal AD (14.03%) 1115–1156 cal AD (35.38%)	1036–1158 cal AD (95.45%)
6	PLD-50993	-20.09 ± 0.25	1005 ± 20	1005 ± 20	995–1005 cal AD (18.20%) 1018–1037 cal AD (50.07%)	993–1047 cal AD (82.95%) 1084–1095 cal AD (3.44%) 1103–1124 cal AD (7.84%) 1141–1147 cal AD (1.22%)

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第8章 総括

I 古墳時代【図66～73,表7～9】

古墳時代の遺構は、A区北端のSI15竪穴建物跡とSK97土坑、同じくA区南端のSI33竪穴建物跡である。当該期の遺跡は、秋田県内では極めて例が少ないため、まず県内の古墳時代遺跡の概略をまとめ、蟹沢遺跡出土土器の年代観について検討する。

1.秋田県内の古墳時代遺跡【図67,68】

秋田県内においては、3世紀から6世紀末にかけての古墳文化と続縄文文化の遺跡が混在する。これらはおおむね北緯40度線を境に南側に古墳文化の遺跡が、北側には続縄文文化の遺跡が分布する。古墳文化の遺跡は、令和7年3月現在で17遺跡が確認されており、その大半は5世紀代、古墳時代中期の遺跡である。以下では、発掘調査がおこなわれている5世紀代の遺跡を中心に概観する。

横手盆地

①神谷地遺跡・小出遺跡、②会塚田中B遺跡、③一本杉遺跡、④オホン清水B遺跡、⑤郷土館B遺跡、⑥一本木遺跡(以上、横手市)で発掘調査がおこなわれている。なお、県内で発掘調査がおこなわれた5世紀代の遺跡は横手市内に集中している。これに加え、⑦五味川遺跡(横手市)、⑧上野遺跡(大仙市)、⑨大久保郡山遺跡(雄勝郡羽後町)で、遺物の表面採集がなされている。

①神谷地・小出遺跡

蟹沢遺跡から北西4.8kmの大宮川左岸に位置し、小河川を挟んだ両岸にそれぞれの遺跡が立地している。両遺跡ともに竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡1棟を検出しており、これに加え小出遺跡からは沢目から土器集中区が発見された。土器は古墳時代中期後半(5世紀後半)の所産である。古墳時代の須恵器は3点(無蓋高杯2点、壺またはハソウ1点)が出土しており、いずれも陶邑編年TK208型式併行期の資料である。

②会塚田中B遺跡

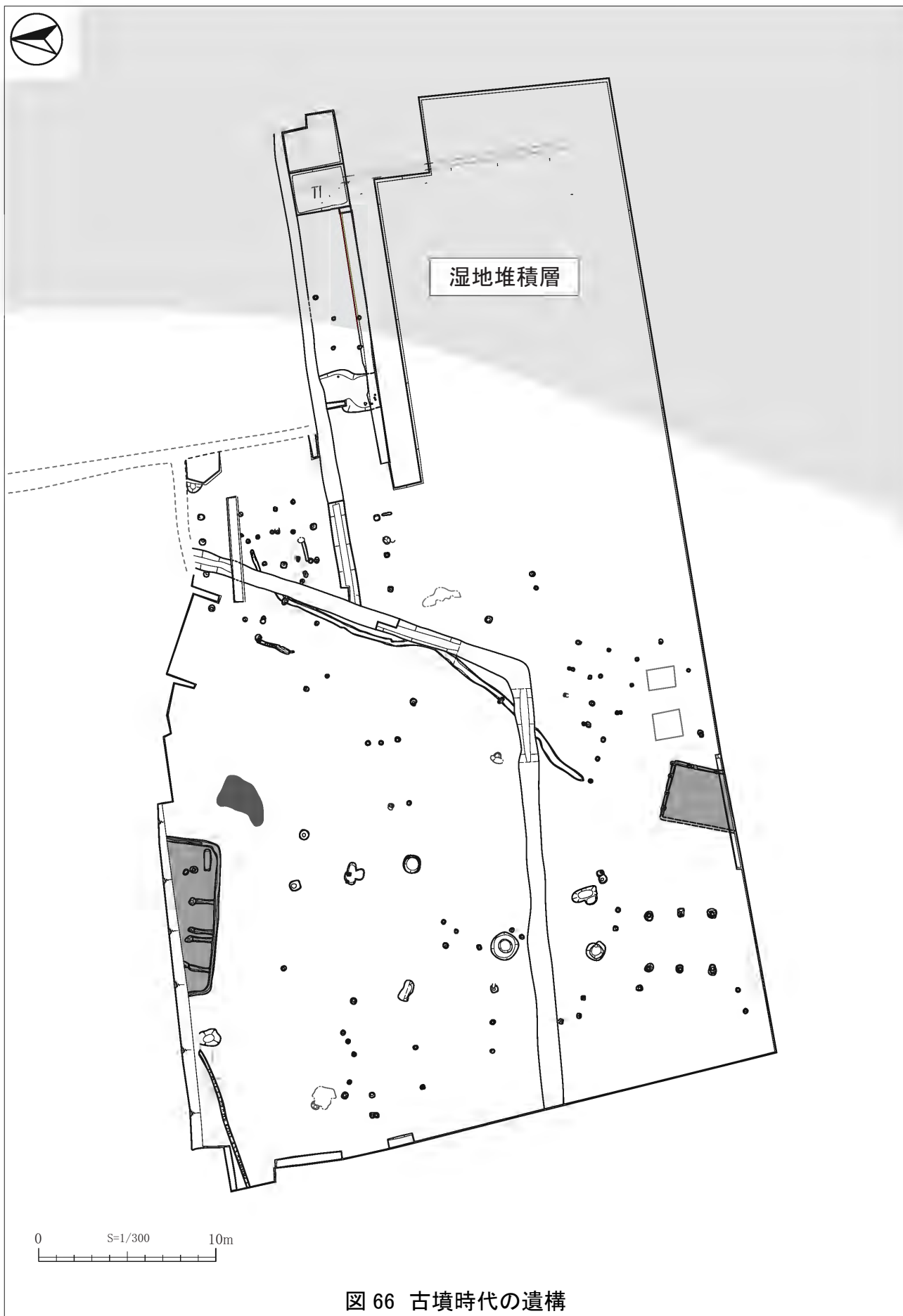
蟹沢遺跡から北西3.5kmの大宮川左岸に位置し、土坑2基から古墳時代中期後半の土師器がまとまって出土した。なお、遺跡の西側には塚状の高まり(「通称・大塚」)があり、古墳である可能性があったことから福島大学行政政策学類考古学研究室により測量調査がおこなわれたが、後世の土地改変が著しく、古墳である確証は掴めなかった(福島大学行政政策学類考古学研究室2022)。

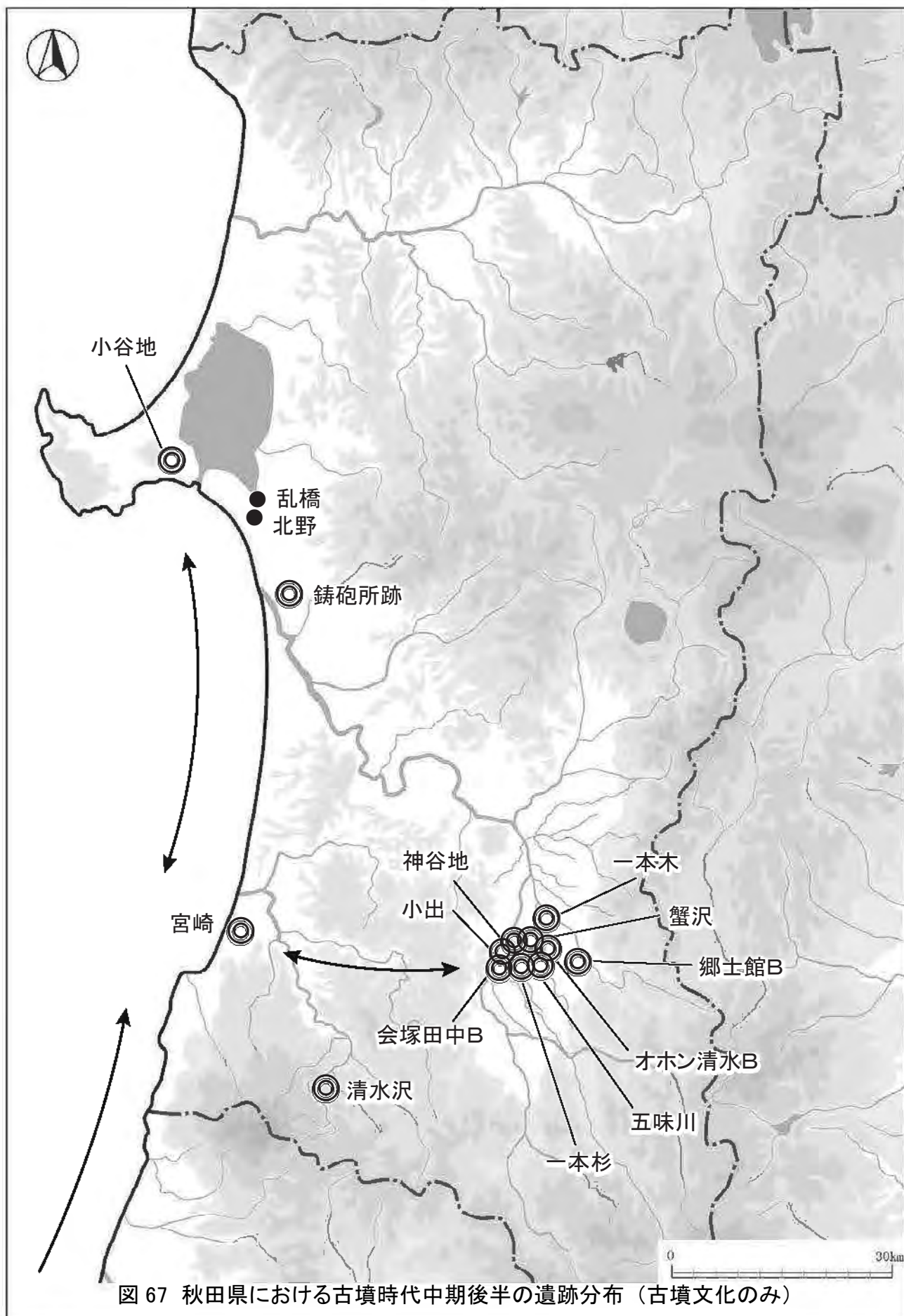
③一本杉遺跡

蟹沢遺跡から北西1.5kmの油川左岸に位置し、竪穴建物跡5軒を検出した。秋田県で初めて古墳時代の集落構造が把握された遺跡である。竪穴建物群は2期の変遷が確認されている。土器は、古墳時代中期後半(5世紀後半)の所産である。古墳時代の須恵器は3点(無蓋杯2点、ハソウ1点)が出土しており、いずれも陶邑編年TK208型式併行期の資料である。

④オホン清水B遺跡

蟹沢遺跡から北2.8kmの大戸川右岸に位置し、竪穴建物跡1軒と土坑2基を検出した。土器は、古墳時代中期後半(5世紀後半)の所産である。古墳時代の須恵器は1点(有蓋高杯)が出土しており、陶邑編年TK208型式併行期の資料である。





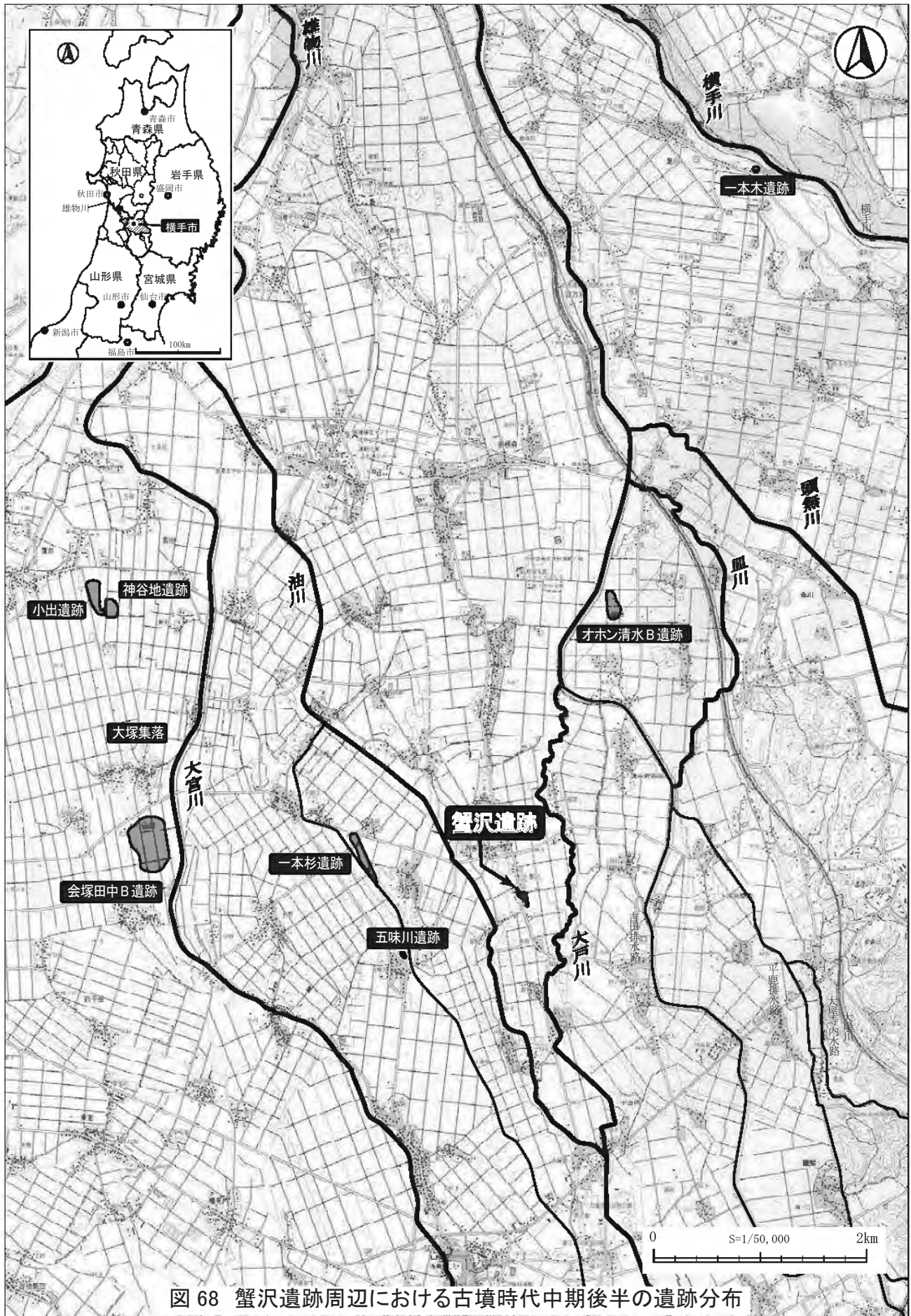


図 68 蟹沢遺跡周辺における古墳時代中期後半の遺跡分布

⑤郷土館B遺跡

蟹沢遺跡から北4.6kmの独立丘陵(中山丘陵)東向き緩斜面に位置し、竪穴状遺構1軒を検出した。土器は土師器甕が1点のみ出土しており、古墳時代中期後半(5世紀後半)の資料である。

⑥一本木遺跡

蟹沢遺跡から北7.3kmの横手川左岸に位置する。工事立会で遺物包含層から土器が大量に出土しており、古墳時代中期後半(5世紀後半)の資料である。

秋田平野・男鹿半島

①鑄砲所跡(秋田市)、②小谷地遺跡(男鹿市)で発掘調査がおこなわれている。これに加え、③乱橋遺跡、④北野遺跡(以上、潟上市)で、遺物の表面採集がなされている。

①鑄砲所跡

秋田市中心市街地に位置し、幕末の沿岸防備のために設置された施設として周知されているが、令和5年度の範囲確認調査で古墳時代の竪穴建物跡が検出された。土師器高杯、椀が出土しており、古墳時代中期後半(5世紀後半)の所産と考えられる。

②小谷地遺跡

男鹿半島東部、寒風山裾野に位置する。昭和39年の発掘調査で大量の木製品と古墳時代の土器が出土し、「埋没家屋」として注目されたが、その後の調査研究により、埋没家屋として認識していた遺構は古代の堰跡であったことが明らかとなっている。土師器高杯、椀が出土しており、古墳時代中期後半(5世紀後半)の所産と考えられる。

日本海沿岸南部・子吉川流域

①宮崎遺跡、②清水沢遺跡(以上、由利本荘市)で発掘調査がおこなわれている。

①宮崎遺跡

かつて潟地形を形成していた「西目潟」の西側に位置する。昭和62年の発掘調査で古墳時代の竪穴建物跡と土坑が検出され、古墳時代の土器が出土した。これらは墳時代中期後半(5世紀後半)の所産と考えられ、北大式土器と共伴している。古墳時代の須恵器は2点(蓋1点、有蓋杯1点)が出土しており、いずれも陶邑編年TK23型式併行期の資料である。このほかに4世紀代の器台、甕が表面採集され、周辺の井岡遺跡では子持ち勾玉が出土するなど、古墳時代前期からの継続した土地利用がなされている。

②清水沢遺跡

出羽山地から西目潟へ注いでいた古吉川支流の百宅川左岸に位置する。出羽山地の沢部に形成された遺跡で、遺構外から古墳時代の土師器杯が出土しており、5世紀代の所産と考えられる。

2.蟹沢遺跡出土土師器の編年観【図69～72,表7～9】

秋田県における古墳時代中期の土器編年は、前掲の一本杉遺跡の発掘調査の際に枠組みが構築され、当該地域の土器の器種組成・製作技術が、北陸地方を中心とした日本海沿岸部の影響を色濃く受けていることが明らかとなった。ここでは、この編年の枠組みのもと、蟹沢遺跡出土土器群の年代について検討する。

図69～71に、古墳時代中期の横手盆地における土師器の器種分類を挙げた。器種は、高杯、有段高杯、鉢・椀、有孔鉢、小型・中型壺、甕、ミニチュア土器に分類され、各器種が形態により細別される。細別器種の概要は表7に示した。器種構成は、横手盆地でこれまで確認されている遺跡と共通することがわかる。

先に述べたとおり、蟹沢遺跡が所在する当該地域においては北陸地方の影響を強く受けているが、

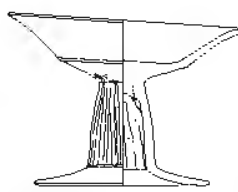
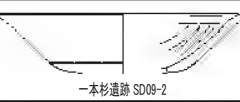
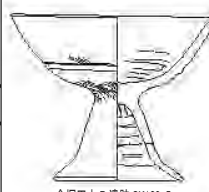
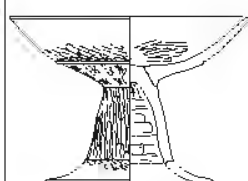
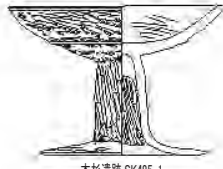
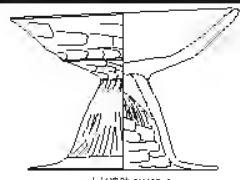
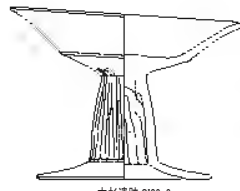
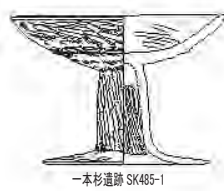
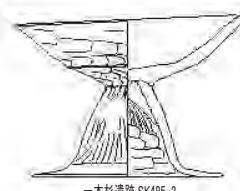
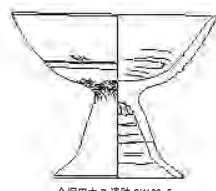
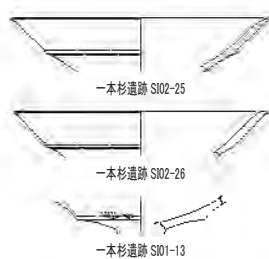
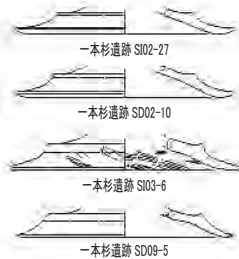
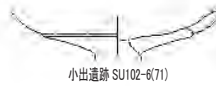
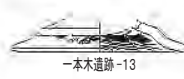
高 杯 ・ 有 段 高 杯	高杯杯身 A1	高杯杯身 A2	高杯杯身 A3	高杯杯身 B2	高杯杯身 B3
	 一本杉遺跡 SI02-2	 一本杉遺跡 SI03-3	 一本杉遺跡 SD09-2 高杯杯身 B1  一本杉遺跡 SK05-1	 会塚田中 B 遺跡 SK103-5	 一本杉遺跡 SD02-3
	高杯杯身 B4	高杯杯身 C1	高杯杯身 C2	高杯杯身 D	高杯脚部 A
	 一本杉遺跡 SI02-8	 一本杉遺跡 SK485-1	 一本杉遺跡 SK485-2	 小出遺跡 SU102-4(65)	 宮崎表塚-5
	高杯脚部 B1	高杯脚部 B2	高杯脚部 B3	高杯脚部 C1	高杯脚部 C2
	 一本杉遺跡 SI03-3	 一本杉遺跡 SD02-4	 一本杉遺跡 SK485-1	 一本杉遺跡 SD02-3	 底化部付着 一本杉遺跡 SD02-5 オホノ清水 B 遺跡 SK03-46
	高杯脚部 D1	高杯脚部 D2	有段高杯杯身 B1	有段高杯裾部 A	
	 一本杉遺跡 SK485-2	 会塚田中 B 遺跡 SK103-5	 一本杉遺跡 SI02-25 一本杉遺跡 SI02-26 一本杉遺跡 SI01-13	 一本杉遺跡 SI02-27 一本杉遺跡 SD02-10 一本杉遺跡 SI03-6 一本杉遺跡 SD09-5	
	高杯脚部 D3	有段高杯杯身 A	有段高杯杯身 B2	有段高杯裾部 B	
	 一本杉遺跡 SI01-9  一本杉遺跡 SD02-7	 一本杉遺跡 SI02-23  一本杉遺跡 SD09-4  小出遺跡 SU102-6(71)	 一本杉遺跡 SD02-9 有段高杯杯身 C  オホノ清水 B 遺跡遺構外-25	 一本杉遺跡 SI03-7 有段高杯裾部 C  会塚田中 B 遺跡 SK103-1  一本木遺跡-13	
鉢・椀 A1	鉢・椀 A2	鉢・椀 A3	鉢・椀 A4		
 一本杉遺跡 SI02-28  小出遺跡 SU102-37	 神谷地遺跡 SB03-1(古 9)  オホノ清水 B 遺跡 SK03・SK05-134	 一本杉遺跡 SI02-31  一本杉遺跡 SI02-33	 一本杉遺跡 SI02-32  一本杉遺跡 SI03-10  一本杉遺跡 SI02-36  オホノ清水 B 遺跡遺構外-6		

図 69 秋田県古墳時代中期の細別器種 (1)

0 S=1/6 10cm

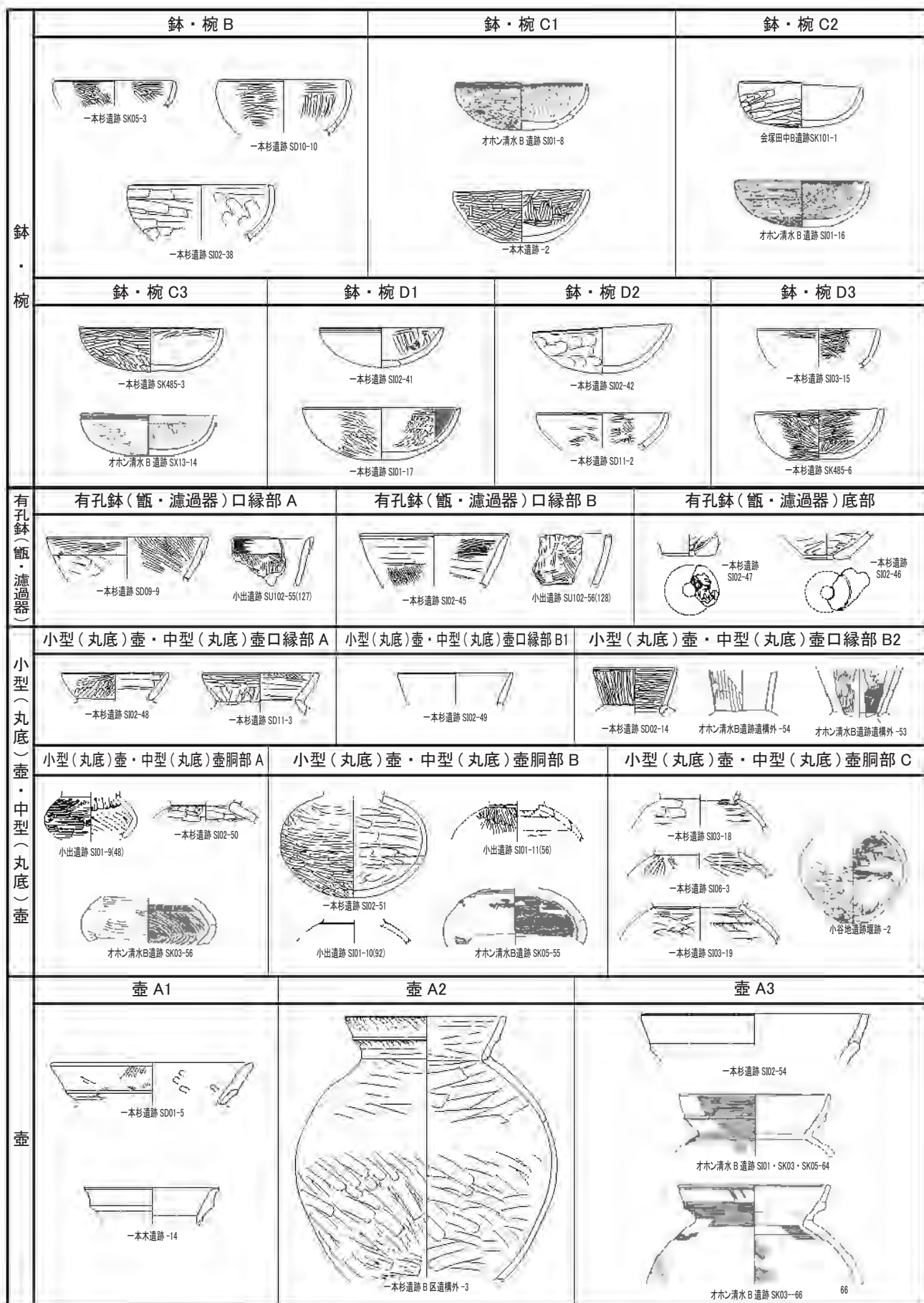


図 70 秋田県古墳時代中期の細別器種 (2)

0 S=1/6 10cm

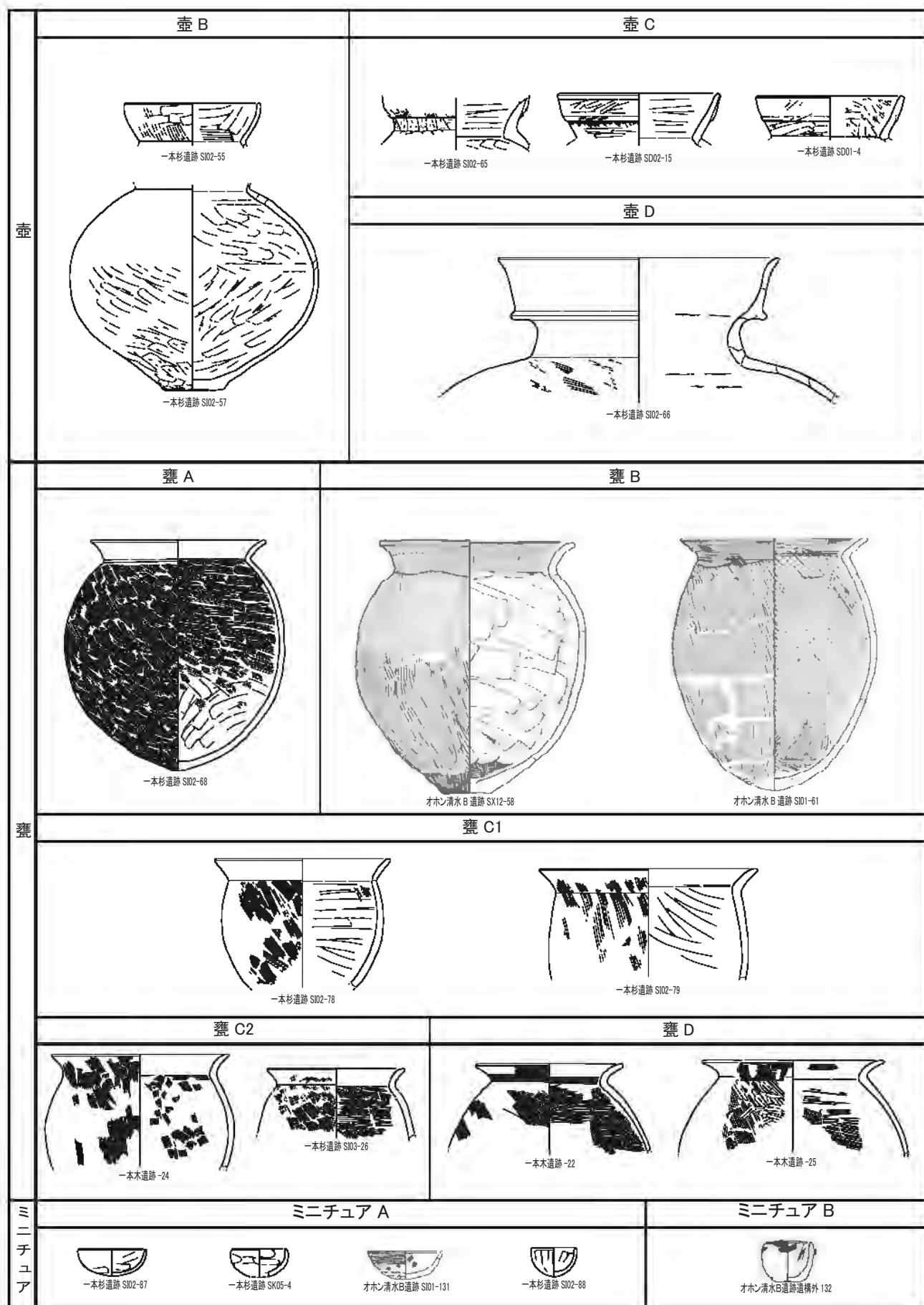


図 71 秋田県古墳時代中期の細別器種 (3)

0 S=1/6 10cm

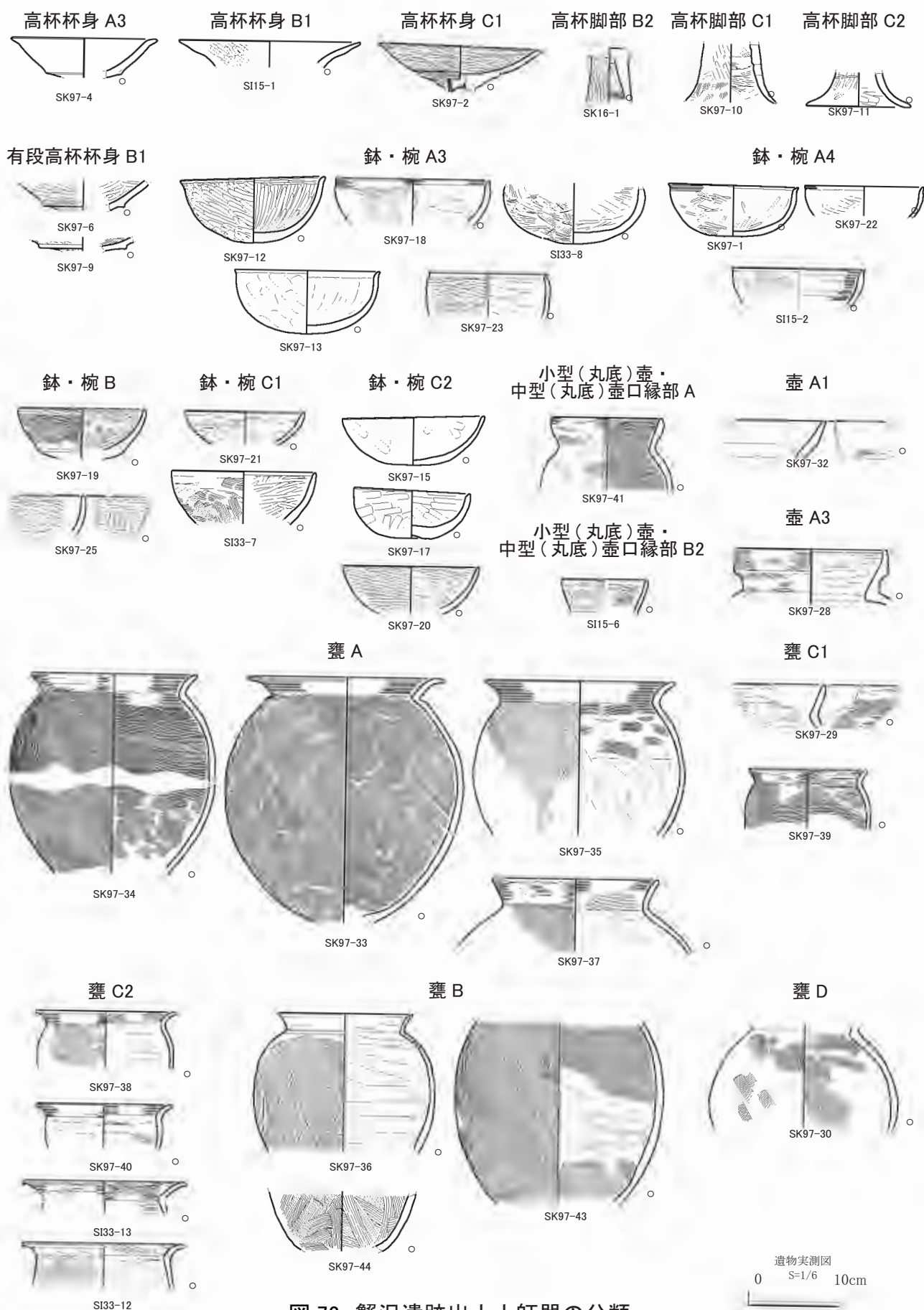


図 72 蟹沢遺跡出土土師器の分類

表 7 秋田県における古墳時代中期の土師器 細別器種の概要

高杯杯身	A類	1類	杯身が深く口縁部が外反	
		2類	杯身がやや浅く口縁部が外反	
		3類	杯身がやや浅く口縁部が外反し端部を摘み出す	
	C類	1類	杯身が浅く皿形で口縁部が外傾	
		2類	杯身が碗形で口縁部が外傾	
		3類	杯身が浅い 碗形で口縁部が外傾	
		4類	杯身が雉で口縁部が外傾し端部を摘み出す	
	B類	1類	杯身が浅く皿形で口縁部が外傾	
		2類	杯身が深く碗形で口縁部が外傾	
	D類		杯身が深く鉢形	
高杯脚部	A類		中実で裾部は高い	
	B類	1類	中空で断面直線台形状で裾部で屈折	
		2類	中空で断面直線台形状で裾部で屈折し高さ5cm未満	
		3類	中空で断面直線台形状で裾部で緩く外反	
	C類	1類	中空で断面中膨れ状で裾部で屈折	
		2類	中空で断面中膨れ状で裾部で屈折し高さ5cm未満	
	D類	1類	中空で断面円錐状で裾部で屈折	
		2類	中空で断面円錐状で裾部で屈折し高さ5cm未満	
		3類	中空で断面円錐状	
	有段高杯杯身	A類		杯身が厚く口縁部が外反
B類		1類	杯身が薄く口縁部が直線的に外傾	
		2類	杯身が深く口縁部が外傾	
C類		杯身底部の段が張り出す		
有段高杯裾部	A類		有段部分で屈折し裾部が薄い	
	B類		裾部から有段部分まで円錐状	
	C類		有段部分で屈折し裾部が厚い	
高杯杯身	A類		球胴形で口縁部断面がくの字状で肩部が張る	
	B類		長胴形で口縁部断面がくの字状で肩部が下がる	
	C類	1類	鉢形で口径が胴径より広い	
		2類	鉢形で口径が胴径より狭い	
	D類		頸部が狭く胴部が算盤玉状	
碗・鉢	A類	1類	甕形で身が深く内湾しながら口縁部で外反	
		2類	鉢形で身が深く内湾しながら口縁部で外反	
		3類	鉢形で内湾しながら口縁部で屈曲外反	
		4類	碗形で内湾しながら口縁部で屈曲外反	
碗・鉢	B類		碗形で身が深く口縁部まで内湾	
	C類	1類	碗形で身がやや浅く内湾しながら口縁部で屈曲し直立	
		2類	碗形で身がやや浅く内湾しながら口縁部で緩く直立	
		3類	碗形で身が浅く内湾しながら口縁部で緩く直立	
	D類	1類	碗形で身が薄く内湾しながら口縁部で緩く外傾	
		2類	碗形で身が厚く内湾しながら口縁部で緩く外傾	
		3類	D2類と同じ特徴を持つが平底	
	甕・有孔鉢	A類		断面逆台形で折り返し口縁
		B類		断面逆台形で単純口縁
C類		断面逆台形で底部に単孔		
小型壺・中型壺 口縁部		A類		口径12～13cmで口縁部が内湾
	B類	1類	口径12～13cmで口縁部が外傾	
		2類	口径10cmで口縁部が外傾する直口壺	
	小型壺・中型壺 胴部	A類		胴径10～15cmで算盤玉形
B類		胴径15～16cmで楕円形		
C類		その他壺の小型化したものか		
壺		A類	1類	二重口縁で口縁部が外反
	2類		二重口縁で口縁端部が外傾	
	3類		二重口縁で口縁端部が内湾	
	B類		直立口縁	
	C類		折り返し口縁	
	D類		口縁部下端に突帯があるもの	
杯身	A類		定型化された器形をミニチュアにしたもの	
	B類		A類以外のもの	

表 8 古墳時代中期における主要遺構の口縁部破片数一覧

遺跡・遺構名	土 師 器 土 器 組 成							残存合計 /%	遺跡内 比率%	高杯を100とした場合の土器組成の比率
	高杯	鉢・碗	小型壺・ 中型壺	有孔鉢 (甕)	壺	甕	ミニ チュア			
一本杉遺跡 SI01+SD02 小計	28	41	6	0	2	36	0	113	11.0%	高杯100、鉢・碗146、小型壺・中型壺21、 有孔鉢0、壺7、甕129、ミニチュア0
	24.8%	36.3%	5.3%	0.0%	1.8%	31.9%	0.0%	100.0%		
一本杉遺跡 SI03+SD09～12 小計	60	84	4	4	5	84	1	242	23.5%	高杯100、鉢・碗140、小型壺・中型壺7、 有孔鉢8、壺8、甕140、ミニチュア2
	24.8%	34.7%	1.7%	1.7%	2.1%	34.7%	0.4%	100.0%		
一本杉遺跡 SI02竪穴建物跡	77	137	17	1	11	113	12	368	35.7%	高杯100、鉢・碗178、小型壺・中型壺22、 有孔鉢1、壺14、甕147、ミニチュア16
	20.9%	37.2%	4.6%	0.3%	3.0%	30.7%	3.3%	100.0%		
小谷地遺跡 堰跡一括	33	64	6	0	25	177	0	305	100.0%	高杯100、鉢・碗194、小型壺・中型壺18、 有孔鉢8、壺76、甕536、ミニチュア0
	10.8%	21.0%	2.0%	0.0%	8.2%	58.0%	0.0%	100.0%		
一本木遺跡 包含層一括	17	65	0	0	5	103	0	190	100.0%	高杯100、鉢・碗382、小型壺・中型壺0、 有孔鉢0、壺29、甕605、ミニチュア0
	8.9%	34.2%	0.0%	0.0%	2.6%	54.2%	0.0%	100.0%		
小出遺跡 SU102土器集中区	9	60	1	6	12	80	0	168	78.1%	高杯100、鉢・碗660、小型壺・中型壺11、 有孔鉢67、壺133、甕889、ミニチュア0
	5.4%	35.7%	0.6%	3.6%	7.1%	47.6%	0.0%	100.0%		
オホン清水B遺跡 SI01+SK03+SK05小計	3	222	13	0	92	85	1	416	78.2%	高杯100、鉢・碗7400、小型壺・中型壺433、 有孔鉢0、壺3067、甕2883、ミニチュア33
	0.7%	53.4%	3.1%	0.0%	22.1%	20.4%	0.2%	100.0%		

表9 蟹沢遺跡主要遺構の口縁部破片数一覧（左）と
口縁部残存計測法による SI15 堅穴建物跡・SK97 土坑の土師器個体数（右）

遺構名	土 師 器 土 器 組 成							破片合計 /%
	高杯	鉢・椀	小型壺・ 中型壺	有孔鉢 (甔)	壺	甕	ミニ チュア	
SI15堅穴建物跡	13	15	1	0	1	3	0	33
	39.4%	45.5%	3.0%	0.0%	3.0%	9.1%	0.0%	100.0%
SK97土坑	9	64	1	0	5	28	0	107
	8.4%	59.8%	0.9%	0.0%	4.7%	26.2%	0.0%	100.0%
SI15堅穴建物跡+SK97土坑 合計	22	79	2	0	6	31	0	140
	15.7%	56.4%	1.4%	0.0%	4.3%	22.2%	0.0%	100.0%
SI33堅穴建物跡	2	15	0	0	0	15	0	32
	6.2%	46.9%	0.0%	0.0%	0.0%	46.9%	0.0%	100.0%

	口縁部残存径から 割り出した個体数	高杯を100とした 場合の比率
高杯	1.667	100
鉢・椀	6.625	567
小型壺・ 中型壺	0.166	14
壺	1.208	103
甕	2.833	242

漆町編年などで示されているように、古墳時代中期でも時代が下るにしたがって、高杯と比べたときの鉢・椀の器種組成比が徐々に高まっていく傾向がある。このため、蟹沢遺跡の土師の年代観を把握する目的で大別器種の所有比について確認する。表8に、一本杉遺跡の整理作業の過程に作成された、横手盆地内における古墳時代中期の遺跡主要遺構の器種組成比をまとめたものを再掲した。上段が口縁部破片数、下段に全体に占めるパーセンテージをまとめている。各遺跡の新旧は鉢・椀と高杯の所有比率である程度把握することができ、1群（一本杉遺跡（横手市）、小谷地遺跡（男鹿市））で鉢・椀：高杯が1:2、2群（一本木遺跡・小出遺跡（横手市））で1:3.8～6.6、3群（オホン清水B遺跡（横手市））で1:74と、鉢・椀の所有が急激に高まる。以上から、1群から2群、2群から3群という変遷が考えられる。ただし、一本木遺跡は、遺構出土の土器ではなく、遺物包含層または堰跡といった「開いた遺構」から出土しているため、当時の土器所有の様相を反映していない可能性があるため、注意が必要である。

以上の整理をもとに、蟹沢遺跡の口縁部破片をまとめたのが、表9(左)である。しかし、口縁部破片には大小の差があるため、破片数と実際の個体数に乖離が生じる可能性があることから、今回は破片数の計量とあわせて口縁部残存計測法を採用した。手順は以下のとおりである。

- ①口縁部破片を実測・未実測（破片一括）に関わらず抽出する。
- ②直径1mm刻み、角度15度ずつに分割線（24分割）を引いた同心円を使用し、①で抽出した破片を計測し、残存口径を計測する。計測は、15度刻みでおこない、完形の場合は24/24、1/2が残存している場合は12/24、1/8が残存している場合は3/24となる。15度以下の残存率の場合は1/24としてカウントする。
- ③遺構ごとに計測結果を加算する。

この結果を示したのが、表9(右)である。古墳時代の土器がまとまって出土したSI15堅穴建物跡、SK97土坑、SI33堅穴建物跡について計測を実施したが、SI15堅穴建物跡とSK97土坑は遺構間で遺物が接合している。このため、SK97土坑はSI15堅穴建物跡に付随する廃棄土坑と判断して差し支えないと思われるので、2つの遺構の合算値もあわせて示した。SI33堅穴建物跡は、高杯がほとんど出土していないため比較ができなかったが、SI15堅穴建物跡・SK97土坑の土器構成比は、鉢・椀：高杯が1:5.7の値を示す。この所有比率は、先に示した2群の値に収まる。このことから、蟹沢遺跡出土土器群、つまり遺構の年代は一本杉遺跡よりやや新しく、オホン清水B遺跡よりはやや古いということができよう。土師器の所有比を基に、横手市内における古墳時代中期後半の遺跡の空間的分布をみると、1群に属する一本杉遺跡から円弧状に拡散するように集落遺跡が拡散する状況が認められる。

3.古墳時代の須恵器甕について

SK97土坑からは、古墳時代の須恵器甕口縁部が出土した。これは、秋田県で初の出土例である。頸部に二重の櫛描波状文を施文しており、口唇部下に粘土紐を貼り付け稜をつくっている。口唇部は下

方に折り曲げることで稜を作出している。胎土から、大阪府陶邑窯跡群の製品とみられる。

須恵器甕の年代は、陶邑編年でTK203～TK15型式期であると考えられ、これまで横手盆地で出土している古墳時代の須恵器と同時期である。また、2で述べた土師器の編年観とも矛盾はしない。

この須恵器甕の特徴的な点は、破断面に漆を塗布していることである。自然科学分析の結果から、この漆は不純物を取り除かれておらず、成分が均質化されていないことから、接着剤としての利用が示唆されている。須恵器甕の口縁部破損に伴い、補修のための接着剤として漆が使用されたものと判断される。横手盆地出土の古墳時代の須恵器で漆を塗布した例はなく、古墳文化の周縁域におけるモノの扱われ方を示していると思われる。

4. 堅穴建物跡の構造と機能【図73】

A区では、堅穴建物跡を2軒検出した。このうち、SI15堅穴建物跡の特徴は、①平面形は隅丸方形であり、長軸は9m弱、床面積は想定で80㎡程度の大型であること、②貼り床は四隅が深いこと、③堅穴建物跡の掘り込みは浅いものに対して、支柱穴の掘り込みが深いこと、④床面小溝が検出されていること、⑤壁際溝が巡り、板材の痕跡が検出されていることの5点にまとめられる。これらは、これまで横手盆地で検出されてきた古墳時代中期後半の堅穴建物跡の特徴と共通する。このほか、一本杉遺跡では堅穴建物跡の周囲に細い溝が巡ることが確認されているが、A区SD19溝跡もこれと同様の配置を採る可能性がある。このような堅穴建物跡の構造は、石川県能登地方と共通性があることが既に指摘されており（四柳ミッコ遺跡）、土師器の特徴とも共通している。

一方で、SI33堅穴建物跡は、支柱穴が建物内に存在しないこと、壁際溝を切るように小柱穴が配置されていることなど、これまで確認されてきた堅穴建物跡とは特徴を異にする。これはいわゆる「壁立式」の堅穴建物跡と考えられ、板壁と外周の小柱穴で上屋を支持したと考えられる。これは秋田県内では初めて検出した。SI15堅穴建物跡との構造の違いは、集落内での機能差を反映していると推察され、古墳時代中期における当該地域の集落構造を検討するうえできわめて重要な事例であろう。

5. 古墳時代中期後半の地域交流

以上、蟹沢遺跡における古墳時代の遺構・遺物について検討したが、これらは古墳時代中期後半に帰属し、これまでの先行研究で明らかとなっているように、北陸地方の影響を色濃く受けていることが遺構・遺物の両面から明らかとなった。先に述べた一本杉遺跡の調査の段階では、秋田県沿岸のラグーン(潟)を介して、北陸地方と当該地域の地域間交流がおこなわれ、由利本荘市西目潟に到達した北陸系の古墳文化集団が子吉川を遡り、横手盆地に到達した可能性が指摘されていた。近年、由利本荘市清水沢遺跡で古墳時代中期後半の土師器が出土したことから、北陸系の土器を携えた集団が子吉川沿いを遡ったことはほぼ確実と考えられ、横手盆地への古墳文化の伝播経路の想定は蓋然性が高まっている。このような動向の中で、蟹沢遺跡で補修痕跡のある須恵器甕や壁立式の堅穴建物跡が検出されたことは極めて示唆に富むものと考えられる。

II 古代前期【図74】

9世紀前半を主体とする時期である。調査区内で確認できた遺構は、A区SB01掘立柱建物跡のみであ

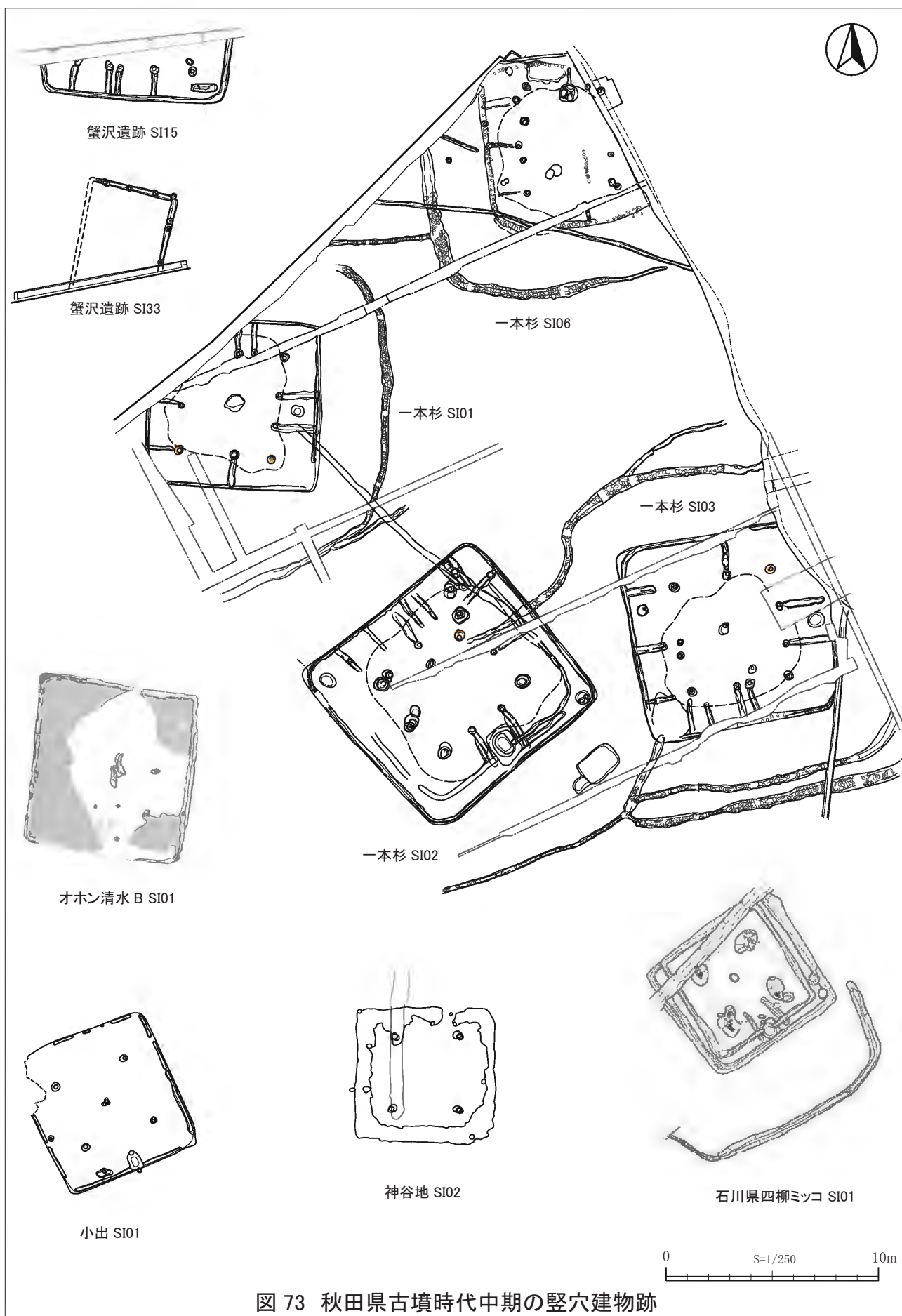


図 73 秋田県古墳時代中期の竪穴建物跡

る。梁間が10尺(3m)の建物跡で、横手盆地では梁間の大きい部類に入る。後述する古代後期の井戸から9世紀前半の須恵器甕が出土しており、当該期に帰属する遺物であると思われる。須恵器甕は、頸部に櫛描波状文を施文し、口唇部の作出に特徴がある中山丘陵窯跡群竹原窯跡支群の製品である(藤原2024)。また、遺構外からも当該期のロクロ土師器杯・甕などが出土している。おそらく、当該期の遺構は多くが調査区外に存在すると思われる。放射性炭素年代測定の結果によれば、B区で確認された柱穴列は年代の上限が当該期であるため、これらの遺構もこの時期に帰属する可能性がある。

Ⅲ 古代後期～中世【図75】

11世紀後半から13世紀前半を主体とする時期である。SE21,22,29井戸跡が帰属する。SE21井戸跡から出土した木製品の放射性炭素年代測定の結果、1013～1158年(2σ)の年代値が得られている。このほかに、12世紀代の遺物として遺構外から白磁皿Ⅴ類が、工事立会区より青磁皿Ⅱ類が出土している。13世紀初頭頃の遺物としては、須恵器系陶器播鉢がある。調査区北端のSB02～04掘立柱建物跡については、集落の中心域である掘立柱建物群と、集落端部に存在する井戸という関係性が想定できることから、当該期の遺構である可能性があると考ええる。ただ、掘立柱建物群は、梁間の柱間間隔が6.5尺(1.95m)を採用するという共通性がある。一般に、柱間間隔が6尺に近づくのは、建具の普及などから近世頃と考えられるため、年代決定の決め手を欠いている。

蟹沢集落の近辺で文献上に現れる中世の拠点は、「八柏」と「吉田」のふたつがある。「八柏」は、現在の横手市大雄八柏に比定され、平賀郡地頭職の立場にあった平賀氏の平賀惟藤が、文保2年(1318)に安芸尼という人物へ譲った所領のなかに現れる。一方、「吉田」については横手市平鹿町上吉田、県指定史跡吉田城跡周辺に比定され、19世紀に整備された平賀家系図に庶子として「吉田氏」が現れる。これらの所領については蟹沢遺跡の東を北流する大戸川流域に存在する。吉田城跡に隣接する館尻遺跡では、当該期の掘立柱建物群や土坑墓・火葬墓、龍泉窯系青磁などが検出されており、考古学的にも拠点の存在が裏付けられている。蟹沢遺跡についても古代末から中世前期にかけての集落域が広がっていた可能性が高いことから、当該期に大戸川沿いの微高地の開発が進んだと考えられる。

Ⅳ 近世

近世に帰属する遺構は検出されていない。遺物は肥前系磁器1点がB区より出土したのみで、遺構・遺物の広がり極めて希薄である。歴史的環境で述べたとおり、文献上で確認できる近世の「蟹沢村」の成立は江戸時代後期であり、小規模な支郷であったと推定される。今回の発掘調査成果からも同様の見解が得られた。菅江真澄が記録した蟹沢村は、おそらく現在の蟹沢集落の景観とさほど変わらず、A区北側を中心とした範囲であったとすることができるだろう。

【参考文献】佐久間正明2012「福島県における五世紀代の土器変遷(2)-隣接地域との並行関係の検討を中心に-」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会/滝沢規朗2014「新潟県における古墳時代中期の土器について(上)-器種分類と基準資料の提示-」『三面川流域の考古学』第12号/滝沢規朗2017「新潟県における古墳時代中期の土器について(下)-細別器種の変遷と隣県との関係-」『東生』第6号 東日本古墳確立期土器検討会/納谷信広2001「西目町宮崎遺跡出土の土師器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会/藤原正大2025「横手市の須恵器窯跡」『古代蝦夷と須恵器-北東北・北海道-』高志書院

【報告書】秋田県教育委員会2011『小谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第472集/秋田県教育委員会2024『清水沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第536集/秋田市教育委員会2024『令和5年度秋田市遺跡確認調査報告書』/石川県立埋蔵文化財センター1986『漆町遺跡』/石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2015『四柳ミッコ遺跡』/横手市2007『横手市史 資料編 考古』/横手市教育委員会2007『会塚田中B遺跡』横手市文化財調査報告第7集/横手市教育委員会2015『神谷地遺跡・小出遺跡』横手市文化財調査報告第32集/横手市教育委員会2018『一本杉遺跡』横手市文化財調査報告第44集

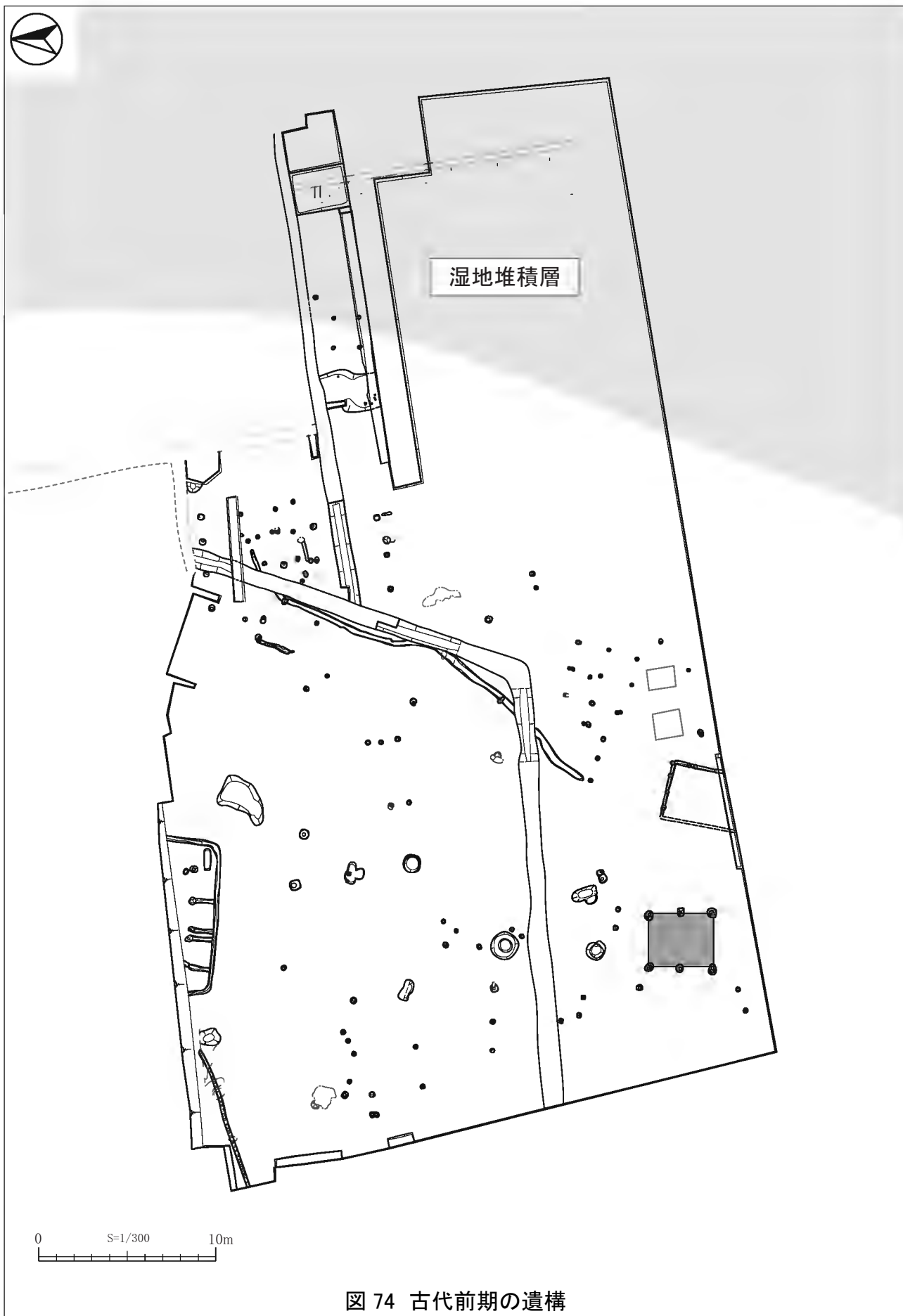


図 74 古代前期の遺構

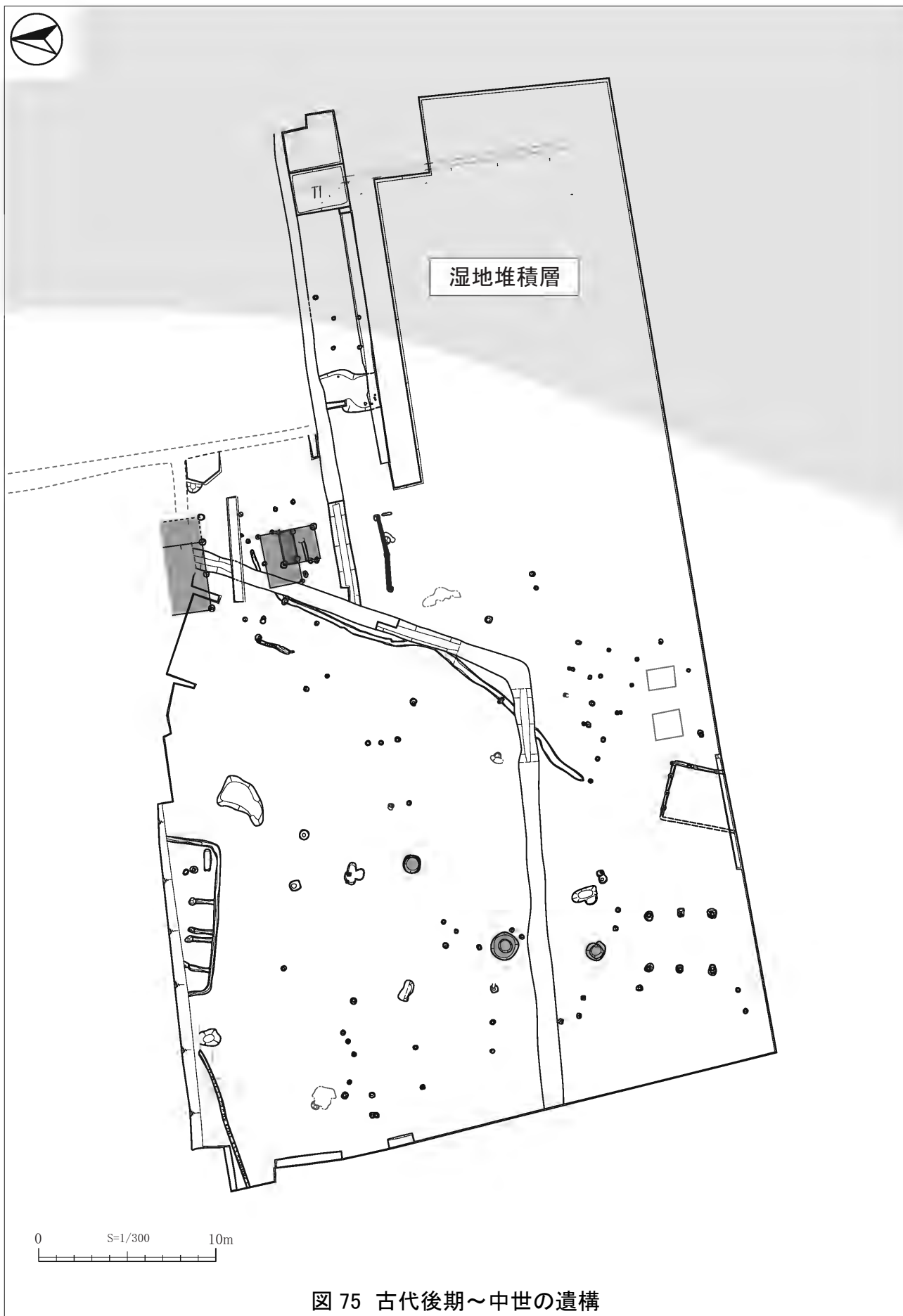


図 75 古代後期～中世の遺構

報 告 書 抄 録

ふりがな	がにざわいせき							
書 名	蟹沢遺跡							
副 書 名	農地中間管理機構関連ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	横手市文化財調査報告							
シリーズ番号	第66集							
編 著 者 名	藤原正大							
編 集 機 関	横手市教育委員会教育総務部文化財保護課							
所 在 地	〒013-0105 秋田県横手市平鹿町浅舞字釜池175番地							
発 行 機 関	横手市教育委員会							
所 在 地	〒013-0060 秋田県横手市条里一丁目1番64号							
発行年月日	西暦2025年3月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″		(m ²)	
がにざわいせき 蟹沢遺跡	よこてしひらかまち 横手市平鹿町 なかよしだあざ 中吉田字 がにざわちない 蟹沢地内	203	59-108	39° 17′ 52″	140° 29′ 38″	20230501 } 20230810	2,620	農地中間管理機構関連ほ場 整備事業(平鹿蟹沢地区)に伴う 埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
蟹 沢 遺 跡	遺物 散布地	縄文			石器剥片		秋田県では事例 の極めて少ない 古墳時代の集落 跡。 県内で初めて古 墳時代の須恵器 甕が出土。	
	集落跡	古墳	竪穴建物跡・土坑		土師器・須恵器			
		平安 中世	掘立柱建物跡 井戸跡 土坑・柱穴列		土師器・須恵器・ 須恵器系陶器・白磁・青磁 瀬戸美濃 木製品(組板・結物箍)			
	遺物 散布地	近世			肥前系磁器			
要 約	遺跡は、雄物川支流の大戸川をはじめとする中小河川が形成した微高地(自然堤防)上に立地する。調査の結果、縄文時代・古墳時代・古代(平安)・中世・近世の複合遺跡であることが明らかとなった。 遺跡の主たる年代である古墳時代は集落域が展開し、2軒の竪穴建物跡を検出した。このうち、1軒は伏屋式であるが、もうひとつの竪穴建物跡は壁立式である。また、建物跡に隣接して土坑を検出し、大量の土師器片と古墳時代の須恵器甕口縁部破片が出土した。遺物の年代から、集落は、古墳時代中期後半に営まれたと考えられる。 平安時代から中世にかけても、遺跡は集落域として利用され、掘立柱建物跡4棟と、これらに伴う柱穴列、土坑、井戸跡を検出した。周辺からは12世紀代の白磁皿や青磁皿が出土したほか、井戸跡から平安時代末頃の木製品が出土している。 縄文時代、近世は遺物散布地であり、石器剥片や肥前系磁器が出土した。							



蟹沢遺跡 全景(北西→)



蟹沢遺跡 全景(南→)

写真図版 1 蟹沢遺跡全景



1948年(昭和23)空中写真[国土地理院]と現況図(赤い線)
 緑の線が蟹沢遺跡

写真図版 2 昭和23年の空中写真



写真図版 3 A 区全景



Ⅲ層遺物出土状況(南→)



基本層序①(東→)



基本層序②(東→)



基本層序④(北東→)



基本層序④(北西→)

写真図版 4 A 区基本層序・旧表土層遺物出土状況



SI15堅穴建物跡 完掘(東→)



SI15堅穴建物跡 遺構検出状況(東→)



SI15堅穴建物跡 I層掘り下げ後(東→)



SI15堅穴建物跡 A-A'断面(東→)



SI15堅穴建物跡 B-B'断面(南→)

写真図版 5 A区堅穴建物跡(1)



SI15堅穴建物跡壁際溝 完掘(南→)



SI15堅穴建物跡壁際溝 完掘(東→)



SI15堅穴建物跡壁際溝 遺物出土状況(南→)



SI15堅穴建物跡 SP158柱穴 完掘(南→)



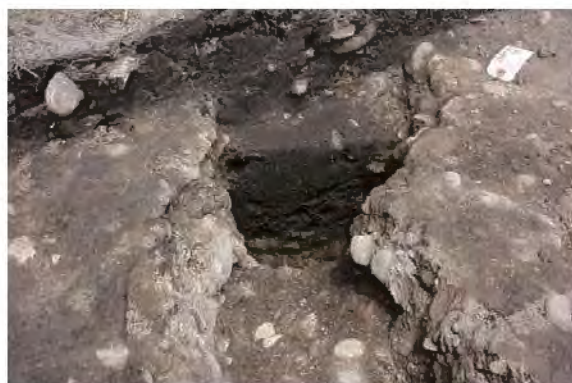
SI15堅穴建物跡 SD128溝跡 A-A'断面(南→)



SI15堅穴建物跡 SD128溝跡 完掘(南→)



SI15堅穴建物跡 SD122,123溝跡 完掘(南→)



SI15堅穴建物跡 SP184柱穴 A-A'断面(南→)

写真図版 6 A区堅穴建物跡(2)



SI33堅穴建物跡 完掘(北→)



SI33堅穴建物跡 遺構確認(北→)



SI33堅穴建物跡 遺物出土状況(北西→)



SI33堅穴建物跡 遺物出土状況(南→)



SI33堅穴建物跡 遺物出土状況(北西→)



SI33堅穴建物跡 C-C'断面(北→)



SI33堅穴建物跡壁際溝 完掘(西→)



SI33堅穴建物跡 SP112柱穴 A-A'断面(北→)

写真図版 7 A区堅穴建物跡(3)



SB01掘立柱建物跡 完掘(東→)



SB03掘立柱建物跡 SP72柱穴 B-B'断面(南→)



SB03掘立柱建物跡 SP76柱穴 B-B'断面(南→)



SB03掘立柱建物跡 SP68柱穴 A-A'断面(北→)



SB03掘立柱建物跡 SP70柱穴 A-A'断面(北→)



SB04掘立柱建物跡 SP66柱穴 C-C'断面(南→)



SB04掘立柱建物跡 SP71柱穴 C-C'断面(南→)



SA01柱穴列 完掘(西→)

写真図版 8 A区掘立柱建物跡・柱穴列



SE21井戸跡 大礫出土状況(南→)



SE21井戸跡 A-A'断面(南→)



SE21井戸跡 遺物出土状況(南→)



SE21井戸跡 完掘(南→)



SE22井戸跡 A-A'断面(南→)

写真図版 9 A区井戸跡(1)



SE22井戸跡 木製品出土状況(東→)



SE22井戸跡 完掘(南→)



SE29井戸跡 A-A'断面(南→)



SE29井戸跡 遺物出土状況(南→)



SE29井戸跡 大礫出土状況(南→)

写真図版 10 A区井戸跡(2)



SK18土坑 A-A' 断面(西→)



SK30土坑 B-B' 断面(北→)



SK30土坑 A-A' 断面(西→)



SK30土坑 完掘(南→)



SK47土坑 A-A' 断面(南西→)



SK163土坑 A-A' 断面(北西→)



SL54炉跡 遺構確認(北→)



SL54炉跡 完掘(北→)

写真図版 11 A 区炉跡・土坑(1)



SK97土坑 完掘(南→)



SK97土坑 A-A'断面(東→)



SK97土坑 B-B'断面(北→)



SK97土坑 C-C'断面(南東→)



SK97土坑 D-D'断面(北東→)

写真図版 12 A 区土坑 (2)



SK97土坑 須恵器甕出土状況(南西→)



SK97土坑 遺構確認面遺物出土状況(南→)



SK97土坑 遺構確認面遺物出土状況(北→)



SK97土坑 1層遺物出土状況(南→)



SI15竪穴建物跡,SK97土坑 完掘(南東→)

写真図版 13 A区土坑(3)



SD19溝跡 完掘(西→)



SD20,42溝跡 遺構確認(南西→)



SD19溝跡 A-A'断面(西→)



SD42溝跡 D-D'断面(南→)



SD81溝跡 遺構確認(東→)



SD153溝跡 A-A'断面(西→)



SD153溝跡 遺構確認(南→)



SD75溝跡 A-A'断面(西→)

写真図版 14 A区溝跡



B区北侧 全景(南→)



基本層序①(西→)



基本層序②(西→)



基本層序③(西→)



基本層序⑤(北→)

写真図版 15 B 区全景・基本層序



SA02柱穴列 SP208柱穴 A-A'断面(南→)



SA02柱穴列 SP209柱穴 A-A'断面(南→)



SA02柱穴列 SP210柱穴 A-A'断面(南→)



SA02柱穴列 SP212柱穴 A-A'断面(南→)



SA04柱穴列 SP206柱穴 完掘(南→)



SA04柱穴列 SP201柱穴 A-A'断面(北→)



SA04柱穴列 SP203柱穴 A-A'断面(北→)



SA06柱穴列 完掘(西→)

写真図版 16 B 区柱穴列



古墳時代の土器



須恵器甕口縁部 SK97-1

写真図版 17 古墳時代の出土遺物



SI15-6,7,8,9,10,11,12



SI15-13,14,15



SI15-16



SI15-1,2,3,4,5



SI33-5



SI33-2,3,4,5,6,7,8



SI33-17,18,19,20



SI33-26,27,28,29,30

写真図版 18 竪穴建物跡 出土遺物



SE21-1 表面



SE21-1 裏面



SE21-2



SE21-3



SE21-4



SE21-5



SE21-6



SE21-7

写真図版 19 井戸跡 出土遺物(1)



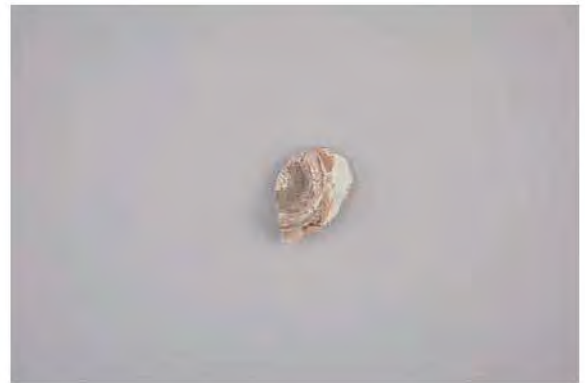
SE22-1



SE22-2



SE22-3,4,5



SE22-6



SE22-7



SE22-8 表面



SE22-8 裏面



SE29-1,2

写真図版 20 井戸跡 出土遺物(2)



SK97-1 断面



SK97-12,13,14,15,17



SK97-28



SK97-33



SK97-35,36



SK97-43



SK97-2



SK97-3,4,5,6,7,8,9

写真図版 21 土坑 出土遺物(1)



SK97-10,11



SK97-16,18,19,20,21



SK97-22,23,24,25,26,27



SK97-29,30,31,32



SK97-34



SK97-37,38,39,40,41,42



SK97-44,45,46,47,48



SK97-46,47

写真図版 22 土坑 出土遺物(2)



A区遺構外-1,2,3,4,5



A区遺構外-6,7,8,9,10,11,12



A区遺構外-13,14,15,16、排土-1



A区遺構外-17(白磁皿V類) 外面



A区遺構外-17(白磁皿V類) 内面



A区遺構外-18



A区遺構外-19(瀬戸美濃大窯) 外面



A区遺構外-19(瀬戸美濃大窯) 内面

写真図版 23 遺構外ほか出土遺物(1)



A区遺構外-22



A区遺構外-23



A区遺構外-24,25



工事立会区-1,2,3



工事立会区-4,5,6,7,8,9,10



工事立会区-11(青磁皿Ⅱ類) 外面



工事立会区-11(青磁皿Ⅱ類) 内面



B区遺構外-1

写真図版 24 遺構外ほか出土遺物(2)

横手市文化財調査報告第66集

蟹 沢 遺 跡

―農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

印刷・発行 令和7年3月

編 集 横手市教育委員会教育総務部

文化財保護課横手市遺跡調査事務所

〒013-0105 秋田県横手市平鹿町浅舞字釜池175番地

TEL 0182-24-3480 FAX 0182-24-3481

発 行 横手市教育委員会

〒013-0060 秋田県横手市条里一丁目1番64号

TEL 0182-32-2403 FAX 0182-32-4034

印 刷 有限会社 柏谷印刷
